

横浜市

これまで、
これからも、
横浜らしく

公共建築

100年



公共建築年表

- 公共建築物の総面積(累計)
- ▲ 横浜市総人口
- 子どもの人口(0歳から15歳未満)
- ▲ 高齢者人口(65歳以上)
- 学校竣工数(校舎)
- 市営住宅竣工数(戸数)
- 地域ケアプラザ竣工数
- 耐震改修施設数
- 木造化施設棟数

- 世の中の出来事
- 横浜市の出来事
- 1923 関東大震災
- 1927 区制施行 | 鶴見区、神奈川区、中区、保土ヶ谷区、磯子区
- 1939 港北区、戸塚区誕生
- 1945 横浜大空襲
- 1948 金沢区誕生
- 1943 南区誕生
- 1944 西区誕生
- 1964 東京オリンピック・パラリンピック
- 1965 六大事業公表
- 1966 横浜市住宅供給公社設立
- 1969 港南区、旭区、緑区、瀬谷区誕生
- 1959 開港100周年
- 1972 横浜市地下鉄開業
- 1986 栄区、泉区誕生
- 1989 横浜博覧会
- 1995 阪神・淡路大震災
- 1994 青葉区、都筑区誕生
- 2002 FIFAワールドカップ開催
- 2004 みなとみらい線開業
- 2011 東日本大震災
- 2009 開港150周年
- 2021 東京2020オリンピック・パラリンピック

建築課の発足
臨時建築課を経て、建築課が発足し、学校や市営住宅、市場などを建設しました。

震災からの復興
関東大震災の復興事業として震災復興小学校や市営住宅などを建設しました。

戦災からの復興
空襲により、市街地が焦土と化し、多くの建物が焼失しました。学校や市営住宅などの復興に力を注ぎました。

人口急増への対応
高度経済成長を背景に、年間約10万人に及ぶ人口急増の時期を迎え、学校や市営住宅などを集中的に建設しました。

「量」から「質」へ
「量」を建設する時代から「質」が求められる時代へと移り、市民や社会のニーズに応え、美術館やホールなど、様々な施設を整備しました。

多様なニーズへの対応
地区センターや地域ケアプラザなど市民の多様な活動を支援する身近な施設を多く整備しました。

防災、減災、長寿命化への対応
震災を契機に耐震改修を進めました。また、老朽化している施設の保全を目的とする改修に取り組んでいます。

脱炭素社会の実現へ
省エネルギー化や再生可能エネルギーの導入、木材利用など環境に配慮した施設の整備に取り組んでいます。



組織変遷

1922年に発足した建築課は、当初、局も部もなく市長直下に組織されました。

戦後の復興期、住宅不足に対応するため、庶務課に変わり住宅課が発足しました。

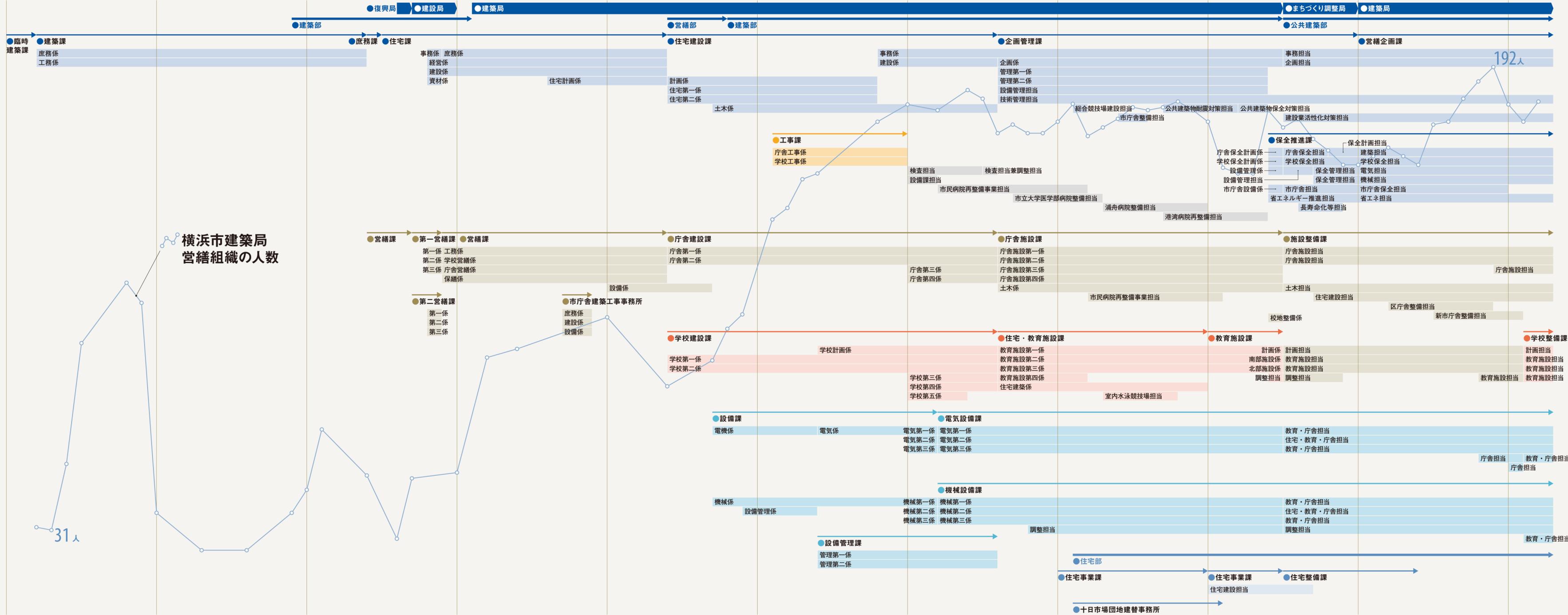
1960年代の人口急増期には郊外部の団地開発と合わせて学校建設ラッシュが続き、設備課、工事課、設備管理課が加わりました。

1980年に工事課が廃止となり、1986年には住宅建設課が担っていた住宅・庁舎の企画部門を企画管理課が引継ぎ、住宅建設部門は住宅・教育施設課が担当しました。これは、住宅を中心とした量の時代から質の時代へと移り変わったことを反映したものです。同時に、修繕保全業務を担う横浜市建築保全公社を設立しました。

2000年代に入り、それまでに整備した建築物の保全を計画的に進めることや、省エネルギー化などに対応するため、保全推進課を設置しました。2021年には、増加する学校建替えへの対応として、学校整備課を設置しました。

かつて「建設」が中心だった営繕組織の役割は、今では企画・設計・建設・維持管理を通した「総合調整の担い手」へとその役割を変えています。

※この組織変遷は『横浜市機構沿革史』及び『横浜市職員録』に基づいて作成し、建築局以外に設置された営繕組織は除いています。



横浜市

横浜
から
しく
く
これ
から
も
、
これ
まで
も
、

公共建築

100年





1922（大正11）年に横浜市行政組織に、庁舎や学校などの公共建築物の整備を行う建築課が発足し、2022（令和4）年に100年を迎えました。

これを契機として、これまでの公共建築の歴史を振り返り、これから先の未来へと取組をつないでいくため、「これまでも、これからも、横浜らしく」をテーマとする、横浜市公共建築100周年事業を実施しました。

本誌では、市民利用施設や学校、市営住宅などを中心に、これまでの人口などの推移とともに、時代ごとの背景や社会ニーズなどを踏まえて取り組んできた公共建築の歴史や100周年事業の内容を紹介します。

目次

巻頭付録

公共建築年表
組織変遷

横浜市の公共建築 —006

第1章 横浜市公共建築のはじまり —009

100年前の横浜 —010

青木 祐介 [横浜開港資料館・横浜都市発展記念館 副館長] 寄稿

初代建築課長 山田七五郎 —012

震災復興事業期の建築課 —014

100年を超える建築

開港記念会館 —016

赤レンガ倉庫 —018

第2章 横浜市公共建築の100年 —021

これまでの横浜市公共建築 —022

市民に身近な公共建築

庁舎 —024

学校 —032

住宅 —040

横浜コモンズ —048

新たな時代の公共建築へ —050

第3章 横浜を代表する公共建築 —055

日刊建設通信新聞社 編集

横浜を代表する公共建築100施設 —056

第4章 100周年事業 —121

100周年事業について —122

根岸森林公園新築トイレ設計コンペ —124

建築家 内藤廣 講演会 —130

よこはま建築ひろば

シンポジウム —138

こどもワークショップ・関連イベント —144

横浜市こどもの美術展2022 —154

こどもの絵画作品LEDビジョン投影 —155

年表・タペストリー展示 —156

学校建替え工事 出前授業 —158

Instagram —159

よこはま建築フォトコンテスト —160

未来に向けて —166

巻末資料

公共建築リスト

庁舎 —168

学校 —177

住宅 —191

木造化施設 —198

参考文献・資料 —201

横浜市公共建築物に関する組織体制 —202

横浜市公共建築100周年事業 プロジェクトメンバー —203

横浜市の公共建築

横浜市における公共建築とは、行政、教育、文化、福祉など様々な分野において、行政サービスの提供や市民活動を実践する場、また、課題の解決に向けた施策を実現するための施設をいいます。

これらの施設を整備し、維持・保全を行っています。

こうした施設には、横浜市が直接整備した建築物だけでなく、国や県、民間から取得又は寄贈を受けた公益的な施設や歴史的な建築物なども含まれます。

現在、2,600を超える施設を保有しています。

市庁舎、区庁舎、学校、市営住宅、地区センター^{※1}、地域ケアプラザ^{※2}、コミュニティハウス^{※3}、図書館、公会堂、病院、斎場、市場、公園施設、水道施設、交通施設、水再生センター、焼却工場のほか、古民家や西洋館などがあります。

※1 体育室や会議室などを備えた、地域住民の活動や相互交流の場としてスポーツやレクリエーション、クラブ活動、集会などを行うことができる施設

※2 多目的ホールや相談室などを備えた、福祉・保健に関する行事や相談・支援などを行うことができる施設

※3 学習室や集会室などを備えた、子どもからお年寄りまで様々な市民の交流や地域活動の身近な拠点となる施設



横浜市の総保有施設数

2,608

市民利用施設	448	庁舎・事務所	310
教育・文化	101	庁舎・事務所	310
コミュニティ	232		
スポーツ・レクリエーション	96		
その他	19		
		都市基盤系建築物	916
社会福祉施設	308	病院等	7
高齢系	146	斎場等	7
障害系	20	公園等	446
こども系	116	交通	97
その他	26	上水道	62
		下水道	46
学校施設	514	港湾	150
小・中・高特別支援	510	市場	4
その他	4	焼却工場等	17
		その他	80
市営住宅	109	その他	3
市営住宅	109	その他	3

財政局 横浜市公共建築部マネジメント白書（第2版）より

左頁上から：区庁舎（都筑区総合庁舎）／市営住宅（川辺町第二住宅）、交通施設（保土ヶ谷営業所）／スポーツ施設（磯子スポーツセンター）／公園施設（東俣野中央公園管理棟）／西洋館（エリスマン邸）
右頁上から：学校（横浜サイエンスフロンティア高等学校・附属中学校）／図書館（山内図書館）／社会福祉施設（六ツ川地域ケアプラザ）／病院（横浜市立市民病院）／文化施設（横浜みなとみらいホール）



横浜市 公共建築の はじまり

100年前の横浜
初代建築課長 山田七五郎
震災復興事業期の建築課
100年を超える建築
開港記念会館
赤レンガ倉庫

100年前の横浜

青木 祐介 [横浜開港資料館・横浜都市発展記念館 副館長] 寄稿

1922 (大正11) 年4月1日、横浜市の建築営繕業務を所管する建築課が誕生しました。その2年前の1920 (大正9) 年4月1日に、市の社会事業拡大にともなう公共施設の工事増加を背景に、初めての営繕組織である臨時建築課が新設されましたが、そこから臨時の文字が取れ、総勢32名からなる組織としての再出発でした。建築課発足当時、大正時代の都市横浜はどのような状況にあったのでしょうか。

港都から工都へ

1909 (明治42) 年、開港50周年を迎えた横浜市では、記念事業として横浜市歌と横浜市章 (ハマ菱) が制定され、同年7月1日には、政府による築港工

事が進行中の新港ふ頭で記念式典が開催されました。会場となった新港ふ頭の造成は、横浜市にとっても将来の発展に不可欠な事業であり、政府の財政難により停滞していた築港工事に対して、残りの工事費の3分の1を市が負担することで、工事の再開にこぎつけたものでした。この年、横浜市では初めて人口が40万人を超え、2年後の1911 (明治44) 年4月1日には、第2次市域拡張により子安、滝頭、磯子などの地域が横浜市に編入されて、市域は現在の中区を中心とした36.7km² (現在の市域の約8%) の範囲となりました。1917 (大正6) 年11月には横浜港の第2期築港工事がすべて完了し、万トクラスの船舶が接岸できる岸壁を備えた新港

ふ頭が完成しました。ふ頭内には港湾荷役用のハンマーヘッドクレーン (現存) や煉瓦造保税倉庫 (現・横浜赤レンガ倉庫) などの陸上設備が建設され、また臨港貨物線 (現・自動車道) が敷設されて、海陸連絡鉄道が整備されました。これにより港の輸送機能は大きく向上しましたが、ふ頭内には貨物ヤードがなかったため、表高島町にあらたに貨物駅が設けられ、1915 (大正4) 年12月に高島貨物駅として開業しました。新港ふ頭の完成によって、横浜港の貿易額は輸出が8.3倍、輸入が2.6倍と大きく増加しましたが、さらに1921 (大正10) 年5月には、内務省土木局の横浜土木出張所が設置され、外国貿易設備 (瑞穂ふ頭) と内国貿易設備 (高島ふ頭・山内ふ頭) を築造する第3期築港工事が開始されました。

1: 大正時代の横浜「大正調査番地入 横浜市全図」(部分) 1920 (大正9) 年〈横浜開港資料館所蔵〉明治後期からの第2期築港工事によって完成した新港ふ頭のほか、新港ふ頭に乗り入れる臨港貨物線や高島の貨物駅など、海陸連絡設備が整備された大正時代の横浜港の状況が確認できる。市街地を走る赤いラインは横浜市電の路線。



そのほか臨海部では、現存する2基の石造ドックをもとに船舶の修繕業を興した横浜船渠株式会社が、1917 (大正6) 年1月に造船部門を新設して、以降、横浜港における造船業の中心的存在となっていきます。同じく民間事業者の動きでは、1913 (大正2) 年8月、実業家浅野総一郎らによる鶴見埋立組合 (現・東亜建設工業) が鶴見・川崎地先の埋め立て事業に着手し、のちの京浜工業地帯の原形が形成されていきました。

都市計画の時代

横浜の市街地に目を向ければ、明治末から大正初期にかけて、横浜市庁舎 (1911年) や開港記念横浜会館 (現・横浜市開港記念会館、1917年) などの施設が次々と完成しました。華やかな煉瓦造の公共建築で街が賑わ

いを見せる一方で、人口が40万人を超えた都市は飽和状態に達していました。

開港から60年を迎えた1919 (大正8) 年4月1日、横浜市は市区改正局を新設し、本格的な都市計画事業に着手します。市区改正局長には、内務省土木局の技師であった阪田貞明が招聘され、翌年臨時建築課の初代課長となる山田七五郎も、同局兼務となりました。発足したばかりの同年4月28日、現在の関外地区で「埋地大火」と呼ばれる火災が発生し、千歳町・扇町一帯の約3000戸を焼失します。市区改正局では焼失跡地の区画整理を実施し、延焼防止に加えて将来の電気鉄道敷設を目した主要道路の拡幅をおこないました。

そして同年の都市計画法の成立をふまえて、翌年1月、市区改正局は都市計画局と改称し、5月に「『大横浜』建設の綱領

横浜市都市計画一班」を発表します。横浜市および隣接する13カ町村の範囲 (のちの第3次市域拡張の範囲) を都市計画区域とし、商業地域・工業地域・住居地域の用途地域が定められました。また市内の交通量調査にもとづいて幹線道路網を計画したほか、1921 (大正10) 年4月には電気局 (現・交通局) を発足させ、横浜電気鉄道 (路面電車) の市営化を実現しました。これが横浜市電にあたります。

このように大正時代には、横浜港の拡張に加えて、交通網やライフラインの整備など本格的な都市計画事業が進められていましたが、1923 (大正12) 年9月1日に発生した関東大震災により、市街地は一日にして瓦礫の山と化しました。前年に発足した横浜市建築課にとって、焼け跡からの公共施設の復興が大きな使命となりました。

2: 横浜市庁舎と派大岡川 大正時代〈横浜都市発展記念館所蔵〉1911 (明治44) 年に港町1丁目完成した2代目横浜市庁舎。煉瓦造3階建ての建物で、最上階には市会講場が設けられた。手前を流れる派大岡川は、現在では埋め立てられて首都高速道路横羽線となり、その上をJR根岸線が通っている。

3: 第2代横浜駅 大正時代〈横浜開港資料館所蔵〉1915 (大正4) 年に高島町へと移転して開業した第2代横浜駅。移転にともなって初代横浜駅は桜木町駅と改称した。煉瓦造の駅舎は、中央に塔をもつ堂々たる建物であったが、1923 (大正12) 年の関東大震災で被災し、駅としては短命に終わった。

初代建築課長 山田七五郎



1922 (大正11) 年に発足した建築課の建築課長、その前身である臨時建築課の建築課長であった山田七五郎について紹介します。

開港記念会館の建設を担当

大正3年、本市は、横浜港開港50周年記念事業として、開港記念会館の建設を決定し、その担当技師として山田七五郎を招きました。明治44年、竣工の長崎県庁舎建設に携わった山田は、その実績が評価され、長崎県知

事から横浜市長となった荒川義太郎に請われたといわれています。山田は、東京帝国大学にて辰野金吾らの指導を受け、建築を学びました。卒業後、文部省大臣官房嘱託や長崎県技師、長崎市技師などを経験し学校建築や庁舎建築の実務を経験しました。長崎県庁舎や長崎市庁舎などの建設チームにいた木村

龍雄や上田改平、宮本岩吉などを本市に呼び寄せ、開港記念会館の実施設計では、設計競技での採用案を活かしながら、ドーム形状を八角形にするなど施工の合理化を図る変更を行いました。

大正6年、当時の開港記念日であった7月1日に竣工記念式典が行われました。外観には赤レ

上：1923 (大正12) 年 横浜市建築課一同 (横浜市開港資料館所蔵) 前列左から3人目が山田七五郎



ンガと花崗岩を用いたリズムカルな意匠を施した「辰野式フリー・クラシック」といわれるものであり、山田が辰野に師事していたことの影響が伺われます。

都市の不燃化を訴える

開港記念会館の竣工後、都市の近代化を図る本市は、山田に学校建築事務を任じました。また、市区改正局が設置され、都市計画と都市の不燃化の業務を兼務しました。

大正8年に発生した埋地大火では、市内の約17万㎡を焼き尽くし、2万3000人の被災者を出し、尋常寿小学校を焼失させました。山田は、大火後の家屋調査を行い、「慈救時報」に「今回大火に就て家屋構造上の教訓」として防火線を耐火建築とすることなどの提言を行いました。

1：執務中の山田七五郎 (横浜都市発展記念館所蔵) 長崎時代に撮影されたもの、手描きの図面を広げ設計図書を確認している姿 / 2：開港記念会館の実施設計図 (横浜都市発展記念館所蔵) この青焼きが保存され、寄贈されたことによりのちのドーム復元につながった。 / 3：商工奨励館 (現横浜情報文化センター) (横浜都市発展記念館所蔵)

寿小学校の再建にあたり、小学校建築としては東日本で初の鉄筋コンクリート造を採用し、この設計は、その後の復興小学校に活かされています。そのほか、中村町第一共同住宅館は日本で初めての不燃化住宅であり、また、のちに震災後の3代目市庁舎となる中央職業紹介所が3階建ての鉄筋コンクリート造でした。

震災復興に尽力

関東大震災により壊滅的な被害を受け、木造だった小学校は火災により焼失したため、子どもたちの教育の場を早急に確保する必要がありました。復興小学校では、震災前にあった36

校のうち5校を改修し、昭和元年から5年までの5年間で31校の鉄筋コンクリート造の校舎を建設しました。

そのほか、山田は庁舎、公設市場、社会事業 (福祉) 施設、病院などを建築課長として統括し、復興事業として建設しました。復興事業の集大成であった商工奨励館 (横浜情報文化センターの一部として現存) は、9か月間で鉄筋コンクリート造4階建ての古典主義をベースとしたアールデコ調の建築物を竣工させ、復興事業は完了となりました。これを機に山田は本市を退職し、後任として鳥海他郎が建築課長に着任しました。



震災復興事業期の建築課



関東大震災からの復興に対応するため、7人の技師が、多岐にわたる施設の建設を担当しました。

7人の技師たち

震災復興事業の最盛期には、短期間で多くの建築が求められたことから、7人の技師たちが山田課長を支えました。

開港記念会館や塵芥処理場、商工奨励館などの特殊建築は木村龍雄が担当しました。

市民生活を直接支える本市の

台所である中央市場は、大量の物流を捌きかつ衛生的な近代施設が求められました。峰弥太郎は全く経験のなかった市場を担当し、中央市場を開設に導きました。

山本外三郎が担当した現在の福祉施設である社会事業施設は、市営住宅や託児所などで、急を要すことからほとんどが木造建築でした。

校舎がない中、青空教室で対応するなど苦心していた義務教育の場である学校において、子どもたちに安全で安心な校舎を建設することは、最優先課題でした。担当技師は川上礎器、石川徹。5年間で31校という短期での建設は、担当を課内コンペで決めるなど、活発で自主性を尊重したものでした。

上：横濱市中央食品市場（横浜市社会事業施設一覧）公設市場は、大正期の米騒動を契機に食品の安定供給を目的として開設した。写真は工事中のもの。



近代医療の礎であり、本市の中核病院であった十全病院と萬治病院は大澤源之助が担当しました。その後病院は、横浜市立大学附属病院となり、萬治病院は閉院し、その跡地に現在の脳卒中・神経脊椎センターを整備しました。

鳥海他郎は、木村と開港記念会館復興に携わるとともに、現

在も洋館部分が残っている市長公舎を担当しました。

増員して要望に対応

7人の技師のもと建築課の職員数は大正12年に31名、大正13年には54名、大正14年には96名となり、復興事業のピークであった昭和3年には117名に拡大しま

した。この当時に手がけた施設は、学校、市営住宅、公民館、隣保館、授産所、病院、市場、質舗、簡易宿泊所、区役所、消防署、塵芥処理場、火葬場、野球場、市長公舎、商工奨励館、ホテル・ニューグランド、横浜公園・野毛山公園・掃部山公園施設など多岐にわたりました。

1：1921 横濱市児童相談所・横濱市託児所（横浜市社会事業施設一覧）2階を児童相談所、1階を託児所として使用。／2：1926 十全病院（横浜都市発展記念館所蔵）関東大震災によって壊滅した横浜十全医院は、3年後の大正15年に最先端の設備を持つ病院として浦舟町に開設した。／3,4：大正十一年事務報告書（横浜市事務報告書）

100年を超える建築——1 開港記念会館

100年を超える建築物は、
様々に変遷し現在も活用されています。

- 1917 竣工
- 1923 震災被災、内部焼失
- 1927 復興工事竣工
- 1945 接收
- 1958 接收解除
- 1978 改修工事実施
- 1989 ドーム復元、重要文化財指定
- 2000 保存修理・バリアフリー
- 2021 保存改修工事実施
- 2023 リニューアルオープン

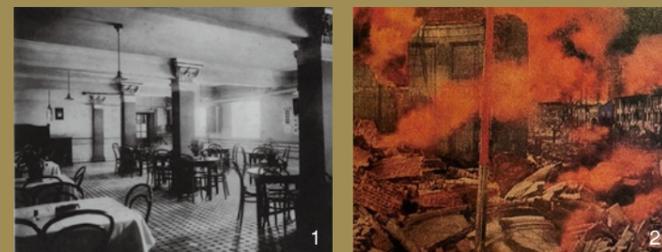
開港50周年記念祭
から震災まで

復興事業から
接收解除まで

ドーム復元から
現在まで

1917 開港記念横浜会館（横浜開港資料館所蔵）

横浜港開港50周年記念事業として計画された開港記念会館は、大正2年に実施された設計競技で、東京市技師、福田重義の設計案が選定されました。その後、山田らによって実施設計、建設が行われ、大正6年に竣工しましたが、建築課発足の翌年の大正12年に関東大震災で被災します。横浜中心部の惨状を記録した写真にはそびえ立つ時計塔が写し出されています。碇^{ていれん}鉄^{おびてつ}構法を採用し、組積造であるレンガ壁の要所に水平方向に帯鉄を廻し、垂直方向の鉄棒を帯鉄に定着させるという工法が、地震の揺れから建物を守りました。しかしながら、火災により内部と屋根が焼失しました。



1:1917 本町食堂（横浜市社会事業施設一覧）開港記念会館地下に食堂があった。「本市ノ中心地ナル関内ニハ各種ノ官公署及び内外商店軒ヲ並べ、之ニ通勤スル官公吏商店員ハ甚ダ多数ニ上ルノデアル。（中略）記念会館ノ地下室ヲ利用シテ公設ノ簡易食堂ヲ開設スルコトナッタノデアル。」/2:1923 開港記念横浜会館（横浜開港資料館所蔵）周辺は被災し瓦礫となっているが、右側奥に時計塔がそびえ立っている。

復興事業にて昭和2年には復興工事を実施しました。内部の架構を鉄筋コンクリートにて補強する工事でしたが、ドーム屋根の復旧には至らず、陸屋根で簡素化された復旧でした。戦災では被災せず、戦後連合軍に接收され、昭和20年から33年まで、「メモリアルホール」と呼ばれ、軍の娯楽厚生施設として使用されていました。令和4年の改修工事にて、接收時代の利用状況が垣間見える遺構が発見されています。接收解除後、昭和34年、中区の公会堂として位置付け、名称を「横浜市開港記念会館」としました。



3:1927 横浜市開港記念会館（横浜開港資料館所蔵）昭初期にはそのほとんどがドーム屋根のない開港記念会館であった。/4:2022 バーバーショップ サイン（株式会社文化財保存計画協会所蔵）接收時のショップサインが、改修により発見された。

昭和60年に創建当時の設計図が発見され、本市に寄贈されたのを契機として、平成元年に大正時代の創建時の姿に復元しました。このとき、国の重要文化財に指定され、引き続き公会堂として活用しています。平成11年から2年間、保存修理工事を行うとともに、平成9年に制定された「横浜市福祉のまちづくり条例」に基づくバリアフリー改修で、エレベーターや多目的トイレの新設などを行いました。

令和4年には外装と地階内装の漆喰を復元する保存修理工事を行いました。文化財としての価値を維持しながら、市民利用に応える改修工事を今後も行っていく必要があります。



5:2000 横浜市開港記念会館（提供：清水建設）エレベーター設置

100年を超える建築——2
赤レンガ倉庫

- 1911 2号館竣工
- 1913 1号館竣工
- 1923 震災 1号館半壊
- 1930 復旧工事竣工
- 1945 接收
- 1956 接收解除
- 1989 倉庫用途廃止
- 1992 国から取得
- 1994 保存改修
- 2000 利活用改修着手
- 2002 商業施設・文化施設としてリニューアルオープン
- 2021 外壁改修工事実施
- 2022 リニューアルオープン

貿易を支える
保税倉庫から
軍需物資補給基地へ

接收から
コンテナ輸送により
保税機能衰退

本市取得から
保存利活用工事、
観光資源へ

大蔵省臨時建築課のリーダーだった妻木頼黄により設計建設された赤レンガ倉庫は、日本で最初の荷物用エレベーターや消火水栓、防火扉などを備えた当時の最新鋭の倉庫でした。

関東大震災により、1号館は半壊しましたが、2号館は倒壊を免れました。1号館は、その後の修復工事で半分の大きさに縮小され、内部に鉄筋コンクリートの補強壁が取り付けられるなどの改修工事が行われました。第二次世界大戦が始まると、海外との貿易が途絶え、本来の用途である保税倉庫としてではなく、戦争における軍事物資の補給基地となりました。



1: 1923 赤レンガ倉庫(1号館)〈横浜都市発展記念館所蔵〉被災した1号館

約10年間続いた接收が解除され、港湾倉庫として再稼働しましたが、1970年代には海上輸送のコンテナ化が急速に進んだことで取扱貨物量が激減しました。本市は都市再生計画において赤レンガ倉庫の保存の検討を始めました。昭和58年には「みなとみらい21」事業に着手し、新港地区は歴史と景観を生かしたまちづくりとして整備が進みます。平成元年、倉庫としての用途は廃止され、赤レンガ倉庫は80年の歴史に一旦幕を下ろしました。

平成4年、国との交渉の末、赤レンガ倉庫の土地と建物を取得し、「保存活用」に向け大きく前進しました。平成6年から保存のための大規模な改修工事を実施し、屋根の改修、窓や庇の復元、鉄骨による構造補強など平成11年まで続きました。平成12年からは商業施設として必要な設備を備えるための内部改修工事が行われ、平成14年、文化・商業施設としてリニューアルオープンし、横浜のシンボルとして活用されています。令和3年、2号館は創建から110周年を迎え、令和4年には空調設備などの大規模改修工事を行いました。



2: 1999 内部改修〈港湾局所蔵〉/3: 2022 リニューアルオープン

1913 赤レンガ倉庫(1号館)〈港湾局所蔵〉



横浜市 公共建築の 100年

これまでの横浜市公共建築
市民に身近な公共建築
庁舎
学校
住宅
横浜 commons
新たな時代の公共建築へ

これまでの横浜市公共建築

第2章では、横浜市公共建築が歩んできたこれまでの100年を振り返ります。市民に身近な公共建築として、市庁舎や区庁舎などの庁舎施設、地区センターや地域ケアプラザなどの市民利用施設、学校、住宅について取り上げ、建築課発足以降、震災や戦災、高度経済成長期などの数々の時代の波に対応してきた取組やその時代に整備した建築物を紹介します。

始まりは、関東大震災復興事業



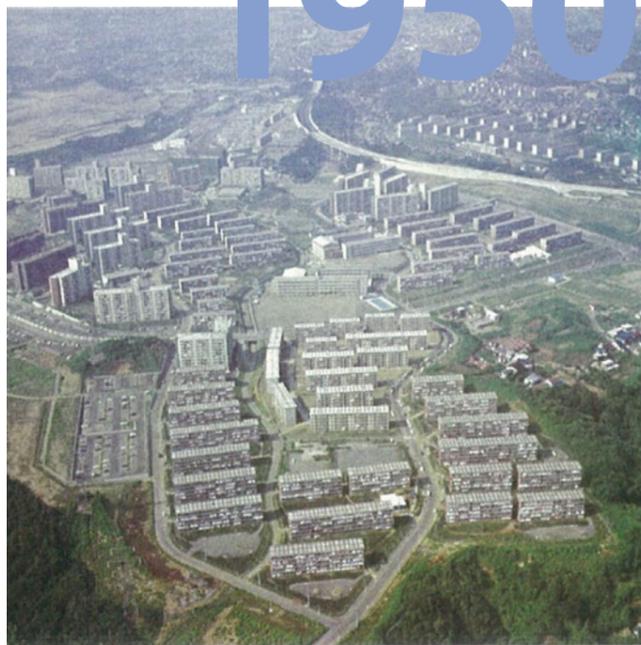
吉田小学校

1922(大正11)年に発足した「建築課」は、翌年に発生した関東大震災で市街地の多くが消失した本市の復興計画を支える中軸として取り組みました。震災復興として建設した建築物の一つである「震災復興小学校」では、震災前の木造やレンガ造の校舎から、新たに鉄筋コンクリート造で凝ったデザインの校舎を次々と建設しました。

震災復興は計画的なまちづくりのきっかけにもなり、この時代に山下公園など多くの公園も誕生しました。

1922

1950



野庭住宅・野庭団地

大量供給の時代

1945(昭和20)年の横浜大空襲により、市街地で大きな被害を受け、戦後は大部分が接収されました。

戦災からの復興を経て、高度経済成長期には、人口や世帯数の増加に対応するため、公共建築物の建設ラッシュが続きました。いち早く均一に建築物を量産するために、「標準設計図」を作成し、それを元に小・中学校や市営住宅を大量に整備しました。



横浜美術館

1980

「質」の時代へ

昭和後半に入り建設ラッシュが落ち着いてくると、「量」を整備する時代から、多様な市民活動を広げる文化施設などのニーズが高まり、「質」が求められるようになりました。

平成に入ると、幅広い世代の地域活動を広げる場として、地区センター、地域ケアプラザ、コミュニティハウスなどを多く整備するとともに、高度経済成長期に建設した公共建築物の耐震補強やバリアフリー化への対応が急務となりました。また、大きな震災を契機に、耐震診断や耐震改修、ホールや体育室などの大空間の天井脱落対策を進めました。

時代は令和へ

現在は2050年の脱炭素社会の実現に向け、省エネルギー化や再生可能エネルギーの導入、木材利用などに取り組んでいます。

2022



山下地域ケアプラザ

市民に身近な公共建築

1—庁舎



市庁舎、区庁舎
公会堂、図書館
スポーツセンター
地区センター
地域ケアプラザなど

2—学校



小学校、中学校
高等学校
特別支援学校など

3—住宅



市営住宅



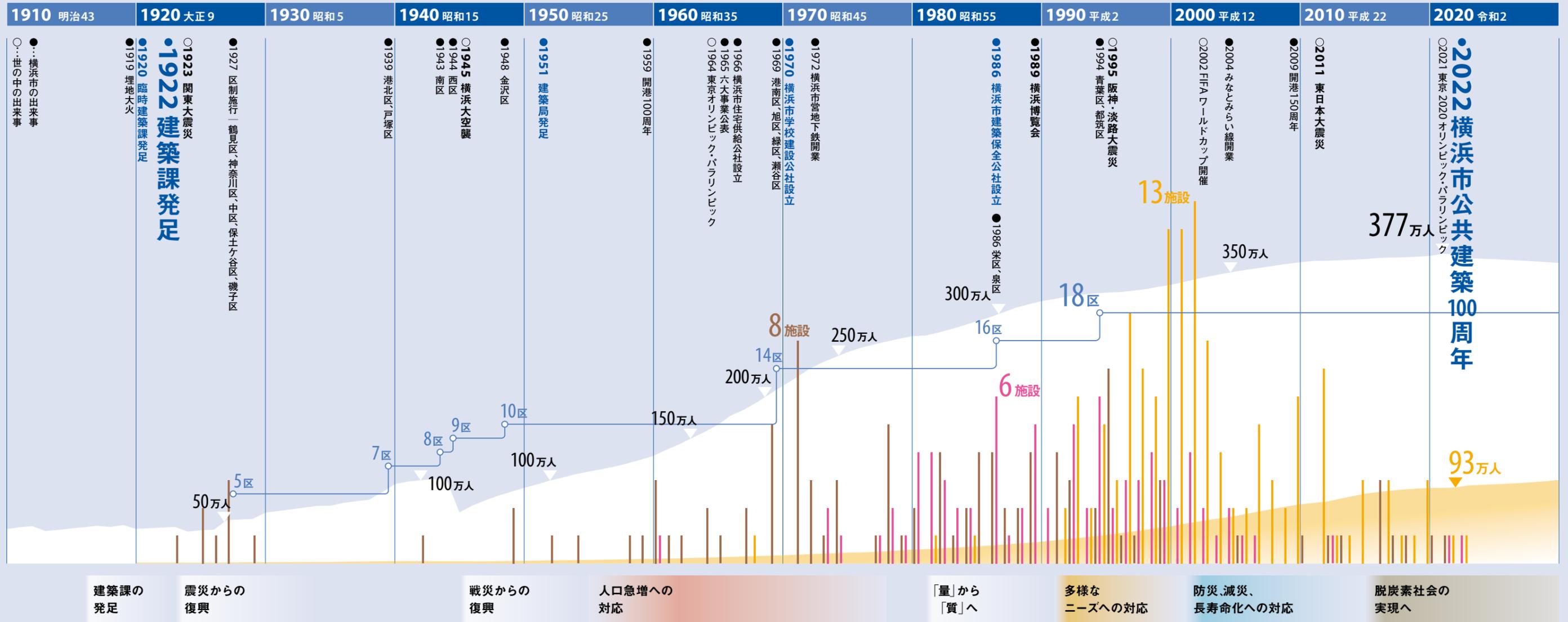
市民に身近な公共建築——1

庁舎

…庁舎等（庁舎・公会堂・図書館・スポーツセンター）竣工数
 …地区センター竣工数
 …地域ケアプラザ竣工数
 …横浜市総人口
 …高齢者人口（65歳以上）
 …区数

震災や戦災からの復興、人口の急増、行政区の再編成等に伴い、事務機能を担う市庁舎・区庁舎だけでなく、都市の基盤となる施設や市民生活を支えるための様々な施設を整備してきました。

区制施行時は5区でしたが、市域の拡張や人口増加に伴う数次の再編成を経て、現在は18区まで増え、新たな区が誕生する度に、区庁舎や公会堂など、区ごとに必要な施設を整備しました。



※ (▲) の建物は現存していません。



庁舎

1920年代

1940年代

1960年代

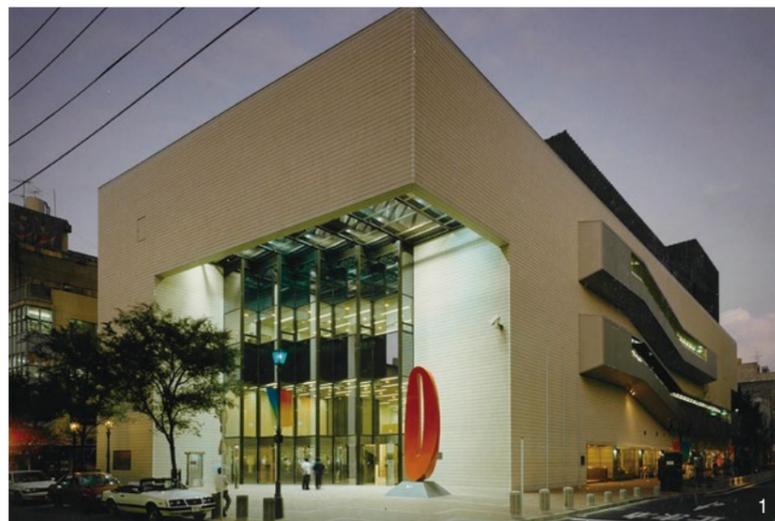
1980年代

2000年代

2020年代

多様な市民ニーズに応える

多様化する市民ニーズや社会課題の解決を図るため、市民活動を支える身近な施設の整備が進みました。



「量」が必要だった時代から「質」が求められる時代に移り、公共建築も多様化の時代を迎えました。「横浜市市民文化会館 関内ホール（設計：芦原義信氏）」、「横浜美術館（設計：丹下健三氏）」など、設計に著名な建築家を積極的に登用し、デザインにも力を入れました。

多様化する市民ニーズに応えるため、地区センターやスポーツセンターといった市民利用施設をはじめ、図書館、公園施設などの施設も多く整備しました。これらの施設は市民が利用しやすく、街の景観に寄与し、何よりも市民に愛着を持たれることを目指しました。

その一方で、高齢化社会を迎え、福祉施策の拠点となる施設の整備が求められるようになり、福祉・保健の相談や情報提供などを行うことができる地域の身近な窓口として、地域ケアプラザの整備を進めました。

1: 1986 関内ホール／2: 1989 横浜美術館／3: 1992 大岡健康プラザ 旧神奈川県立商工実習学校跡地に整備した地区センターと地域ケアプラザ、スポーツセンターの複合施設で、旧校舎の外観などを意匠復元／4: 1992 南図書館 弘明寺公園内に整備した市内16番目の図書館。全国で初めて屋上に市民プールを備えた図書館となっている。／5: 1992 港南北公園こどもログハウス（どんぐりハウス）こどもログハウスは平成2年から9年にかけて、各区に1館を整備した。



庁舎

1920年代

1940年代

1960年代

1980年代

2000年代

2020年代

地域の身近な施設

多様な市民ニーズに応える



● 地区センター

地域住民が、自らの生活環境の向上のために自主的な活動及びスポーツ、レクリエーション、クラブ活動等を通じて相互の交流を深めることのできる施設です。昭和48年に「地区センター整備基本構想」が策定され、同年には第1館目となる希望が丘地区センターを整備しました。

日常利用圏に配置することを目標とし、市内に81館整備する計画で、令和4年に最後の81館目となる都田地区センターを整備しました。

● 地域ケアプラザ

高齢者、子ども、障害のある人など誰もが地域で安心して暮らせるよう、身近な福祉・保健の拠点としてさまざまな取組を行っている本市独自の施設です。当初は「在宅支援サービスセンター」という名称で、平成3年に泉区に第1館目となる上飯田地域ケアプラザを整備しました。

中学校区に1館を整備目標とし、現在は143施設あります。地区センターなどと一体で整備した施設も多くあります。

1: 2022 都田地区センター・地域ケアプラザ 首都高速道路北西線のトンネル上部に整備／2: 2019 岡津地域ケアプラザ／3: 1973 希望が丘地区センター（横浜市史資料室所蔵資料）／4: 1991 上飯田地域ケアプラザ



庁舎

1920年代

1940年代

1960年代

1980年代

2000年代

2020年代

新たな手法を用いた公共建築

民間企業の資金や創意工夫、設計者・施工者の持つ

ノウハウを最大限に活かした新たな整備手法を取り入れました。

平成以降、人口急増期に整備した多くの施設が老朽化を迎えます。新たな施設の整備や庁舎の建替えにあたっては、本市が整備する従来型の手法だけでなく、民間の資金とノウハウを活用するPFI※といった新たな手法を取り入れ始めました。PFIを活用した施設では民間企業による整備後、事業期間終了までの建築物の維持管理、運営が行われます。「瀬谷区総合庁舎」と「戸塚区総合庁舎」ではこの手法を活用し、建替えました。老朽化が進んだ「横浜市上郷森の家」もこの手法を採用し、施設を改修しました。

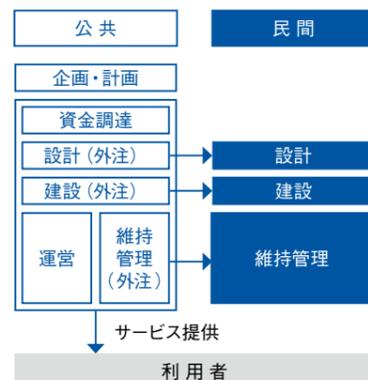
また、従来の設計・施工を分割して発注する方式だけでなく、設計・施工を一括して発注するデザインビルド方式も採用しています。令和2年に竣工した現在の市庁舎の整備では、この方式を採用し、民間企業のもつノウハウを最大限に活かすとともに、工期短縮も実現しました。



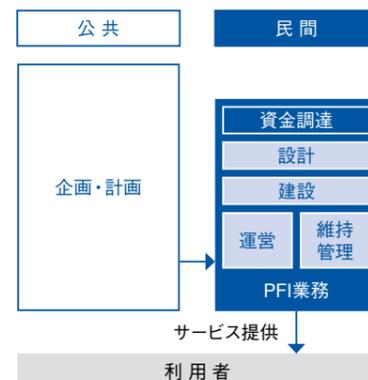
1:2012 瀬谷区総合庁舎 区庁舎や公会堂、公園などを整備/2:2013 戸塚区総合庁舎 区庁舎や区民文化センターのほか、民間の商業施設と合わせて整備/3:2020 横浜みなとみらい国際コンベンションセンター（パンフィコ横浜ノース） MICE施設として整備/4:2019 横浜市上郷・森の家 PFIで施設の改修を実施



従来型公共事業



PFI事業

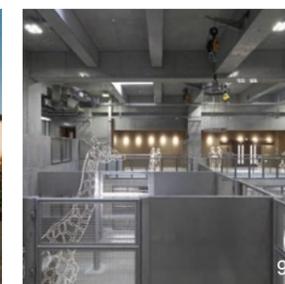


※PFI (Private Finance Initiative)

公共施設等の設計、建設、維持管理及び運営に、民間の資金とノウハウを活用し、公共サービスの提供を民間主導で行うことで、効率的かつ効果的な公共サービスの提供を図る手法



よこはま動物園ズーラシアは、野毛山動物園、金沢動物園に次いで、平成11年に開園した国内最大級の敷地面積を有する動物園です。広大な園内には、動物の生態に合わせた獣舎のほか、トイレや休憩所など、様々なデザインの建築物があり、これらも公共建築物として整備しました。

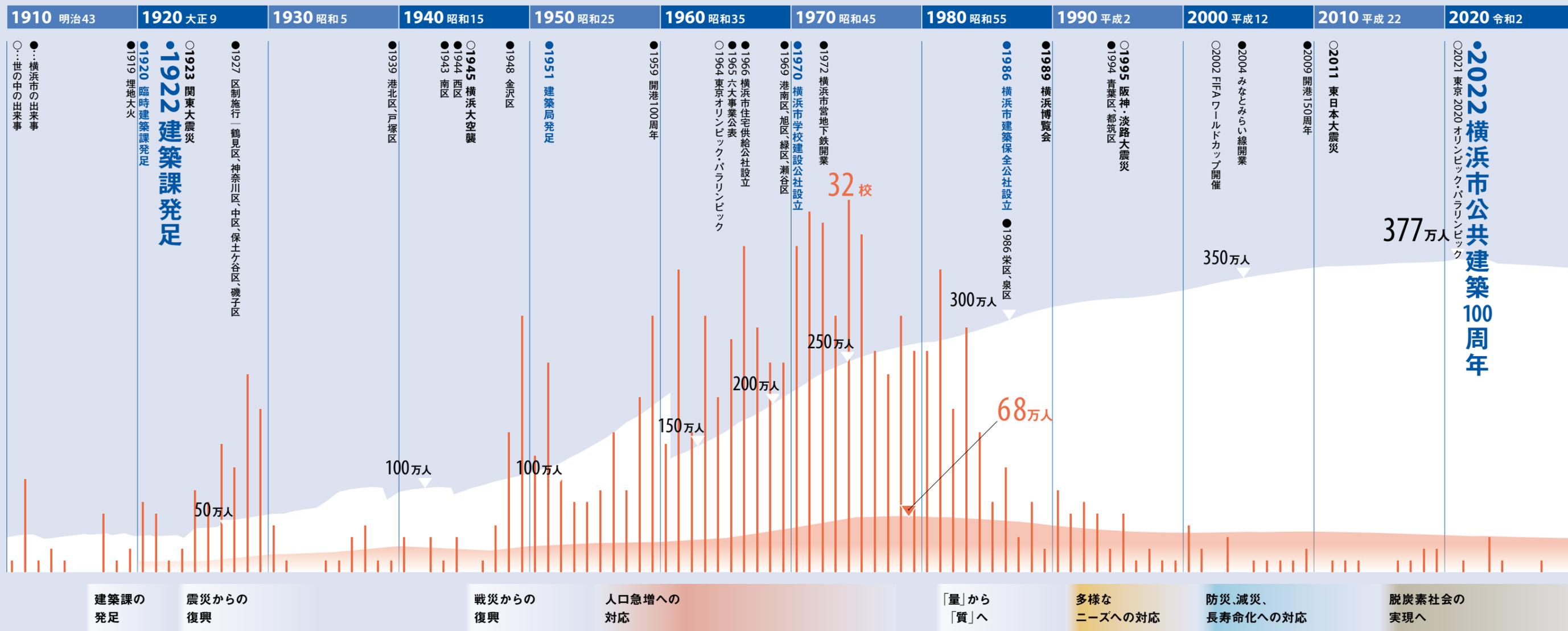


1:1998 南入口ゾーン/2:1997 インドゾウ舎/3:1997 オラウータン・テナガザル舎/4:2006 カワイノシシ舎/5:2013 チータービューイングシェルター/6:2011 ビグミーゴート舎/7:2013 休憩棟(サバンナテラス)/8:2003 アフリカジャングルゾーントイレ棟/9:2013 キリン舎/10:2002 オカビ舎



関東大震災により多くの小学校が失われ、震災後は震災復興小学校の整備が進みました。その後、戦災からの復興を経て、子どもの人口急増期のピーク時には年間32校を整備しました。人口急増期以降もしばらくは学校の整備を続けましたが、近年では新設校の整備は少なくなっています。一方で、老朽化した校舎の建替えを進めています。

校舎竣工数 横浜市総人口 子どもの人口 (0歳から15歳未満)



建築課の発足 震災からの復興 戦災からの復興 人口急増への対応 「量」から「質」へ 多様なニーズへの対応 防災・減災、長寿命化への対応 脱炭素社会の実現へ

1910 明治43 1920 大正9 1930 昭和5 1940 昭和15 1950 昭和25 1960 昭和35 1970 昭和45 1980 昭和55 1990 平成2 2000 平成12 2010 平成22 2020 令和2



1897 横浜商業高校 (▲) 〈横浜中央図書館所蔵〉	1920 寿小学校 (▲) 〈横浜開港資料館所蔵〉	1928 吉田小学校 (▲) 〈横浜中央図書館所蔵〉	1951 中村小学校 (▲) 〈横浜中央図書館所蔵〉	1954 大鳥中学校 (▲) 〈横浜中央図書館所蔵〉	1966 六浦小学校 〈横浜中央図書館所蔵〉	1970 ブレハブ校舎 (左近山分校) (▲) 〈横浜市資料室所蔵資料〉	1978 並木第一小学校	1990 中川西小学校	2011 あかね台中学校	2019 箕輪小学校	2021 緑園学園
-----------------------------------	---------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	------------------------------	--	-----------------	----------------	-----------------	---------------	--------------

※ (▲) の建物は現存していません。



1920年代

1940年代

1960年代

1980年代

2000年代

2020年代

学校

はじめは学校建築に力が注がれた

建築課の発足前から力を注いでいた学校建築は、震災や戦災からの復興の中で、再び力が注がれました。



本市の学校建築は、臨時建築課が大正9年に発足する以前も主要な業務として、明治後半から大正期にかけて、土木課工務係が新築・改築・増築を含めて約30校の尋常小学校を整備しました。鉄筋コンクリート造の校舎建設は、当時の特筆すべき技術で、寿小学校は本市建築営繕における初めての鉄筋コンクリート造として、全国的にも先進的な事例でした。

大正12年の関東大震災の際、当時建設されていた小学校36校のうち半数以上が全焼又は全壊しましたが、寿小学校は焼失しませんでした。そのことが、以後の学校建設における鉄筋コンクリート造の標準化につながります。

その後も昭和20年の横浜大空襲により、多くの学校は焼失する被害を受け、復興の中で学校建築に再び力が注がれました。

1: 寿小学校〈横浜市学校沿革誌〉本市初の鉄筋コンクリート造校舎。震災だけでなく、戦災を受けても焼け残り、昭和31年に解除されるまで米軍に接収されていた。/2,3: 吉田小学校〈横浜市立復興小学校図集〉明治時代に建てられた木造校舎(写真2)は関東大震災により焼失したが、その後、鉄筋コンクリート造で再建(写真3)され、震災復興小学校として「鉄筋コンクリート造」「3階建て以下」「スロープの設置」の特徴を持っていた。/4: 復興小学校のスロープ(東小学校)〈横浜市立復興小学校図集〉避難のしやすさを考慮し、ほぼ全ての震災復興小学校にスロープを設置/5: 大鳥中学校〈横浜市学校沿革誌〉昭和29年に戦後初の鉄筋コンクリート造として建設



1920年代

1940年代

1960年代

1980年代

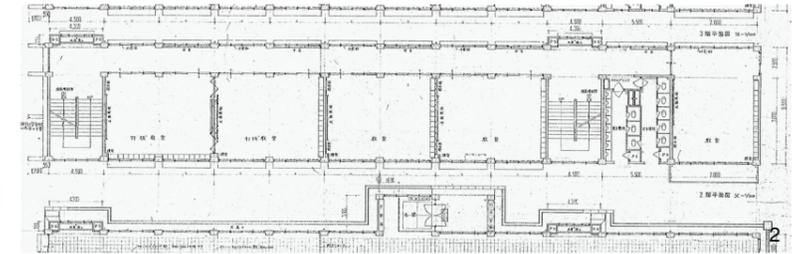
2000年代

2020年代

学校

合理的に大量に造る

児童数の急激な増加に対し、合理的に設計や工事を進めるため、標準設計図を用いて学校整備を進めました。



1950年代の第一次ベビーブーム対策をきっかけとして、学校の計画的整備が始まりました。合理的に設計と工事を進めるために、本市では昭和30年に木造校舎、昭和34年に鉄筋コンクリート造校舎の標準図を作成しました。また昭和42年には、限られた校地を最大限活用するために、校舎と体育館を積層(立体型)にした標準図も作成しました。

一方で、大規模な団地開発により、児童数に対して学校の建設が追い付かず、一時的なプレハブ校舎の設置や分校の整備も行いました。昭和45年には、本市と銀行による融資で「財団法人横浜市学校建設公社」を設立し、公社が先行して学校を建設し、その後、本市が学校を買い取るという全国でも先駆的な方式を採用しました。

「財団法人横浜市学校建設公社」は昭和61年にその役目を終え解散し、現在は「公益財団法人横浜市建築保全公社」となり、学校を含む公共建築物の保全に取り組んでいます。

1: 標準図による小学校(六浦小学校)〈横浜市学校沿革誌〉柱等の構造的な寸法だけでなく、部屋や開口部の大きさ、仕上げまで標準図により画一的に整備した。/2: 学校標準図 標準図は、意匠などの小規模な改訂だけでなく、法改正などに合わせた大規模な改訂も繰り返しながら、現在でも最新の標準図が使われている。/3: 公社による学校建設(城郷中学校)〈横浜市学校沿革誌〉学校建設公社の仕組みや標準図を活用しながら効率的に学校整備を進めた。/4: 体育館が積層された校舎(立体型)〈横浜市学校沿革誌〉敷地を有効利用するために、教室の上に体育館を配置する学校もあった。/5: 団地とプレハブ校舎(左近山分校)〈横浜市資料室所蔵資料〉団地開発に伴って児童数が急増した際は、プレハブ校舎により一時的な対応を行った。/6: 標準以外の学校〈横浜市学校沿革誌〉標準図による設計が大半を占めていた一方、集合住宅の1階を臨時的に学校として整備した事例や円形校舎など、標準外の学校もあった。円形校舎は仏向小学校をはじめとして3校建設されたが、現存しているのは藤田小学校のみ。



学校

1920年代

1940年代

1960年代

1980年代

2000年代

2020年代

よりよい学校を目指して

学校にも新たな役割が求められるようになり、デザインや機能に特色のある学校の整備を進めました。



昭和末期から平成にかけては、昭和52年に「学校施設の改善に関する検討委員会」が設けられるなど、学校建築も「量」から「質」への時代となりました。標準図による設計・計画のプロセスを短縮する省力化のシステムを見直し、基本計画を大事にした上で設計テーマを持つことを重視するようになりました。

学校は地域に親しまれる「シンボル」としての役割も求められ、同時期に進んでいた六大事業の金沢地先埋立事業や港北ニュータウン建設事業の中では、外観のデザインを工夫した校舎を整備しました。

また、震災復興で建てられた鉄筋コンクリート造校舎の建替えも進みました。

その他にも「親しみある豊かな環境をもつ学校」を実現するために、フレキシブルな学習環境を目指して可動間仕切壁を設けた教室も登場するなど、それぞれ特色のある学校を建設しました。

1,2: 並木第一小学校〈横浜市の学校建築〉金沢地先埋立地に計画された小学校4校、中学校2校のうち最初に建設された学校。地域利用のためのオープンスペース確保や特徴的な屋根形状など、量から質への転換期において先駆的な事例／3: 南吉田小学校〈横浜市の学校建築〉復興小学校の建替え校であり、復興小学校の特徴であったスロープを校舎内に再現している。／4,5: 本町小学校〈横浜市の学校建築II、横浜の公共建築写真集〉復興小学校の建替え校の中でも、新しい教育理念に基づくオープンスクールを実践した。廊下と教室の間を可動間仕切りとし、多目的ホールの前に配置することで有機的な空間を創り出している。／6: 中川西小学校〈横浜市の学校建築II〉港北ニュータウン内に計画された小学校で、「街のシンボル性」「地域のコミュニティの場」「隣地との一体的な緑化」「周辺住宅との調和」をコンセプトに設計されている。



学校

1920年代

1940年代

1960年代

1980年代

2000年代

2020年代

色々な学校の使い方のために

児童・生徒だけの場所から、地域の方も使うことができる施設へ、学校のあり方や使い方も時代に合わせて変わってきました。



平成元年からはコミュニティハウス（スクール）の複合整備を開始するなど、「地域社会の拠点となる学校施設」づくりが進み、学校は児童・生徒だけでなく市民にとって生涯学習の支援の場となっていきました。

放課後児童を受け入れる環境として、平成5年に「はまっ子ふれあいスクール」のモデル事業が始まり、平成13年には全校展開を開始、その後、平成25年以降は「放課後キッズクラブ」へ事業を転換し、全ての小学校に整備しています。

近年は、時代の変化に伴うニーズの多様化に合わせて、学校のあり方も変化し、誰でも使いやすい環境とするために、エレベーターを設置するなど、バリアフリー化やトイレの改修を積極的に進めています。

1: 本牧中学校〈横浜市の学校建築III〉本牧の接取解除後に整備された学校で、外観は地区の建築協定に沿った特徴を取り入れ、地域利用される諸室は利便性を考え北側にまとめて配置している。／2: 横浜吉田中学校第二校舎 吉田中学校との統廃合により閉校となった旧富士見中学校跡地に「日本語支援施設」「コミュニティハウス」「地域防災拠点」を再整備／3: 青葉台小学校放課後キッズクラブ 既存校舎前に木造2階建てで計画され、室内は木のあたたかみが感じられる空間となっている。／4,5: 鶴ヶ峯中学校昇降機室増築 階段利用が困難な児童・生徒や学校利用者等のために既存校舎へのエレベーター整備を進めている。／6: 保全公社によるトイレ改修事例〈保全公社30周年記念誌〉生活様式の変化に合わせて洋式便器への改修やドライ化を保全公社とともに進めている。



学校

1920年代

1940年代

1960年代

1980年代

2000年代

2020年代

学校整備は新たな時代へ

子どもの数が減少していく一方、老朽化した学校の建替えなど、学校整備は新たな時代を迎えています。



本市全体の児童数（小学生）は昭和55年、生徒数（中学生）は昭和61年をピークに減少しています。現在は、一部の地域では開発などの影響により短期間で子どもの数が増加する場合もあり、既存校舎への増築や暫定校の設置、新設校の整備などの対応が求められています。

また、平成27年の学校教育法改正により、一人の校長・一つの組織で小学校・中学校の9年間を一貫して教育する校種として「義務教育学校」が新たに加わり、新しい形態の学校施設も整備しています。

1,2,3: 緑園義務教育学校 本市における義務教育学校としては、初めて施設一体型で整備。武道場には大きな開口部を設け、人工芝を張った交流広場と一体的な活用が可能／4: みなとみらい本町小学校〈日刊建設通信新聞社提供〉5: 市場小学校けやき分校 周辺学区の児童急増に伴い、分校として暫定的に整備。期間限定という前提を踏まえ、経済性、解体の容易さなどに配慮し、鉄筋コンクリート造ではなく、鉄骨プレース構造としている。／6: 矢向中学校増築 グラウンドへの影響を最小限にしつつ、生徒数の増加対策として校舎棟を増築した事例。建設コストを抑えるため、建築面積がコンパクトに収まる中廊下型としつつ、教室の配置を工夫し良好な採光と通風を確保している。



学校

1920年代

1940年代

1960年代

1980年代

2000年代

2020年代

学校整備は新たな時代へ



本市では、市内の市立小・中学校を昭和40年代から50年代にかけて集中的に整備してきました。そこで、老朽化対策や教育環境の向上を図るために、平成29年5月に「横浜市立小・中学校施設の建替えに関する基本方針」を策定し、計画的に学校建替えを進めています。

また、令和3年の法律改正により、小学校の全ての学年で1クラスの定員上限が35人となる「35人学級」の導入が段階的に行われており、改修工事を進めています。

今後は、建替えや改修工事に加え長寿命化にも取り組み、1校1校に最善の形で効率的・効果的な整備を進めていきます。

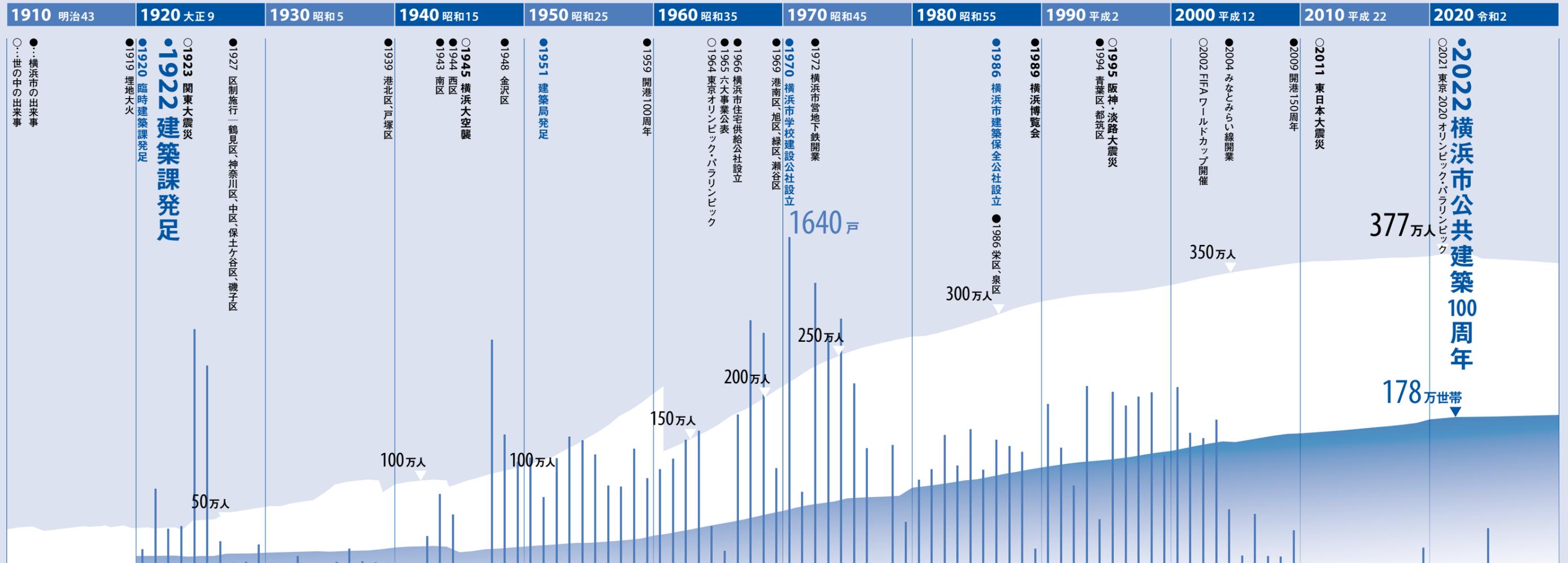
7,8,9: 子安小学校移転新築 本市の中でも特に歴史がある小学校の一つであり、校舎の老朽化と今後の児童数増加が予想されたため、敷地を移転し、新校舎を整備。／10,11: 箕輪小学校 再開発地区内に令和初の新設校として整備。市内でも特に児童数が多い大規模校なため、コンパクトな平面計画と明快な動線計画に配慮している。また、断熱や設備の工夫により省エネルギー化も実現した。／12: 上菅田笹の丘小学校（完成イメージ）／13: 汐見台小学校（工事中写真）／14: 都岡小学校（1期工事竣工写真）平成29年の建替えに関する基本方針の策定後、第1弾の工事が進行中

市民に身近な公共建築——3 住宅

埋地大火による被災者救済や都市の住宅不足を解決するため、市営住宅の建設が始まりました。震災や戦災により多くの住宅を失いますが、その都度、新たな住宅を建設・供給してきました。

その後、人口急増に伴う大量供給の時代から居住水準の向上など質が求められる時代を経て、住戸改善や建替えなど、市営住宅の再生を進めています。

市営住宅竣工数(戸数) 横浜市総人口 世帯数



2022 横浜市公共建築100周年

建築課の発足 震災からの復興 戦災からの復興 人口急増への対応 「量」から「質」へ 多様なニーズへの対応 防災・減災、長寿命化への対応 脱炭素社会の実現へ

1910 明治43 1920 大正9 1930 昭和5 1940 昭和15 1950 昭和25 1960 昭和35 1970 昭和45 1980 昭和55 1990 平成2 2000 平成12 2010 平成22 2020 令和2



1921 齋藤分住宅 (▲) 〈横浜市中央図書館所蔵〉	1921 中村町住宅 (▲) 〈横浜市中央図書館所蔵〉	1926 外国人住宅 (▲) 〈横浜市中央図書館所蔵〉	1939 分譲住宅 (▲) 〈横浜市中央図書館所蔵〉	1955 楽老住宅 (▲) 〈横浜市中央図書館所蔵〉	1965 上飯田住宅 〈横浜市史資料室所蔵資料〉	1972 南三双住宅	1984 岡村住宅 〈横浜の公共建築写真集〉	1996 矢向第二住宅	2005 中村町南住宅	2008 桜ヶ丘グリーンハイツ	2019 寿町スカイハイツ
--------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-----------------------------	------------	---------------------------	-------------	-------------	-----------------	---------------

※ (▲) の建物は現存していません。



1920年代

1940年代

1960年代

1980年代

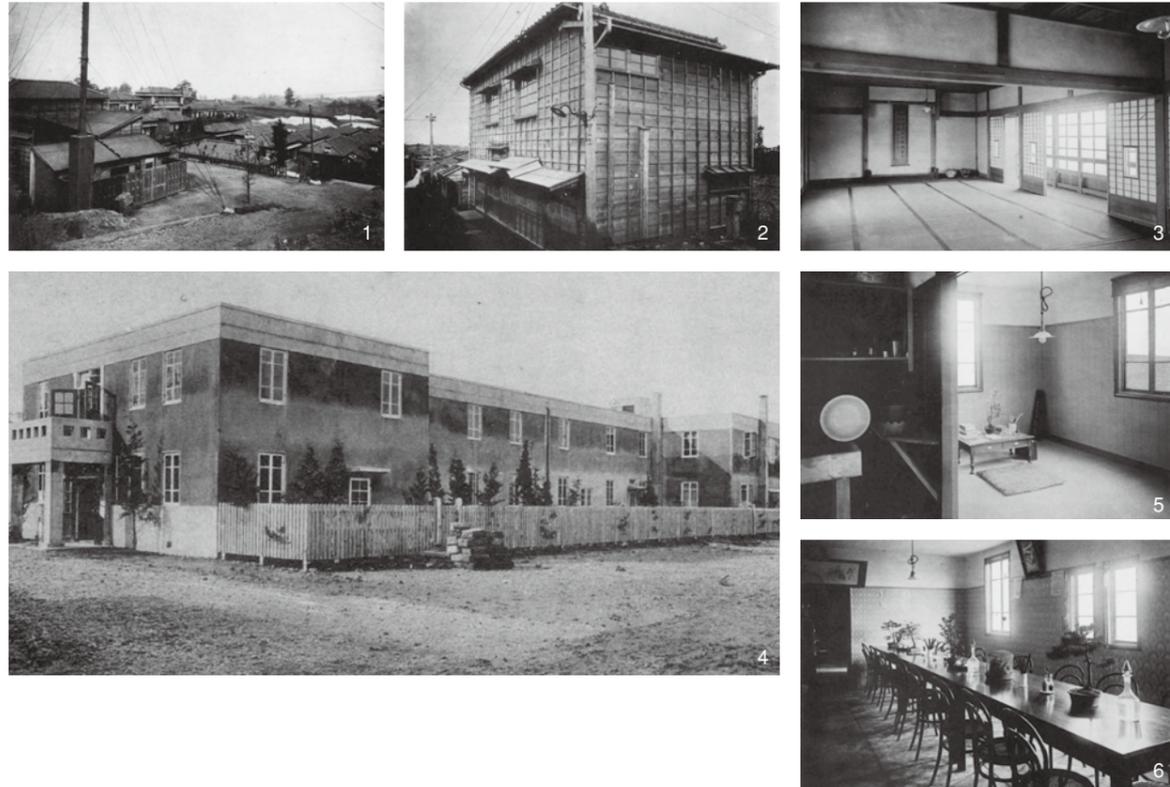
2000年代

2020年代

住宅

住宅不足の解消と不燃建築の取組

大火による被災者救済や大都市への人口集中による住宅不足などの問題を解決するため、新たな取組が始まりました。



大正8年4月28日、千歳町を火元とする「埋地大火」により3,000戸以上を焼失、被災者は2万3,000人余りに及ぶと言われ、付近一帯は甚大な被害を受けました。その被災者救済のために集められた義援金の一部を使い、住宅難緩和のため、「普通住宅」と呼ばれる「久保山住宅」74戸を、大正9年に最初の市営住宅として建設しました。その後、都市の住宅不足を緩和救済するため、齋藤分住宅、中村町住宅など4か所を建設しました。

また、明治末期頃から社会問題化し始めていた独身者、低所得者等に対し、簡易で清潔な居室を提供するため、中村町住宅の敷地内に東日本で最初の不燃建築の公営共同住宅で「共同住宅館」と呼ばれる、鉄筋ブロック造2階建ての「中村町第一共同住宅館」32戸を、大正10年に建設しました。以降、共同住宅館は3か所に建設しましたが、いずれも木造でした。

1,2,3:1920 久保山住宅〈横浜市社会事業施設一覧〉住宅敷地内には瓦葺木造平屋の二戸建32棟及び一戸建5棟の住宅、平屋で二戸建の住宅兼商店、2階建ての住宅兼浴場(外に浴室)、1階が二戸建住宅、2階に10畳と17畳半の二間からなる住宅兼倶楽部が各1棟／4:1921 中村町第一共同住宅館〈横浜市要覧〉／5,6:1921 中村町第一共同住宅館〈横浜市社会事業施設一覧〉建物内の1階は管理人室、下足室、応接室・食堂及び12室の住戸、2階は20室の住戸、屋上に物干し場あり。各室は1間の押入、台所兼用の土間、水道とガスを供給、廊下と部屋の間には低い掃き出し窓あり。1942年まで市営住宅、1943年以降は母子保護施設として使用、1968年に老朽化により解体



1920年代

1940年代

1960年代

1980年代

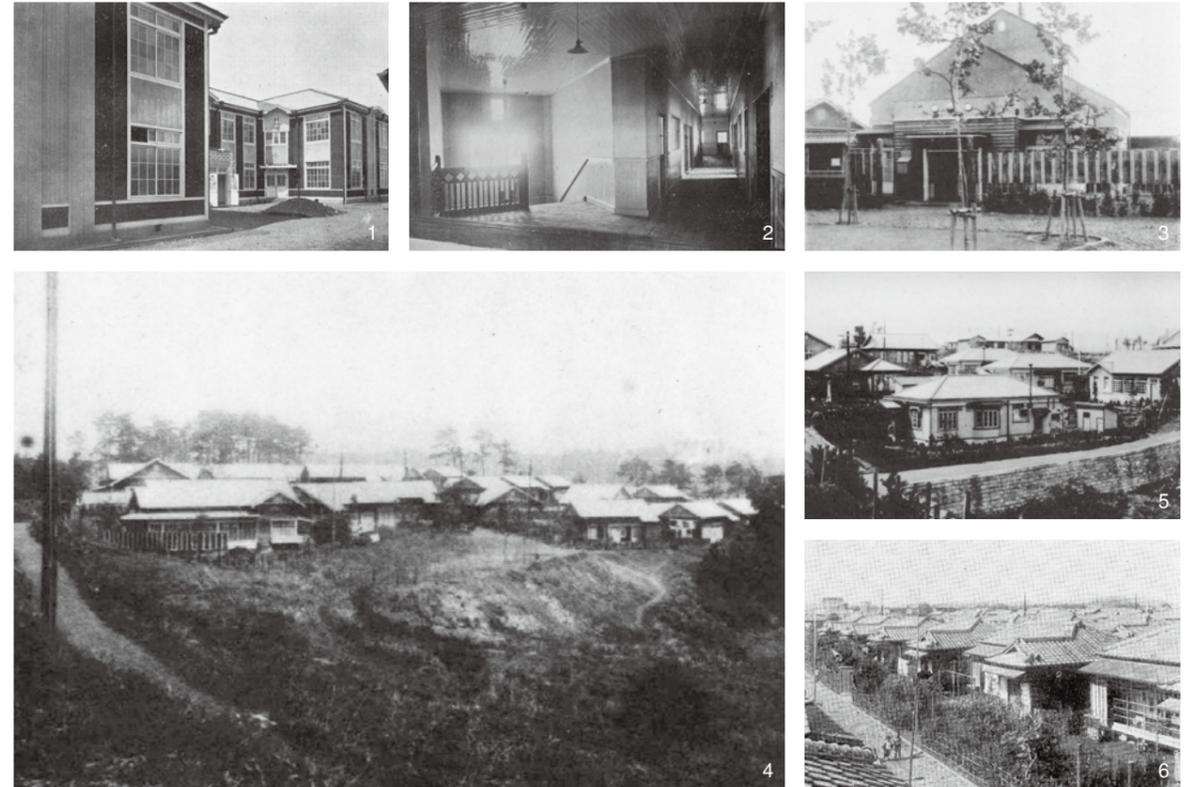
2000年代

2020年代

住宅

震災の影響と復興に向けて

震災前に建設した市営住宅の多くが被害を受け、住宅不足の解消に向けて早急に動き出しました。



震災後は、被害の程度が軽い使用可能な住宅の応急修理をするとともに、全壊した「普通住宅」や「共同住宅館」の建替え、七島住宅をはじめとする「復興住宅」など、その用途や目的により、大正13年から昭和4年頃までに、2,000戸を超える新たな住宅を建設しました。新たに建設した住宅の中には、震災によって他都市に移住した外国人を横浜に呼び戻すため、山手を中心に4か所建設した「外国人住宅」や、建設後3年で撤去する方針で建設した「仮住宅」などに加え、神奈川県が建設し、本市が管理経営を任された「小住宅」もありました。一部の仮住宅などは、その後の社会状況の変化により、3年を過ぎても引き続き市営住宅として使用しました。

また、昭和2年には新しい試みとして、本市が建設し、指定期間の賃家料を完納した者に所有権を譲渡する「供給住宅」や、昭和5年からは「分譲住宅」の建設を開始しました。

1,2:1925 柏葉共同住宅館(復興後)〈横浜市社会事業概要〉復興後の柏葉共同住宅館と2階内部廊下／3:1925 豆口住宅(浴場)〈横浜市要覧〉／4:1925 七島住宅〈横浜市要覧〉／5:1925~1929 山手外国人住宅〈横浜市要覧〉／6:1932~1939 分譲住宅〈横浜市社会事業概要〉本市があらかじめ選定した土地に本市が選定した数十種類の建築設計図の中から一種類を選び、これに居住者の希望その他を加え、集団的あるいは個々に建設し、指定期間の賃家料を完納した者に所有権を譲渡する住宅



住宅

1920年代

1940年代

1960年代

1980年代

2000年代

2020年代

戦災復興と公営住宅のはじまり

横浜大空襲により市内の住宅は壊滅的な状態に陥り、さらに終戦後の接収によって住宅の量が全体的に不足しました。



昭和17年の「横浜市事務報告書」において1,804戸管理していた市営住宅は、昭和20年の報告書ではその数が710戸に減少しました。

戦後の住宅難緩和のため、昭和26年6月の「公営住宅法」の施行に先立ち、戦後間もない昭和23年に「横浜市庶民住宅使用条例」を制定し、木造平屋住宅588戸を建設しました。翌年には最初の耐火構造の公営住宅「栗田谷アパート」など649戸を建設し、昭和35年までに6,811戸を建設するなど、住宅に困窮する低所得世帯向けの公営住宅を供給することで復興に向かいました。

また、昭和35年には、不良住宅が密集する地区の整備改善を図るため「住宅地区改良法」が施行され、最初の「改良住宅」として「中村町住宅」50戸を建設しました。これにより、震災直後に3年で撤去する方針で建設されたものの、引き続き使用していた「稲荷山下仮住宅」はその役目を終えました。

1:1948 栗田谷住宅〈市政概要〉栗田谷アパートと同一敷地に建設した住宅/2:1948 神大寺住宅〈横浜市の公営住宅〉/3:1953 桜ヶ丘アパート〈市政概要〉建設大臣賞受賞/4:1958 楽老アパート〈市政概要〉/5:1956 法泉町住宅〈撮影:北尾春道(「寮・アパート 建築写真文庫(69)」彰国社、1958年)〉星型に建設された珍しい住宅/6:1959 谷津田原第二住宅〈市政概要〉



住宅

1920年代

1940年代

1960年代

1980年代

2000年代

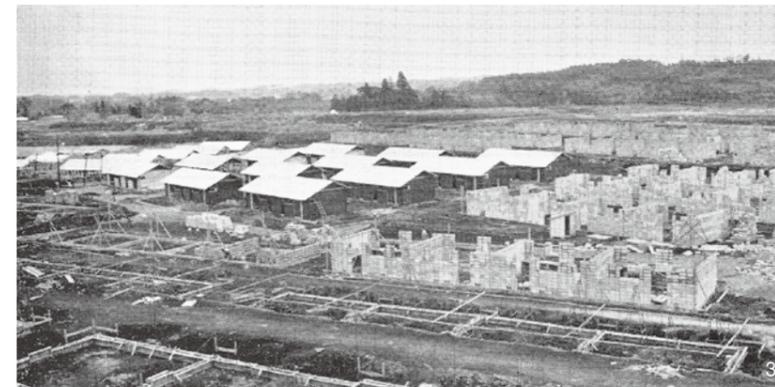
2020年代

人口急増への対応

戦後の住宅不足から高度経済成長に起因した大都市圏への人口集中による住宅需要に対応しました。

これまで市営住宅の多くは木造戸建てでしたが、昭和34年から建設を開始した「十日市場住宅」をもって木造住宅を終了し、ブロック造住宅を経て、昭和39年以降は、鉄筋コンクリートブロック造中高層住宅へと、戸建住宅から集合住宅の建設に移行しました。

また、市営住宅だけでなく、日本住宅公団(現:UR都市機構)による公団住宅や県及び市の住宅供給公社による公社住宅など、住宅供給が大幅に増加し、市内でも大規模な住宅団地が数多く開発されました。こうした状況の中で住宅政策の中心は、「一世帯一住宅」を目標とする「住宅の量」の充足に重点が置かれ、昭和40年代になると郊外部を中心として、「上飯田住宅」など1団地1,000戸以上となる大規模な住宅団地を整備しました。



1:1959 十日市場住宅〈市政概要〉建設を終了した木造住宅/2,3:1963 十日市場団地の建設状況〈市政概要〉

住宅建設を計画的かつ集中的に行う手段として、昭和30年代後半から、部品の規格化が図られコストダウンを可能としました。昭和41年頃からはPC工法*による構造躯体の工業化が行われ、昭和45年以降は、PC工法によるSPH(Standard Public Housing)に関わる住宅を建設してきました。しかしながらSPHは住宅計画において、規模の拡大に対応しづらく、棟単位の型別供給など変化のある住棟構成ができないなど課題もありました。そこで、団地の規模に応じて住棟構成ができ、型別供給に対応した公共住宅設計計画標準NPS(New Planning System)が昭和56年以降の公営住宅に適用され、本市では「ひかりが丘住宅」の建設から採用しました。



4:1982 ひかりが丘住宅〈横浜市の公営住宅〉

*PC工法
工場で製作された柱・梁などのプレキャスト部材を、プレストレスにより一体化し建築物を構築する工法



住宅

1920年代

1940年代

1960年代

1980年代

2000年代

2020年代

より質の向上を求めて

「量」の確保を優先した時代から、居住水準の向上や建築物として地域や街並みに調和する「質」が求められる時代に移りました。



昭和43年以降になると住宅総数が世帯総数を上回りましたが、家族人数に応じた広さを確保できない世帯や、質的に問題のある住宅に居住する世帯も多くありました。

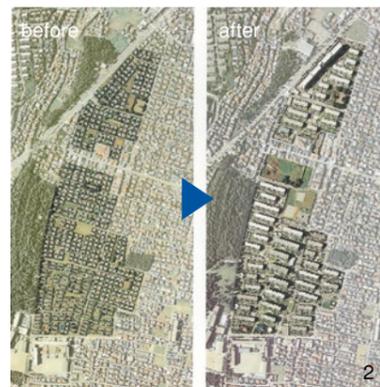
市営住宅は、民間住宅の品質及び面積等の居住水準の向上のために先導的役割を果たすことが求められ、年を重ねるごとに徐々に居住面積の拡大を図りました。

また、昭和55年からは、戦後に建設し老朽化した既存住宅の建替事業に着手しました。

無秩序に拡大都市化する本市の都市としての骨格づくりとして、昭和40年2月に六大事業を打ち出しました。

その一つである金沢地先埋立事業では、近代的な工場団地だけではなく、そこで働く従業員向け職住近接の住宅などが立ち並び、住宅団地として金沢シーサイドタウンが形成され、そのエリア内に多くの市営住宅を整備しました。

また、施行面積1,317haに及ぶ我が国最大規模の土地区画整理であった港北ニュータウン建設事業においても、昭和49年の事業着手から22年を経て完了したエリア内には、市営住宅をはじめ、日本住宅公団（現：UR都市機構）や県及び市の住宅供給公社などが多くの集合住宅を整備しました。



1: 1980～1983 南台ハイイツ〈横浜市の公営住宅〉本市で最初の木造公営住宅からの建替え／2: 建替え前後の状況〈横浜市の公営住宅〉1951年～1954年にかけて建設した「瀬谷住宅」711戸を1980年から4か年で「南台ハイイツ」1,190戸に建替え



3: 1981 金沢第三住宅〈横浜市の公営住宅〉／4: 1984 つづきが丘住宅〈横浜市の公営住宅〉21世紀の街づくりを展望した港北ニュータウン内に最初に建設した市営住宅



住宅

1920年代

1940年代

1960年代

1980年代

2000年代

2020年代

住みやすく、長く使うために

高度成長期に大量供給した住宅をより住みやすく、より長く使うために住戸改善や耐震改修に着手しました。



昭和40年代に建設された住宅には、洗濯機置場や浴槽がなく、洋間と和室の境や浴室入口部に段差がありました。さらに一般的な仕様の中層住宅には、エレベーターが設置されていませんでした。このような住宅の居住水準や設備水準の向上を図るため、エレベーターの設置、既存建物の躯体を生かしたまま、住宅内部の設備や内装の更新、バリアフリー化対応を行う住戸改善事業に平成13年度から着手しました。

なお、耐震改修が必要な20住宅122棟については、平成25年度までに工事を完了しました。

近年は、住戸改善だけでなく既存住宅の建替えに着手するなど、平成30年に策定した「市営住宅の再生に関する基本的な考え方」に基づき、効率的、効果的な市営住宅の再生を進めています。

1: 2013 小菅が谷第二住宅（耐震改修）／2: 2014 さかえ住宅（耐震改修）／3: 2014 六浦住宅（耐震改修）／4: 2014～2017 ひかりが丘住宅（エレベーター設置）階段室型住宅であり居住者年齢の高齢化に対応し、2017年をもって階段室にエレベーター設置完了／5: 2017～ ひかりが丘住宅（住戸改善）1968年～1971年に建設された2K、3DKが主体の住宅を現代的な間取りへ変更、3点給湯（風呂、台所、洗面所）等の改善により居住性を向上

横浜コモンズ

今から約30年前、21世紀を迎えるにあたり、横浜らしさや新たな時代の公共建築の考え方について議論しました。その基本理念や整備方針は現在の様々な施策や取組に根付いています。

平成5年、当時市職員であった北沢猛を中心として、横浜市建築懇談会を立ち上げ「21世紀の公共建築の在り方を考える」をテーマに、委員により様々な議論が行われました。平成7年の答申では、公共建築は公共空間として「都市の共有地」であり、市民、企業、行政が協働して、市民の知恵、企業のノウハウを活かした計画、整備、運営を行っていくことを進言しています。この答申を受け『横浜コモンズ』として、21世紀の公共建築や公共空間に望まれる考え方をまとめました。

横浜コモンズは、現在本市が取り組んでいる歴史的建築物を活かしたまちづくりや、バリアフリー、景観条例、地区計画などの計画の基となる基準や考え方に活かされています。また、機能の複合化を前提とした施設計画は「再編整備の方針」に導入しています。設計者の選定には、プロポーザルやコンペを実施し、計画・整備・運営を市民、企業、行政が協働する仕組みとしてPFIを採用する、運営には指定管理者制度を導入するなど、現在の様々な取組に『横浜コモンズ』は深く根付いています。



写真左：横浜コモンズ、写真右：横浜が縦浜にならないために（荻野アンナ/著）横浜コモンズの理念をイメージしたエッセイ

検討経過

	年月日	検討事項
第1回	平成5年10月29日	会長・副会長の選出、諮問、横浜市公共建築の現状について
第2回	平成6年2月1日	個性あるまちを実現するための、横浜の将来に向けた公共建築整備の姿勢について
第3回	平成6年5月17日	市民・企業・行政の協働による公共空間「横浜コモンズ」の提案（基本理念の骨子について）
第4回	平成6年11月7日	答申案の検討
第5回	平成7年2月10日	答申

横浜市建築懇談会委員

役名	氏名	職業等（当時）	役名	氏名	職業等（当時）
会長	泉 眞也	環境デザイナー	委員	長久保 美昌	横浜住宅供給公社理事長
副会長	川手 昭二	芝浦工業大学教授（都市計画）		浜野 安宏	浜野総合研究所代表
委員	上野 千鶴子	東京大学助教授（社会学）		平塚 迪夫	インテリアデザイナー
	荻野 アンナ	作家		宮村 忠	関東学院大学教授（土木工学）
	鶴岡 博	横浜ジャズ協会理事長			

I—基本理念

公共建築をはじめとする公共空間は、社会経済環境や市民ニーズを受けて施策化されるものであり、その時代の行政姿勢そのものの表れであるといえます。21世紀を間近にひかえた今日、急速に進みつつある都市の情報化・国際化などによって新しい文脈の社会が到来し、社会経済環境は生産性を極めて重要視した時代から、市民生活の基盤である都市の質を問う時代になると予測されます。

これらの社会的変化とその要求に的確に応えるためには、公共建築をはじめとする公共空間が従来の行政的な「公共」という概念の枠にとらわれることなく、「都市の共有地」であるという認識の上に立つことが必要です。そしてこの都市の共有地を創造し、活動を支えていくために、所有、計画、建設、運営にいたるまで、多様な方式により市民・企業・行政が協働することが重要です。

このような新しい考え方に立った公共空間を『横浜コモンズ』と呼びます。

その際、市民が共有できる「横浜らしさ」が重要な視点であり、これまでに育んできた環境や歴史と文化、つまり都市文脈を踏まえることが必要です。また、横浜が新しい「こと」に開かれた都市であるという特質を生かし、これまでの方式にとらわれることなく、創造的かつ先進的なプロジェクトに取り組むべきと考えます。

『横浜コモンズ』、この基本理念が21世紀の魅力ある公共建築を実現し、個性ある都市を形成していくことになるのです。

II—整備方針

A

公共空間に求められる視点

1 「横浜らしさ」を見出し、創りあげる

独自の都市文脈を活かす／横浜らしい特色ある風景をつくる

2 市民ニーズに細やかに対応する

新鮮な発想でつくる／地域にあった施設をつくる／バリアフリーを一層進める

3 市民・企業・行政が協働する

市民に開かれた空間をつくる／市民活動を支援する／市民の知恵を活かす

4 まちづくりを意識する

公共建築の配置を工夫する／まちのツボに公共空間をつくる／歴史が息づくまちをつくる／地域を生き生きとさせる／安心なまちをつくる

B

公共建築の新しい整備システム

1 公共建築の整備の仕組みを工夫する

必要な所に必要なものをつくる／中身を考える／設計者を選ぶ／設計者とともにつくる

2 管理運営まで一貫した仕組みをつくる

柔軟な管理運営体制を整える／効果的なリストラを図る／長期的な経済性に配慮する

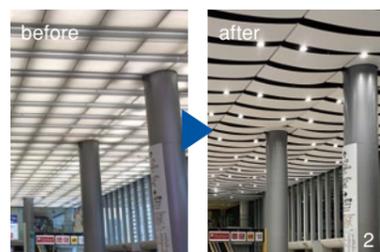
新たな時代の公共建築へ

公共建築を取り巻く環境が大きく変わり、より長く、安全安心に、環境にも優しい施設とすることが求められています。

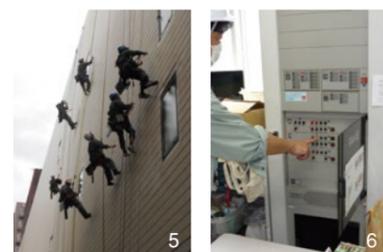
災害にそなえる 耐震改修と天井脱落対策

阪神淡路大震災をきっかけに、現行の耐震基準以前の建物の耐震診断や耐震改修を進める耐震改修促進法が制定されました。本市では「公共建築耐震対策事業計画」を策定し、計画的に公共建築物の耐震化に取り組んできました。これまでに約2,300棟の耐震診断、約1,300棟の耐震改修を実施し、耐震化率は99%を超えています。

また、東日本大震災では、ホールなど大空間の天井脱落による事故が多く発生したことから、建築基準法が改正されました。既存施設への適合義務はありませんが、本市では、全てを計画的に改修する「天井脱落対策事業計画」を策定し、令和7年度までに改修が完了するよう進めています。



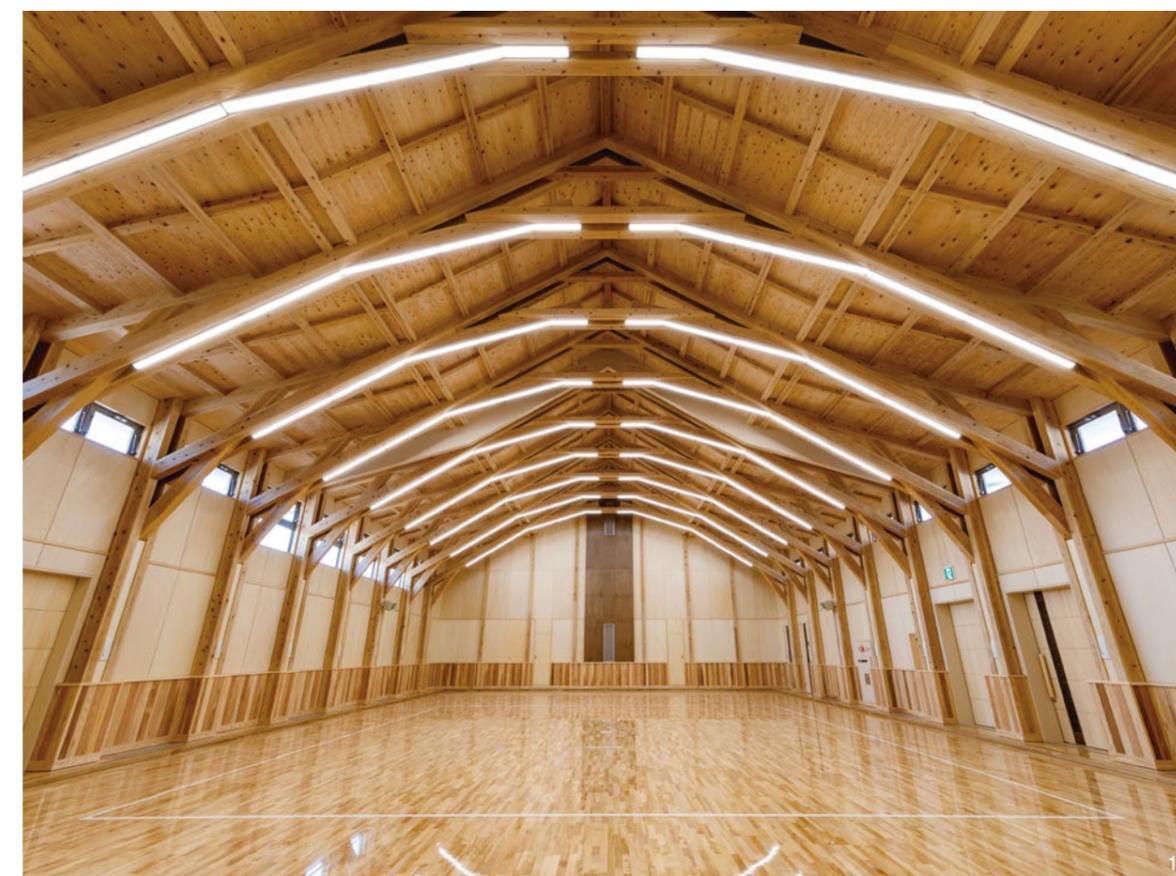
1: 横浜市立大学金沢八景キャンパス文科系研究棟耐震補強 / 2: 新横浜駅交通広場の天井改修



3: 樽町ポンプ場外壁改修 / 4: 十日市場保育園園屋上防水改修 / 5: 外壁調査 (公財) 横浜市建築保全公社提供 / 6: 防火設備点検 (公財) 横浜市建築保全公社提供

長く使う 長寿命化対策

高度経済成長期に整備した大量の施設が一斉に老朽化を迎えるため、今後の保全や建替えにかかる財政負担が課題となっています。そこで、各種点検や調査から、劣化状況を把握するとともに、劣化がどのような影響を及ぼすかを考慮して、計画的に保全しています。使用できるものはできる限り長く使用することで、必要となる修繕回数を少なくし、保全に関するライフサイクルコストの抑制を図っています。



木とともに 木材利用の促進

建築物への木材利用は、森林循環を通じて、国土を災害から守るとともに森林の二酸化炭素吸収作用を強化します。

平成22年の木材利用促進法の施行以降、本市でも木材利用に関する方針を定め、地域ケアプラザやコミュニティハウスなどの低層の建築物の木造化、区庁舎のエントランスホールといった市民の目に触れる機会が多い部分を中心に内装等の木質化を行うなど、公共建築物への木材利用を進めています。

令和5年には、新築時の木材使用量の目標値を建物用途ごとに定め、更なる木材利用の促進を図っていきます。



1: 2022 新井中学校武道場 (木造) / 2: 2017 日野こもれび納骨堂 (木質化) / 3: 2016 南区総合庁舎 (木質化) / 4: 2006 倉田コミュニティハウス (木質化) / 5: 2019 富岡総合公園トイレ (一部木造)

未来のための環境への配慮

本市では「公共建築物における環境配慮基準」を定め、環境負荷の低減及び周辺環境の保全に配慮した公共建築物の整備を推進しています。新築する場合の庁舎や学校等はZEB Oriented^{※1}相当、市営住宅はZEH^{※1}水準を満たす計画とし、改修においても、照明のLED化、省エネ性能向上や再生可能エネルギーの導入を進めています。

また、民間のノウハウを活用しながら、省エネルギー化と維持管理費の低減を図ることができる「ESCO事業^{※2}」を積極的に導入しています。



※1: ZEB、ZEH
Net Zero Energy Building (House) の略称で、快適な室内環境を実現しながら、年間の一次エネルギーの収支をゼロにすることを目指した建築物（住宅）のことです。

※2: ESCO事業
Energy Service Companyの略称で、既存施設の省エネに関する、計画・工事・管理・資金調達等包括的なサービスを提供し、従前の環境を低下させることなく省エネルギーを行い、その結果得られる省エネルギー効果を保証する事業です。

1: 南区総合庁舎の太陽光パネル / 2: ESCO 事業を行った新横浜地区3施設（障害者スポーツ文化センター横浜ラポール・横浜市総合リハビリテーションセンター・横浜市総合保健医療センター）

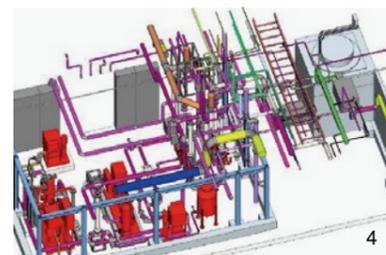
営繕業務のICT化

営繕積算システムや公共建築物データベースなど、基幹となるシステムを適切に運用し、タブレット端末の配備による業務効率の向上を図るなど、営繕業務のICT化を進めています。

また、設計・工事監理におけるBIM^{※3}の導入も推進しています。BIMを実際に導入した市民病院の整備では、施工前に免震装置の動作確認や設備配管と構造部材の干渉チェックなどを行うことで効率的に工事を進めました。

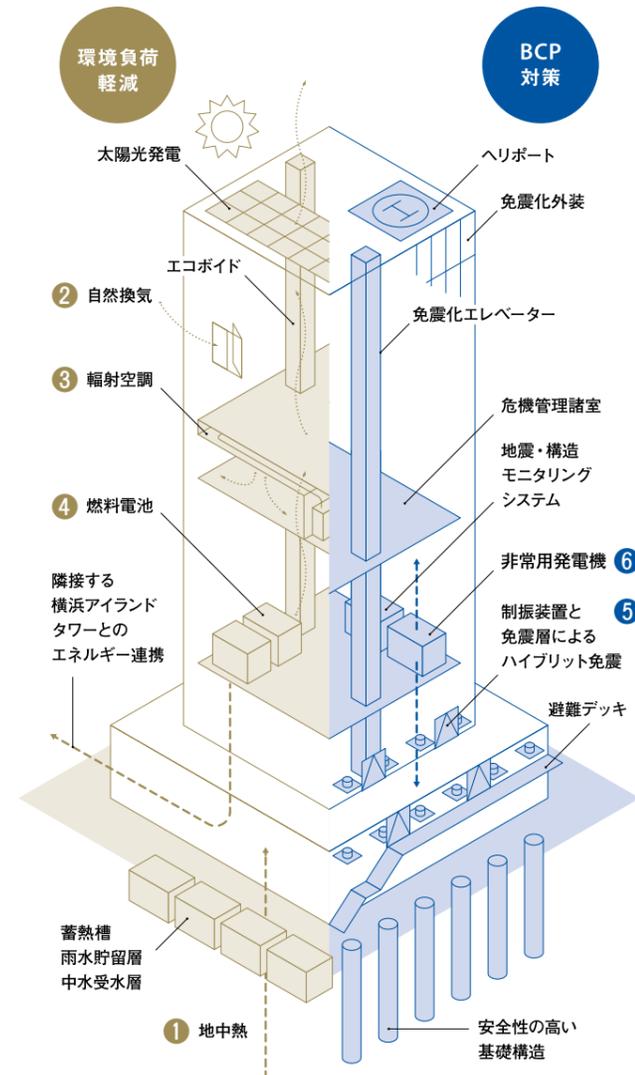


※3: BIM
Building Information Modelingの略称で、コンピュータ上に作成した3次元の形状情報に、材料や部材の仕様、性能、コスト、仕上げなどの情報を追加させて構築したシステムです。設計や施工上の課題を早期に確認、解決できるだけでなく、竣工後の維持管理にも活用できます。



3: 横浜市民市民病院 / 4: 市民病院のBIM画像

これからの100年に向けて 8代目市庁舎



現在の市庁舎はこれからの100年を見据えて整備しました。太陽光発電や地中熱を利用した空調、高層部に換気パネルの設置など、様々な自然エネルギーの導入、さらに、断熱性能の高い外壁や輻射式空調システム、発電効率に優れた燃料電池などによる省エネルギー化を図ることで、低炭素型の市庁舎としてZEB Readyを実現しています。

また、BCP対策として、大地震による被害を最小限にするようハイブリッド免震の採用や、津波による浸水を意識した設備の配置、7日間使用できる水と非常用発電機の燃料の確保など、災害にも強い市庁舎となっています。

1 地中熱採熱管

地中杭に敷設した配管を使って地中の熱をアトリウムなどの空調に活用しています。



2 自然換気

窓際の換気パネルから外気を取り入れ、建物内部を縦に貫く吹き抜け空間（エコボイド）との相乗効果で自然換気を行い、エネルギー負荷を低減します。



3 輻射空調システム

執務室の天井材の裏に張り巡らせた配管に冷水や温水を流し、輻射熱で空調するシステムです。気流が少なく快適で省エネルギー性能にも優れています。



4 燃料電池

発電効率に優れた固体酸化物形燃料電池（SOFC）を導入し、市庁舎で消費される電力の一部を賄います。停電時もガスが供給されていれば、発電も可能です。



5 ハイブリッド免震（免震装置）

2階と3階の間に設置した免震装置による上部の揺れの低減と、制振装置による地震エネルギーの吸収で、什器転倒などの被害を防ぎ、業務の継続性を確保します。



6 非常用発電機

大容量の非常用発電機を設置し、電力事業者からの電力供給が途絶えた場合でも業務が継続できます。備蓄燃料で7日間の連続運転が可能です。





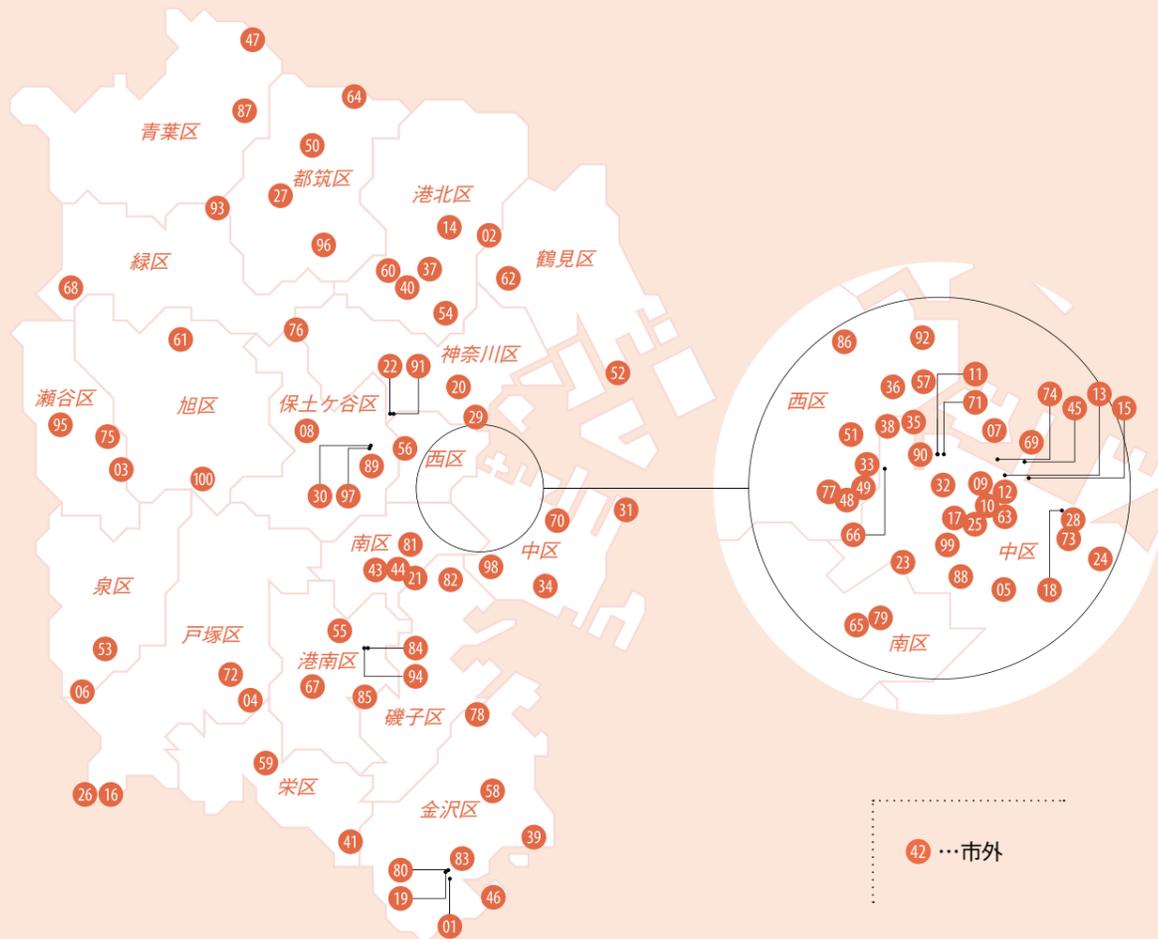
横浜を 代表する 公共建築

横浜を代表する公共建築100施設
[日刊建設通信新聞社 編集]

横浜を代表する公共建築100施設

2022年4月1日～2023年3月31日、日刊建設通信新聞社の『建設通信新聞』紙上で、横浜市公共建築100周年を記念したシリーズ企画が実施されました。代表的な24施設を大きく取り上げ、その他76施設と合わせた100施設が紹介されました。本章では、その24施設の新聞記事を再編集して掲載するとともに、「横浜を代表する公共建築物」として100施設を掲載します。

※役職名は新聞掲載当時、設計事務所、施工者名は建設当時、株式会社等社名は一部省略



- 01 旧円通寺客殿 (旧木村家住宅主屋)
- 02 旧横溝家住宅主屋
- 03 旧大岡家長屋門
- 04 旧金子家住宅主屋
- 05 外交官の家
- 06 旧清水製糸場本館 (天王森泉館)
- 07 横浜赤レンガ倉庫
- 08 西谷浄水場 (旧整水室上屋、旧浄水井上屋、旧配水井上屋)
- 09 開港記念会館
- 10 THE BAYS (旧関東財務局横浜財務事務所)
- 11 旧第一銀行横浜支店
- 12 横浜都市発展記念館・横浜ユーラシア文化館 (旧横浜市外電話局)
- 13 横浜開港資料館 (旧横浜英国総領事館)
- 14 大倉山記念館
- 15 インド水塔
- 16 俣野別邸

- 17 7代目市庁舎
- 18 横浜マリニタワー
- 19 横浜市立大学 金沢八景キャンパス本校舎
- 20 神奈川県総合庁舎 (神奈川県役所・神奈川県消防署)
- 21 三殿台考古館 住居址保護棟
- 22 ミツ沢公園球技場 (ニッパツミツ沢球技場)
- 23 中消防署
- 24 大佛次郎記念館
- 25 横浜スタジアム
- 26 西部水再生センター 管理本館
- 27 都筑工場・都筑ふれあいの丘 (都筑地区センター・横浜あゆみ荘・つつき緑寿荘・都筑プール)
- 28 横浜人形の家
- 29 中央卸売市場本場 (再整備)
- 30 消防司令センター
- 31 横浜港シンボルタワー
- 32 市民文化会館関内ホール
- 33 横浜市民ギャラリー (旧いせやま会館)
- 34 三溪記念館
- 35 横浜みなと博物館
- 36 横浜美術館
- 37 横浜アリーナ
- 38 みなとみらい21・クリーンセンター
- 39 横浜市立大学附属病院
- 40 障害者スポーツ文化センター 横浜ラポール
- 41 上郷・森の家
- 42 道志村水源林管理所
- 43 南図書館・弘明寺公園プール
- 44 大岡健康プラザ (南スポーツセンター・大岡地区センター・地域ケアプラザ)
- 45 大さん橋ふ頭ビル
- 46 野島青少年研修センター
- 47 こどもログハウス (ロケットハウス)
- 48 急な坂スタジオ・野毛山荘 (旧老松会館)
- 49 中央図書館
- 50 歴史博物館
- 51 横浜能楽堂
- 52 高齢者保養研修施設ふれーゆ
- 53 下和泉地区センター・地域ケアプラザ
- 54 篠原地区センター・地域ケアプラザ
- 55 東永谷地区センター・地域ケアプラザ
- 56 西スポーツセンター・浅間町営業所
- 57 横浜みなとみらいホール
- 58 長浜ホール (横浜検疫所 長浜措置場旧事務棟)
- 59 栄区民文化センター リリス
- 60 横浜国際総合競技場 (日産スタジアム)
- 61 よこはま動物園南入口ゾーン (管理センター、アクアテラス、リングゲート)
- 62 馬場花木園休憩棟
- 63 洗手亭
- 64 横浜国際プール
- 65 横浜市立大学附属 市民総合医療センター
- 66 横浜にぎわい座
- 67 野庭地区センター・地域ケアプラザ
- 68 北部斎場
- 69 横浜港大さん橋 国際客船ターミナル
- 70 みなと赤十字病院
- 71 みなとみらい線 馬車道駅
- 72 倉田コミュニティハウス
- 73 アメリカ山公園 (建築物)
- 74 象の鼻テラス
- 75 瀬谷区総合庁舎 (瀬谷区役所・瀬谷公会堂・瀬谷消防署)
- 76 動物愛護センター
- 77 野毛山展望台
- 78 衛生研究所
- 79 南区総合庁舎 (南区役所・南公会堂・南土木事務所・南消防署)
- 80 横浜市立大学YCUスクエア
- 81 蒔田消防出張所
- 82 市電保存館 しでんほーる
- 83 金沢区総合庁舎 (金沢区役所・金沢公会堂・金沢消防署)
- 84 港南区総合庁舎 (港南区役所・港南消防署)
- 85 日野こもれび納骨堂
- 86 みなとみらい本町小学校
- 87 荻田コミュニティハウス
- 88 寿町健康福祉交流センター・寿町スカイハイツ
- 89 保土ヶ谷消防署
- 90 8代目市庁舎
- 91 横浜市立市民病院
- 92 横浜みなとみらい 国際コンベンションセンター (パシフィック横浜ノース)
- 93 山下地域ケアプラザ
- 94 港南公会堂・港南土木事務所
- 95 瀬谷区民文化センター あじさいプラザ
- 96 都田地区センター・地域ケアプラザ
- 97 消防本部庁舎
- 98 根岸森林公園トイレ (芝生広場前)
- 99 横浜BUNTAI
- 100 万騎が原小学校



市政が施行された1889 (明治22) 年から今日まで、横浜市の発展とともに歩み続けてきた市庁舎は、2020年6月29日に開庁した現在の施設で8代目となる。市民に開かれた、これからの横浜市を象徴する施設づくりに込められた意図を紹介する。

記憶を表象 品位あるシルクの質感

デザイン監修を担当した建築家 槇文彦氏——

横浜市役所は、開港以来の歴史ある関内地区と新都市のみならずみらい21地区の接点でもある北仲通南地区に立地する。したがってまちの結節点として周辺エリアとの強いつながりをつくり出し、まちそのものが入り込んだ

ように開かれ、市民のさまざまな活動や憩いの場にもなるようにこの市役所は構想されている。

既存する周辺の街並みのスケールと軸線を考慮しながらそのボリュームを分割し、隣接する横浜アイランドタワーと連続する一体的な景観を形成している。市庁舎は3層構成とし、高層部

に行政執務関係のスペース、中層部に議会関係のスペースを配置し、低層部にはアトリウムを中心に、市民利用施設、商業施設など市民に開かれた空間となっている。

高層棟は白いシルクのような質感を伴った外観デザインにより、シルクに所縁のある横浜港の記憶を表象するとともに、国際都市にふさわしい市庁舎と



横氏

してのウォーターフロントのエレガンスのある佇まいを見せている。そして低層部には西側の大岡川に沿ってプロムナードや広場が広がり、それに面する市民ラウンジや商業施設も含めて、市民に対して望ましいパブリックスペースをも提供しているといつてよい。

例えば今回、市役所とJR桜木町駅間に新設した人道橋を渡ると川沿いのプロムナードはそのまま市役所の前面を介して北仲通北地区に展開するホテル、住居施設につながっていく。市役所はこうした広域の周辺エリアをつなげる焦点を形成していることが分かる。このように都市デザインという見地からも市役所はユニークな存在となりつつあることが明瞭である。

市役所のアトリウムは人間の動きという点からいえば、その焦点でもある。公共交通機関には人道橋が桜木町駅とつながるとともに、エスカレーターによって地下鉄の馬車道駅とつながっている。そしてアトリウムはここから水平に市庁舎空間につながり、エスカレーターで昇れば市



アトリウム

役所の行政関係や議会関係の受付ロビーにアクセスすることができる。このように内外空間にもこのアトリウムが焦点の空間として存在している。アトリウムは都市の中で、市民の日常空間、あるいは非日常空間の核を形成しているのである。

市役所の内外のパブリックスペースにおいて、いつも人びとが集いさまざまな情景が展開される。この周辺エリアとつながるパブリックスペースを通して、市民にとって市役所が、横浜の過去に記憶が照射され、あるいは現在という存在が確認され、さらに未来に対する予兆が感じられる、横浜の象徴の場所となっていくのである。

高度な技術結集し 細部まで デザイン徹底

横浜市前建築局長 (現政策局長) 鈴木和宏氏——

大地震が発生しても業務継続できる、災害に動じない市庁舎を造ることが大きなミッションであり、SDGs未来都市に選定さ



鈴木氏

れた市として環境性能の高い建物を自ら造って範を示すことができる。このように内外空間にもこのアトリウムが焦点の空間として存在している。アトリウムは都市の中で、市民の日常空間、あるいは非日常空間の核を形成しているのである。

これからの横浜を象徴する市民に親しまれる建物となるためにデザインは非常に重要です。設計・施工者である竹中・西松建設共同企業体の持つ高度な技術力とともに、デザイン監修者として槇 (文彦) 先生に参画いただき、細部まで目が行き届く仕組みを取り入れたことは非常に良かったと思います。

横浜美術館

36

2022 (令和4) 年4月27日掲載

横浜美術館は、多様な市民のニーズに応えた「開かれた美術館」として、1989年11月に開館した。設計は日本を代表する建築家である丹下健三が担当。みなとみらい21地区に完成した最初の恒久施設であり、その後のまちづくりを先導する役割も担ってきた。現在進めている大規模改修の設計を手掛ける丹下都市建築設計の丹下憲孝会長に、親子2代にわたって設計に携わる思いを聞いた。



自然光が差し込む開放的なグランドギャラリー

©村井修

「みる・つくる・まなぶ」を具現

前面のグランモール公園中央から海に至る緑（植栽）と水で整備された歩行者空間。この「緑と水の都市軸」を受け止めるように、美術館は中央部を高く、左右にゆったりと広がったシンメトリの重厚な全体構成としている。「みなとみらいの文化ゾーン」の中心としてのあるべき姿とは何か。当時まだなにもなかったみなとみらいに、総合的なまちづくり

の「へそ」である部分はこうあるべきだというものを示す。その使命を感じて設計したのだと思う」と語る。

国際港湾都市にふさわしい世界に開かれた美術交流の場であると同時に市民や芸術家に創造活動の場を提供する。この基本理念に基づき、構想段階で市側から提唱されたのが当時としては斬新な「体験型」の美術館だ。

使いやすい美術館としての機能と文化的シンボルとしての外観が両立する施設も求められた。

都市軸に合わせる形で高層化した半円形の中央部には、美術館の象徴である収蔵庫を積み上げることで「アートに対するリスペクト」も込めたという。同時に、「何もないところから街ができてくる。そのワクワク感を含めて街の建設プロセスを市民の皆さんにも見てもらえるような展望台をつくらう」と、最上階

(8階)に展望ギャラリーを設けたのも特色といえる。

収蔵庫の足元には、この美術館最大の特徴となる2層吹き抜けの大空間「グランドギャラリー」がある。長さ100m、高さ20mの自然光が差し込む明るい空間には階段状のプラザが設けられ、各種イベントに対応する。これを介して上部には七つの展示室がまとめられ、下部には情報提供コーナー、会議室、レクチャーホール、ミュージアム・

街を先導する「開かれた美術館」

ショップなどを配した。この収蔵・展示スペースの左右には図書館・レストラン棟とアトリエ棟を配置。「みる・つくる・まなぶ」を建物が表象する形としている。「市の皆さんの思いや斬新なアイデアをいかにして都市計画家であり建築家として実現するか。その解答がこの形だった」とも。

海外の文化をいち早く取り入れて発展してきた国際港湾都市らしい一歩先をいく先進性とそれを具現化する建築家の構想力。それが、わが国最大規模となる現代アートの国際展「横浜トリエンナーレ」などの活動に結実していく。2011年以降はそのメイン会場として、誰もが多様な表現に触れる機会を提供し、新たな価値観や文化を世界に発信。現代アートを通じて世界の芸術家の活動の場、市民との交流の場として発展し、国内外から注目され評価される美術館となっている。

大規模改修工事は21年3月からスタートした。2年以上の長期休館は開館以来初となる。老朽化が進む施設や設備を更新して長寿命化を図るとともに、「あらゆる人に開かれた新しい価値を創造・発信し続ける美術館」を今後の使命＝ミッションに掲げ、より使いやすく心地よさを感じられる空間へとブラッシュアップしていく。

具体的には、常設・企画展示

室とも天井高さを上げ、展示作品に対する照明の当て方も見直すなど、「専門家を交えてモックアップによる検証を行いながら、できるだけ多様な作品に対応できる形にしていく」考えだ。

美術情報センターは市民が利用しやすいよう現在の3階から広場に面した2階に移設し、移設後の3階は将来的な収蔵スペースとする。空調設備更新のほか、バリアフリー対応として、グランドギャラリーとレクチャーホールにはエレベーターを新たに設置。グランドギャラリー天井の開閉式ルーバーも更新し、より明るく開放的な空間としながら耐震補強も実施する。

「従前以上に街に開いていくことで周辺の建物との関係性をより強くし、連携して賑わいをつくっていく。次の30年、50年に向けて、市民や来訪者がより来館しやすく、芸術作品に親しめるようにしたい」と思いを込める。



展望ギャラリーから見るみなとみらい21地区・丹下氏

丹下都市建築設計会長 丹下憲孝氏に聞く

大倉山記念館

14

2022 (令和4) 年5月11日掲載

横浜市港北区にある「横浜市大倉山記念館」は1932年、実業家で教育者・思想家の大倉邦彦が「大倉精神文化研究所」として開設した東西精神文化の研究・実践施設を前身とする。81年に横浜市が寄贈を受け、現在の名称になった。設計者の長野宇平治は大倉の思いをギリシャ文明以前の「プレ・ヘレニック様式」で形にした。建築家の隈研吾氏は小さいころ、生まれ育った自宅近くにあったこの研究所の周りでよく遊んだ。子どもの目にはただ不思議な建物として脳裏に焼き付いていたという。

建築家 隈研吾氏に聞く

幼かった隈氏にとってその建物はただ不思議だった。いつの時代のものなのか、見たことのない建物。洋風でも和風でもない。これが外国にある古代の神殿なのか。その建物は、横浜市の自宅すぐそばの丘陵、大倉山に建てていた。大倉山とその山裾に広がる農家、田畑、ため池などは子どもたちの格好の遊び場だった。東京・田園調布の幼稚園から電車で帰ってきて、オニヤンマを追っかけ、ザリガニを取り、山を登って不思議な建物の周りで遊んだ。田んぼの一角では新幹線の新横浜駅の工事が始まろうとしていた。隈氏の



隈氏

原風景は、こうした典型的な里山だった。

建物の名称は、「大倉精神文化研究所」。文字どおり東洋・西洋の精神文化を研究し、伝統文化を学び心を鍛える場所として設立された。隈氏の自宅の大家は近くの農家で、幼なじみだったその大家の女の子の名前から「ジュンコちゃんち」と呼んでいた。隈氏は、ジュンコちゃん姉妹や近所の仲間数人と、大倉山のやぶをかき分けて登り、記念館によく遊びに行っていたという。

場所に深く依存している樹木のような存在だと自身を語っている著書『僕の場所』（大和書房）に、自分を育んだこの里山の風景は詳しい。著書に関連して、「ジュンコちゃんち」について「農家というのは生産行為の場所。うちのようなサラリーマンの郊外住宅と違って、ジュンコちゃんちが農作業の場所であって、ヤギやニワトリを飼って生産活動をしていた。その生産活動の場所の生き生きとした楽しさっていうのは格別でした」と解説する。この里山での経験は、いま

遊び場だった不思議な建築

の自分の建築や生き方に強く影響しているという。

同研究所の建物を設計したのは、長野宇平治。東京駅の設計で有名な辰野金吾の弟子に当たる。長野はこの建築を「プレ・ヘレニック様式」と命名した。特徴は、裾ぼそりの柱、円盤列、三角型空間、ロゼット、山形と螺旋文様の構成装飾など。初期に制作された机、いすなどの什器類もプレ・ヘレニックのデザインに統一している。

「建築を勉強し始めてから、設計した長野宇平治のことを知りました。大倉精神文化研究所はギリシャ文明以前の古代建築、古代のプリミティブな神殿のようところがとても興味深い。クライアントの大倉さんは、東西の壮大な文化、歴史を探求したユニークでおもしろい方だったのだと思います。設計者との触媒作用による共同制作と

原風景は農家が建ち並ぶ典型的な里山

いえるでしょう。三角形の窓（三角型空間）、古代の神殿のイメージで言うと、バングラデシュのルイス・カーン設計の国会議事堂に近いものがあります。好きな建築ですね」

辰野金吾からはどうしたら大きな建築にもリズムがつくれるのか、そのコツを学んだのではないかと指摘する。「辰野は東京駅でれんがの間に白い石を挟むなど、リズムを刻むバランス感覚を見せている。建築は、大きくても小さくてもリズムをつくりさえすれば良いものになる」



正面外観

大倉精神文化研究所理事長 平井 誠二氏の話

大倉精神文化研究所理事長の平井誠二氏はこう話す。

「大倉邦彦は大正時代、大倉洋紙店の3代目社長に就任した時、同社の熱心な社員教育に携わる中で、子どものころからの教育の重要性を強く実感して、図書館を併設した研究所づくりを考えました。一般市民が誰でも自ら勉強して心を豊かに、強くして社会貢献できる立派な人を育



平井氏。ホール（殿堂）入り口前で

成するのが目的です」
ギリシャ神殿風の外観を持つ研究所の建築は、この大倉の思いを形にしていることが強く伝わってくる空間になっている。「正面入り口に入って真ん中の吹き抜けのエントランス部分は当初、『心の間』と呼ばれていました。人間の心です。階段を上るとホールがあります。ここは『殿堂』といわれていて、信仰心を表

す厳かな場所として教会、神社、寺のいずれにもあるようなつくりになっています」

エントランスの吹き抜けの塔屋壁面にはライオンと鷲の彫刻、ステンドグラスがはめ込まれ、ステンドグラスからは黄金色の光が差し込み、上部空間全体が金色に輝く。

「エントランスホールに降り注ぐ黄金色の光と殿堂で心を清らかにし、坐禅道場で心を強くして行動を促すということ。中央館の左右には図書館と研究室を配置して知識を得る。大倉が考えた研究所は、中心に心、左右に知性を配して全体で人間を表しています。こうした強く正しい心と豊かな知性を兼ね備えた人間を育てるのが究極の目的でした」

建物中央に「心」、左右に「知性」配置

63

横浜を代表する公共建築100施設

62

第3章 横浜を代表する公共建築

象の鼻パーク/テラス

74 2022(令和4)年5月25日掲載



横浜開港150周年の節目となる2009年、横浜港発祥の地に「象の鼻パーク/テラス」が誕生した。オープン以来、憩い・交流・表現の場として、さまざまな出会いを生み出し続けている。象の鼻パーク/テラスを設計した小泉雅生氏と現地を歩きながら、完成までの秘話や空間に隠された秘密を聞いた。

スクリーンパネルのあかりが夜の横浜を優しく包み込む

小さいもの並べ大きな風景

かつてこの場所には、1859年の横浜港開港に当たり、直線状の2本の波止場がつくられた。象の鼻パーク内の地面をよく見ると、当時の波止場のうち西側の1本がどこにどのように存在していたか、舗装の色の変化でわかるようになっている。

その後、東側の波止場が徐々に大きくなり、湾曲した形になっ

ていったことから、明治ごろには「象の鼻」と呼ばれるようになる。1923年の関東大震災被災後は、やや直線的な形に復旧され、物揚場や船だまりとして活用された。

象の鼻パーク整備に当たって小泉氏は「実は何の時期の形に復元するのが正しいのか議論になりました。結果として、やはり象の鼻という場所の由来となっ

た明治中期の湾曲した形に復元しましょうという話にまとまりました」と明かしてくれた。

“シンボル性”の獲得方法にもこだわったという。「この場所は、タワーのような形態でシンボル性を獲得するのではなく、人間の身体感覚に則した、ヒューマンスケールの空間づくりをするべきだと感じました。そう



左:左にあるのが象の鼻テラス。黒い舗装部分が当時の波止場の1本/右:小泉氏



小泉アトリエ主宰 東京都立大学大学院教授 小泉雅生氏に聞く

したときに、小さいものを並べて大きな風景をつくるという案が思い浮かびました。その象徴が、水面を大きく円形に囲い込むように配置したスクリーンパネルです。個々のパネルが集まることで、一つの大きな照明のように感じられる。『みなと横浜』の原点を表現しています」

パーク内を歩くと、随所に明治期の港の遺構が使われていることがわかる。なだらかな斜面形状の芝生スペースには、工事中に地中から発見され

た明治時代の舗石をベンチとして活用した。

「調べてみると神奈川県真鶴町の小松石であることがわかりました。どうにかして使おうと考え、斜面と並行に並べてベンチにするというアイデアが浮かびました」と語る。

明治中期ごろに整備された鉄軌道と転車台で発見された。転車台

はいまでも回るといふ。工事終盤に出てきたこともあり「大騒ぎになりました。関係者みんな現地に集合して、どうしようどうしようと右往左往」と懐かしむ。続けて、「結果的に現地で展示するのが一番良いという話になり、来街者が自由に見られるようにガラス蓋をかけることにしました」

このほかパーク内では、税関施設の一つだった「煉瓦造2階建倉庫」の基礎部分や関東大震災で沈下した当時の防波堤の一部がそのままの形で保存・展示されている。

公募型プロポーザルで自身が設計者に選ばれた際のエピソードも教えてくれた。

「プロジェクトが開始するタイミングに、横浜税関の当時の税関長から呼び出しがかかりました。行くと、マッカーサー元帥が当時執務していた部屋などを案内されるのです。一体何を言われるのだろうとビクビクしていると、税関長から『象の鼻地区は税関の歴史の発祥の地で、とて

も思い入れのある場所だ。それを理解した上で設計してほしい』との声を掛けられました。ものすごいプレッシャーでした」

その後、遺構の発見など一筋縄ではいかない工事を経て、象の鼻パーク/テラスが無事完成する。「税関長が『ずっと(横浜税関の)執務室から工事の様子を見ていた。柔らかい雰囲気のところが出来上がり、良い場所になった』と言ってくれました」と話す。

オープンから10年以上が経ち、「みんなに認識される場所になってきたと同時に、大人がゆったりとした時間を楽しめる場所であることが認知されてきたと感じています。象の鼻テラスに関しては、障がいのある方とアーティストをつなぐ活動など、意欲的な取り組みが展開されています。この場所で活動されてきた栗栖良依さんは、東京2020パラリンピックの開会式でステージアドバイザーを務められました。象の鼻テラスの取り組みは大きな成果です」と感慨を込める。

東永谷地区センター・地域ケアプラザ

55

2022 (令和4) 年6月8日掲載

横浜市港南区の東永谷地区センター・地域ケアプラザは、設計者・伊東豊雄氏の真骨頂である「閉じない建築」の先駆けとなる公共建築だ。伊東氏によると「与条件が明快」で窮屈なところもあったが、そこをすり抜けて緩く自由につくる実験的なことを随所で試みている。後のせんだいメディアテークにもつながっていく興味深い建築である。伊東氏と設計当時の担当者の柳澤潤氏（現コンテンポラリーズ代表／関東学院大学）に聞いた。

与条件から逃れる場所をつくる

「どうやって与条件の明快さから逃れる場所をつくり得るかというのが、われわれの大きなテーマでした」。設計者の伊東氏はそう振り返る。面白い公共建築をつくるために立ちはだかる「壁」を克服するには、風穴をあけるのではなく、壁の間をすり抜けるしかない話す。東永谷地区センター・地域ケアプラザもそうだった。「正直、窮屈なところもありましたが、エントランスから体育室、図書コーナーの部分はわりと緩く自由につくれるんじゃないかと思いました」。現場監

理を統括していた東建男氏（現伊東豊雄建築設計事務所取締役）、担当の柳澤氏とすり抜ける道を模索した。実はここで、実験的な試みがいくつか展開され、伊東氏の公共建築への考え方の端緒が垣間見られる。せんだいメディアテークにも連なっているものだ。

担当の柳澤氏は東永谷地区センターの設計が始まった1994年当時、30代前半だった。「伊東さん、東さんと一緒にいろいろ考えさせていただきました。サイン一つ、家具一つまでこだわりを持ってつくることができました」と話す。当時は、公共建築の壁はあったとは言え、自由度が残っていた。柳澤氏にとって

伊東 豊雄氏に聞く

さまざまなことを学んだバイブルのような建築であり、「いろいろな意味で伊東豊雄建築設計事務所にとっても公共建築から学んだことの多い作品だったのではないかと思う」と話す。

東永谷地区センターは2階建てで、デイサービスなどの地域ケアプラザを併設する建物。地区センターの中には体育室をメインボリュームに図書コーナー、音楽室、料理室、工芸室、会議室などが配置されている。

翌95年から設計が始まった「せんだいメディアテーク」が、公共建築としての自由度が画期的に高かったこともあって、東

永谷地区センターの建築がより「窮屈」に感じられたのかもしれないが、先行した同センターの意欲的な考え方はメディアテークに生かされてもいった。

その一つは、伊東氏の真骨頂でもある「壁の少ない建築」だ。せんだいメディアテークは、これを象徴する建築で、透明なガラスで覆われたチューブと呼ばれる構造体が上下階を視覚的につないでいるのはよく知られている。東永谷地区センターにもこの走りのような考え方が見られ、機能の異なる地域ケアプラザを「壁」をつくらないように巧妙につなげた。

伊東氏はこう話す。

「(二つの機能について) 外と中とははっきり分けるようにと言われたので、地区センターとケアプラザの間にコートヤード(中庭)を設けて、(ガラスのファサードとすることで)お互いに見合えるけれども機能的にははっきり分かれている、ということの一つの特徴だと思います」。隣接する2階の図書コーナーと1階のケアプラザがガラス越しにコートヤードを挟む構造になっている。

壁の少ない建築というつながる(閉じない)空間はさらに、両施設を天井のアルミルーバーとグレーの床で統一したこと、体育室と図書コーナーをあえて隣



図書コーナーからはガラス越しに体育室が見える

りに配置したことが挙げられる。体育室そのものも閉じない建築を先導しており、ファサードはガラスだ。

スペースがしっかりと確保された図書コーナーからは、ケアプラザとちょうど反対方向にやはりガラス越しで体育室が見える。体育室と図書施設が視覚的につながる建物はほとんどないのではなかろうか。静と動がガラスを隔ててつながる。伊東氏は「図書コーナーから見ると体育室は吹き抜けの働きをしているとも言えます」と指摘する。

公共建築について伊東氏はこう述べる。

「最近負けたある自治体のコンペティションなんですけど、調理室と他の部分との境界を割と緩くつくったんですね。そうしたら役所の方から、これだといかが外にもれてしまうのでまずいのじゃないですかと言われたのですが、ぼくは逆ににおいで

何をつくっているかが感じられた方が交流ができて、コミュニケーションを促進するんじゃないかと思うんです。でも役所の方にはなかなか許していただけなくて。公共建築に立ちはだかる壁の間をすり抜ける回り込み方は、いろいろあるような気がしています。利用者の方は模型を見てもなかなか実感できない部分があって、説明をしても理解が難しいのは当然だと思うんです。いろんな方法で理解をしていただくよう努めていますが、出来上がってみると割とさらっと良いじゃないですか、みたいに言われることも結構あるんですよ」



左:伊東氏/右:外観



「壁」の間をすり抜け、閉じない建築



柳澤氏

みなとみらい線馬車道駅

横浜都心部の魅力的なスポットを結ぶ地下鉄「みなとみらい線」。個性あふれる各駅舎のデザインは、土木・都市・建築が融合した画期的なものとして、2004年2月の開業当初から高い評価を得た。その一つ、馬車道駅をデザインした建築家の内藤廣氏は、「これからの駅は街とともにあるべきだ」という、当時の高木文雄横浜高速鉄道社長からの言葉が「強く心に響いた」と振り返る。

街とつながり地域の財産に

「それぞれアイデアを出してほしい。自由にプレゼンテーションしてくれ。そういうスタートでしたね」という。東急東横線を延伸する形で横浜駅から元町・中華街駅までを結ぶ、この長さ

4.1kmの鉄道は、地下水位が高く軟弱な地盤に加え、三つの川を横断するため、地中深くを走行する。この地上からの「深さ」を逆手にとって、地下に出現する大空間を周辺の街づくりとも連

携した都市のオープンスペースとして有効活用し、地域の財産となる駅空間を創出していく。その実現に求められたのが、既成概念にとらわれない建築家の豊かな発想と構想力だった。

71

2022(令和4)年6月22日掲載



左：駅中央の円形ドーム／上：内藤氏

内藤氏とともに招聘されたのは、みなとみらい駅が早川邦彦氏、元町・中華街駅は伊東豊雄氏、日本大通り駅が日本鉄道建設公団（現鉄道建設・運輸施設整備支援機構）の安藤恵一氏。計画途中で追加された新高島駅はUG都市建築の山下昌彦氏が担当した。各分野の専門家と市民代表で組織するデザイン委員会に、月1回のペースでそれぞれの地区の特性を考慮した駅空間デザインを提案し、議論を重ねてプランを固めていく。そのプロセスを通じて、初会合での「地元と一緒に駅をつくりたい」という高木社長の言葉は「常に頭の中にあった」と語る。

馬車道は、横浜の発展を担った歴史ある建造物が建ち並ぶ地区と再開発が進む新しい地区との中間に位置する。この場所性を踏まえた「過去と未来の対比と融合」をデザインのメインテーマとした。その最大の特徴がコンコース壁面のレンガだ。

歴史を投影し未来を表徴

職人が手作業で仕上げた「張りものではない真正銘のレンガ積み」であり、駅中央に位置する2層吹き抜けのドーム空間には大正以前に広島で焼かれた古レンガが使われている。その陰影ある肌合いはまさに歴史の堆積そのものと言える。

このレンガ壁は、「ほとんど水の中。潜水艦を設計しているみたいなもの」という、極めて高い地下水位に備えた漏水対策の仕上げ壁となる。外殻コンクリートから水が漏れてこないように隙間をあけるなど、レンガの積み方は現代の技術が裏打ちしており、鉄道特有の列車振動にも万全の対策を講じている。直径24m、ドーム中央部での高さが12mという、地下とは思えないダイナミックな円蓋は「過去と未来の融合」を表徴する空間として、GRC（ガラス繊維補強セメント）で天井を形成。音響の専門家である唐澤誠氏との協働により、吸音性能の高いアルミ吸音パネルを取り付けるなど、良好な音環境にも配慮した。

一方で、地下水に備える必要のない内部の柱などはすべてむき出しとした。「これまでの柱は電線や設備の配管などを包み込むことで張りぼてのように断面が大きくなる。このカバーや仕上げ材を剥がすことで、そのコストを函体の漏水対策に回せる」と提案した。防火区画用のシャッターレールも熱押出鋼で

建築家 内藤 廣氏

(内藤廣建築設計事務所代表) に聞く

よりコンパクトとし構内やプラットフォームの視認性を高めた。照明や空調の吹出し口などを一つのボックスに収めた新しいシステム天井も導入。プラットフォームに設置したアクリル一体成形による浮遊感ある透明なベンチは、まさに近未来を想起させるものとなっている。

他方、街と連動した「駅の在り方」として、「横浜の歴史が沈潜していくような場所をつくる」ことも提案した。当時、市内で歴史的な建造物が取り壊される際に主要なパーツを保管していると聞いたことがきっかけだった。

「それをレンガ壁に展示し、この地下空間が横浜の記憶をとどめる場所になればいい」と、かつて駅の地上部にあった横浜銀行旧本店別館の金庫扉、貸金庫、階段手すりなどのパーツは東側コンコース壁面に。西側コンコースの壁面は明治から昭和にかけて活躍した建築家・中村順平が手掛けた長さ45mの大壁画『横浜開港史』が行き交う人の目を引く。

「鉄道はやはり安全が第一でデザインはずっと後ろの方にある。だけど街とともになければ減じるのだと、国鉄総裁も務めた高木さんはそう思ってメッセージを発したのではないかな。そういう意味でも馬車道駅はよくできたと思う」と改めて感じている。

音楽やスポーツなど数多くの感動や熱狂に包まれてきた「横浜アリーナ」が生まれ変わった。2016年に続いて実施した大規模改修工事が終了、22年8月に新装オープンした。設計・施工を竹中工務店が担当。開業から33年、「ヨコアリ」の新たな歴史が始まった。

快適さを追求

竹中工務店は、新築時の設計・施工を担当し、16年と22年の大改修も設計と施工を担った。このうち22年の工事の中心は天井の軽量化で、高所作業が必須。「無事故・無災害で完工すべく、特に安全施工を徹底している」(月岡正則作業所所長)。また「鉄骨トラスの補強工事もあり、当初計画で予定されていた在来の吊り足場を、作業性の良いクイックデッキ(先行床施工式フロア型システム吊り足場)に変更するなど工夫し、タイトな工期に備えた」という。

高所足場作業での安全を徹底するため、VR(仮想現実)ゴーグルを装着した疑似体験の安全教

育も実施し、万全を期した。ウェアラブルカメラを活用した遠隔施工管理も導入、「すごく有効だった」ほか、「BIMで足場モデルをつくり、そこから数量を算出して業務の効率化を図れた」など、新たな取り組みも実施し、成果を上げた。

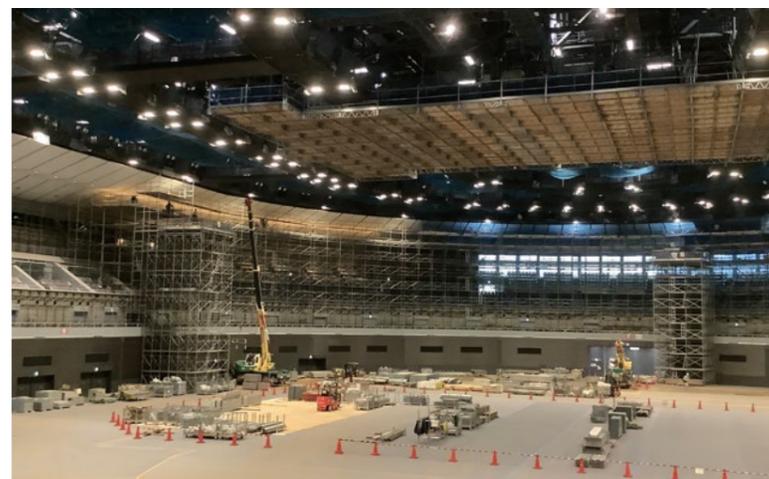
月岡所長を補佐する横浜・湘南地区FMセンターの高橋昭三主管は、前回の16年大改修を現場代理人として采配した。「今回は、前はなかった構造の工事が中心です。なかでも印象深いのが、新しい他のアリーナに見劣りしないような吊り荷重への強化です」。既存の施設に文字どおり、新たな命を吹き込むようなリノベーションであり、感慨深い様子だ。

設計と監理を担当した東京本

店設計部の松浦勇一主任は、高橋主管と同様に、前回の大改修に続いて今回の工事に臨んでいる。「仕上げ工事のメインは、特定天井を軽量なものに置き換えるものですが、設備機器をスリット部にまとめることで天井はできるだけシンプルにして、より安全性の高いものにするのに一番気を使った」ほか、音響についても「改修することでどのように変わるかシミュレーションし、横浜アリーナさんの要望にできる限り沿う提案ができたと思います」と語る。

また、「横浜アリーナは、現在は音楽イベントが大多数ですが、計画当時はスポーツも含めた多目的の利用をよりはっきりと意図されており、それを念頭に設計させています。例えば搬入口も、いろいろなイベントに対応できるレイアウトがしやすいよう3方向に設けたのではないかと思います。ロビーの動線空間や通路幅など他の類似施設に比べ、ゆとりがありますが、そうしたことも多目的施設としての使いやすさを意識したためと考えられます」という。

多目的ホールの代表格



上: 施工中の吊り足場/右: 外観



音響設備など充実

横浜アリーナが開業以来30年以上、わが国の多目的ホールの代表格であり続けている理由の一つに、音響が良く、設備機器が充実していることがある。加えて、ステージの位置や1万1,000席もの観客席などホール内部の形状を、コンピューター制御で自由自在に変えられる「ラムダシステム」も見逃せない。メインアリーナの床下に収納している可動式客席ユニットを昇降させることで、イベントの企画・演出に合わせてステージ

の位置や観客席を3時間程度で自由にレイアウトできるという優れたもので、使用者に評判のシステムとなっている。

開業以来初となる半年間の休業を伴う16年の大規模改修工事では、誘導サインの更新を主軸としたロビー・トイレの内装、照明器具のLED化、ユニバーサルデザインへの対応、建物外部の歩行者デッキ・正面広場・駐車場の改修などを行った。

また、横浜市は東日本大震災後の基準に合わせた「天井脱落対策事業計画」の中で、横浜アリーナを他の施設などとともに

「災害時に最も重要な拠点」として位置付けており、2回目となった22年の大改修では吊り天井の耐震化、いわゆる特定天井の軽量化を始め、空調設備や屋上防水の更新、外壁補修などを実施した。

横浜アリーナは、イベント会場である半面、災害時には帰宅困難者の一時滞在所となる公共施設としての顔もあり、大改修により施設の長寿命化が図られ、より安全・安心な施設に生まれ変わった。

長寿命化に対応

横浜マリンタワー

18

2022 (令和4) 年7月27日掲載

観光名所の山下公園や大さん橋、港の見える丘公園などのゲートとして位置付けられる横浜マリンタワーは、横浜港のシンボルとして60年以上にわたり市民に親しまれてきた。開業は1961年。高さは106m。2009年の大規模再生事業に続き、19年から2年半かけて実施した大規模改修も終了、22年9月にリニューアルオープンした。眺望絶佳の一等地で、来館者にとって2層の展望フロアから眺める360度の大パノラマは必見だ。

眺望絶佳の大パノラマ

工期の6割超が仮設工事

09年の改修を工事長として統括した清水建設横浜支店安全環境部の堤俊明氏は「あんなに難しい工事は初めてでした」と施工当時を振り返る。工期11カ月のうち、6割以上の約7カ月を仮設工事に費やしたといえ、その特殊性が分かるというものである。極端な話、工事は、施工のための仮設足場を架設したら先が見えた、と言って過言ではなかった。

工事名称「マリンタワー再生事業改修工事(1工区)」。工事内容は灯台と展望台の内外装改修、鉄塔の耐震補強と塗装などで、「展望室と灯台室は外部サッシ、屋根パネルなどを全面更新」したほか、鉄塔の「上部に鋼材を付け足して補強する、いわゆる耐震補強工事と全面塗り

替え工事」を行った。完成後50年近くが経過し、初めての改修・再生工事であった。

マリンタワーは、下から上に細くなり、その頂上部に灯台室(現在は役目を終えている)と展望室が載る。周りは賑やかで、人や車の往来も多い。工事中は多くの人の目にさらされ、海の近くのため強風も吹く。それだけに物の落下はもちろん、墜落転落など無事故無災害での施工を徹底し、万全を期した。

というのも、このような工事の場合、一般的には養生を兼ねた枠組み足場やブラケット足場を組み合わせて架設する。しかし、着工前の段階で風の強さや高所作業などを考慮して工程を検討した結果、仮設の資材揚重と架設が工事の大部分を占め、工期を順守するのは厳しかった。大部分の仮設工事が高所や空中での作業となるため、安全確保が大変で作業効率も悪く、コスト増になることも懸念された。

そこで、タワー形状に合わせて3パターンの足場を設置することにした。塔体部分の平面形状変化と傾斜に対応し、昇降できる塗装用「クライミング足場」、展望室のサッシやパネルなどの付け替え作業を安全・安心に、床上で効率よく作業できる「スライド足場」、底部がお椀のような形状の展望室上げ裏改修に、同じく安全で効率よく作業できる「ユニット足場」の採用である。

特にクライミング足場については「上に向かって細くなるのに従って生じる隙間をふさぐため、

高所で高難度特殊作業

足場デッキに横方向に自動で伸縮できるように改造した跳ね出しステージを取り付けて鉄塔の平面形状に対応できるようにし、計4台で外周を取り囲み、耐震補強や改修工事を行った。また、塗装工事での飛散防止にもなる養生シートについても、「強風に耐えられるよう結束部分にワイヤーを入れて強化」とするとともに、形状は一般的な長方形ではなく、塔部の形状変化に合わせて覆うことができるよう台形の特注品とし、「工事中もタワーのフォルムそのままの美しくスマートな外形を維持」した。

エレベーターシャフトを活用

19年——。新装開業に向けて、約10年ぶりに改修することになった。工事名称「横浜マリンタワー改修工事(建築工事)」。施工は渡辺組が担当した。主な工事内容は、塔体部等の鉄部の劣化補修と塗装改修、屋根や外装の防水改修と塗装改修、低層部内装の美装と更新(横浜市資産の共用部)などである。

作業所長を務めた渡辺組の篠田隆信工事部長は「工事のメインは、塗装をはがして塗り直すというもので、工事内容には特段、目新しいことはないですね」と事もなげに話すが、実際の施工は容易ではなかった。除去する塗膜に有害物質のPCB(高濃度ポリ塩化ビフェニル)

が使われており、除去する際に飛散を食い止める必要があった。しかし、屋内などの閉鎖空間なら対処するのはたやすいものの、鉄塔という吹きさらしの骨組みだけの構造で、ましてや高所での除去作業である。飛散する条件はそろっていた。

除去にはまず、塔体を上下方向に5つの区画に分割し、1区画ずつ順繰りに施工した。「1区画は高さ15m。フレームの足場を組んで外周を防音パネルで覆うのですが、それだけでは空気の流れは止まらないので、その中にシートとベニヤで水平区画をつくり、さらに内側をビニールシートで養生して内部を負圧防塵装置で負圧にし、万全の飛散対策を取って作業しました」。1区画につき、フレームを上げるのに3カ月、改修のための柵足場の組み立てに3.5カ月、その解体に3カ月を要した。工期が2年半となった大きな理由に、この仮設工事があった。

もう一つ、記録しておきたい工夫に、材料等の揚重や搬出に既存のエレベーターシャフトを活用したことがある。「提案して、設計変更を認めてもらいました」という。篠田所長は、10年前の低層部・機械棟の改修工事「マリンタワー再生事業改修工事(2工区)」にも参加しており、その時の知識と経験がシャフト活用に活きた。

横浜市中央図書館

49

2022 (令和4) 年8月10日掲載

2021年6月に開業100周年を迎えた横浜市立図書館は、大きな時代変化に対応しながら、1990年代半ばには市内18区すべてに設置されるなど、人と本をつなぎ、生涯の学びを支える場としての役割を果たしてきた。94年に開館した『横浜市中央図書館』は、この図書館ネットワークの中核であり、特徴ある建築空間とデザインは、つながり・ひろがる「知の森」を体現する。その設計意図を前川建築設計事務所の橋本功所長に聞いた。

単位空間がつながり・ひろがる「知の森」

横浜市中央図書館は、横浜の繁華街を見下ろす小高い野毛山公園に隣接した敷地に建つ。坂道の登り口から分かれるような傾斜地の複雑な敷地形状にあって、「この土地を見たときに、野毛山公園と街との連携がとても大事であり、この敷地の不定形をどうやって活かすのかをまず検討した」という。

「ある一定のボリュームを持った単位空間が増殖し、あるいは収縮して変化しながら連続していく」という「前川建築」の特徴も活かしながら「この土地に合う増殖の単位は何か」を探り、検討を重ねた結果、導かれたのが「柱を中心に、正三角形を組み合わせた正六角形が隣り

合うことで増殖していく」プランニングだ。全体の佇まいとしても「六角形のボリュームが立ち上がって山なりにつながり広がっていく。野毛山と街の景観に対して一つのリズムを与えることができる造形」をもたらしている。

開館時で約150万冊の蔵書を収容できる、公立では全国有数の規模を誇る大型図書館として、限られた敷地とスペースの中で大規模開架を実現する上でも「単位空間」の考え方は効果を発揮した。人がスムーズに移動できるよう、書架の間隔は1.8mとなり、柱と柱の間隔は書架6列分となる10.8mにそれぞれ統一。

さらに「図書館の計画では利用者はもちろん、そこで働く人

たちの動線をどれだけ短くできるかが大事」だとして、六角形の単位ユニットを湾曲するように展開し、大空間の閲覧室を確保しながら、光庭を挟んで抱え込む形に事務室を設けることでバックヤードからの移動が容易な効率のいい書架配置を可能とした。

閲覧席も六角形の形を活かして窓側に設置することで、資料と座席の距離をできるだけ縮めると同時に緑豊かな外部環境ともつながる、居心地の良い快適な空間環境を提供している。

図書館には歴史的、

前川建築設計事務所所長 橋本功氏に聞く



撮影：川澄明男



左：野毛山公園と一体となった図書館全景（提供：前川建築設計事務所）／右：橋本所長



撮影：川澄明男

1階エントランスと総合カウンター（提供：前川建築設計事務所）

学術的な価値の高い資料や書物も多く保管されている。それだけに空調環境の整備にとどまらず、「建物自体が丈夫で元気でなくてはならない。シンプルイズベストで長持ちする素材を使うのも基本の一つ」と前川建築の流儀の一端を語る。

この図書館では、蔵書を温度や湿度の変化から保護するため、外壁は石張りとし、外断熱で二重壁のオープンジョイント工法を採用した。

「要するに躯体があって断熱材があり、その外側に空気層があって石がある。外気温が上がっても躯体を温めず、室内に対して外気の熱負荷を抑えている。省エネ的にも優れた性能を持っている」ことに加え、水密

性を保持し浸入した水を外部に排水させるため、「よほど大きな災害でもない限り、しっかりとメンテナンスしていけばこの建物の構造体としての鉄筋コンクリートは100年でも200年でも長持ちできる」と自信を込める。

他方、「商業的で劇場化」する近年の公共図書館の在り方には率直に疑義を差し挟む。「ショールーム化も一つのやり方ではあるし、いろいろなバリエーションがあっていい。だが図書館活動の原則は本と人がどうふれ合うかであり、写真映えるからと人が集まり、見に来るものではない。単に本の表紙を見せるのではなく、著者は何を訴え、何を語ろうとしているのかを感じられる、触れること

ができるところに図書館の醍醐味があるはずだ」と。

横浜市中央図書館では、より多くの市民に「本を手にとってもらいたい」との思いを込め、書架の高さを身長150cmの人が一番上の棚に手が届く2065mmに設定した。情報過多社会だからこそ、94年のユネスコ公共図書館宣言にある、「地域において誰もが知る権利を得る窓口」であり「自分の意思で自らの思想性を培い、情報を判断し、それを発信できる礎をつくる」という公共図書館の役割は「今後ますます重要になっていく」と見据える。

本を守り、本とふれあう

横浜を代表する公共建築100施設

75

74

第3章 横浜を代表する公共建築

市民文化会館 関内ホール

32

2022 (令和4) 年8月24日掲載

1986年に開館した『横浜市市民文化会館関内ホール』は、芸術文化の発信と交流の場として、長く市民に親しまれてきた。築後30年が経過したことを機に大規模改修工事を実施。モダニズム建築の名作を多く世に送り出した建築家、芦原義信の設計による建築の質やオリジナリティーを保持しながら、さまざまなジャンルのエンターテインメントをより快適に楽しめる空間として、2018年9月にリニューアルオープンしている。改修設計を担当した建築家で芦原太郎建築事務所所長の芦原太郎氏に、設計のポイントとともに、モダニズム建築の活用の在り方などを聞いた。

街に果たす役割受け継ぎ最適化

横浜の中心市街地として発展してきた関内・馬車道エリア。この開港以来の歴史が息づく街並みに大きく開かれたファサードは、関内ホールの持つ魅力の一つだ。

「街に対する顔をどうつくっていくか、一生懸命考えていたのだと思う。外部空間や街並みについての研究が実作品に実践されている。音響や雰囲気を含めホールもオーソドックスにきちんとできている。公共ホールの優等生だなと感じる」と、その印象を率直に語りつつ、改修に当たっては「いまの時代に、いまの人びと、街にとって最良な答えを

出す」という思いを込めた。

なにより「モダニズムの建築家として機能、ファンクションを重視していたわけだから、僕らも極めてオーソドックスに機能面から次の30年に向けた関内ホールを考えた」とふり返る。

開館以来、初めての長期休館を伴った大規模改修工事では、災害拠点施設としての機能を担保するため、大小ホールとエントランスの特定天井耐震化改修を中心に、施設全体の長寿命化対策として設備インフラを全面更新。さらに天井改修に合わせて大ホールの音響計画や舞台機構も更新するとともに、ホール客席を含め内外装をリデザインした。

特に音響は「ホールにとって一番大事なこと」であり、「関内ホールはもともと音響の評判も良かったが、どうせ天井を変えるのなら地震対策だけでなく、より良い音になる天井にしよう」と永田音響設計と協働して最適解を求めた。

ホール客席も「座席幅を広げ、椅子自体もグレードアップした。中央ブロックは千鳥配置に変更し、より気持ちよく見えるようにしている」など、安全で快適に鑑賞できる環境を整えた。客席の色は「馬車道の赤レンガをイメージしたエンジ色に近い赤」に大胆に変更し、「ハレの場」としての高揚感も演出している。

ファサードの雁行するミラーガラスの壁面は、街路樹からの木漏れ日をイメージさせる白のアルミのデザインパネルを西側に1面ずつ取り付けることで日射を遮へいしながら変化のある表情を見せている。エントランスの床仕上げも既存のレンガタイルから白を基調とした石張りに更新することで明るく来場者を迎え入れる空間とした。

一貫するのは「意匠的な部分や空間の持つ

建築家 芦原太郎氏 (芦原太郎建築事務所所長) に聞く

質、オリジナルなものは尊重し、きちんと活かしながら、性能はより良いものにしていく」姿勢であり、「父の意識にあったのは、横浜の市民の、街の、都市のために役に立つ建築を一生懸命つくっていくという思いではないのか。その役割をいまの時代にできるだけうまく果たしていくために改修していく」という、受け継がれる思いだ。

他方、「父の時代は手描き図面。これをすべてCADデータで書き起こすという、設計の前段での図面のCAD化には苦労した」と苦笑しつつ、「そのCADデータをベースに、ファシリティマネジメントを展開していけば、いずれまた来る設備更新への対応をはじめ、維持管理の効率、能率を上げることにつながるのではないかと提起する。

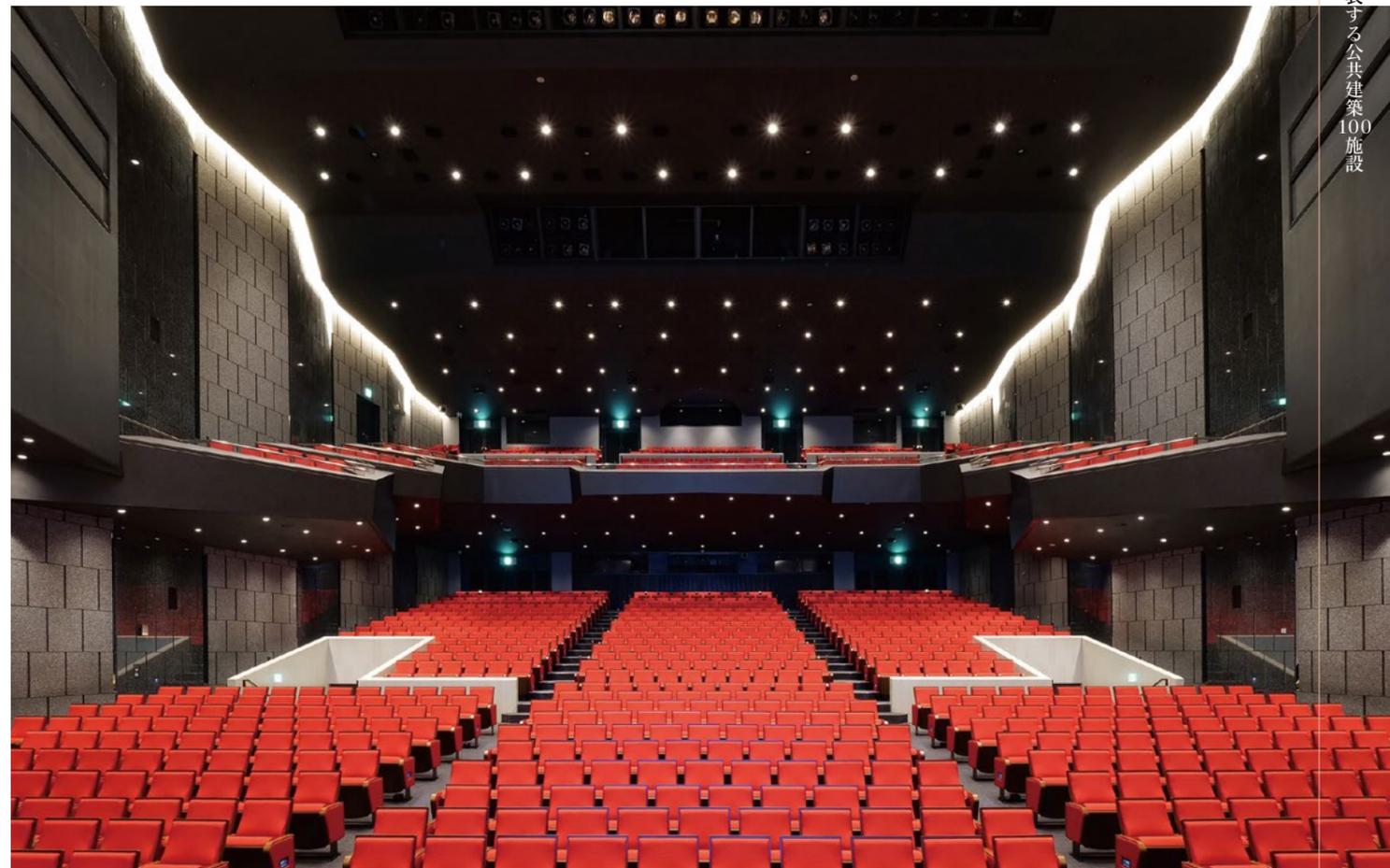


上:外観/下:大ホール

パリの街がそうであるように、「都市の魅力形成するには100年以上、200年、あるいは300年というスケールで時間を積み重ねていくことが大事になる」とした上で、「いまの時代のいいね、を建築の形にして次の時代に引き渡す。受け継いだ

方はその時代、時代で工夫していく。要は長い時間をどうやって継続させるか。ダイナミックな発想の転換をしながら、建築やインフラをうまく使いこなすか、その使い方の知恵を社会なり街が持つ必要がある」と強調する。

時を重ね使いこなす知恵を



芦原氏

「日本の歴史的な建築の理想郷のようなところ」。建築史家、建築家の藤森照信氏は、横浜市中区の「三溪園」をそのように表現する。大好きな場所の一つだ。明治から昭和にかけて活躍した実業家・原三溪が、日本の古建築を京都や鎌倉などから移築し、広大な敷地に巧みに配置した日本庭園である。国の重要文化財が10棟ある。京都・燈明寺から移された室町時代の建築・旧燈明寺三重塔をランドマークとする外苑、藤森氏が「全身数寄屋造り」と評価する「臨春閣」を景観の中心とする内苑で構成される。その臨春閣が2022年、5年にわたる大修理を終えた。内部からの庭園の眺めも考えられた臨春閣で、藤森氏に三溪園の魅力などを聞いた。

歴史的な建築の理想郷

三溪園は17万5000㎡もの広大な敷地に、古くは室町時代にさかのぼり桃山時代を経て、江戸時代を中心とする古建築を移築した。京都の二条城内で江戸時代に建てられたといわれる「聴秋閣」を1922年に移築して全体が完成。2022年で完成100周年を迎えた。最初の移築は1905年、豊臣秀吉が桃山時代に建てた「旧天瑞寺寿塔覆堂」。三溪はその後、桃山時代にゆかりの建築や美術品を蒐集(しゅうしゅう)していったという。藤森氏はこう話す。

「庭園を歩くと一見京都のような感覚を持つかもしれない。でも、京都にもこれだけ歴史的な名建築が集まっている所はない。日本ではここだけだと思う。原三溪さんは自分の好みで集めたのだが、非常に趣味が良くて、洗練されている。日本の歴史的な建築の理想郷のようなところだと思う」

建築史家にとって見どころが満載の庭園だが、中でも藤森氏が大好きなのが「聴秋閣」だという。聴秋閣は、徳川家光の上洛に際し、1623年に二条城内に

建てられたと伝えられるもので、書院造りで茶亭の建築である。のちに家光の乳母であった春日局に与えられたという。入り口が一段低くなっているのが特徴で、これは水辺から舟で直接上がり込むための空間で、舟遊びを意識したものであったことが想像されると三溪園の公式ホームページに説明されている。

「御座船という大名や将軍が乗る屋形船があるが、建物を実際に見たときにそのような船を意識したのだというのは本当だったのだと思った」

建築史家・建築家・東京都江戸東京博物館館長 藤森 照信氏に聞く



左：臨春閣は11年かけて念入りに配置が考えられ、池に面して三つの棟を奥にずらしながら連結させた／右：藤森氏

御座船を思わせる「聴秋閣」に魅了されて

意匠は、幕府の造営などに関わる作事方を務め、茶人でもあった佐久間将監によるといわれ、三つの屋根を組み合わせた外観から移築前は三笠閣と呼ばれていた。三溪はこれを聴秋閣と改め、周辺を秋に紅葉を楽しむ風情とした。

内苑の中心である臨春閣は、歴史上ほとんど残っていない貴重な数寄屋造りの建築だ。

「日本の住宅は寝殿造りがあって、それが発達して書院造りになって、書院造りができた時点で千利休が茶室を

つくる。それで、書院造りが茶室の影響を受けて数寄屋造りが生まれた。江戸時代には書院造り、数寄屋造り、茶室の三つが併存して、基本的にはそのまま現代につながっている。茶室や書院造りは情報があって成立過程は分かっているが、数寄屋造りは現存する建物が初期のものとして桂離宮だけで、その後がずっとなく、途中にこの臨春閣があるくらい。それほど歴史は古くないけれど、どう成立したかよく分からない。数寄屋造りは無駄なものをそぎ落としてシンプルに薄く、細くつくるもので、火にも弱いから管理が大変でなかなか残らなかった。この臨春閣は、どこにも長押(なげし)が回っていないことから、まさに『全身数寄屋造り』といえる貴重な建



藤森氏が一番好きだという「聴秋閣」

物になる」

数寄屋造りは歴史の文脈で見るとは好きだが、自分自身が建築家として数寄屋の美学で設計をすることはないだろうと話す。「(設計しないのは)数寄屋造りは、畳割ということもあってほぼ完成している様式なので、何か新しいことをやろうと思っても難しいから。(ドイツの建築家の)グロピウスが初めて桂離宮を見たとき、コルビュジエに手紙を書いて、『自分たちのやろうとしていたことは既にここでやられている』という内容だった。数寄屋造りはそれほど完成した建築だった」

臨春閣の配置については「入り口から順に見ていくと一本の軸を通す視線を持ちながら、随所で崩していくことを意識した

ことが分かって、さすがだなと思った。古美術が好きで書画をたしなんだ三溪にとって、庭の造形はあえて勉強はしなくても大体理解できていたのではないかと思う。庭づくりの原則は、石庭とは違って浄土庭園といって極楽をイメージしている。阿弥陀如来がどこかに置いてある感じがあって、三溪園もそれをわきまえてやっておられる」と述べる。

自然や文化が地域や国の誇りを象徴するのだと言う。

「その国、その地域に暮らす人は自分たちの場所、生きている時代に誇りを持つということがとても大事な事。その誇りを象徴するのが自然や文化だ。三溪園はまさに地域にとっての象徴。誇りをつないでいく場として大事な働きをしている」

西谷浄水場

(旧整水室上屋、旧浄水井上屋、旧配水井上屋)

08

2022 (令和4) 年9月21日掲載

日本の近代水道発祥の地・横浜。初めて給水を開始した1887年、水栓からほとぼしる水に市民は驚嘆した。その28年後の1915年3月、横浜市ほぼ中央に位置する保土ヶ谷区の高台に、西谷浄水場は誕生した。ここには、横浜に数ある有名近代建築に引けをとらない、赤レンガの小さな建屋が6棟、凜と佇んでいる。何のためにつくられ、今後どのように保存されていくのか、現地を訪ねた。



1997年に四角形、八角形の建屋ともに国の有形文化財に登録された

赤レンガの小さな文化財

浄水処理施設の中央部に、四角形の四つの建屋、八角形の二つの建屋が整然と立ち並ぶ。四角形の建屋は元々、ろ過池の整水室として整備された。当初室内にはバルブがあり、ろ過する水の量を調整する役割を果たしていた。

当時は、現在主流の薬品を利用して水をきれいにする急速ろ過ではなく、微生物の力を使う緩速ろ過を採用しており、この方式では急速ろ過池に比べて広大な敷地が必要で、当初はろ過池が八つあった。

整水室も同数備えていたが、

1973年の改修工事により緩速ろ過池と整水室は機能を停止。工事に伴い整水室4棟は解体したものの、東側の4棟は現地で保存し、97年には八角形2棟の建屋とともに国の有形文化財に登録された。

関東大震災前の希少なレンガ造

銅板葺き平屋建ての整水室は、赤レンガを基調に花崗岩のラインが入った建築デザインで、

1914年12月に開業した辰野金吾設計の東京駅丸の内駅舎や17年7月開館の横浜市開港記念会館を彷彿とさせる。

現在の銅板屋根は緑青色だが、当初は鮮やかな赤褐色だった。室内は漆喰塗りで、中央の照明器具取り付け口は陶磁器となっている。

一方、八角形の建屋は1号配水池（現在は休止）の脇に1棟ずつ設けられた。ここにもバルブがあり、配水池に出入りする水の量を調節していた。形状が八角形となっていること以外は、外観、内観ともに整水室と同様の造りとなっている。

どうして浄水施設の建築が、ここまで凝ったつくりになっているのか。「横浜市水道第二拡張誌」（1919年）には「場内ノ美観ヲ添ウル為メ其上部ニ煉瓦及ヒ花崗岩ヲ以テ上屋ヲ築造シタ」

と特長を表す文章が残っている。これを見ると、建設当時から場内の美観を意識して浄水場を整備していたことがわかる。

西谷浄水場の再整備（2032年工事完了見込み）により、現存する四角形、八角形の6棟は敷地内の別位置に曳家工法で移設される。「関東大震災前の希少なレンガ造」、かつての浄水場の水の流れを示す「配置」、浄水場らしいのびやかな「景観」の三つの価値があるため、移設時には極力既存の配置や向きに配慮した形で残すという。滑車などの使用に伴う振動で損傷しないように、基礎補強した上で、細心の注意を払いながら移設する。

1号配水池管廊（地下通路）の出入り口となっている坑門も特長的だ。外観はユージント・シュティル様式というドイツ風の様式を模しており、建設当時は装飾が施されていたことが見て取れる。

配水池の内部は二つに分かれており、その間には通路がある。通路への出入り口が坑門だ。現在この配水池は耐震性不足などのため使われておらず、中に入ることはできない。再整備により解体し、跡地はろ過池となる。配水池の解体に伴いこの坑門も撤去するが、現在、保存の方向性を検討している。

建設当時から美観を意識



四角形、八角形の建屋ともに形状以外は外観・内観同様のつくりとなっている

横浜港大さん橋 国際客船ターミナル

69

2022 (令和4) 年10月5日掲載

日本の海の玄関として世界各国のクルーズ船が寄港する「横浜港大さん橋国際客船ターミナル」。その設計者を選定する国際コンペで世界41カ国、660の応募作品の中から最優秀作品に選ばれた英国在住の建築家、アレハンドロ・ザエラ・ポロ氏とファッシド・ムサヴィ氏による建築家ユニットfoa (foreign office architects) 案は、コンピューターを媒介とした、従来の建築の概念を覆すような斬新なデザインが世界の建築界に衝撃を与えた。

折り紙を想起させる架橋のホール内部 (提供: 横浜市港湾局)

「見たことのない空間」実現へ若き才能集結

「他のコンペ案とは全然違う。foa案を見て衝撃を受けた」。コンペの審査結果が発表された1995年当時、京大大学院生だった岸川謙介氏 (京都精華大学教授・akk代表)、早大大学院生でコンペにも参加した田村圭介氏 (昭和女子大学教授) と小林泉氏 (パワーアーキテツク代表) は、そう口をそろえる。これをきっか

けに3人とも渡欧を決意。大学院修了後、岸川氏と小林氏は英国のAAスクールとUCL (ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン)、田村氏はオランダのベルラーヘ・インスティトゥートにそれぞれ留学した。直接師事した岸川氏をはじめ、3人ともポロ、ムサヴィ両氏に学ぶ機会を得ながら、ヨーロッパの建築プロジェクトに携わっていく。

転機は99年。それぞれが次のステップに向けて日本への帰国を考え始めていた時に、コンペ後は基本設計段階でとどまっていた「横浜」が動く。「興味があったらチームに加われ」というポロ氏の呼び掛けに呼応し、同年9月1日、東京・芝浦に開設したfoaの日本オフィスで実施設計がスタートを切った。

当時、foaに設計協力していた現代建築研究所に勤務し、後に管理技術者としてfoaメンバーに合流した永山智文氏 (横浜市建築局施設整備課担当係長) は、コンペ後にfoaと現代建築研究所、それに構造設計集団〈SDG〉と森村設計も加わった設計チームがコンペ案の実現性を高めるスタディーを際限なく重ね、基本設計を練り直す姿を間近に見てきた。

一方、当時からロンドン事務所に在籍し、意匠全般を担当した松澤憲一氏 (楠山設計設計部係長) は、特に構造をめぐる議論について、「SDGの渡辺邦夫さんは、構造はスペースフレームにして上面と下面に仕上げをし、コンペのイメージ、つらとした空間を推していた。けれど、アレハンドロとファッシドは建物全体の形状がカードボード構造と入れ子状になることにこだわった」と語る。そして、ついにコンペとはやや異なるカードボード構造の下面を無くして、折板構造を露出するという決断に至る。「二人がコンペのイメージよりコンセプトを重視したのは驚きました。竣工時にはコンペとの違いに批判があったけれど、素晴らしい判断だったと思う」と振り返る。

2000年3月に着工を迎えたが、基礎工事と並行して上屋の詳細検討を進める「力業」だった。埋立地の建設地では地中25~56mの深さまで合計485本の鋼管杭を打設。その上に強固な基礎構造を構築した。建物の長

さは約450m。まさに「港湾工事、土木のスケール」だった現場で「建築」を実感したのは上屋のメインフレームとなるボックスガーダーの設置が始まってからという。「海上輸送された最初のワンピースがクレーンで船から吊り降ろされた時はものすごく感動した。やっと形が見えた瞬間だった」と永山氏は語る。

田村氏は現場を訪れた建築家のレム・コールハース氏を案内した時に「こんな建物は世界中で見たことがない」と言われたことを鮮明に覚えている。一方で「最先端の建築と思っていたが、ガーダーが並んできた時にエッフェル塔が横になったような前近代的な感じがあってショックを覚えた」とも。

岸川氏も「3Dは使っていたが、やっていることはけっこうローテクで折板の形もすべて手作業で描いていた。アルゴリズムやプログラミングの前段階だった」と指摘する。

「動線の設定が変わると3D

モデルもすべて変更となる。ガーダー1列全部、折板もすべて作り直さなければいけない。やりながら考え、発見していく。その連続だった」とは小林氏の弁だ。

竣工を迎えた時、田村氏は「最先端と思っていたものが実は優しい建築だと感じられて幸せな気分になった」という。「ここに来る人はみんな笑顔で、戻っていく時も笑顔になっている。それがうれしく誇りにも思う」と永山氏。岸川、小林両氏は「ここに携わったみんながこれは俺がつくったと自慢できるような、そういう思いを共有していることがうれしい」と口をそろえる。

かつて自らが学生時代に代々木体育館を見て感じたように、竣工から20年を経て、いま若い学生が「大さん橋」を見て建築の道を志すきっかけになっていることに大きな喜びも感じている。

やりながら考え発見



左から永山氏、小林氏、松澤氏、岸川氏、田村氏

横浜国際総合競技場 (日産スタジアム)

60

2022 (令和4) 年11月2日掲載



全景。増水時、地上レベルは遊水地となる

命名権による「日産スタジアム」の愛称で親しまれている横浜国際総合競技場は、国内最大級の観客席7万2,077席を誇る。建設着手は1994年1月で、97年10月に竣工し、翌98年3月に供用開始した。各種競技のほか、コンサートなど幅広く活用されており、中でもスポーツイベントでは国内大会はもとより、国際大会も数多く開催されている。

この競技場の最大の特徴は、ピロティ形式にある。いわゆる高床式で、施設全体が1,000本以上の柱に支えられた人工地盤の上に造られている。高床式の理由は、鶴見川多目的遊水地内に建設されているため、増水などで遊水地に水をため込んでもスタジアムが利用できるよう工夫されている。

スタジアムの形状は方円形で、地上7階建て。1階（階高約8.1m）は遊水地機能を兼ねた駐車場で、2階部分にフィールドが設けられ、その全周に大屋根で覆われた2層式の観客スタンド（4-7階）が配置されている。また、スタンドの下には業務関連や競技関連諸室、店舗、コンコースなどのほか、診療所や

運動施設などを備える横浜市スポーツ医科学センター、スポーツコミュニティプラザ（日産ウォーターパーク）も開設されている。

地震に強い PCaPC造

建設に当たっては、まず深さ約25mにある支持地盤まで現

場造成杭を築造し、その基礎の上にプレキャスト・プレストレストコンクリート（PCaPC）造で躯体の骨組み（柱、梁）を構築。具体的には、鉄筋コンクリート（RC）造の柱と梁を工場プレキャスト（PCa）化し、うち柱は現場でプレストレス（圧縮応力）を加えて建て込み、梁については工場、1次ケーブルでプレストレスを与えて現場に持ち込み、建て込んだ柱のコーベル（持ち送り）の上に単純支持させる。そして、その後、柱と梁を圧着ケーブル（2次ケーブル）により、さらにプレストレスをかけて圧着させている。

地震に強いのが特徴で、PCaPC造を採用した利点として他に①施工中や完成後の冠水対策として有効②工程管理がしやすい③高品質で高強度コンクリートによる品質確保が可能④鉄骨造に比べ経済性が高い⑤工事車両を少なくできて大気汚染対策につながる⑥型枠合板ではなく繰り返し利用できる鋼

千本以上の柱が支える高床式

製の型枠の採用で、森林破壊や産業廃棄物の発生を抑える——などがある。

スタンドの架構でもスタンド下にコンコースなどを設けたため、コンクリート壁や筋交いなどは採用せず、柱と梁による骨組みで耐震性を確保。安全性は万全で、横浜市条例に則り建築基準法に基づく地震係数をさらに1.25倍した

地震力で設計しているほか、屋根やフィールドの架構も入念な耐震対応を図っている。

先進性を確保

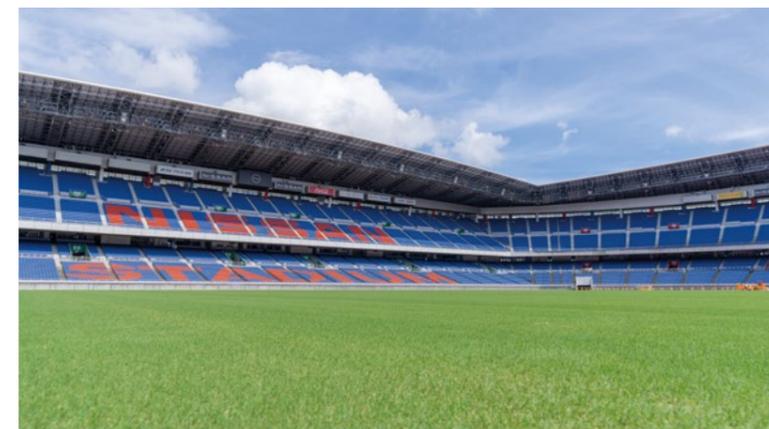
この競技場は、構想・建設時から国際Aマッチ競技の開催はもとより、各種イベントに対応した空間構成と設備を備えた最上級スタジアムとして整備されており、そのための先進技術や最新設備などを導入、また更新を含め先進性の確保に余念はない。

例えば、全天候型のトラックは日本陸連第1種公認および国際陸連クラス2認証で、特にサッカー競技などで重要になる芝生については、夏芝と冬芝を併用して1年中美しいフィールドをつくっているが、人工地盤で地温の変動が大きいと、芝の養生を考慮してフィールド下30cmの土の中に温度調節ができる温水パイプが敷設され、最適な状態が保たれるようになっている。

スタンド全周に架設している屋根は騒音や照明光を遮る

制振鋼板とし、軒天下にはアルミ吸音材、開口部には遮音壁を設置。照明はLED化され、フィールド照明は隣接のメディカルゾーンに影響を及ぼさないよう屋根の下に配置されているのを始め、建物外周コンコース照明もさまざまな色で彩られるようになっている。さらに、水再生センターから下水再生水を引き入れトイレ洗浄水等に利用しているほか、雨水も散水利用しており、案内や誘導などの各種サイン、120基設置のデジタルサイネージ、先進の音響設備などソフト対応も充実している。

横浜国際総合競技場は、東京2020オリンピック競技大会でサッカー男女の決勝戦が行われたことにより世界で初めて、3大スポーツイベントといわれる「FIFAワールドカップ」「ラグビーワールドカップ」「オリンピック競技大会」の決勝戦会場になった。



フィールド（提供：（公財）横浜市スポーツ協会）

横浜BUNTAI／横浜武道館

99

2022 (令和4) 年11月16日掲載

「ぶんたい」の愛称で親しまれた横浜文化体育館が、横浜市の横浜文化体育館再整備事業で生まれ変わろうとしている。中核施設となるのが、メインアリーナ「横浜BUNTAI」とサブアリーナ「横浜武道館」で、うち横浜武道館は開館し、各種武道やバスケットボール、フットサル、体操、卓球、プロレスなどの会場として利用されている。斬新な意匠をまとった横浜BUNTAIは2024年4月の開館に向けて建設中で、完成すると横浜の新たな名所の一つになること請け合いだ。設計意図などを梓設計の永廣正邦専務執行役員プリンシパルアーキテクト、石成雅人チーフアーキテクトの両氏に語ってもらった。

キーワードは「人・文化・まち」

設計に際しては、「地域に何を提案できるか」「地域に何が求められているか」など、まずはまちの課題を整理し、構想をスタートしました。それに基づき「人・文化・まち」の三つのキーワードを抽出し、それぞれを「つなぐ場」として施設コンセプトを掲げました。「人・文化」では集客力・発信力・コミュニティ、「まち」ではにぎわいと回遊性を生み出すこ

とを施設づくりのポイントとしました。市庁舎跡地などの周辺エリアの開発が進んでいますが、本事業は関内と関外地区をつなぐ中核施設となることも目指しています。

具体的には、市民利用はもとより、大規模な大会やコンサートなどの興行にも対応した施設整備により、スポーツ振興やさまざまなエンターテインメントの拠

点として、にぎわい創出・地域の活性化につなげていきたいと考えています。

視覚差でモアレを起こす

横浜BUNTAIの建設は、24年の開館に向けて急ピッチで進んでいます。建築コンセプトである、まず、まちづくりの象徴として交流と集客を生む「シンボリックアリーナ」とすべく、みなと大通りに

面した建物の風景を重視し、横浜らしい浜風になびく帆をイメージした唯一無二の外観としました。

具体的には、2枚の外装スキン（外側はアルミ板に80mmの穴を14cm間隔で開け、内側は壁面に塗装された黒いドット模様）により生じる視野差で揺らぎ、いわゆるモアレによる印象的な風景を演出したいと考えています。

港町ならではの特徴的な外観は、季節に合わせたライトアップによるこだわりの夜景と相まって、横浜の新景観が創出できればと思っています。

大型ビジョン3面分を横長に

多彩な興奮と感動を生む「ハイパフォーマンスアリーナ」を実現する仕掛けの一つとして、壁面型大型ビジョン3面分（9:48）を横長に設置します。さらに、客



横浜武道館

席はステージを囲む扇形に配置し、いわゆる3方向からステージを見る劇場型アリーナとなりますが、可変性も考慮しており、演出面でも大きな威力を発揮します。さらに、これにより多様な興行に対応する「エンターテインメントアリーナ」、変化するまち・人のニーズへの対応、運用の自由度を高める「フレキシブルアリーナ」を具現化したいと思います。

横浜BUNTAIは地上3階建て。1階はアリーナ階で、2階のメインは観客席となっています。3階はVVIP・VIP席（7室）などのプレミアムゾーンです。2階はロビーとラウンジのほか、体育室も配置します。また、3階のVVIP・VIPゾーンにはボックス席やカウンター席が設けられ、スナッキング（ゲームをつまみにそれぞれの観戦スタイルで飲食）できるホスピタリティーあふれる観戦環境をつくります。また2、3階レベルでは、飲食のサプライも可能な民間収益施設との連絡動線によ

横浜市初の武道館

りサービスの連携を図ります。横浜武道館は、本格的な武道場を備えた横浜市初の武道館として市民の武道やスポーツ振興などを図る目的で横浜総合高校の移転跡地に建設されました。20年7月から開館しており、名称にちなみ各種の武道大会をはじめ、さまざまなスポーツ大会等に利用されています。

設計では、横浜の武道の聖地として“ぶんたい”の精神性を継承すべく構想しました。デザイン的には、外観は切り立った屋根とし、その間に和の奥行きを導き出す、アルミに木目のプリントを施したルーバーを設置しています。また、環境面でも最大限配慮しています。太陽光などの再生エネルギーの活用や省エネルギー機器の積極活用により、CASBEE横浜で最高のSランクを取得しています。

横浜BUNTAIの外観イメージ（提供：YOKOHAMA文体）（設計中のため、建物の外観デザインは変更になる場合がある）

横浜赤レンガ倉庫

07

2022 (令和4) 年11月30日掲載



© YOKOHAMA RED BRICK WAREHOUSE

2棟間広場 (全景)

明治末期から1世紀を超える時を刻み、その時代の要請に応じた役割を果たしてきた『横浜赤レンガ倉庫』。明治期を代表する建築家、妻木頼黄が設計したこの歴史的な建物は、「港の賑わいと文化を創造する空間」をコンセプトに文化・商業施設として再生され、2002年の開業以来、累計1億1000万人以上が来場する横浜を代表する観光スポットとなっている。改修設計を担当した建築家の新居千秋氏（新居千秋都市建築設計代表）は、「この空間にしかない『気』を読み、次代に残していくこと」が重要だったと強調する。

近代100年の夢 現代の技術で表現

このプロジェクトは明治時代の建築家、妻木頼黄設計による組積造建築の完成形といえる赤レンガ倉庫を、保存を超えて積極的に活用して保全していくもの。ただ活用方針が定まる前に外観主体の保存工事として構造補強と屋根改修が完了しており、電気やガス、空調のスペースも階段もなく、文化施設や商業

施設としては建築基準法、消防法に適合しない危険な状態でのスタートとなった。

このため、「フランスのオルセー美術館のように用途に合わせて内部をかなり改修する方法をとった」と振り返りつつ、「保存や保全を考えると大事なことは、その建物や場所の『気』だ。建築史家クリスチャン・ノル

ベルグ＝シュルツ言うところの『ゲニウス・ロキ＝その場所に集まり来たるもの』であり、それによって発せられる気を読まなければいけない」と指摘する。

官民のパートナーシップによる事業体制を敷いたのもこの事業の特徴の一つ。国から土地・建物を取得した横浜市から、第三セクターの横浜みなとみらい

官民のインタラクティブな関係築く

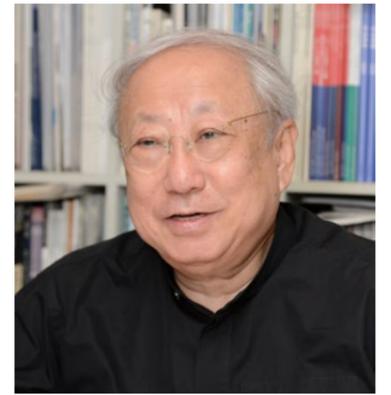
21が1、2号棟を賃貸借するとともに2棟間広場の管理を受託。1号棟は横浜市芸術文化振興財団が文化事業を運営し、2号棟は事業者公募で選ばれた麒麟ビール、サッポロビール、ニュートキヨーが出資する横浜赤レンガが商業施設のテナント運営を行う。この複雑な事業フレームを総合的にコーディネートし、インタラクティブな関係をつくり上げる媒介となったのが新居千秋都市建築設計だ。

施設の設計監理に加え、全体計画のファシリテーターとして官民さまざまな組織との調整役を担った。さらには2号棟での商業施設のコンセプトづくりとデザインガイドライン、内装設計指針の作成によるテナントデザインコントロールなども主導した。

「キング・クイーン・ジャックの横浜三塔に対して、赤レンガ倉庫はジョーカー。当時ほとんどの人が成功するとは思ってなかった」という。それでも「赤レンガ倉庫の持つ力を信じてい

た横浜みなとみらい21の若竹馨氏ら、横浜赤レンガの村澤彰氏、杉一郎氏らと私たちは、TRIVE（TRY+LIVE＝挑戦と躍動）を合い言葉に、大人の街をつくるために商業コンサルタントを使わず、独自のチームをつくりから取り組み試行錯誤を重ねた。そのチームを献身的に支えたのが竹中工務店の山田健夫氏、中嶋徹氏らだった」。

テナントを含め、多様な主体が関わるだけに「全体構想をつくるには、それを一つにまとめるストーリーが必要」とも指摘。「この赤レンガ倉庫が生まれた時代である『ファーストマシンエイジ』」を1号棟、2号棟共通のデザインコードとしたことを、「人間の努力や挑戦が目に見えた時代、機械への憧れ、未来への夢が語られた、その時代の精神や時代感覚を、現代の技術を使ってよみがえらせ、継承することで他に類を見ない空間づくりを目指そうと考えた」と説明する。横浜赤レンガ倉庫は「ファーストマシンエイジのスピリッツが



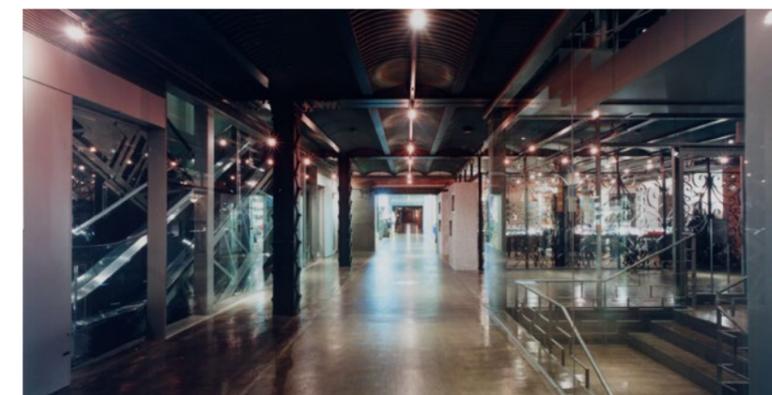
新居氏

積み込まれたタイムシンプ」だとも。

「歴史的建造物を現代によみがえらせるためには空間イメージを共有することが重要」として、赤レンガ倉庫の空間づくりには「脚本（スクリプト）を作って、言葉と図によって空間イメージを共有化していく」方法論である「デザイン・スクリプト」の考えも導入した。

本物の価値をいかに残し、活用に必要な機能をいかに新設するか明確に示し、新旧の調和が細部にわたって緻密に計られた完成度の高い建物・インテリアを実現。日本建築学会賞（業績）、ユネスコ文化遺産保全のためのアジア太平洋遺産賞を受賞するなど、国内外から高い評価を得ている。

建築家 新居千秋氏（新居千秋都市建築設計代表）に聞く



2号棟内部

明治から大正にかけて世界中を飛び回った外交官・内田定植の邸宅が、東京都渋谷区南平台から横浜市の山手地区に移築復原されてから2022年で25周年を迎えた。新築時から数えて110年以上経ったいまなお、『外交官の家』として残り続けている背景には、定植の孫・宮入久子さんの「この家を残したい」という強い思いと、その思いに共鳴した人たちの奮闘があった。久子さんの長男・宮入康夫さんと三男・昭彦さんに、内田邸がたどってきた歴史と移築復原の過程を聞いた。

空襲の難を逃れ避難所に

内田定植邸は洋館と和館併設の住宅で、明治政府の外交官だった定植の自邸として、米国人建築家・J・M・ガーディナーの設計により1910年に建設された。太平洋戦争末期の45年、本土空襲で焼夷弾のおもりが洋館の屋根を貫き、2階浴室が破壊されたが、焼夷剤(出火させる薬剤)は周囲に飛び散り、内田邸は難を逃れた。一方、周囲の住宅は焼夷剤による火事で辺り一面焼け野原になったという。

この時、定植の長男一家と周囲の人たちは何とか内田邸を守ろうと、火が燃え移らないように内田邸敷地内の井戸から水を汲み、消火活動に当たった。「この影響で井戸の水が枯れてしまっ

たと言われている」(康夫さん)という逸話が残るほど、当時からこの家は人々にとって“守りたい”と思わせる特別な存在だった。多くの人の手により、燃えずに残った内田邸は、避難所として火災で家を失った周辺の人を受け入れた。

59年には進駐軍が接收時に行った工事が原因で漏電し、ボヤ騒ぎも発生。現在でも、3階には焼け焦げた跡が残っている。たび重なる危機に遭遇しながらもその姿は残り続け、内田から久子さんら子孫へと受け継がれていく。康夫さんと昭彦さんも、南平台に建っていた時代、この家で暮らしていた。

昭彦さんは、この家に遊びに

来る友人は「洋館を特別なもののように感じていたようだ」と振り返る。写真家・篠山紀信氏もこの住宅に魅力を感じていた一人だ。1階のサンルームを気に入り、撮影スタジオとしてたびたび使っていた。吉永小百合さんや天地真理さんなどが撮影に訪れた際は、「授業をサボって見学に来ていた」と康夫さん。

この時代にも建物内ではアクシデントが発生していた。昭彦さんが高校生のとき、2階の自室の勉強机に向かって漆喰の天井が落ちてきた。「爆撃を食らったようなものすごい音がして親が飛んできたが、奇跡的に直撃を免れた」と昭彦さんは回想する。白いほこりで目の前が真っ白な状態だったといい、衝撃の大きさを物語る。

幾度もの危機に遭いながらも、幸いなことに誰一人けが人は出なかった。「大きい台風が来る際は、それに備えて工務店に徹夜で常駐してもらった」(昭彦さん)など、家を守ることが生活の一部となり、暮らし続けること

篠山紀信氏もお気に入りの場所



で家を守り続けた。

「この家を残し続けたい」。内田邸を守り続けることは、久子さんの悲願だった。久子さんを揺り動かしたのは、祖母・陽子との絆にあるという。

康夫さんは「母は陽子さんに大変かわいがってもらっていたため、祖母のためにもこの家を守りたいと感じていたのでは」と話す。久子さんは賃貸や当初洋館に併設されていた和館を取り壊して駐車場として活用するなどさまざまな工夫をし、建物の維持に努めていた。しかし、そうした努力も限界に達する。

建物保存の道を探るため、関係各所に働きかけたが、なかなか思うようには進まなかった。そんな時、雑誌の企画でまち歩きをしていた当時法政大教授で建築史家の陣内秀信氏が偶

然内田邸を見つけたところから、保存への歯車が動き出す。

この住宅に興味を示して見入っていた陣内氏に久子さんが声を掛ける。「母は陣内さんに『残したいのです』という話をしたそうです。そうすると陣内さんが『それでは私が一肌脱ぎましょ』と言ってくれた」と康夫さんは語る。

その後、陣内氏の仲介で建物本体を寄付する要望書を横浜市に提出。市は検討の結果、久子さんの要望どおり、建物を受け入れることに決めた。

移築復原に当たっては、建物に改造が加えられていたため、創建時が本来の姿と決め、外交官の当時の生活空間を再現することにした。工事は大きく前半

の久子さんによる解体工事と後半の市による組み立て工事に分かれる。

解体は94年に実施。昭彦さんは「部材の一つひとつに番号を振り、ひたすら束ねていく作業で、とてつもなく大変だった」と回顧する。95年から97年にかけて実施した復原工事では「束ねていたパーツを全部元と同じように、順番どおりに戻していった」

康夫さんは「移築復原に携わったすべての人の何か一つでも欠けていたら、この家はなくなっていたはず。たくさんの奇跡が重なってこうして残った。いまこの場所にたくさんの人が見に来てくれるのはとてもうれしい」と頬を緩める。

危機乗り越え思い受け継ぐ



左: 右から康夫さん、昭彦さん / 右: 1階室内



横浜市瀬谷区総合庁舎 およびニツ橋公園

75

2022(令和4)年12月21日掲載

横浜市の最西部に位置する瀬谷区は、同市内にあって自然環境に恵まれた街としても知られる。その豊かな緑空間を象徴するのがニツ橋公園と一体的に建て替え再整備された『瀬谷区総合庁舎』だ。区庁舎整備では同市初のPFIを導入したこの事業。設計を担った建築家で環境デザイン研究所会長の仙田満氏は「主役は公園であり緑。その背景となる建築のあり様を考えた」と語る。



全景(公園から庁舎2階へのアプローチ)

緑と共生し、まちに開かれた「杜の庁舎」

仙田氏は、市中央部の保土ヶ谷区出身だが、瀬谷は父方の祖父が生まれた「仙田家ゆかりの地」であり、「子どもの頃はよく遊びに来た」という、原体験を形づくった場所の一つでもある。

「区民のための杜、杜の庁舎」をテーマとした、このプロジェクトでは、「ケヤキがとても美しい場所で、サクラやイチヨウ

など土地の記憶を残す大径木が多数存在していた。この環境をどう守っていくかというところを集中してお手伝いした」と振り返る。

「あらゆる公共施設は子ども連れの人たちが来やすい場所であればいけない」という年来の持論からも「豊かな緑をできるだけ保全・活用しながら、誰もが気軽に立ち寄り、安らぎや憩いの

場となるよう公園を主役とし、その背景として庁舎が建つという新しい景観の創出」を提案した。

庁舎敷地と、これに隣接し地盤が高い公園敷地の高低差を生かすことで、緑豊かな公園から庁舎2階にあるメインエントランスにバリアフリーでアクセスできる。「建築とランドスケープ、内と外の関係性をいつも考えている」というように、公園は庁舎のアプローチ広場でもあり、



公会堂ホワイエ

その一体感ある佇まいは、まさに「杜の庁舎」のコンセプトを明確に実現するものだ。

庁舎は区役所、公会堂、消防署からなり、旧公園の東半分と地下駐車場の上部を連続した公園として再整備した。区役所の待合スペースと公会堂のホワイエは連続的に公園側に配置され、日中は施設側から公園の緑が映え、夜間は公園側からホワイエなどのアクティビティが明るく浮かび上がる。「建築の側から緑が楽しめる視点も重要になる。ここでは地域の中心になる空間を公園と捉え、そこに寄り添う形で建築があり、外部の緑空間、公園に視線が集まるつくり方をしている」とも。

公園は、南側の「遊具広場」と北側の「自由広場」で構成され、相互を緩やかな斜面や回遊園路で結び、一体的な利用を可能とした。遊具広場は、ケヤキ、イチヨウなどの既存の大木を保存しながら円形のオープンスペースやオリジナル遊具を整備し、緑豊かな遊びと憩いの場を

つくり出している。自由広場は、地下駐車場の上部に新たに設けられ、開放的な芝生広場と周辺の緑地・休憩スペースで構成している。この二つの広場の間を庁舎2階へのアプローチが象徴的に貫いている。

公園と庁舎は、自由な行き来と一体的な利用を前提に、分かりやすい動線や統一感のあるデザインにも配慮した。公園と庁舎の境界沿いには「とおり空間」を設けて明快な南北軸の動線を構成している。

事務所名にあるとおり、建築にとどまらず地域・都市や造園、インテリア、インダストリアルデザイン、遊具、ファニチャーなど、あらゆるスケールの環境をデザインしてきた。中でも次世代を育む、子どものあそび環境のデザインは一貫したテーマでもある。それだけに「日本には緑と共生する建築が必要だ」と説く。「良い景観をつくっていくのは建物と距離と緑の関数」だとも。

2021年刊行の書籍『遊環構造デザイン』には街並み景観に

関する「個体距離」という章がある。そこでは「建築と緑、建築間の距離が良い景観をつくる上で必要」だと主張する。2階建ての戸建て住宅の場合、結論としては「高さの2倍、およそ12メートルの離間が適正な距離」という。この距離は「京都の町家のようにデザインが共通化していれば近づけられるのではないか」という仮説を立てながら、実験と検証を重ねてきた。「緑も個体距離を縮める有効な手法」とも。

他方、「いまの日本はデザインがバラバラで個体距離がゼロなのでごくハレーションを起こしており落ち着かない」と指摘。だからこそ「デザインの力をもっと認めてほしい」と訴える。財政が厳しい時代であるからこそ、「限られた財源でより高い効果を上げるようなことを、山積する社会課題を逆手にとって地域をどう活性化し元気にしていくかを考えていくことが求められる」と力を込める。



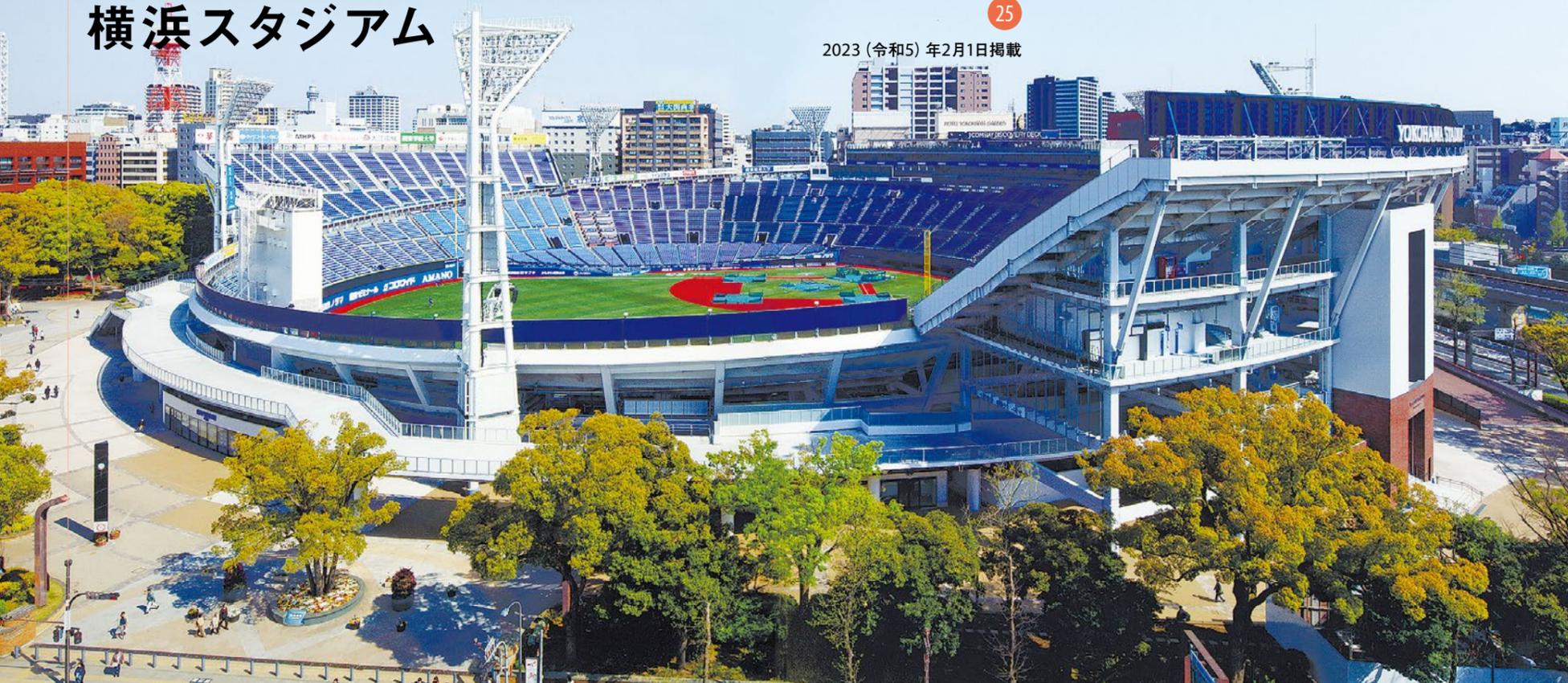
仙田氏

仙田満氏(環境デザイン研究所会長)に聞く

横浜スタジアム

25

2023 (令和5) 年2月1日掲載



全景。スタンドが増設され、外周には回遊デッキが設けられた。

プロ野球・セリーグ、横浜DeNAベイスターズの本拠地で、「ハマスタ」の愛称で多くの人に親しまれている横浜スタジアムは、わが国初の多目的スタジアムとして1978年4月に開業した。昇降式のマウンドを降下させてフィールドをフラットにできるため、各種スポーツ競技やコンサートなど幅広いイベントにも活用されている。

20年に新装開業

コミュニケーションを育むランドマークになりたいという思いを集約した「コミュニティボールパーク」化構想に基づき、2017年から増築・改修工事に着手。右翼・左翼側スタンド(計6,000席)をそれぞれ増設するとともに、新設の左翼側スタンド「ウイング席」、スタジアム外周の回遊デッキ「Yデッキ」、リニューアルしたバックネット裏に「個室観覧席」「屋上テラス席」などを設け、収容人数も大幅に増加して

20年に新装開業した。

より魅力的な球場に、いかに生まれ変わらせるか——。清水建設が設計と施工を通じて追求したのは、この1点に集約できる。コンセプトとなった「コミュニティボールパーク」化構想の実現のための与条件は①プロ野球興行を行いながら2シーズン、主にシーズンオフを使って約3万5,000人の収容人数とする②東京オリンピック2020大会の野球・ソフトボール会場とする——の二つだった。

「今回のリニューアルの背景に、都市公園法の建ぺい率の条例改正があります。それまでの18%から31%に引き上げられ、増築が可能になりました。工事自体は、スタジアムがより収益を上げるため、1塁側ウイングと個室観覧席は1年先行して引き渡しました。そして、20年に3塁側ウイングと回遊デッキが竣工し、グラウンドオープンしています」(清水建設設計本部商業・宿泊施設設計部の平賀直樹グループ長)。

施設を踏まえ、関係者との協議を重ねて調和のとれたデザインにした。

また、隣接する横浜公園への動線を意識し、スタジアムを2階レベルで一周する600mのデッキを新設。プロ野球開催時の回遊性を確保するとともに、通常時は市民が散歩しながら球場内を一望できる「ドリームゲート」も提案して2カ所設置した。

既存スタジアムとの一体化も図った。中心座標と観覧席の勾配をそろえてすり鉢状に観覧席を連続させ、2階の回遊デッキレベルで接続することで調和させているが、これは「シームレスに既存部分と増設部分がつながるように、当初から考えていた」(同)ところだという。

一体化を実現する施工技術にメガトラスの構築がある。1塁側のウイング下部には既存の練習場があり、本来ならその位置に柱を設けるが、練習場を有効利用するため約23mのメガトラスで練習場をまたぎ、その上に既存スタンドと一体化したウイング席を設けた。

既存施設と一体化

横浜スタジアムは、リニューアルに際してのコンセプトのほかに、横浜市が描く都市レベルでの「横浜スポーツタウン構想」の中心に位置付けられてもいる。「スタジアムは日本大通りの軸線上にあります。スタジアム前面の中央に噴水があり、スタジアムがそれを受ける形で立地しています。増築するスタンドはあえて、そのライン上まで延ばさず、視線の抜けを確保」(同)することで、開放感を持たせた。市の都市美対策審議会のアドバイスを尊重し、歴史や景観、周辺

効率的に仮囲い移動

増築部分の3次元対応も工夫した。「1、3塁側の増築部分は、すり鉢状になっています。最上段も同じ高さではなく、少しずつ上がっています。鉄骨が3次元に取り合ってくるので、平面上で表現して鉄骨を製作する段階から大変な思いをしました」(清水

建設横浜支店の中村竜平工事長)。

施工技術のソフト対応の点にも特徴的な取り組みがある。「最も苦労したことの一つ」(同)が仮囲いの移動だ。約3万人の観客の避難動線確保は避けて通れない課題で、「年間80日あるプロ野球興行日に工事エリアを開放して、また元に戻すことを繰り返す必要があり、どうやって仮囲いを効率的に移動するかを考えました。アメフトや高校野球の試合の時も実施しましたが、観客が安全に歩行できるゴムマットの厚みにも配慮」(同)するとともに、仮囲いのユニット化などにも工夫を凝らした。

中村工事長は、現業長の立場で従事し、基本的にはライトとレフトのスタンド、回遊デッキなどを担当し、増設の観覧棟は同じ横浜支店所属の三澤裕樹工事長が役割分担して担当。「個室観覧棟の記者席の屋根切り替えといった特殊な進め方が求められており、工期も押していましたので、応援の形で入りました」(三澤工事長)。しかも資材確保がタイトになりつつあり、労務も繁忙な時期だった。いまではグラウンドオープンから2年ほどが経過しているが、「忙しく大変な時などふと、ハマスタを完成させられたのだからできないことはない、と自信につながっている」(同)と振り返る。

横浜能楽堂にある関東最古の能舞台は、1875年に能をこよなく愛した旧加賀藩主・前田齊泰により東京・根岸に建てられた。1965年に解体されたが、能楽関係者や市民の思いにより、再び、横浜の地で歴史を刻むことになる。”再生”の中心的役割を果たしたのが、国立能楽堂などの設計を手がけた建築家・大江宏の思いを受け継いだ、大江宏建築事務所の面々だった。設計に携わった大江建築アトリエの大江新代表と当時大江事務所に在籍していた奥富利幸近畿大建築学部教授に、能舞台復原の話を知るとともに、大規模改修の設計を手がける松田平田設計の白井達雄常務執行役員にコンセプトを語ってもらった。

大江宏の哲学引き出す

第3章 横浜を代表する公共建築

能舞台は齊泰の死後、1919年に東京・染井（現東京都豊島区）の旧高松藩主・松平頼寿邸に移築され、「染井能舞台」として親しまれた。数々の名舞台が演じられてきたものの、老朽化などのため解体し、部材が保存されていた。

それを知った横浜在住の能楽師やその周りの人々を中心に、能楽堂建設に向けた運動が起こり、次第に市民も声を上げ始める。5万筆を超える署名も集まった。

能楽師が能を演じる能舞台の復原と、それを包む能楽堂の建物の新築設計は、大江宏が没した翌年にスタート。当時事務

所を主宰した大江新氏を中心に、奥富氏らが実務面を担当した。奥富氏は「大江事務所としても、宏先生の遺志を継ぎ、どのように横浜市民の皆さんに愛される能楽堂ができるか考えました」と話す。その過程では「宏だったらこう考えるだろうと想像しながらつくっていきました。誰がリーダーシップをとるでもなく、亡くなった宏に導かれるように」と新氏。

能楽堂の建設に際しては、いくつかの敷地が候補に挙がった。最終的に、神奈川県立音楽堂や県立図書館など前川國男作品が周囲に立ち並ぶ、掃部山公園の南端部に決まった。狭小な敷地だったが、多くの人々に歴史ある能舞台に触れてもらうため、

500席を設けるという目標も課せられる。目標達成のため、2階席を設けることにした。

能舞台の復原では、初めはどこにアイデンティティーがあるかわからず、苦労した。地覆（建物の土台）から下の部材も残っていなかった。その流れが変わるのが、建設当時の根岸邸が描かれた絵図の発見だ。能舞台も描かれていた。

奥富氏は「池のほとりに能舞台が建っていたことがわかりました。玉石の上に載っている能舞台というのは非常に珍しいのです。再現しているのでぜひ見ていただきたいです」と説明する。幸運なことに、能舞台の横に描かれていた「煎茶席三華亭」も、石川県金沢市の「成巽閣」に残っていた。「横浜市の方と見に行き、設計のイメージが一気に広がりました」と奥富氏は振り返る。

屋根の復原にも苦労した。初めは形がわからなかったが、保管されていた部材を仮組することで、ようやく寄棟の能舞台ということが判明した。復原された屋根の下の天井は、能楽師の意見



左：左から奥富氏、大江新氏、白井氏／右：玉石の上に載っている能舞台

文化財を“生かす”復原

も参考にしながら建築当時とは異なるつくりにした。

新氏は「現代の能楽師の方々に使っていただいてこそ、建物は“生きる”。”文化財を生かす”という意味で、天井は当時と変わっています」と話す。

能楽堂の光天井も大きな特徴だ。拡散透過材を通して間接的に光を透過させることで、自然光のように優しい印象を与える。能は元々、屋外で演じられていたからこそ、非日常ではなく、日常的な空間の演出にこだわった。

歴史的建築物を残す意義について新氏は、「昔の人たちが築いてきた知恵や技を大事にして、それと向き合おうという姿勢があると、建築に魅力が出てくるのです。それが命だと思います。

昔の人たちの痕跡を上手に盛り込んだ建築には面白みや深みがあります」と力を込める。

白井氏は「建物には、その背景にある歴史、人が使ってきた手の跡のようなものがあります。その跡は壊してしまったらもう二度と戻らない。”古い時代のもの”だから残すべきだというレベルの話ではありません。ずっと残ってきた建物には、過去を生きてきた人々のさまざまな生活の息づかいを感じます。そこに歴史的建造物を残す意味があるように思うのです」と語る。

奥富氏は「この能舞台もそうですが、工匠の人の痕跡が残っています。削り方は全部異なっており、それを見るとどの時代にこの材料を扱ったのかわかる

のです。当時の人の思いや精神、そうしたものが実体的に残っていくのが建物、文化財です。文献と異なり、建物の場合はリアルに材料として残ってくる。つくり方を見ると、当時の社会背景や、どのような考えでつくられたのかが読み取れるのです。生きた証人のように」と話す。大規模改修では、見所の特定天井改修工事に合わせて、設備工事などを進める。白井氏は改修設計を手がけるに当たり、「中の見えない部分はより良い施設となるように変えますが、見えるところはできるだけ変えない。これを自分たちのルールとしています」と言い切る。

見えない部分をより良く変更



横浜を代表する公共建築100施設

横浜市南区総合庁舎

79

2023 (令和5) 年3月15日掲載



外観。区役所、消防署、土木事務所、公会堂が一体となった複合施設

横浜市南区総合庁舎には地域との融和や機能性、利便性、さらには歴史の継承と区民の安全・安心の拠点といった公共施設に求められる基本的な要素が十二分に詰まっている。区役所、消防署、土木事務所、公会堂が一体となった複合施設だが、その動線は流ちょうで、外観も抑制をきかせたデザインながら、しっかりと存在感を醸し出している。竣工して7年。設計監理を石本建築事務所が担当した。同社設計部門の小林一文執行役員グループ統括、エンジニアリング部門環境グループの関根能文、米山浩一両部長の3氏に設計意図やこだわった点などを聞いた。

区内8番目の「丘」

設計着手に際し、「広いまとまった敷地はあるが、動線を含めて、複数の施設機能をどう配置してうまくまとめるかが大きな課題だった」と振り返る。そして、南区は七つの丘でできており、その地理的な特徴や地域的要素、歴史性をいかにして反映するかに腐心したという。

中心施設である南区役所の

場合、「機能性のもとより、親しみのある温かさを感じられる施設」であることを心掛け、その象徴として外壁を区の花「さくら」の花吹雪をイメージしたコンクリートパネルで仕上げている。

地域の象徴を外装に反映

空間構成としては、1階フロアは区役所窓口のない多目的スペースとし、庁舎機能は2階に集約したワンフロアサービスを実現。ユニバーサルデザインの採用や子育て支援設備も充実している。

一方、区役所と消防署は災害時には業務の関連や連携が欠かせないが、平時の行き来はほとんどない。しかし、いざというときには一体的な活動が求められる。そのことを意識し、「庁舎、消防署、土木事務所、公会堂は日常的には分離しながら運用し、災害時には一体で機能できる動線計画としている」という。

立地特性にも配慮した。区内にある七つの丘になぞらえ、総合庁舎全体を第8の丘「南区さくらの丘」と位置付けるとともに、屋上緑化は本格的植栽とし、庁舎周辺の離れた地上レベルからも緑化がうかがえる庭園をつくり上げた。また、建設地に関東大震災での復興第1号小学校として建設されていた旧三吉小学校の手すりなどの遺物を展示、歴史の記憶を残

積極的に環境配慮



左：屋上庭園／右：西側公道から。町並みに溶け込んでいる

しているのも特徴の一つだ。

いうまでもなく、総合庁舎は災害対応の中心的拠点の一つである。何より庁舎自体が災害に強くなくてはいけない。そこで、地震被害に備えて免震構造を採用しているほか、浸水対策で低層部に機械室は置かず、6階にまとめて配置した。屋上には太陽光発電40kWを設置して環境負荷を低減しているのを始め、「非常時に備えた電源の多重化を実現」している。

さらに、この総合庁舎の先進性を示す事例に「省エネ」で「環境に配慮」している点がある。

「高い環境性能を目指すということで、条件としてCASBEE横浜Sランク取得が市から求められていた」ため、環境配慮には積極的に取り組んだ。

特に自然通風は一段踏み込んだ取り組みとして、奥行きのある建物でも風向きなどに影響されず、できるだけ自然の空気が流れるように「サーキュレーター併用空調システム」を採用。「かなりオリジナルな技術」と胸を張るように、このシステムは自信作と言えそうだ。

南区総合庁舎を訪れて感じるのは、延べ床面積約2万7,500㎡に対する予断とのギャップである。一帯では抜きんてた大きさにもかかわらず、過度な威風や圧迫感とは無縁で、違和感なく町並みに溶け込んでおり、その実大規模に圧倒されることはない。しかし、矛盾するようだが、遠目にも一目でわかる、区を中心施設の区庁舎だと存在感を放っている。「設計の初期段階から、できるだけボリューム感を抑えるという思いがあった。そこは、かなり意図した」。区民の身近な存在であろうという、設計の狙いはみごとに成功しているといえる。

横浜市の担当者の一人として設計業務に携わった市建築局の高松誠課長補佐も「基本設計7カ月、実施設計9カ月という非常に厳しいスケジュールでしたが、素晴らしい施設を設計していただきました」と労う。



区民の安全・安心の拠点

99

横浜を代表する公共建築100施設

第3章 横浜を代表する公共建築

消防本部庁舎

97

2023 (令和5) 年3月22日掲載

「安全・安心を実感できる都市ヨコハマ、実現への象徴となるプロジェクトがある。市民の安全・安心を守る司令塔として、消防・防災活動の中核を担う「消防本部庁舎等整備事業」だ。心臓部である司令センターを配置する新たな本部庁舎は免震構造を採用。大規模な災害が発生した場合でも、継続的に機能を発揮できる活動拠点の整備が着々と進む。

この事業では、中核となる消防本部庁舎の整備と消防通信指令システムの更新を一体的に行う。老朽化への対応や機能強化といった従来からの課題解消を目的に移転整備した保土ヶ谷消防署の解体跡地に新たな消防本部庁舎を建設する。

設計者とのコミュニケーションの中で「お互いのイメージをすりあわせてきちんと共有できていることが大きい。何よりも「良い建物を造りたい」という向かすべき方向性は同じ。その思いは間違いなく共通している」と話す。

実際に「消防本部としての機能を継続的に発揮させるための免震構造の採用だけでなく、しっかりとした硬さを感じさせる建物のファサード（外観）は市民にとって困ったときに頼りになる。そんな安心感を与える」とも。

「市民に親しまれる頼りがいのある建物になってほしい」とするように「堅牢な建物を」という設計のコンセプトが「われわれの施工によって、できるだけ多くの人に伝わってほしい」と力を込める。

新築工事は2020年12月から本格着手した。地上部の立ち上げでは狭い敷地とあってタワークレーンを1階の梁に抱きつく形で設置し、作業空間を確保したという。クレーンの作業半径が限られる厳しい制約条



航空写真

件下で日々の打ち合わせを徹底し、緻密な作業工程を組み立ててきた。

隣接する保土ヶ谷区役所とNTT新保土ヶ谷ビルに挟まれた建設地は「道路に面した出入り口のゲートが一つしかない。思っていた以上に歩行者や車の往来が多く、間口が狭い上に奥行きもあるため資機材の搬出入調整に腐心した」と振り返る。

ゲート前面には常に3-4人の交通誘導員を配置するなど、「市民の安全・安心を守る消防本部庁舎の整備で事故を起こすことが絶対にあってはならない」と、第三者対策をはじめ安全には細心の注意を払って施工を進めてきた。

23年1月末現在の進捗率は81%。着工からの無災害記録は延べ26万3,568時間（1月末現在）でいまなお継続中だ。最終的には延べ31万時間の目標達成を目指す。

今後、仕上げ工事が本格化する。「日ごろから協力会社の作業員と知恵を出し合いながら、これまで予定どおりに施工を進めてきた。施工のプロフェッショナルとして、現場に携わる作業員それぞれが持てるスキルをしっかり発揮できる「適材適所」の現場運営を続けることで、最後まで気を抜かず施工を進めたい」と意気込む。

工期は23年7月31日まで。指令システム設備の更新工事を経て、10月10日に開庁し、11月9日から司令センターの運用を開始する予定だ。別館は24年度末の運用を目指す。

大規模災害時も機能を継続発揮

松田平田設計横浜事務所
設計部長 浅野智之氏

現横浜市消防本部が抱える主な課題として、「大規模災害時に災害対応の方針決定及び緊急消防援助隊などの関係機関との調整を行うためのスペースが不十分」「情報収集機能の中核である司令センターが消防本部と別棟になっている」「耐震構造基準には適合しているが、大規模地震発生時に、建物内部や重要機器が被害を受ける恐れがある」などがあった。

この課題を解決し、消防防災活動の中核としての役割を果たす庁舎として、①迅速かつ機動的に消防機能を発揮できる庁舎②大規模災害にも消防機能を継続発揮できる庁舎③安心、信頼を実感できる庁舎④社会の変化に柔軟に対応できる庁舎——の四つの基本方針をもとに「災害に強い消防本部庁舎」を目指した。



鳥瞰図（提供：株式会社松田平田設計）

全景

市民の安全安心を守る新たな砦

戸田建設JV
丸橋靖明作業所長

建築工事を担う戸田建設・小俣組・小雀建設JVの丸橋靖明作業所長は「われわれ施工者の役割は設計者の意図をいかに

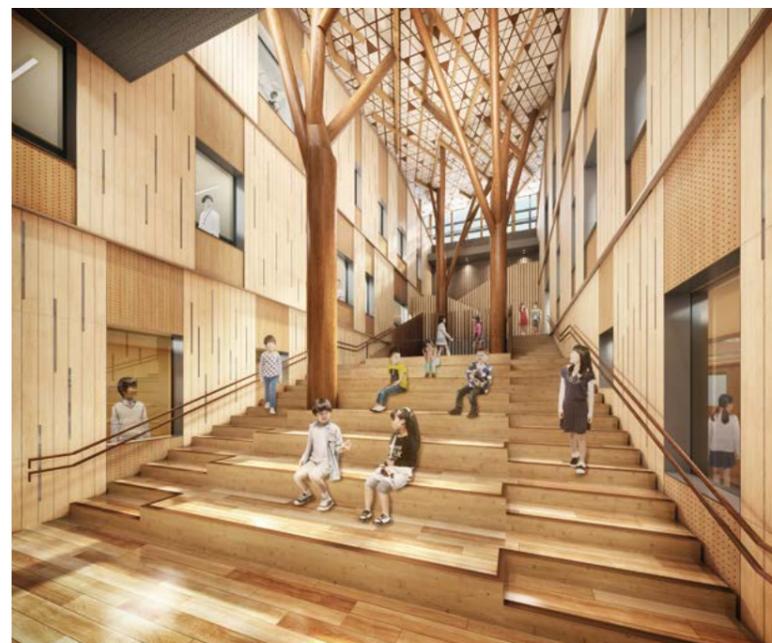
的確かつ忠実に再現できるかということにある。それが最終的に発注者である横浜市が求める「安全・安心を実感できる都市ヨコハマ」の拠点の構築につながっていく」と言い切る。

横浜市立万騎が原小学校

100

2023 (令和5) 年3月29日掲載

青い海は港町・横浜市のトレードマークだが、同市西部の旭区にある市立万騎が原小学校は、小高い山と森林が隣り合った緑の学校だ。建設から半世紀以上が経過した校舎の建て替えに当たって同市は、戦後初の木造校舎建築に挑む。設計を担う梓設計は、森の中を想起させる階段広場を施設の核に、自然の風や光を取り込んだ開放的な「森の学校」をデザインした。同社執行役員アーキテクト部門副代表BASE01ゼネラルマネージャーの鈴木教久氏、同部門BASE02チーフマネージャー文教・庁舎ドメインエグゼクティブダイレクターの古田知美氏、同部門BASE02アソシエイトの後藤正太郎氏の3人に、木造校舎実現に向けた設計上の工夫や思いを聞いた。



「コモレビコモンズ」のイメージ

学びの広場 「コモレビコモンズ」

「コモレビコモンズ」は、木々を模した樹状の柱が吹き抜けの天井を支える象徴的な空間だ。鈴木氏は「児童たちに森の中で学習している雰囲気を感じてもらえるように、本物の森を感じられる空間を目指している」と話す。

コモンズは、周辺に配置した図書室やその他特別教室などと一体的に利用でき、児童の学習、発表、交流のための広場にもなる。階段は日常的に利用する動線でありながら、グループ学習や発表、イベントの際には観覧席になるなど学校生活の多様な場面で活用できる二面性が特徴だ。

自然換気窓や天井に設けたハイサイドライトの採光により、外部の心地よい風と光を取り込んで施設全体に行き渡らせるなど、吹き抜けは機能面でも中心的な役割を持っている。

森の中の学び舎を具現化

戦後初、木造校舎への挑戦

既存校舎は、自然公園に隣接しており、市民が日常的に緑と親しむ周辺環境だ。老朽化に伴う建て替えを検討していた横浜市は、同校の環境や法的条件などを踏まえ、「同市建築物における木材の利用の促進に関する方針」に基づく初めての木造校舎建築への挑戦を決めた。

公募型簡易プロポーザルで選

ばれた梓設計は「木漏れ日と爽やかな風の中で、健やかな子どもを育む『森の学校』」をコンセプトにした木造三階建て校舎を提案した。木々に囲まれた森の中を象徴する吹き抜け大空間「コモレビコモンズ」を中心に、児童のさまざまな活動が校舎全体に広がっていく姿を描いた。

より開放的に 「壁タイプ」を採用 コスト・調達も工夫

木造三階建ての校舎、いわゆる「木三学」は、2015年の建築基準法改正で防火性能の基準が緩和されて以来、建築事例が増えている。現在、木造建築物は、3,000㎡ごとに耐火性能が高いコアや壁で区切り、延焼防止に備える必要がある。

「木三学」の事例のほとんどは「コアタイプ」を採用しているが、万騎が原小では、より開放的な空間設計ができる「壁タイプ」を選択した。鈴木氏は「政令市として全国最多の人口を抱える横浜市の新しい挑戦には、公共建築に対する高いメッセージ性がある。この先の同市の学校建築にもつながるような、新しく魅力的な木造学校をつくりたい」と思いを語る。

参考になる事例や知見が少ない壁タイプへの挑戦について、後藤氏は「開放的な大空間を木造で実現するために、技術とコストの両面から手探りで試行錯誤をしてきた。壁の構造は、木とRCを総合的に比較検討した

結果、RC造を採用した」と振り返る。

木造の大空間をつくる場合は大断面集成材を使うことが考えられるが、鈴木氏は「コストの負担が大きい。費用を抑えるためには流通量が多い規格の部材を活用し、細かいスパンで設計することが必要だ」と指摘する。

ウッドショック以来、安価な外国産木材の調達が難しくなっている。設計に当たっては、木構造や木材供給の専門家の知見を反映することで、スムーズな発注・加工・納品を目指した。

適材適所で 木は身近になる

プロジェクトを進めてみて鈴木氏は「木造建築の技術は進歩している。これまで以上の空間が実現できる」と手応えを感じている。調達やコスト面に課題はあるが、「小さなスパンで全体コストを低く抑え、施設の目玉をつくる。こうして設計にメリハリをつけていけば、RC造に負けない建築がつけれる」と強調する。

木造建築の普及について後

藤氏は「木造そのものが目的になってしまうと、ただの割高な建物になりかねない。適材適所の考えが大切だ。部分的な木造や混構造を使い分けていけば、木造を挑戦しやすい身近なものに感じられるようになるだろう」と話す。

古田氏は「RCや木それぞれの良さを活かしながら経済的な設計としていく。これにより木造が普及し、需要が継続することで森林の持続可能性につながる」と話す。さらに、「木造建築の事例はまだあまり多くない。普及が進めば遮音などの木造を前提とした性能値も蓄積していく」と見通す。

公共施設の中でも学校は、合計の床面積が多い施設だ。地球環境への対応を考える上で、学校建築を変えることの影響は大きい。鈴木氏は、「自然に親しみや関心を持った子どもが増えていくことは未来の環境にもつながるはずだ。『森の学校』がその一助になれば嬉しい」と話す。



左：左から鈴木氏、古田氏、後藤氏／右：鳥瞰図



横浜市開港記念会館

09

2023 (令和5) 年3月31日掲載

横浜市開港記念会館と横浜市建築局はほぼ同時代を歩んできた。開港記念会館の竣工・開館が1917年、横浜市建築局の前身である建築課の誕生が1922年。初代建築課長は開港記念会館設計者の山田七五郎(原案はコンペ1等の福田重義)だった。その意味で開港記念会館は名実ともに公共建築を体現した最初の建築と言えるだろう。建築史家・建築批評家の五十嵐太郎氏は開港記念会館について「古典主義建築を踏襲しているのだが、その『文法』をさまざまな部分で崩して、自由に遊んでいるのがとてもおもしろい。しかもデザインの質が高い。かなり個性的な建築で、フリークラシックと一言で片づけずに、文法崩しのデザインの面白さをもっと具体的に伝えていきたいと思う」と話す。

古典主義を踏襲しつつ自由に遊ぶ

横浜市開港記念会館は1917年に開館したが、23年の関東大震災で時計塔と壁の一部をわずかに残して倒壊した。このため頑強な建築に建て直そうと災害復旧工事によって27年に復元された。工事の対象外だったドーム屋根は89年、横浜市によって復元されている。同年、国の重要文化財にも指定された。所在地は、1874年から時計台の町会所として親しまれていたところで、

1906年に焼失。その時計台の文脈が現在の建物に引き継がれた。

「最初に開館したのは明治時代だが、近代以前の高い建築は寺の塔や城郭くらいしかなかった。だから近代を迎え、市民のランドマークとなる塔を持つ建物が横浜市によって建てられた意義は大きい。しかも財源は市民の寄付、設計は初のコンペということで、まさに公共建築の

先駆的な建物として位置付けられると思う。開港記念会館が公共建築100周年と深く繋がっていることが改めて分かる」

塔はジャックの塔とも呼ばれ、「大さん橋国際客船ターミナルやそこから出ている船から町の方を見ると、キングの塔、クィーンの塔とともに、三つの塔が見える視点が今も残り、すごく横浜らしいランドマークだなと思う」とも述べる。角地という立地

外観



左:ジャックの塔とも呼ばれている/右:五十嵐氏



建築史家・建築批評家 五十嵐太郎氏に聞く

についても「日本の近代建築の特徴でもあるが、メインとなる顔がうまく配置されていて斜めから写真が撮りたくなるようなとてもシンボリックな建て方だ」と言う。

辰野式フリークラシックと言われるデザインについてはこう話す。

「辰野金吾が設計した東京駅に代表される当時の赤いレンガと白い花崗岩の組み合わせがここでも採用されていて、要素としては古典主義建築を踏襲しているが、かなり自由に遊んで

いるというのがこの建築の面白いところ。例えば、扉周りの意匠は、海側の本町通りのファサードにあるニカ所をフォーマルにする一方、裏側の細い南仲通りの扉ではペディメントの内側のアーチ、両側のトリグリフといった一番変則的な遊びを取り入れ、正面と裏との格式を変えている。ただ、正面側のファサードも、二

層目のみにイオニア式円柱が並ぶという変わったことをやっている。古典建築には文法のようにかなり厳密なルールがあるのだが、この建築家は多分それを知った上で実にユニークなことをやっている。ルネサンス後にマネリスムという古典主義をずらす動きがあったが、開港記念会館ではほかにもいろいろところでマネリスム的なおきて破りが見られる」

ヨーロッパ建築をただ真似ているというのではなく、古典建築の単語はしっかりと持ちつつ、その組み合わせが独特で、崩し方、凝り方がよく考えられているということだ。

「古典主義を崩した理由の一つはデザインの密度を上げたかったからではないか。メイン通りの面は特に密度を濃くするとか、メイン以外の通りの面ではより羽目を外すという感じがある。ただ、3面いずれも手を抜いておらずデザインの質がとても高い。以前開催した『かたちが語るとき』という展覧会で伝

えたように、形態そのものが語りかけてくるのがいっぱいある。建築によってそんなに語らないものと饒舌なものがあって、開港記念会館は饒舌に語りかけてくる建築だと思う。それをしっかりと読み取って伝えていきたい」

横浜市が建築に果たしてきた役割について、「関東大震災後や戦後に住宅の供給を推進したり、復興小学校に取り組んだ歴史があること、地区センターなどの設計で若手建築家に積極的にチャンスを与えたこと、横浜ランドマークタワーや象の鼻パーク、大さん橋ターミナルでシンボル性の転換を図ったことなど、時代の要請に応え、時代を切り開いてきたと思う。今後は、実績にこだわらずに若手が活躍できる先進的なコンペを実施してほしい。大さん橋は、建築家の故磯崎新氏が審査を主導したコンペを通じて、画期的で斬新なシンボルとなった。そんな建築をこれからも期待している」と語る。

饒舌に語りかけてくる建築を読み取り伝える

01 旧円通寺客殿 (旧木村家住宅主屋)



●所在地：金沢区瀬戸20-3 金沢八景権現山公園内 ●竣工年：江戸時代後期 ●延べ面積：141㎡ ●構造種別：木造 ●階数：地上1階 ●設計者：【当初】不詳【2022復元】建文 ●施工者：【当初】不詳【2022復元】〈建築〉馬淵建設〈電気〉K・T・A〈空調衛生〉今野設備

02 旧横溝家住宅主屋



●所在地：鶴見区獅子ヶ谷三丁目10-2 農村生活館 みその公園内 ●竣工年：江戸時代後期～明治時代中期 ●延べ面積：352㎡ ●構造種別：木造 ●階数：地上2階 ●設計者：【当初】不詳【1989保存修理】歴史環境計画研究所 ●施工者：【当初】不詳【1989保存修理】関工務店

03 旧大岡家長屋門



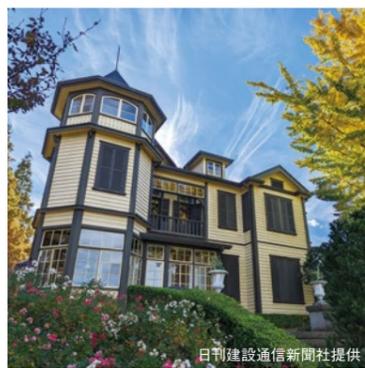
●所在地：瀬谷区阿久和東一丁目17 長屋門公園内 ●竣工年：1887(明治20)年 ●延べ面積：180㎡ ●構造種別：木造 ●階数：地上2階 ●設計者：【当初】不詳【1992復元修理】南雲建築設計研究所 ●施工者：【当初】浅尾三四郎・大工栄二郎【1992復元修理】〈建築〉関工務店〈電気〉小車電気工事〈給排水・防災〉昭和設備工業

04 旧金子家住宅主屋



●所在地：戸塚区舞岡町1764 舞岡公園内 ●竣工年：明治時代後期 ●延べ面積：629㎡ ●構造種別：木造 ●階数：地上1階 ●設計者：【当初】不詳【1995移築復元】農村・都市計画研究所、建築文化研究所 ●施工者：【当初】不詳【1995移築復元】〈建築〉黒崎工務店〈電気〉三栄電設〈給排水〉マコト設備工業〈防犯防火〉昭和設備工業、能美防災、国際連邦警備保障

05 外交官の家



●所在地：中区山手町16 山手イタリア山庭園内 ●竣工年：1910(明治43)年 ●延べ面積：416㎡ ●構造種別：木造 ●階数：地上2階塔屋1階 ●設計者：【当初】J.M.ガーディナー【1997移築】文化財建造物保存技術協会 ●施

工者：【当初】横田組【1997移築】〈建築〉竹中工務店〈電気〉明和電設工業〈衛生〉神中工業

06 旧清水製糸場本館 (天王森泉館)



●所在地：泉区和泉町300 天王森泉公園内 ●竣工年：1911(明治44)年 ●延べ面積：325㎡ ●構造種別：木造 ●階数：地上2階 ●設計者：【当初】不詳【1997移築復元・増築】農村・都市計画研究所 ●施工者：【当初】不詳【1997移築復元・増築】細沼工務店

07 横浜赤レンガ倉庫



●所在地：中区新港一丁目1 ●竣工年：〔1号館〕1913(大正2)年〔2号館〕1911(明治44)年 ●延べ面積：〔1号館〕5,942㎡〔2号館〕11,255㎡ ●構造種別：レンガ造一部S造 ●階数：地上3階 ●設計者：【当初】妻木頼黄【1999保存工事】建築研究協会、国設計【2002活用工事】新居千秋都市建築設計 ●施工者：【当初】〔1号棟〕原木仙之助〔2号棟〕大蔵省【1999保存工事】竹中工務店【2002保存改修】〔1号棟〕〈建築〉竹中・小松JV〈電気〉丸子・千代田計装JV〈空調〉川本・三沢JV〈衛生〉エルゴテック〈舞台機構〉森平舞台機構〈舞台照明〉丸茂

電気〈舞台音響・映像〉不二音響〈昇降機〉三菱電機〔2号棟〕〈建築〉竹中工務店〈電気〉関電工〈空調〉高砂熱学工業〈衛生〉三建設備工業〈昇降機〉三菱電機

08 西谷浄水場 (旧整水室上屋、旧浄水井上屋、旧配水井上屋)



●所在地：保土ヶ谷区川島町522 ●竣工年：1915(大正4)年 ●延べ面積：〔旧整水室上屋 4棟〕各13㎡〔旧浄水井上屋〕22㎡〔旧配水井上屋〕30㎡ ●構造種別：レンガ造 ●階数：地上1階 ●設計者：横浜市水道臨時事業部 ●施工者：直営

09 開港記念会館



●所在地：中区本町1-6 ●竣工年：1917(大正6)年 ●延べ面積：4,426㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上2階、地下1階 ●設計者：【当初】市建築課(山田七五郎)【1989ドーム復元】清水建設【2000保存修理】横浜市建築設計協同組合

【2023保存修理】文化財保存計画協会 ●施工者：【当初】清水組【1989ドーム復元】清水建設【2000保存修理】〈建築〉清水建設〈電気〉清進電設〈空調衛生〉山本電気水道〈昇降機〉フジテック【2023保存修理】〈建築〉清水建設〈電気〉誠伸電気〈空調〉オザワ総合設備〈衛生〉アメニティ

10 THE BAYS (旧関東財務局 横浜財務事務所)



●所在地：中区日本大通34 ●竣工年：1928(昭和3)年 ●延べ面積：1,981㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上4階、地下1階 ●設計者：【当初】渡辺節建築事務所【2016耐震補強等】横浜市建築設計協同組合 ●施工者：【当初】佐伯組【2016耐震補強等】〈建築〉小俣組〈電気〉栄光電設〈空調衛生〉ピオン工業〈昇降機〉横浜エレベータ

11 旧第一銀行 横浜支店



●所在地：中区本町6-50-1 ●竣工年：1929(昭和4)年 ●延べ面積：1,934㎡(旧第一銀行部分) ●構造種別：SRC造 ●階数：地上3階、地下2階、塔屋1階 ●設計者：【当初】西村好時、清水組【2003曳家・意匠再現】都市基盤整

備公団、横総合計画事務所 ●施工者：【当初】清水組【2003曳家・意匠再現(アイランドタワーへ増築)】〈建築〉竹中・清水・戸田JV〈電気〉関電工・四電工・近畿工業JV〈空調衛生〉新菱冷熱・日本設備・共栄JV

12 横浜都市発展記念館・ 横浜ユーラシア文化館 (旧横浜市外電話局)



●所在地：中区日本大通12 ●竣工年：1929(昭和4)年 ●延べ面積：2,906㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上4階、地下1階 ●設計者：【当初】通信省営繕課(中山広吉)【2002改修時】日建設計 ●施工者：【当初】安藤組【2002改修】〈建築〉和同建設〈建築〉共栄社〈空調衛生〉神奈川保健事業社〈昇降機〉東芝エレベータ【2002搬入口増築】〈建築〉白井組〈電気〉洋光電気工事

13 横浜開港資料館 (旧横浜英国総領事館)



●所在地：中区日本大通3 ●竣工年：1931(昭和6)年 ●延べ面積：〔旧館〕1,041㎡〔新館〕1,690㎡ ●構造種別：〔旧館〕RC造〔新館〕RC造一部S造 ●階数：地上3階、地下1階 ●設計者：【当初】英国工務省【1981新館増築】浦辺建築事務所 ●施工者：【当初】清水建設【1981新館増築】〈建築〉清水建設〈電気〉共栄社〈空調衛生〉第一設備〈昇降機〉横浜エレベータ

14 大倉山記念館



●所在地：港北区大倉山二丁目10-1
●竣工年：1932（昭和7）年 ●延べ面積：2,990㎡ ●構造種別：SRC造
●階数：地上3階 ●設計者：【当初】長野宇平治【1984改修】環境開発研究所 ●施工者：【当初】竹中工務店【1984改修】〈建築〉竹中工務店〈電気〉共栄社〈空調衛生〉川本工業

15 インド水塔



●所在地：中区山下町279 山下公園内 ●竣工年：1939（昭和14）年 ●構造種別：RC造一部S造 ●階数：地上1階 ●設計者：【当初】鷺巢昌（第四代建築課長）【2023改修】山手総合計画研究所 ●施工者：【当初】清水組【2023改修】ヨコテック

16 俣野別邸



●所在地：戸塚区東俣野町80-1 ほか
●竣工年：【当初】1939（昭和14）年【再建】2016（平成28）年 ●延べ面積：803㎡ ●構造種別：木造、一部レン

ガ造 ●階数：地上2階、地下1階 ●設計者：【当初】佐藤秀三【2016復元】山手総合計画研究所 ●施工者：【当初】佐藤秀三建築工務所【2016復元】〈建築〉佐藤秀三〈電気〉三沢電機〈空調衛生〉南設備工業〈昇降機〉中央エレベーター工業

17 7代目市庁舎



●所在地：中区港町1-1 ●竣工年：1959（昭和34）年 ●延べ面積：30,719㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上8階、地下1階 ●設計者：【当初】村野・森建築事務所（村野藤吾）【2009耐震補強（免震レトロフィット）】東畑建築事務所 ●施工者：〈建築〉【1期（仮囲、根切等）】松尾工務店【2～4期】戸田組〈弱電設備〉東洋電機通信工業〈強電設備〉関東電気工事〈空調〉大阪電気商会大阪暖房商会〈衛生〉三機工業〈昇降機〉東洋オーチス・エレベータ〈自動電話交換設備〉富士通信機製造【2009耐震補強（免震レトロフィット）】戸田・馬淵・住友電設・ダイダン異業種JV

18 横浜マリンタワー



●所在地：中区山下町14-1 ●竣工年：1961（昭和36）年 ●延べ面積：4,389㎡ ●構造種別：〔展望部、塔体部〕S造、〔低層部〕SRC造一部RC造、S造 ●階数：地上4階 ●設計者：【当初】清水建設【2009改修】日建設計【2022改修】日建設計 ●施工者：【当初】清水建設【2009改修】【第1工区】清水建設【第2工区】〈建築〉渡辺組〈電気〉共栄社〈空調〉日本工業所〈衛生〉興信工業〈昇降機〉日立ビルシステム【第3工区】〈外構〉奈良造園土木【2022改修】〈建築〉渡辺組〈電気〉共栄社〈空調衛生〉日本工業所〈昇降機〉三菱電機ビルテクノサービス

19 横浜市立大学 金沢八景キャンパス 本校舎



●所在地：金沢区瀬戸22-2 ●竣工年：1963（昭和38）年 ●延べ面積：9,046㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上3階、地下1階 ●設計者：【当初】村野・森建築事務所（村野藤吾）【2015耐震補強】横浜市建築設計協同組合 ●施工者：【当初】大林組【2015耐震補強】小俣組

20 神奈川区総合庁舎（神奈川区役所・神奈川消防署）



●所在地：神奈川区広台太田町3-8 ●竣工年：1964（昭和39）年 ●延べ面積：〔本館〕9,192㎡〔別館〕5,760㎡

●構造種別：RC造、一部SRC造 ●階数：〔本館〕地上5階、地下1階〔別館〕地上3階、地下2階 ●設計者：【当初】松田平田設計事務所【1990別館増築】松田平田坂本設計事務所 ●施工者：【当初】〈建築〉三木組〈電気・昇降機〉共栄社〈空調衛生〉東横工業【1990別館増築】〈建築〉三木・見上・司JV〈電気〉神電工・江電社・山下JV〈空調〉大澤・山本・三井・戸塚JV〈衛生〉昭和設備工業〈昇降機〉日立製作所〈自家発電設備〉富士電機〈立体駐車場設備〉石川島播磨重工業

21 三殿台考古館 住居址保護棟



●所在地：磯子区岡村四丁目11-22 三殿台考古館内 ●竣工年：1964（昭和39）年 ●延べ面積：431㎡ ●構造種別：RC造一部S造 ●階数：地上1階 ●設計者：大岡實 ●施工者：市営繕課

22 三ツ沢公園球場（ニッパツ三ツ沢球場）



●所在地：神奈川区三ツ沢西町3-1 三ツ沢公園内 ●竣工年：1964（昭和39）年 ●延べ面積：11,678㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上3階 ●設計者：福永建築設計事務所 ●施工者：【当初】藤田組【1993増築】〈建築〉フ

ジタ・三木JV〈電気〉シンデン・東陽電業JV〈空調衛生〉日宝工業

23 中消防署



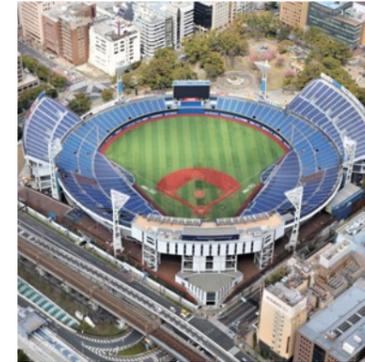
●所在地：中区山吹町2-2 ●竣工年：1976（昭和51）年 ●延べ面積：2,498㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上6階 ●設計者：氏家隆正設計事務所 ●施工者：〈建築〉和同建設〈電気〉藤沢電気〈衛生空調〉昭和設備工業〈構内電話交換設備〉日本電気〈昇降機〉三精輸送

24 大佛次郎記念館



●所在地：中区山手町113 港の見える丘公園内 ●竣工年：1977（昭和52）年 ●延べ面積：1,166㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上2階、地下2階 ●設計者：浦辺建築事務所（浦辺鎮太郎） ●施工者：清水建設

25 横浜スタジアム



●所在地：中区横浜公園 ●竣工年：1978（昭和53）年 ●延べ面積：46,295㎡ ●構造種別：SRC造、RC造、S造 ●階数：地上4階、地下1階 ●設計者：【当初】創和設計、協力・鎌田建築研究所【2020増築・改修】清水建設 ●施工者：【当初】横浜スタジアムJV（清水建設、大林組、奥村組、鹿島、熊谷組、西武建設、大成建設、竹中工務店、戸田建設、フジタ工業、前田建設工業）【2020増築・改修】清水・馬淵・大洋JV

26 西部水再生センター管理本館



●所在地：戸塚区東俣野町231 ●竣工年：1981（昭和56）年 ●延べ面積：8,947㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上3階、地下1階 ●設計者：横浜建築研究所 ●施工者：〈建築〉大成・五洋・中野JV〈電気〉三沢電気

27 都筑工場・都筑ふれあいの丘 (都筑地区センター・横浜あゆみ荘・つづき緑寿荘・都筑プール)



●所在地：〔都筑工場〕都筑区平台27-1、〔地区センター、つづき緑寿荘〕都筑区葛が谷2-1、〔都筑プール〕都筑区葛が谷2-2、〔横浜あゆみ荘〕都筑区葛が谷2-3 ●竣工年：1984（昭和59）年 ●延べ面積：〔都筑工場〕28,692㎡、〔都筑ふれあいの丘〕10,730㎡ ●構造種別：SRC造、RC造、S造 ●階数：〔都筑工場〕地上5階、地下3階〔都筑ふれあいの丘〕地上2階、地下1階 ●設計者：〔都筑工場〕東畑建築事務所〔都筑ふれあいの丘〕日建設計 ●施工者：〔都筑工場〕〈建築〉前田・東急・山岸JV〈電気〉共栄・山本JV〈空調〉新日空・東横JV〈衛生〉新日空・東横JV〔都筑ふれあいの丘〕〈建築〉銭高・奈良JV、山岸・広川JV、工藤・土志田JV〈電気〉弘電・山本JV〈空調〉三冷・光JV〈衛生〉東横・橋JV〈昇降機〉横浜エレベータ

28 横浜人形の家



●所在地：中区山下町18 ●竣工年：1986（昭和61）年 ●延べ面積：3,929㎡ ●構造種別：SRC造一部S造 ●階数：地上5階 ●設計者：坂倉建築研

究所 ●施工者：〈建築〉竹中・日成JV〈電気〉新興電設工業〈空調〉鈴木商会〈衛生〉高田設備〈昇降機〉横浜エレベータ

29 中央卸売市場本場 (再整備)



●所在地：神奈川県山内町1 ●竣工年：〔水産棟〕1986（昭和61）年、〔青果棟〕1992（平成4）年 ●延べ面積：132,453㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上6階、地下1階 ●設計者：日建設計 ●施工者：〔1986水産物部施設改築〕〈建築〉大成・鴻池・山岸JV〈電気〉共栄・藤沢JV〈空調〉川本工業〈衛生〉大澤・渡辺JV〈昇降機〉横浜エレベータ〔1992青果部施設改築〕〈建築〉鹿島・間・三木・山岸・大洋JV〈電気〉共栄・藤沢・飯島JV〈空調〉光電社〈衛生〉トーヨコ・渡辺工業JV〈昇降機〉横浜エレベータ

30 消防司令センター



●所在地：保土ヶ谷区川辺町2-9 ●竣工年：1986（昭和61）年 ●延べ面積：2,935㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上5階 ●設計者：松田平田坂

本設計事務所 ●施工者：〈建築〉渡辺組・酒井JV〈電気〉三和電業社〈空調〉昭和設備工業〈衛生〉三沢電機〈昇降機〉横浜エレベータ

31 横浜港シンボルタワー



●所在地：中区本牧ふ頭1-16 ●竣工年：1986（昭和61）年 ●延べ面積：1,091㎡ ●構造種別：SRC造一部S造 ●階数：地上6階 ●設計者：国建築事務所 ●施工者：〈建築〉奥村組、関工務店〈電気〉藤沢電気〈空調衛生〉牛田工務所〈昇降機〉日立製作所

32 市民文化会館 関内ホール



●所在地：中区住吉町4-42-1 ●竣工年：1986（昭和61）年 ●延べ面積：10,098㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上5階、地下2階 ●設計者：【当初・2018改修】芦原建築設計研究所 ●施工者：【当初】〈建築〉清水・三井・馬淵JV〈電気〉共栄社・光電社JV〈空調〉川本・光電社JV〈衛生〉昭和設備工業〈昇降機〉日本オーチス・エレベータ〈舞台照明〉松村電機製作所〈自家発電機〉東洋電機製造〈舞台音響〉松下通信工業【2018改修】〈建築〉小俣・岡山JV〈電気〉東電同窓電気〈空調〉川本・康栄社JV〈衛生〉川本工業〈昇降機〉中央エレベーター工業〈電気通信〉東電同窓電気〈受変電

設備〉東電同窓・窪倉JV〈舞台照明〉松村電機製作所〈自家発電機〉荏原商事〈舞台音響〉アセント

33 横浜市民ギャラリー (旧いせやま会館)



●所在地：西区宮崎町26-1 ●竣工年：1988（昭和63年）年 ●延べ面積：3,428㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上4階、地下1階 ●設計者：松本陽一設計事務所 ●施工者：【当初】〈建築〉熊谷組・馬淵JV〈電気〉三沢電気〈空調〉川本工業〈衛生〉興信工業〈昇降機〉日立製作所【2014市民ギャラリー改修時】〈建築〉小俣組〈電気〉清進電設〈空調衛生〉ピオン・万里JV〈昇降機〉中央エレベーター工業

34 三溪記念館



●所在地：中区本牧三之谷58-1 三溪園内 ●竣工年：1988（昭和63）年 ●延べ面積：1,642㎡ ●構造種別：RC造、寄棟造銅板葺 ●階数：地上1階 ●設計者：大江宏建築事務所 ●施工者：〈建築〉戸田・関JV〈電気〉東電同窓電気〈衛生〉牛田工業所〈空調〉川本工業

35 横浜みなと博物館



●所在地：西区みなとみらい二丁目1-1 日本丸メモリアルパーク内 ●竣工年：1988（昭和63）年 ●延べ面積：7,146㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上1階、地下1階 ●設計者：三菱地所一級建築士事務所 ●施工者：〈建築〉大成・大林・フジタ・山岸・馬淵JV〈電気〉共栄社・電成社JV〈空調〉トーヨコ・山本JV〈衛生〉日宝工業〈昇降機〉日本オーチス・エレベータ、三菱重工業

36 横浜美術館



●所在地：西区みなとみらい三丁目4-1 ●竣工年：1989（平成元）年 ●延べ面積：26,829㎡ ●構造種別：SRC造一部RC造、S造 ●階数：地上8階 ●設計者：【当初】丹下健三・都市・建築設計研究所【2023改修】丹下都市建築設計 ●施工者：【当初】〈建築〉竹中・清水・東急・奥村・佐藤・奈良JV〈電気〉共栄社・山本・電成社・成電社JV〈空調〉大暖・川本・トーヨコ・光電JV〈衛生〉昭和・興信・戸塚JV〈昇降機〉東芝〈展示〉丹青社、横浜松坂屋〈特別高圧受変電〉富士電機〈自家発電〉東芝〈電波障害除去〉通信設備【2023改修】〈建築〉清水・小俣・三木JV〈電気〉共栄・シンデン・矢口JV〈空調〉川本工業・ヨコレイ・関東設備JV〈衛生〉エルゴテック・杉山管工JV

37 横浜アリーナ



●所在地：港北区新横浜三丁目10 ●竣工年：1989（平成元）年 ●延べ面積：45,800㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上5階 ●設計者：竹中工務店 ●施工者：竹中工務店

38 みなとみらい21・ クリーンセンター



●所在地：中区桜木町1-1-56 ●竣工年：1990（平成2）年 ●延べ面積：6,669㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上8階、地下1階 ●設計者：【当初】東畑建築事務所【2020改修】須山設計 ●施工者：【当初】〈建築〉清水・飛鳥・日成JV〈電気〉三和・朝日JV〈衛生〉トーヨコ〈空調〉大澤工業〈集塵〉三菱重工・日本鋼管・神戸製鋼JV〈昇降機〉横浜エレベータ【2020改修】【第1期】〈建築工事〉工藤建設〈電気〉東邦電設〈空調衛生〉ニッセツ〈昇降機〉横浜エレベータ【第2期】〈建築〉筒見工務店〈電気〉三沢電機〈空調衛生〉万里設備〈昇降機〉横浜エレベータ

39 横浜市立大学 附属病院



●所在地：金沢区福浦三丁目9 ●竣工年：1991（平成3）年 ●延べ面積：57,115㎡ ●構造種別：S造一部SRC造 ●階数：地上10階、地下1階 ●設計者：横浜市立大学医学部附属病院設計JV（松田平田坂本設計事務所十伊藤喜三郎建築研究所） ●施工者：〈建築〉熊谷・鹿島・間・東急・紅梅・渡辺JV〈電気〉日本電設・共栄・電成・山本JV〈空調〉高砂・川本・三建・光電・福島JV〈衛生〉トーヨーコ・一説・大澤・渡辺JV〈昇降機〉東芝〈土木〉保土ヶ谷・新栄JV〈搬送〉シーメンス〈特別高圧受変電〉日新電機〈自家発電〉東洋電機製造

40 障害者 スポーツ文化センター 横浜ラポール



●所在地：港北区鳥山町1752 ●竣工年：1992（平成4）年 ●延べ面積：28,818㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上3階、地下1階 ●設計者：東畑建築事務所 ●施工者：〈建築〉西松・銭高・大木・奈良・紅梅JV〈電気〉共栄社・山本・山正・飯島JV〈空調〉川本・昭和・鈴木・ヨコレイJV〈衛生〉日宝工業・矢崎設備・光設備JV〈昇降機〉東芝〈自家発電〉明電舎〈舞台照明〉丸茂電機〈舞台音響〉不二音響

41 上郷・森の家



●所在地：栄区上郷町1499-1 ●竣工年：1992（平成4）年 ●延べ面積：6,891㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上2階、地下1階 ●設計者：【当初】内井昭蔵建築設計事務所【2019再整備】デザインの森（PFI事業者：上郷フォレストPFI株式会社） ●施工者：【当初】〈建築〉東急・村本・山岸・紅梅JV〈電気〉三沢・三興JV〈空調〉トーヨーコ・鈴商・福崎JV〈衛生〉日宝・太陽JV〈昇降機〉日本エレベーター製造【2019再整備】紅梅組（PFI事業者：上郷フォレストPFI株式会社）

42 道志村水源林 管理所



●所在地：山梨県南都留郡道志村9020 ●竣工年：1992（平成4）年 ●延べ面積：465㎡ ●構造種別：S造、木造 ●階数：地上2階 ●設計者：須山設計 ●施工者：長田産業

43 南図書館・ 弘明寺公園プール



●所在地：南区弘明寺町265-1 ●竣工年：1992（平成4）年 ●延べ面積：2,805㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上4階 ●設計者：相和技術研究所 ●施工者：〈建築〉清水・京急JV〈電気〉藤澤電気〈空調衛生〉光電社〈昇降機〉日本エレベーター製造

44 大岡健康プラザ （南スポーツセンター・ 大岡地区センター・ 地域ケアプラザ）



●所在地：南区大岡一丁目14-1 ●竣工年：1992（平成4）年 ●延べ面積：6,753㎡ ●構造種別：RC造他 ●階数：地上3階 ●設計者：松本陽一設計事務所 ●施工者：〈建築〉佐藤・松尾JV〈電気〉富士・朝日JV〈空調〉昭和・杉山JV〈衛生〉昭和設備工業〈昇降機〉横浜エレベータ

45 大さん橋ふ頭ビル



●所在地：中区海岸通1-1 ●竣工年：1993（平成5）年 ●延べ面積：5,985㎡

●構造種別：S造 ●階数：地上5階 ●設計者：松田平田設計 ●施工者：〈建築〉地崎・松尾JV〈電気〉シンデン〈空調〉川本・渡辺JV〈衛生〉豊正工業〈昇降機〉東芝エレベーターテクノス

46 野島青少年 研修センター



●所在地：金沢区野島町24-2 ●竣工年：1993（平成5）年 ●延べ面積：3,967㎡ ●構造種別：RC造一部SRC造 ●階数：地上2階、地下1階 ●設計者：田辺洋建築設計事務所 ●施工者：〈建築〉富士工・渡辺JV〈電気〉日宝工業〈空調衛生〉昭和・戸塚JV〈昇降機〉横浜エレベータ

47 こどもログハウス （ロケットハウス）



●所在地：青葉区美しが丘二丁目22美しが丘公園内 ●竣工年：1993（平成5）年 ●延べ面積：279㎡ ●構造種別：木造 ●階数：地上2階、地下1階 ●設計者：創和設計 ●施工者：〈建築〉小林建設林産〈電気〉大貫電興社

48 急な坂スタジオ・ 野毛山荘（旧老松会館）



●所在地：西区老松町26-1 ●竣工年：1993（平成5）年 ●延べ面積：3,487㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上3階、地下1階 ●設計者：建築モード研究所 ●施工者：〈建築〉松村・紅梅JV〈電気〉藤沢電気〈空調衛生〉昭和・大洋JV〈昇降機〉横浜エレベータ〈土木〉トーヨーコ建設

49 中央図書館



●所在地：西区老松町1 ●竣工年：1994（平成6）年 ●延べ面積：24,520㎡ ●構造種別：S造、SRC造 ●階数：地上5階、地下3階 ●設計者：前川建築設計事務所 ●施工者：〈建築〉竹中・東急・松村・紅梅・和同JV〈電気〉三ツ沢・新興・江電社・三興JV〈空調〉トーヨーコ理研・山本・鈴工福島JV〈衛生〉トーヨーコ理研・有賀JV〈自家発電〉明電舎〈昇降機〉三菱電機〈書籍搬送〉シーメンス

50 歴史博物館



●所在地：都筑区中川中央一丁目18-1 ●竣工年：1994（平成6）年 ●延べ面積：9,269㎡ ●構造種別：SRC造一部RC造 ●階数：地上6階、地下1階 ●設計者：大高建築設計事務所 ●施工者：〈建築〉間・大末・山岸・奈良JV〈電気〉扶桑・山本JV〈空調衛生〉トーヨーコ理研・矢崎・豊正JV〈自

家発電〉富士電機〈講堂視聴覚設備〉松下通信工業〈昇降機〉フジテック

51 横浜能楽堂



●所在地：西区紅葉ヶ丘27-2 掃部山公園内 ●竣工年：1996（平成8）年 ●延べ面積：5,696㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上2階、地下2階 ●設計者：【当初】大江宏建築事務所【改修】松田平田設計 ●施工者：〈建築〉竹中・住友・紅梅JV〈電気〉三沢・江電社JV〈空調〉川本・フクザキJV〈衛生〉光電社〈駐車場機械設備〉三菱重工業〈昇降機〉フジテック〈舞台照明〉松下電工〈舞台音響〉日本ビクター

52 高齢者保養 研修施設ふれーゆ



●所在地：鶴見区末広町1-15-2 ●竣工年：1996（平成8）年 ●延べ面積：7,630㎡ ●構造種別：RC造一部S造、SRC造 ●階数：地上3階 ●設計者：山下設計 ●施工者：〈建築〉松尾・工藤JV〈電気〉富士・江電JV〈空調衛生〉日宝・興信JV

53 下和泉地区センター ・地域ケアプラザ



●所在地：泉区和泉が丘一丁目26-1
●竣工年：1996（平成8）年 ●延べ面積：3,108㎡ ●構造種別：RC造一部S造 ●階数：地上2階、地下1階 ●設計者：山本理顕設計工場 ●施工者：〈建築〉大洋建設〈電気〉東電同窓電機〈空調〉三沢電気〈衛生〉金子工業所〈昇降機〉シンドラーエレベータ

54 篠原地区センター ・地域ケアプラザ



●所在地：港北区篠原東二丁目15-27
●竣工年：1997（平成9）年 ●延べ面積：3,250㎡ ●構造種別：RC造、一部S造 ●階数：地上3階、地下1階 ●設計者：楨総合計画事務所 ●施工者：〈建築〉サンゴ〈電気〉日宝工業〈空調〉鈴木商会〈衛生〉京浜設備工業所〈昇降機〉シンドラーエレベータ

55 東永谷地区センター ・地域ケアプラザ



●所在地：港南区東永谷1-1-12 ●竣工年：1997（平成9）年 ●延べ面積：2,803㎡ ●構造種別：RC造一部S造

●階数：地上2階 ●設計者：伊東豊雄建築設計事務所 ●施工者：〈建築〉千代田アクタス〈電気〉三興電設〈衛生〉フクザキコーポレーション〈空調〉太陽・サノセキJV〈昇降機〉横浜エレベータ

56 西スポーツセンター ・浅間町営業所



●所在地：西区浅間町4-340-1 ●竣工年：1997（平成9）年 ●延べ面積：7,777㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上4階 ●設計者：久米設計 ●施工者：〈建築〉紅梅・小俣JV〈電気〉三沢電機〈空調〉川本工業〈衛生〉大澤工業〈昇降機〉フジテック〈コージェネレーション・自家発電〉三菱電機〈機械式駐車設備〉東急パーキングシステムズ

57 横浜みなとみらい ホール



●所在地：西区みなとみらい二丁目3-6 ●竣工年：1997（平成9）年 ●延べ面積：18,689㎡ ●構造種別：SRC造一部S造 ●階数：地上7階、地下1階 ●設計者：日建設計 ●施工者：【当初】大成・鹿島・東急他 JV ※民間で「クイーンズスクエア」として建設【2022改修】〈建築〉鹿島・NB・石井JV〈電気〉シンデン・矢口JV、きんでん〈空調〉エルゴテック・杉山管工JV〈衛生〉川本工業〈舞台音響〉ヒビノスペースステック〈舞台照明〉松村電機製作所〈昇降機〉日本オーチス・エレベータ

58 長浜ホール （横浜検疫所長浜措置場 旧事務棟）



●所在地：金沢区長浜114-4 長浜野口記念公園内 ●竣工年：1997（平成9）年復元 ●延べ面積：984㎡ ●構造種別：S造一部RC造 ●階数：地上2階、地下1階 ●設計者：【当初】河合政市【1997復元】AUR建築・都市・研究コンサルタント ●施工者：【当初】不明【1997復元】〈建築〉トーヨー建設〈電気〉幸陽電気〈空調衛生〉フクザキコーポレーション

59 栄区民文化センター リリース



●所在地：栄区小菅ケ谷一丁目2-1 ●竣工年：1997（平成9）年 ●延べ面積：31,832㎡うち本施設面積 2,977㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上6階、地下2階 ●設計者：松本陽一設計事務所 ●施工者：〈建築〉大林・松井・三木・明誠・白井JV〈電気〉東光・関口・阿部JV〈空調〉三機・大澤・矢崎JV〈衛生〉川本・昭和・戸塚JV〈昇降機〉日本オーチス・エレベータ

60 横浜国際総合競技場 （日産スタジアム）



●所在地：港北区小机町3300 新横浜公園内 ●竣工年：1997（平成9）年 ●延べ面積：172,759㎡ ●構造種別：PCaPC造 ●階数：地上7階 ●設計者：松田平田・東畑設計JV ●施工者：〈建築〉【第1工区、フィールド工区】竹中・奈良JV【第2工区】銭高・日本鋼管JV【第3工区】日本国土・渡辺JV【第4工区】佐藤・三木JV〈電気〉きんでん・共栄社JV〈空調〉新日空・大澤JV〈衛生〉川本・山本電気水道JV〈昇降機〉ダイコー、シンドラーエレベータ〈人工地盤〉三木・渡辺JV、竹中・駿河JV

61 よこはま動物園 南入口ゾーン （管理センター、アクアテラス、 リングゲート）



●所在地：旭区上白根町1175-1 横浜動物の森公園ゾーンアジア内 ●竣工年：1998（平成10）年 ●延べ面積：〔管理センター〕2,349㎡〔アクアテラス〕756㎡ ●構造種別：〔管理センター〕SRC造、〔アクアテラス〕S造一部RC造 ●階数：〔管理センター〕地上2階、地下1階〔アクアテラス〕地上1階 ●設計者：高松伸建築設計事務所 ●施工者：〈建築〉三木・駿河JV〈空調〉光電社〈衛生〉有賀工業〈電気〉三興電設〈昇降機〉守谷輸送機工業

62 馬場花木園休憩棟



●所在地：鶴見区馬場二丁目20-1 馬場花木園内 ●竣工年：1998（平成10）年 ●延べ面積：160㎡ ●構造種別：S造 ●階数：地上1階 ●設計者：プランテック総合計画事務所 ●施工者：〈建築〉小松工務店〈電気〉フタバ電業社〈空調衛生〉日本工業所

63 洗手亭



●所在地：中区山下町203地先 ●竣工年：1998（平成10）年 ●延べ面積：48㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上1階 ●設計者：須山設計、RA建築設計 ●施工者：〈施工者〉青柳組〈企画協力、部材寄付〉横浜中華街発展会協同組合

64 横浜国際プール



●所在地：都筑区北山田七丁目3-1 ●竣工年：年：1998（平成10）年 ●延べ面積：35,877㎡ ●構造種別：RC造、SRC造、S造 ●階数：地上3階、地下2階 ●設計者：創造社 ●施工者：〈建築〉【第1工区】大成・地崎・工藤JV【第2工区】石井建設工業〈電気〉扶

桑・富士鋼管JV〈空調〉川本・光電・鈴商JV〈衛生〉トーヨー理研・山本・矢崎JV〈土木〉奈良建設〈大型映像表示設備〉ソニー〈自家発電〉明電舎〈昇降機〉三菱電機

65 横浜市立大学附属 市民総合医療 センター



●所在地：南区浦舟町4-57 ●竣工年：1999（平成11）年 ●延べ面積：58,363㎡ ●構造種別：S造、SRC造、RC造 ●階数：地上15階、地下2階 ●設計者：横河建築設計 ●施工者：〈建築〉竹中・日本国土・紅梅・相鉄JV〈電気〉電設工・四電工・共栄社JV〈空調〉エルゴテック・三機・大澤JV〈衛生〉西原衛生・大成温調・日宝JV〈昇降機〉日立製作所〈昇降機2〉横浜エレベータ〈特別高圧受変電〉東芝〈自家発電廃熱利用〉明電舎〈搬送〉日本シューター

66 横浜にぎわい座



●所在地：中区野毛町3-110-1 ●竣工年：2001（平成13）年 ●延べ面積：14,135㎡ ●構造種別：SRC造 ●階数：地上13階、地下3階 ●設計者：石本建築事務所、アクト環境計画（劇場部分協同） ●施工者：〈建築〉大成・銭高・三木・イワキJV〈電気〉共栄社・新興JV〈空調衛生〉エルゴテック・昭和JV〈昇降機〉横浜エレベータ

67 野庭地区センター・地域ケアプラザ



●所在地：港南区野庭町612 ●竣工年：2001（平成13）年 ●延べ面積：2,850㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上3階 ●設計者：国設計 ●施工者：〈建築〉馬淵・小俣JV〈電気〉三沢電機〈空調〉山本電気水道〈衛生〉コムロ〈昇降機〉日本オーチス・エレベータ

68 北部斎場



●所在地：緑区長津田町5125-1 ●竣工年：2002（平成14）年 ●延べ面積：20,049㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上2階、地下1階 ●設計者：竹山実建築総合研究所 ●施工者：〈建築〉清水・東急・長谷工・土志田JV〈電気〉電成・山本・江電JV〈空調〉エルゴテック・川本・昭和JV〈衛生〉日宝・鈴商JV〈昇降機〉三菱電機〈自家発電〉明電舎〈火葬炉〉宮本工業所〈斎場関連施設〉菅野建設〈土木〉大竹興業、本田建設〈2号遊水池〉清水・東急・長谷工・土志田JV

69 横浜港大さん橋国際客船ターミナル



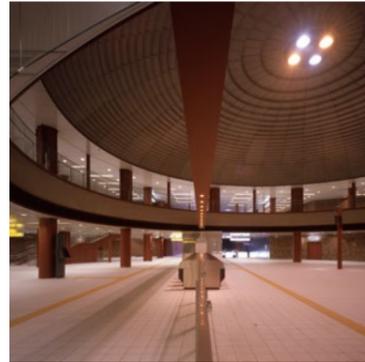
●所在地：中区海岸通1-1-4 ●竣工年：2002（平成14）年 ●延べ面積：約44,000 ●構造種別：S造一部RC造（折板構造+ガーダー構造） ●階数：地上2階、地下1階 ●設計者：foa ●施工者：〈建築〉【1工区】清水・東亜・日本鋼管・松尾JV【2工区】鹿島・フジタ・相鉄・工藤JV【3工区】戸田・東急・山岸・駿河JV〈電気〉扶桑・シンデン・江電社JV〈空調〉エルゴテック・大澤・光電社JV〈衛生〉川本・昭和・太陽JV〈受変電〉富士電機〈発電機〉三菱電機〈搬送機〉トーヨーカネツ〈昇降機〉横浜エレベータ

70 みなと赤十字病院



●所在地：中区新山下三丁目12-1 ●竣工年：2003（平成15）年 ●延べ面積：74,148㎡ ●構造種別：SRC造（免震構造） ●階数：地上8階、地下1階、塔屋2階 ●設計者：伊藤喜三郎建築研究所 ●施工者：〈建築〉【病院棟工区】清水・大林・大成・三星・佐藤・飛島・安藤・渡辺・紅梅・奈良JV【エネルギーセンター棟工区】山岸・相鉄・千代田アクタスJV〈空調〉川本・新菱・日宝・鈴商JV〈衛生〉ダイダン・三建・興新・山本JV〈電気〉きんでん・トーエネック・共栄社・三沢電機JV〈昇降機〉三菱電機、横浜エレベータ、日本エレベーター製造

71 みなとみらい線馬車道駅



●所在地：中区本町5-49 ●竣工年：2004（平成16）年 ●延べ面積：10,312㎡ ●構造種別：RC造、S造 ●階数：地上1階、地下3階 ●設計者：内藤廣建築設計事務所 ●施工者：戸田建設

72 倉田コミュニティハウス



●所在地：戸塚区上倉田町1865-4 ●竣工年：2006（平成18）年 ●延べ面積：378㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上2階 ●設計者：シグマ建築企画 ●施工者：〈建築〉小雀建設〈電気〉大井電業社〈空調衛生〉イエス〈昇降機〉ダイコー

73 アメリカ山公園（立体都市公園）



●所在地：中区山手町97-1 ●竣工年：2009（平成21）年 ●延べ面積：3,954㎡（駅舎増築部分） ●構造種別：RC造 ●階数：地上5階、地下4階 ●設計者：八千代エンジニアリング ●施工者：〈建築〉熊谷・東洋JV〈電気〉扶桑電気〈機械〉川本工業

74 象の鼻テラス



●所在地：中区海岸通1 象の鼻パーク内 ●竣工年：2009（平成21）年 ●延べ面積：604㎡ ●構造種別：S造 ●階数：地上1階 ●設計者：小泉アトリエ ●施工者：〈建築〉渡辺組〈電気〉横山電気工業〈空調衛生〉神奈川産業

75 瀬谷区総合庁舎（瀬谷区役所・瀬谷公会堂・瀬谷消防署）



●所在地：瀬谷区二ツ橋町190 ●竣工年：〔公会堂〕2010（平成22）年〔区役所・消防署〕2012（平成24）年 ●延べ面積：15,369㎡ ●構造種別：RC造、SRC造 ●階数：地上5階、地下1階 ●設計者：環境デザイン研究所、NTTファシリティーズ（PFI事業者：グリーンファシリティーズ瀬谷株式会社） ●施工者：鹿島建設（PFI事業者：グリーンファシリティーズ瀬谷株式会社）

76 動物愛護センター



●所在地：神奈川区菅田町75-4 ●竣工年：2011（平成23）年 ●延べ面積：2,858㎡ ●構造種別：RC造、木造 ●階数：地上2階、地下1階 ●設計者：湯澤建築設計事務所 ●施工者：〈建築〉松尾・石井JV〈電気〉東洋電装〈空調〉川本工業〈衛生〉司工事〈昇降機〉日立ビルシステム〈土木〉親和興業〈フェンス〉リョーコー

77 野毛山展望台



●所在地：西区老松町63-10 野毛山公園内 ●竣工年：2011（平成23）年 ●延べ面積：140㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上2階 ●設計者：松本陽一設計事務所 ●施工者：〈建築〉森田建設〈電気〉中央電器住設

78 衛生研究所



●所在地：金沢区富岡東二丁目7-1 ●竣工年：2014（平成26）年 ●延べ面積：7,653㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上7階 ●設計者：伊藤喜三郎建築研究所 ●施工者：〈建築〉馬淵・紅梅JV〈電気〉電成社・会津電業社JV〈空調〉川本・エルゴテック・ヨコレイJV〈衛生〉南・ホーセンJV〈自家発電〉大崎電設〈昇降機〉中央エレベーター工業〈外構〉新栄重機土木〈植栽〉ダイヤ緑地

79 南区総合庁舎（南区役所・南公会堂・南土木事務所・南消防署）



●所在地：南区浦舟町2-33 ●竣工年：2016（平成28）年 ●延べ面積：27,589㎡ ●構造種別：CFT造、S造、RC造 ●階数：地上7階、地下1階 ●設計者：石本建築事務所 ●施工者：〈建築〉【第1工区】大成・工藤・風越JV【第2工区】馬淵・小俣JV【第3工区】渡辺・根本JV〈電気〉【第1・2工区】シンデン・共栄・窪倉JV【第3工区】横森電気工業〈空調〉【第1・2工区】川本・ヨコレイ・サノセキJV【第3工区】川本工業〈衛生〉【第1・2工区】万里・ピオンJV【第3工区】川本工業〈昇降機〉【第1・2工区】中央エレベーター工業【第3工区】三菱電機〈自家発電〉明電舎〈地下燃料タンク置場〉馬淵・小俣JV〈舞台照明〉松村電機製作所〈舞台音響・映像〉ヤマハサウンドシステム

80 横浜市立大学 YCUスクエア



●所在地：金沢区瀬戸22-2 ●竣工年：2016（平成28）年 ●延べ面積：4,100㎡ ●構造種別：RC造一部S造 ●階数：地上5階 ●設計者：山本理顕設計工場 ●施工者：〈建築〉渡辺・見上JV〈電気〉共栄・会津JV〈空調〉エルゴテック・ヨコレイJV〈衛生〉万里設備〈昇降機〉東芝エレベータ〈外構電気〉太洋電設〈外構〉錦興建設〈植栽〉篠原造園建設

81 蒔田消防出張所



●所在地：南区宿町3-54-5 ●竣工年：2016（平成28）年 ●延べ面積：768㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上3階 ●設計者：湯澤建築設計研究所 ●施工者：〈建築〉馬淵建設〈空調衛生〉相模設備工業〈通信指令〉日本電気〈電気〉横山電気工業

82 市電保存館 しでんほーる



日刊建設通信新聞社提供

●所在地：磯子区滝頭三丁目1-53 ●竣工年：2016（平成28）年 ●延べ面積：287㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上2階 ●設計者：abanba ●施工者：安藤建設

83 金沢区総合庁舎（金沢区役所・金沢公会堂・金沢消防署）



●所在地：金沢区泥亀二丁目9-1 ●竣工年：【第1工区】2016（平成28）年【第2・3工区】2018（平成30）年 ●延べ面積：20,535㎡ ●構造種別：CFT造一部S造、RC造、SRC造 ●階数：地上8階 ●設計者：国設計 ●施工者：〈建築〉【第1工区】松尾・小俣・大洋JV【第2工区】小俣組【第3工区】小俣・日成・安藤JV〈電気〉【第1工区】電成・丸子・栄光JV【第2・3工区】向洋・ケイテクノJV〈空調〉【第1工区】エルゴテック・神奈川保健・矢崎JV【第2・3工区】エルゴテック・矢崎設備JV〈衛生〉【第1工区】ビオン・万里JV【第2・3工区】エルゴテック・有賀JV〈自家発電〉明電舎〈昇降機〉【第1工区】中央エレベーター工業【第3工区】フジテック〈外構〉【第1工区】新世【第2・3工区】青野建設〈舞台照明〉【第2・3工区】松村電機製作所〈舞台音響・映像設備〉【第2・3工区】ヤマハサウンドシステム

84 港南区総合庁舎（港南区役所・港南消防署）



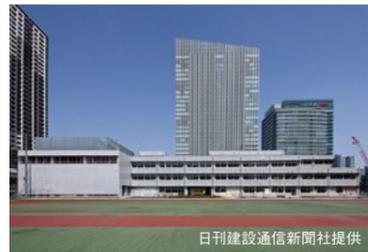
●所在地：港南区港南四丁目2-10 ●竣工年：2017（平成29）年 ●延べ面積：17,334㎡ ●構造種別：S造一部CFT造、SRC造、RC造 ●階数：地上8階、地下1階 ●設計者：小泉アトリエ ●施工者：〈建築〉【第1工区】渡辺・見上JV【第2工区】鹿島・谷津・中島JV〈電気〉神奈川ケイテクノ・向洋電機土木・尾鈴電気JV〈空調〉三沢・光電・エヌ・ケイJV〈衛生〉興信・岳南JV〈昇降機〉フジテック〈自家発電〉明電舎〈機械式駐車設備〉横浜エレベータ〈外構〉湘南建設〈緑化〉錦光園

85 日野こもれび納骨堂



●所在地：港南区日野中央一丁目13-2 ●竣工年：2018（平成30）年 ●延べ面積：1,448㎡ ●構造種別：S造一部RC造 ●階数：地上1階、地下1階 ●設計者：コンテンポラリーズ ●施工者：〈建築〉渡辺・見上JV〈電気〉浜川電気〈空調衛生〉金子工業所〈自動納骨機械〉光洋自動機〈法面保護〉アウラ・シーイー〈緑地整備〉丸孝造園土木〈造園〉横浜緑地

86 みなとみらい本町小学校



日刊建設通信新聞社提供

●所在地：西区高島一丁目2-3 ●竣工年：2018（平成30）年 ●延べ面積：7,984㎡ ●構造種別：S造 ●階数：地上4階 ●設計者：みかんぐみ ●施工者：〈建築〉渡辺・根本・昭和JV〈電気〉シ

ンデン・矢口JV〈空調衛生〉南・ホーセンJV〈昇降機〉中央エレベーター工業〈校庭整備〉奈良建設〈緑化〉相武造園土木〈防護施設〉K.Y.S

87 荏田コミュニティハウス



●所在地：青葉区あざみ野南一丁目4-1 ●竣工年：2019（平成31）年 ●延べ面積：250㎡ ●構造種別：S造 ●階数：地上1階 ●設計者：川喜田建築設計事務所 ●施工者：〈建築〉伊勝〈電気〉三光電業〈空調衛生〉イエス

88 寿町健康福祉交流センター・寿町スカイハイツ



●所在地：中区寿町4-14 ●竣工年：2019（令和元）年 ●延べ面積：7,694㎡ ●構造種別：RC造 ●階数：地上9階、地下1階 ●設計者：小泉アトリエ ●施工者：〈建築〉松尾・小俣・土志田JV〈電気〉共栄・栄光JV〈空調〉エヌ・ケイ・テクノ〈衛生〉万里・ビオンJV〈昇降機〉三菱電機ビルテクノサービス〈スロープ・広場〉菅野建設

89 保土ヶ谷消防署



●所在地：保土ヶ谷区神戸町140-5 ●竣工年：2020（令和2）年 ●延べ面積：2,627㎡ ●構造種別：RC造一部S造 ●階数：地上3階 ●設計者：日生建築計画研究所 ●施工者：〈建築〉大洋・信友JV〈電気〉新興電設工業〈空調衛生〉エルゴテック〈昇降機〉中央エレベーター工業〈通信指令設備〉日本電気〈歩道等改良〉新都市建設

90 8代目市庁舎



●所在地：中区本町6-50-10 ●竣工年：2020（令和2年）年 ●延べ面積：142,582㎡ ●構造種別：S造、CFT造他、中間層免震構造十制振構造 ●階数：地上32階、地下2階 ●設計者：竹中工務店、横総合計画事務所 ●施工者：竹中・西松JV ●別途発注工事 中層部施工：〈建築〉【第1工区】NB建設【第2工区】小俣組〈電気〉【第1・2工区】扶桑・日宝JV〈空調〉三沢・興信・三光JV〈衛生〉エルゴテック、その他施工：〈マルチサイン設備〉東洋電装・神電設備工業JV〈防犯・入退室管理設備〉三沢・セイブJV〈監視カメラ設備〉きんでん〈映像・音響設備〉清進・浜川JV〈議場・委員会設備〉システムエンジニアリング〈構内交換設備〉東日本電信電話〈間仕切り壁設置〉土志田建設〈サイン設置〉土志田建設〈駐車管制設備〉東洋電装

91 横浜市立市民病院



●所在地：神奈川区三ツ沢西町1-1 ●竣工年：2020（令和2）年 ●延べ面積：79,613㎡ ●構造種別：〔診療棟〕S造、一部SRC造、RC造（免震構造）〔管理棟〕S造 ●階数：〔診療棟〕地上7階、地下2階、塔屋1階〔管理棟〕地上4階 ●設計者：佐藤総合計画 ●施工者：〔診療棟〕〈建築〉戸田・松尾・馬淵JV〈電気〉九電工・大三・丸子JV〈空調〉西原衛生・菱和設備JV〈衛生〉川本・日本装芸・ヨコレイJV〔管理棟〕〈建築〉松尾・奈良JV〈電気〉三沢・新興JV〈空調〉川本・康栄社JV〈衛生〉エルゴテック

92 横浜みなとみらい国際コンベンションセンター（パシフィコ横浜ノース）



●所在地：西区みなとみらい一丁目1-1 ●竣工年：2020（令和2）年 ●延べ面積：46,296㎡ ●構造種別：S造、一部SRC造、RC造 ●階数：地上6階、地下1階 ●設計者：佐藤総合計画・竹中工務店JV（PFI事業者）（設計）：横浜グローバルMICE ●施工者：竹中・小俣JV（PFI事業者）（施工）：横浜グローバルMICE

93 山下地域ケアプラザ



●所在地：緑区北八朔町218-13 ●竣工年：2021（令和3）年 ●延べ面積：462㎡ ●構造種別：木造 ●階数：地上1階 ●設計者：松本陽一設計事務所 ●施工者：〈建築〉昭和建設〈電気〉紘永工業〈空調衛生〉紘永工業

94 港南公会堂・港南土木事務所



●所在地：港南区港南中央通10-1 ●竣工年：2021（令和3）年 ●延べ面積：5,941㎡ ●構造種別：RC造、S造、SRC造 ●階数：地上4階、地下1階 ●設計者：新居千秋都市建築設計 ●施工者：〈建築〉松尾・大洋・安藤JV 〈電気〉向洋・エスシーイーJV 〈空調衛生〉ヨコレイ・エヌケイテクノJV 〈昇降機〉フジテック 〈舞台音響・映像設備〉ヤマハサウンドシステム 〈舞台照明設備〉パナソニックLSエンジニアリング 〈リフター整備〉朝日輸送機 〈自家発電設備〉荏原商事 〈道路拡幅〉重田建設企業

95 瀬谷区民文化センターあじさいプラザ



●所在地：瀬谷区瀬谷四丁目4-10（ライプゲート瀬谷3階・4階） ●竣工年：2021（令和3）年 ●延べ面積：24,575㎡うち本施設1,611㎡ ●構造種別：RC造一部S造 ●階数：地上10階、地下1階 ●設計者：アール・アイ・エー ●施工者：戸田建設

96 都田地区センター・地域ケアプラザ



●所在地：都筑区東方町655-4 ●竣工年：2022（令和4）年 ●延べ面積：1,458㎡ ●構造種別：S造 ●階数：地上2階 ●設計者：金子設計 ●施工者：〈建築〉小俣組〈電気〉メルビック電工〈空調衛生〉シンサナミ〈昇降機〉フジテック

97 消防本部庁舎



●所在地：保土ヶ谷区川辺町2-20 ●竣工予定：2023（令和5）年 ●延べ面積：14,847㎡ ●構造種別：〔本館〕RC一部PRC・SRC造〔倉庫棟〕S造〔別館〕SRC造 ●階数：〔本館〕地上7階、地下1階、塔屋2階〔倉庫棟〕地上3階〔別館〕地上5階、塔屋1階 ●設計者：松田平田設計 ●施工者：〈建築〉戸田・小俣・小雀JV 〈電気〉メルビック・京浜・東邦JV 〈空調〉川本・康栄社JV 〈衛生〉ビオン工業〈昇降機〉フジテック〈自家発電〉八千代電設工業

98 根岸森林公園トイレ（芝生広場前）



●所在地：中区根岸台 根岸森林公園内 ●竣工予定：2024（令和6）年 ●延べ面積：49㎡ ●構造種別：木造一部S造 ●階数：地上1階 ●設計者：一級建築士事務所nenlin ●施工者：未定

99 横浜BUNTAI



●所在地：中区不老町2-7-1 ●竣工予定：2024（令和6）年 ●延べ面積：15,454㎡ ●構造種別：RC造一部S造 ●階数：地上3階 ●設計者：梓・アーキボックス・大成JV（PFI事業者：YOKOHAMA文体） ●施工者：大成・渡辺JV（PFI事業者：YOKOHAMA文体）

100 万騎が原小学校



●所在地：旭区大池町66 ●竣工予定：2027（令和8）年 ●延べ面積：〔校舎棟〕5,092㎡、〔体育館・給食室棟〕1,323㎡ ●構造種別：〔校舎棟〕木造〔体育館・給食室棟〕RC造一部S造 ●階数：地上3階 ●設計者：梓・金子JV ●施工者：未定

100周年事業

100周年事業について

根岸森林公園新築トイレ設計コンペ

建築家 内藤廣 講演会

よこはま建築ひろば

シンポジウム

こどもワークショップ、関連イベント

横浜市こどもの美術展2022

こどもの絵画作品LEDビジョン投影

年表・タペストリー展示

学校建替え工事 出前授業

Instagram

よこはま建築フォトコンテスト

100周年事業について

横浜市の公共建築は、市民や関係団体のみなさまに支えられ、100周年を迎えることができました。「横浜市公共建築100周年事業」として、多くのみなさまに公共建築に対する親しみや愛着を一層高めていただくため、関係団体のみなさまと連携して、様々なイベント等を実施しました。



ロゴマーク

デザイン: アスカコヤマックス株式会社

これから100年続く建築として建てられた横浜の公共建築のシンボルである、「横浜市役所新市庁舎」をモチーフに、2つの建物が重なって見えるような設計コンセプトを数字の「1」に見立て、100周年の「100」の数字となるアイデアを組み合わせたシンボルデザインです。

横浜市公共建築100周年事業	日時・期間	会場・メディア
ロゴマーク	[決定] 令和3年12月 [使用期間] 令和4年1月～令和5年3月	
設計コンペ	[公募開始] 令和4年4月1日 [設計案〆切] 令和4年7月15日 [公開ヒアリング] 令和4年8月22日 [結果発表] 令和4年9月1日	[公開ヒアリング] 関内ホール 大ホール
講演会 建築家 内藤廣「建築とまちづくり」	令和4年8月22日	関内ホール 大ホール
よこはま建築ひろば	シンポジウム 「これまでも、これからも、横浜らしく」	3階 議会棟 多目的室
	こどもワークショップ ・折り紙建築ワークショップ ・工作! お家で使える延長コード作り ・とび出す建物に色をぬろう ・空間ワークショップ ・間伐材で作るオリジナルコースター ・建設重機・機械工具体験会	
関連イベント	31階からの景色を見よう	横浜市役所 1階 アトリウム及び北プラザ 31階 レセプションルーム 市役所内各所 横浜市役所及び周辺公共建築 横浜市開港記念会館 横浜市役所 1階 展示スペース
	ナゾ解き! よこはま市役所アドベンチャー	
	デジタルスタンプラリー	
	工事現場見学会「横浜市開港記念会館」	
	ガス・電気設備展示	
横浜市こどもの美術展2022 こどもの絵画作品LEDビジョン投影	令和4年7月22日～31日 令和4年11月12日	横浜市民ギャラリー 横浜市役所 1階 アトリウム
年表・タペストリー展示	令和4年11月1日～30日	横浜市役所 2階 展示スペース
学校建替え工事 出前授業	令和4年11月15日、28日 令和5年2月14日	都岡小学校 汐見台小学校
Instagram	令和4年4月1日～	
フォトコンテスト	[応募期間] 令和4年11月11日～ 令和5年1月10日 [結果発表] 令和5年2月22日 [展示] 令和5年3月4日～31日	Instagramにて作品募集 [展示] 横浜市役所 2階 展示スペース (3月4日～24日) 1階 展示スペース (3月25日～31日)
記念誌『横浜市公共建築の100年』	[発行] 令和5年7月	横浜市ウェブサイト公開

根岸森林公園新築トイレ設計コンペ



協力：一般社団法人 神奈川県建築士会、一般社団法人 神奈川県建築士事務所協会横浜支部、公益社団法人 日本建築家協会関東甲信越支部神奈川地域会（JIA神奈川）、一般社団法人 横浜市建築士事務所協会、横浜市建築設計協同組合

次世代の設計人材の発掘や育成を目的に実施

根岸森林公園新築トイレ設計コンペは、学生を含めた40歳以下の若手設計者を対象として、次世代の設計人材の発掘や育成につながることを期待して実施しました。

対象の根岸森林公園は、戦後米軍に接収された時期もありましたが、接収解除後に、なだらかな地形を生かし、多くの樹木が植わった森林公園として開園しました。大きな芝生広場が魅力で、休日などは、多くの人がかつろいでおり、特に桜の時期などはとても賑わいます。この芝生広場に面した位置に、誰もが利用しやすく、周辺環境と調和したトイレを建築することで、利用者の利便性を高めるとともに、より魅力ある公園とすることを目指しました。

スケジュール

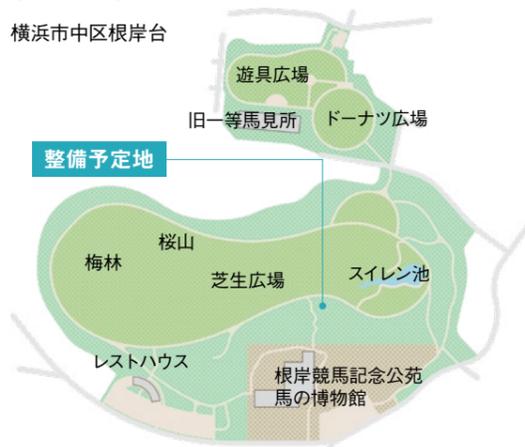
令和4年4月1日	実施要項公表
令和4年5月16日～5月27日	参加意向申出受付
令和4年7月1日～7月15日	設計案受付
令和4年7月28日	一次評価
令和4年8月4日	一次評価結果公表
令和4年8月22日	二次評価(公開ヒアリング)
令和4年9月1日	最終結果公表

敷地・計画条件

構造・階数	木造又は一部木造・地上1階建て
延べ面積	50㎡以下
構成	男子トイレ、女子トイレ、バリアフリートイレ、掃除用具入れ
予定工事費	5,000万円以下で、実現可能な提案

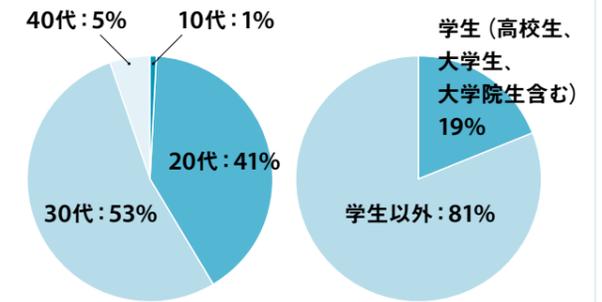
敷地場所

横浜市中区根岸台



応募者 267者から設計案が提出

参加意向申出書の提出が504者、設計案の提出が267者と非常に多くの方から応募がありました。応募者の年齢は、10代から40歳、所在地では、北は北海道、南は沖縄、また海外（ドイツ、中国）からと、幅広く応募がありました。



設計案提出者（267者）年代と学生の割合

評価委員

外部委員



小泉 雅生
[建築家/東京都立大学 教授]



曾我部 昌史
[建築家/神奈川大学 教授]



中川 エリカ
[建築家/中川エリカ 建築設計事務所代表]

内部委員

藤田 辰一郎 [横浜市 環境創造局 公園緑地部長]
肥田 雄三 [横浜市 建築局 公共建築部長]

評価の着眼点

- 周辺環境と調和したデザイン
- 施設利用者の利便性や快適性
- 施設管理者の清掃・点検・維持保全等の管理全般への配慮
- 脱炭素社会の実現を踏まえた環境配慮
- ライフサイクルコスト

一次評価

非公開で評価委員が設計案（匿名）を、第1選考、第2選考、第3選考と、3段階で評価しました。

第1選考

5人の委員が各15票を投票し、56作品が得票。複数得票した作品に委員が推薦した作品を加えた、19作品を選出。

第2選考

対象とした19作品に、5人の委員が各5票投票し、15作品が得票。複数得票した作品に委員が推薦した作品を加えた、9作品を選出。

第3選考

対象とした9作品について委員が議論し、二次評価対象として5作品を選出。



二次評価（公開ヒアリング）

二次評価は関内ホール大ホールで、公開ヒアリングとして、応募者本人によるプレゼンテーションと、評価委員との質疑応答を実施しました。

応募者は、模型やパース、動画などを駆使し、設計案のコンセプトや特徴、公共建築に対する考えなどをアピールしました。また、評価委員から、作品の実現性やコスト、環境配慮や経年変化など様々な角度から質問していただきました。



全体講評

終了後に、評価委員から、横浜市を代表して肥田委員と、外部委員を代表して小泉委員から、設計コンペ全体の講評をいただきました。肥田委員は、「今回残った5者は周辺環境にしっかりと向きあっていた。この後の選定では、プレゼンテーションで実現性に関する不安をどれだけ払拭できていたかが議論されると思う。」と話し、小泉委員は、「縮退する社会が取り上げられる中で若手設計者の間にも閉塞感が漂っている。若手を対象としたコンペの実施はありがたい。各案が様々な新しい試みをしていて、コンペという機会をうまくつかっていた。参加者はこのコンペで経験したことを次の仕事につなげてほしい。」と話されました。



左：根岸森林公園新築トイレ設計コンペ ホームページ/
右：根岸森林公園新築トイレ設計コンペ公開ヒアリング動画



最優秀賞

丘の小道

張 昊、甘粕 敦彦

根岸森林公園の特徴である丘の起伏をなぞるような薄いアーチ状の大屋根と、トイレと公園をつなぐ草花ゾーンが特徴で、大屋根がトイレブースやベンチを緩やかにつなぎ、日射を遮りつつ風通しを確保しています。トイレへの動線は誰もがアクセスしやすいスロープで、使う人の気持ちを考えており、これから長く愛されることが期待できる、優しい印象の作品です。公園のランドスケープと連続した風景として魅力ある提案であること、実現性の高い提案であることが決め手となりました。

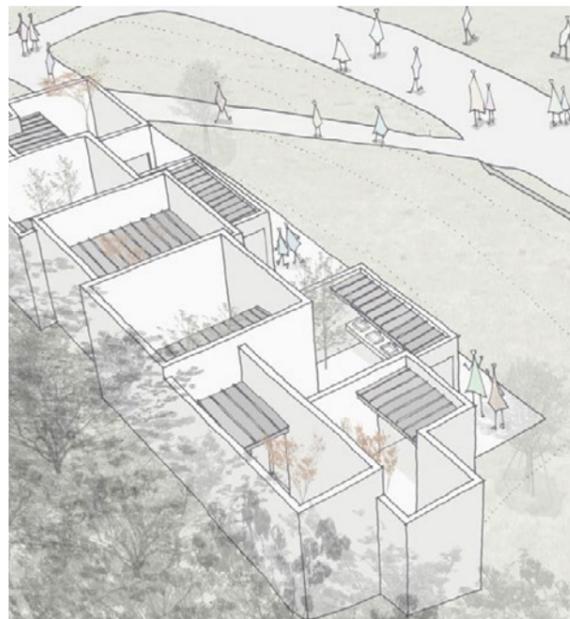
表彰式

令和4年11月12日「よこはま建築ひろば」シンポジウムの冒頭で表彰式を行い、最優秀賞を受賞した張氏、甘粕氏に、鶴澤建築局長から表彰状と記念品を授与しました。

張氏は「今回の案は、大きな自然や人のアクティビティなどと、建築が一体になったものを目指して設計した。これから建築の実現に向けて、多くのスタディ、多くの試作に取り組んでいきたい。」甘粕氏は「今回の案は、身近な福祉の視点や自然環境の視点を盛り込めた案だと思っている。これからも建築に対して、様々な視点を持って、これからの公共建築のあり方も合わせて考えていきたい。」と受賞コメントをいただきました。



優秀賞



樹々を包み込むトイレ

山川 尚哉

トイレブースが広く、ブース内などに半屋外空間があり、トイレ内に樹木が植えられた開放的な空間が最大の特徴です。5作品の中で、唯一トイレブース自体の提案をしており、今後の公園トイレとして斬新な作品でした。

入賞

森林レストルーム

桐 圭佑

ベンチと一体となったおおらかな半月状の木製屋根が特徴的で、シンボリックでありつつも公園の風景に溶け込んだ作品です。



大地とつながる木レンガの風突トイレ

中倉 康介、増田 伸也

塔の形状でシンボル性を確保しつつ、塔の重力換気と蛇籠(じゃかご)の壁でトイレの臭いの問題を解決しようという案で、木材を多く使用した作品です。



木と土のパーゴラ

小野寺 匠吾

地面から屋根へと土壌がつながり、そこで繁茂した植物が人々の休息のための日陰を作り出す「地球とつながる建築」をテーマとした作品です。

佳作



公園の個室
神山 義浩



公園の回折
松村 耕、星安 康至、森 惠吾、張 婕



煉瓦とコンクリートと木と鉄骨の積層
山田 健太郎



公園のストラクチャー
山田 陽平、平川 凌成



丘に寄り添う とまり木テラス
山下 唯、中島 みづき



Responsive toilet
小山 浩太郎、清水 太幹、井上 岳、大重 雄暉



A Toilet for Everyone自分の好きなトイレを見つけられる場所
大久保 尚人



NEGISHI PARK STAND 根岸パークスタンド
横尾 周、林 恭正、小島 慎平、稲田 玲奈



大きな公園の小さな縁側
手嶋 恵佑、高橋 雅人



どんぐりの森と池
加藤 溪一、坂田 裕貴、marie

建築とまちづくり



内藤廣 [建築家/東京大学名誉教授]

令和4年8月22日、関内ホール大ホールにて、多くの公共建築や文化施設などを手掛ける建築家の内藤 廣氏を招き「建築とまちづくり」をテーマに講演会を開催しました。当日は約450名の方にご参加いただきました。以下、当日の講演会での内容を一部抜粋して紹介します。

昔の横浜

私と横浜の関係についてお話しします。私の生まれは横浜で、祖父が建てた屋敷がありました。戦争が終わってしばらくして祖父が亡くなり、屋敷を整理して5歳のときから鎌倉に住むことになりました。ただ、5歳ぐらいまでの記憶はいろいろ残っており、桜木町のあたりに連れて行かれると、アメリカの軍人さんがたくさんいて、地下道では傷痕軍人の方がアコーディオンを弾いて日銭を稼いでいるというような風景がまだたくさんありまし

た。横浜は大空襲があり、焼け野原から今日に至るということを、100年を振り返る上では忘れてはいけないと思います。よくここまでやってきたなあ、と思います。それから、当時本当にお金がなく、住宅政策とかいろいろなことをやれという声もあった中で「音楽堂を建てる、やっぱり文化だ。」と言った当時の知事さんは偉かったと思います。中学1年から高校3年ぐらいまで、母がピアノをやっていたので、県立音楽堂にはよく通いました。なので、横浜は非常に近いものと感じています。不思議な魅

力があるというか、湿りけがあるというか、やっぱり港町なのかなと思います。もう一つ、横浜で忘れられないことがあります。学生運動が一番すごい時に大学に入りましたが、授業も何もなかったのですが、アルバイトをしていました。横浜の石川町の前の運河にダルマ船が何艘も止まっていて、その中に設計事務所があり、アルバイト、といっても無給ですが、ダルマ船に泊まり込んで図面を描いたりしていたこともあります。長崎の軍艦島のブロックプランを描いた記憶があります。

横浜らしさ

「横浜らしさ」についてですが、神戸も長崎もそうですが、港町特有の、独特のバタ臭さというか不思議な臭いが漂っていると思います。私は、横浜は海外に開かれた場所であることをもっと標榜してもいいと思います。例えば、外国人墓地があり、いろいろな海外との繋がりもありますので、横浜は「開かれた文化」、外国の方もどんどん受け入れて「グローバルに開かれた場所」というイメージが「横浜らしさ」であっていいと思います。「東京の喧騒からちょっと離れた開かれたまち」という感じが横浜の空気をつくっていくと思います。

これまでの公共建築

これまでの公共建築についてお話しします。司馬遼太郎さんが、

「建築っていうのは人を励ますためにあるのではないですか。」と言った。「人間、辛い時があったり、色んな時があるけれど、そういう時、まちを歩いたり、巷を歩く人たちを励ますためにあるんじゃないですか。そういうふうになっていますか。」と問いかけていました。私は、これまでの公共建築、これからの公共建築を考える上でそうあるべきだろうなと思いました。

三陸復興に深く関わりました。その中で出来上がってくる建物やまちが、本当に人を励ますものになっているだろうか、いつも自分自身にも問いかけてやってきました。三陸の話は単なる震災や津波からの復興というだけではなく、日本あるいは建築家はこれまで、まちとどう向き合ってきたかが問われている話だと思います。建築にやれなかったこ

と、やれたこと、都市計画にできなかったこと、できたことを反芻する良い場所だと思っています。

建築とまちづくり

今日は「建築とまちづくり」というテーマなので、皆さんにぜひお話ししておきたいことがあります。横浜とは、みなとみらい線に関わることになりました。みなとみらい線の委員会の最初の時に、当時の横浜高速鉄道の社長で元国鉄総裁の高木文雄さんが「これからの駅は地域とともにあるべきだと思います。地域の空気を反映するような駅をぜひとも作っていただきたい。」と挨拶をされ、深々と頭を下げられました。そのときのことが忘れられなくて、その思いに応えようと地下鉄の駅を設計しました。



みなとみらい線馬車道駅(内藤廣建築設計事務所提供)

駅は究極の公共建築物

「駅は究極の公共建築物」だと思っています。要するに、まちの生き死にを担っていると思います。渋谷駅の乗降客数は、1日に300万人近くあるわけです。例えば県立の美術館とかは、年間20万人来たら嬉しいよね、となりますが、駅というのは全然オーダーが違います。それを考えると、馬車道駅も良いものをつくりたいと思い、取り組みました。地下鉄の空間として、こんなに余剰の大きな空間は、おそらく東京メトロでは不可能でしょう。ひょっとしたら日本で一番大きな余剰空間を持った地下空間が、みなとみらい線の馬車道駅だと思っています。そしてそれは、いろいろな方の努力で出来上がっています。

みなとみらい線の設計について

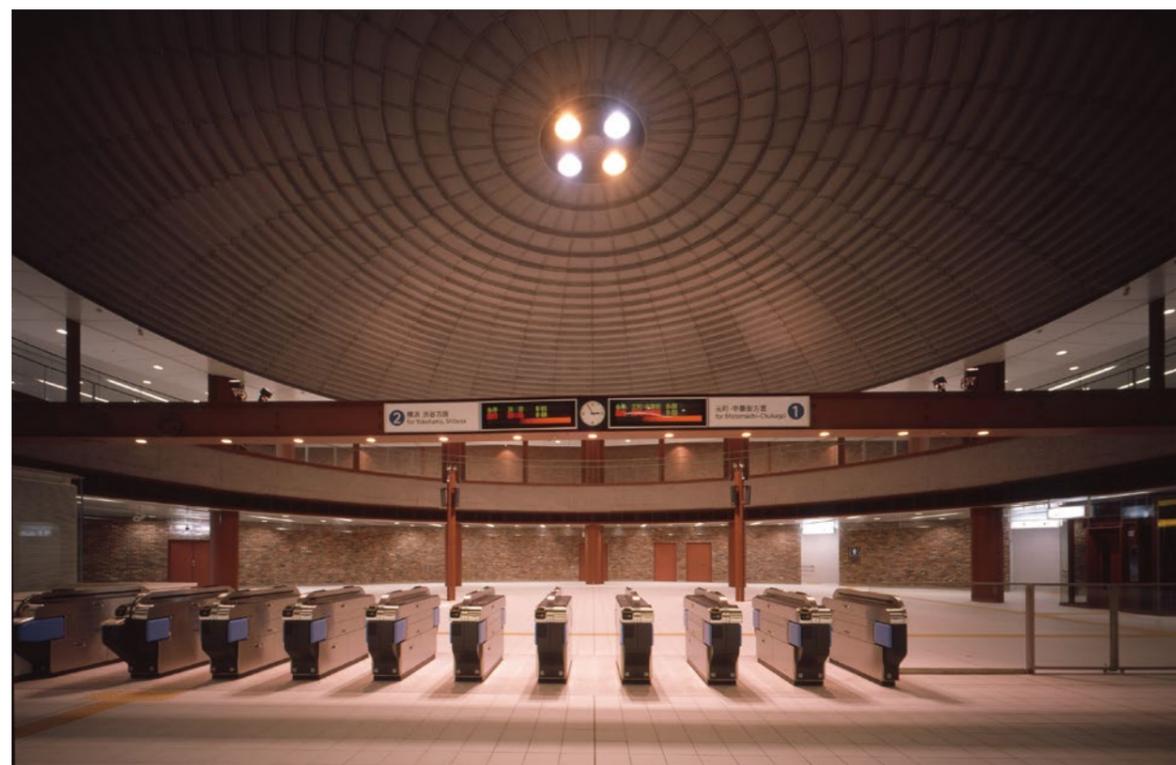
【天井のデザイン】真ん中のドーム状の空間にホールを作り、鉄道施設では初めて音響実験をやりました。段々になった天井をよく見ると、そこにアルミの調整板(吸音材)をはめ込んでいます。また、天井に貼ってあるGRC(ガラス繊維補強セメント)が全部雨樋になっており、通路に水を落とさないように設計しました。

【柱のデザイン】見通しをよくするため、通常の鉄道駅にある柱巻を全部剥がし、柱巻の中に納めるべき区画のシャッターレールや電設の材料を全てデザインしました。柱巻をなくして余裕が出た予算で外側の壁に無垢のレンガを使いました。

【ベンチのデザイン】駅構内の

ベンチを透明の強化アクリルで作りました。ものすごい数の実験をやりました。みなとみらい線です。やって以来、他の駅でこれに類するアクリルのベンチが出ましたが、みなとみらい線が初めての試みです。

【壁面のデザイン】地下鉄の構内は非常に壁面が多いので、横浜で壊された建物のパーツを飾ることを構想していました。横浜銀行が曳家をするタイミングで、地下にある金庫扉などをもらい壁にかけました。特に横浜銀行の正面にあった大壁画「横浜開港史」も行き場所がなかったので、この地下鉄の駅で引き取り展示をしています。ブロンズではなく石膏でできていたため、列車振動などで壊さないよう、保存会の方と一緒に気がつかってすすめました。



みなとみらい線馬車道駅中央にあるドーム状のホール。天井には音響や雨漏りに配慮した材料を使用している。(内藤廣建築設計事務所提供)



左:強化アクリルを使用したベンチ。鉄道駅では初の試み/右:見通しの良い駅構内。レンガ壁には大壁画「横浜開港史」が展示されている。(内藤廣建築設計事務所提供)



日向市の事例「溜まりコンセプト」

私が宮崎県の日向市に関わって27年、いまだに付き合いがあります。「建築とまちづくり」という意味で喋るのはいいかなと思ひ、日向市の話をしさせていただけます。日向市では鉄道高架の事業からまちづくりにも関わりました。まちづくりについて、10年20年未来のことを語るなら主役は子どもだね、ということで、小学校でワークショップをやりました。小学校の子どもたちが議論して、模型を作ったりしました。本当に勉強になります。第2弾をやろうということになり、日向市は杉の集積地で賑わったので、杉を使って大工さん

も巻き込んで、子どもたちの提案を実際に作っちゃおうと、みんなで議論して模型を作りました。最後は、大工さんのサポートもありましたが、子どもたちが案の中から実際に屋台を作りました。今でも祭りのときにいろいろ使っています。何より嬉しいのは、市役所の人から電話があって、就職の募集期間に、このときの子どもが「市役所の職員になりたい、まちづくりやりたい。」と市役所に来ました、と言っていました。まちづくりをやるのだったら、小学校の高学年から中学生ぐらいを大事にするのが早道なのかなと最近では思っています。その後は、中学校でもワークショップをやり、中学生からも全く我々の思っていな

い答えが返ってきたりしました。まちづくりには、いろいろな人が集まってきます。地元の建築士会の青年部の方にも出てもらい、駅の駐車場の管理棟を、彼らが考えて作ることにしました。ここに「陽だまり・風だまり・緑だまり・水だまり・人だまり」と書いてあるのですが、彼らが日向のまちに必要なものはこういうことだ、と考えたコンセプトです。私は、これは素晴らしいと思っています。建物がそれぞれ大きさをなくてもいいから、ちっちゃい「たまり」を持つということ、日向のまちづくりの構造にしてもいいじゃないか、という話です。横浜でも使えると思います。いろいろなところでまちづくりの話をするときに、彼らのこの

ひだまりをつくらう!
冬はあたたかい陽だまりに包まれるといいね。<ベンチ>
夏はパラソルや軒下の涼しい陰でゆっくりしよう。

みどりだまりをつくらう!
常緑樹や実のなる木、お花などを植えるといいね。<植栽>
生命力あふれる植物でいやしてもらおう。

かぜだまりをつくらう!
おいしい匂いや生活の音などが聞こえるといいね。<のれん>
活気あふれるまちで心豊かになろう。

みずだまりをつくらう!
金魚や水草を入れた水鉢などがあるといいね。<水鉢>
水は生命の源、心の潤いと安らぎをもらおう。

陽・緑・風・水のたまり場には **ひだまり**ができるよ!
会話が笑顔があり、にぎやかになるといいね。
ひょうが時間でもいいじゃない。元気をわけあおう。



宮崎県日向市の建築士会青年部の若者が考えた「溜まりコンセプト」と駐車場の管理棟(内藤廣建築設計事務所提供)

山口県周南市の駅舎。まちの広場側は全面ガラス張りとなっており、まちに対して開かれた空間となっている。(内藤廣建築設計事務所提供)



コンセプトをできるだけ言うようにしています。私は何か全国のまちが、あるいは建築家がこういうことを目指したならば、まちはずいぶん良くなるはずだと思っています。横浜の馬車道でも元町でもそうになっています。まちに対して建築がちょっと引くと、そこに人だまりや、ちょっとした「たまり」が出来るとするのは、似ているところがあるなと思います。

驚くべきことに、どこも人口減少と高齢化で乗降客数が減っていく中で、日向市駅だけは乗降客数が伸びています。やっぱり、まちづくりって一生懸命やるものなんだろうな、と思いました。横浜もいろいろなまちがありますけれども、まちづくりを一生懸命やったまちというのは人も寄ってくるのだと思います。

周南市の事例 「場所のニーズ」

山口県の周南市の駅についてもお話しします。建て替えることになって提案をしました。これは駅というよりも駅ビルですね。建て替える前のビルはなかなか良かったと思っています。そ

れは戦後、いわゆる自治体側が国鉄に要望して建てた民衆駅で、ビル自体は使い勝手が悪くてボロボロだったけど、市民がいろんな形で使っていて、その風景はとてもよかったです。ここでも、ワークショップをやって、高校生の学生たちを集めていろいろ聞きました。駅に何があったらいいって聞いたら、シャワー室が欲しいと言うんです。彼らは学校の授業が終わって部活やって、そこから塾に行くんですね。つまり、部活やって汗だくになって塾に行く、その駅にシャワー室があったらシャワー浴びて塾に行けるという訳です。彼らのライフスタイルが見えて、それがとても面白かったです。建築の計画をやっていくと気がつかないような話がたくさんあります。ひょっとしたらこれからの公共建築は、いわゆる計画学的に見えているものではなく、そういうものを拾っていかなくちゃいけないと思います。直接聞かないと分からない。その「場所のニーズ」みたいなものちゃんとシンクロした場合に、公共建築はものすごく生きるといことです。

これからの公共建築

これからは、建築っていうのが一体何なのか、ということが問われます。一昔に比べると建築を作り上げる上で、経済的な圧力はかなり高まっている気がします。建てにくい時代に移りつつあります。つまり「ちゃんと考えて、ちゃんとつくる」ということをしっかりと考えるべき時期に来ているのではないかなと思います。

横浜といえば、キングとクイーンとジャックがある。県立音楽堂もある。我々は、立派なホールや公共建築物を作ってきたけれど、これまでの100年の中で、本当に後世に残せるもの、誇れるようなものを作ってきたのか、一度考えた方がいいと思います。結局、愛されない建物は残らないと思います。100年にわたって愛される建物をつくれるかどうかということは、建築家の大テーマです。ちょっと面白くて拍手喝采でメディアに出て、大騒ぎになって、すぐみんな忘れるみたいな建物はあるかもしれないけれど、100年にわたって人に愛され続けるような価値

みたいなものを公共建築は本当につくれるのか。今まで横浜はつくってきたのか、と検証した方がいい。

昔「つまらなくて価値のあるもの」っていう文章を書いたことがあります。面白くて価値のないものがたくさんある。例えば、お笑い芸の一発芸みたいなものは一瞬面白いけれども何も残らないみたいな。建築も同じで、面白くて価値のないものにあふれているように見えたんですね。じゃあその逆ってなんだろう。「つまらなくて価値のあるもの」っていうのはないか、ということ考えた時期があります。例えば使い込んだ道具があって、その人が本当に使い込んだ道具っていうのは私にとっては何の価値もないかもしれないけれど、その人にとっては、その道

具の手触りだとか、そういうものは価値がありますよね。私は、建築も、そのようになる素質を持った建築がつかれないかなと思うんです。

私はこれからの教育や公共建築がどうあるべきかと問われたならば、「社会的共通資本」の話をもっと前面に出してもいいと思います。つまりインフラのことです。みんなから愛されるような建築ならば、鉄道や道路や港湾などと同じように、社会的なインフラの一つだと言ってもいいと思います。文化を担うような建築も「社会的共通資本」の一部だと言ってもいい。横浜市が公共建築を建てる際に、100年後、200年後に残す、公共建築は社会的なインフラだということ認識を持った方がいいと思います。

内藤 廣

[建築家/東京大学名誉教授]

1950年横浜市生まれ。1976年早稲田大学大学院修了。フェルナンド・イゲラス建築設計事務所、菊竹清訓建築設計事務所を経て1981年内藤廣建築設計事務所設立。2001～11年東京大学大学院にて教授、副学長を歴任。2011年～同大学名誉教授。また、2022年4月からは公益財団法人日本デザイン振興会会長を務める。主な建築作品に、海の博物館、みなとみらい線馬車道駅、島根県芸術文化センター、高田松原津波復興祈念公園国営追悼・祈念施設、東京メトロ銀座線渋谷駅など。



クロストーク

内藤廣 [建築家/東京大学名誉教授]、小泉雅生 [建築家/東京都立大学教授]、曾我部昌史 [建築家/神奈川大学教授]、中川エリカ [建築家/中川エリカ建築設計事務所代表]

内藤——この後のコンペ*の評価委員の小泉さんと曾我部さんと中川さんがいらっしゃるので、少しお話を伺いたいと思います。まずは小泉さん、いかがでしょうか。

小泉——僕は「社会的共通資本」という言葉が非常に重く響きました。公共建築は、今だどうしてもコスト、説明責任、法令遵守といったところが前面に出てくるケースが多いです。多くの人々がいろいろな恩恵をこうむる共通資本だと考えたときにもう一度、その建築のあり方が、ただ安きゃいいのか、そうじゃない

だろう、というような姿勢が必要ではないか、と改めて思いました。それがないと僕らの生活は成り立たない、そういう姿勢で我々も作っていくことが大事だと思いました。

内藤——曾我部さんはいかがですか。

曾我部——僕も「社会的共通資本」の話は重い話題として関心を持ちましたし、建築に愛着をどのように持っているか、そういう余地を残すか。という考え方にはっとさせられました。公共建築というと、行政の方が必要な建築、施設はこういうものであろうと予想した上で、それを達成するよう頑張ってきたと思うのですが、あるいは地域の子供たちが欲しいと思うものをどういうものかをきちんと把握した上でそれを実現してあげるのが公共建築、と変わってくるとすると、行

政側の公共建築を実現するスタンスそのものにも大きな変革が期待されるということなのかな、とお聞きしました。併せて、建築家としての我々の活動のタイプも、それに合わせていろいろ変わっていかざるを得ないのかな、と思いました。

内藤——曾我部さんは三陸に関わっていましたが、三陸での公共建築のあり方みたいなところはどうですか。

曾我部——難しいですね。私が関わったところでは、なるべく地域の方々の声を取り入れた建築にしようという努力はしましたが、そうならない機会の方が多かったようにも思います。あれだけのことがあっても、やはり行政が主導で何かを実現していくということ自体は、あまり揺るがなかったんじゃないかなという気がしています。



内藤——例えば、たくさんのワークショップをやったりしていましたが、それまでそういうことをあまり習慣として持っていなかった人たちがいきなりやったって無理だよね、というのもありました。行政の塩梅だってあるし。むしろ、日常からああいうことを年中やとくべきだったと思いました。そこで民主主義的な回路を入れていくことが非常時にも役立つんだ、というある種の予行演習みたいに捉えて、日常からワークショップ的な活動をやらせたいのかな、と思いました。中川さんはいかがでしょうか。

中川——ワークショップというのは、よりよく生きるための知恵を集める行いだと思っています。内藤さんがおっしゃるように、非常時の予行演習もかねて、その場に生きる方々の声を日頃から集めておくというのはとても素晴らしいですね。「建築とまちづくり」というテーマは、世代によって向き合い方に差が出るテーマではないでしょうか。内藤さんの世代と、私たちの世代では、おそらく実践の仕方が違う。お話



のあった3.11の震災はちょうど、社会に出てすぐの頃でした。日常を見直して、小さいことを長い年月をかけて壮大に繋ぎ、積み重ねていくことに興味を持っている人も多い世代です。私たちの世代だからこそ発することのできるメッセージはどんなものだろう?と思いを巡らせながら、今日のお話を伺いました。

内藤——若い世代の方の意見は良いですね。中川さんのお話に応えると、この国は長く厳しい局面が続くのではないかと考えています。それは環境的な意味や、災害という話も含めて、あまり楽観的には見れません。そのときに、何か建築が人々の心を支える、ちょっとお役に立てるみたいな話は、必ずあると思っています。私はそこに希望を託せるような対象として、建築はありうると思うのです。これからいろんなことがあるでしょう。今まで100年やってきて、でもこれからの100年は、いろいろなことがあるだろうけれど、人々の心の支えになるような公共建築がまち中に幾つもあれば、それは必ず人々の心の支えになると思います。横浜市の方には、ぜひそういう建物を作っていただきたい。

それから、まったく新しいまちづくりのロジックも出てくる可能性もあり、ひょっとしたらメタバースみたいなので、バーチャル横浜みたいなものを見ながら、どういうふう建物を作ったらいいのかみたいな話だって出



てくるかもしれない。でも、やっぱり最後は物なので。どれほどバーチャルの世界が広がっても、やっぱり最後は、人が頼りになるのは我が身の置き所ですね。そこが大事になると思いますので、そういうハードウェアとしての建築が最後の砦になるはずだから、横浜は東京では成り立たない、横浜の「アイデンティティ」みたいなものをぜひとも確立していただきたいなと思っています。それが必ず、人の支えになると考えています。

※令和4年8月22日同日、講演会の後に根岸森林公園新築トイレ設計コンペの公開2次評価が行われた。詳しくは第4章「根岸森林公園新築トイレ設計コンペ」を参照

小泉 雅生
[建築家、東京都立大学教授]

曾我部 昌史
[建築家、神奈川大学教授]

中川 エリカ
[建築家、中川エリカ建築設計事務所代表]



これまでも、これからも、横浜らしく



ファシリテーター：山家 京子 [神奈川大学教授]、パネリスト：小泉雅生 [建築家/東京都立大学大学院教授/小泉アトリエ主宰]、乾 久美子 [建築家/横浜国立大学教授/乾久美子建築設計事務所主宰]、五十嵐 太郎 [建築史・建築批評家/東北大学大学院教授]、肥田 雄三 [横浜市建築局公共建築部長]
協力：一般社団法人 横浜建設業協会、横浜市建築設計協同組合

令和4年11月12日、「よこはま建築ひろば シンポジウム」を、横浜市役所3階議会棟多目的室で開催しました。建築のプロフェッショナルにご登壇いただき、各登壇者から活動についてプレゼンテーションしていただいた後、「これまでも、これからも、横浜らしく」をテーマに、ディスカッションいただきました。当日は約110人の方にご参加いただきました。以下、当日の内容を一部抜粋して紹介します。

横浜らしさ

山家——イントロダクションとして、「横浜らしさ」についてパネリストの皆さんにお伺いします。「横浜らしさ」はいろいろあると思いますが、空間的特徴や建築の特徴など、それぞれがイメージするところをお話いただければと思います。まずは、五十嵐さんからお願いできますか。

五十嵐——あくまでも僕の世代で個人的な体験からですが、自分が建築史の研究室出身だったので、大正とか昭和に西洋の様式のデザインが入ったタイプがよく残っている街として認識しました。残った建物も転用されて再

活用されているというのが、自分の中では大きな横浜のイメージです。

横浜博覧会 (YES'89) のときには、横浜美術館が「みなとみらい」にほとんど何も無いときにポツンと公共建築として建っていて、それが妙に未来的だなと思った記憶があります。公共建築ではないですが、ランドマークタワーも当時日本で一番高い建築で、すごく未来的なイメージでした。また、自分が批評の文章を新聞で書くようになった最初は、大さん橋ターミナルだったので、先端的な建築が登場する街だと思いました。だからちょっと過去と未来の両方の面がありますね。

もう一つは、個人的にも付き合いがあったBankART。代表の池田修さんが今年亡くなられましたが、建築とアートを繋げて盛り上げていくことをずっとやられていたので、僕の中ではとても印象が強いです。

ちょっとトリッキーな言い方ですけど、コロナ前に上海に行って、新しい建築がすごい元気で、未来的な建築が増え、なおかつ現代アートがすごい盛んです。なので上海を見て「横浜らしいな」って、ちょっと思いました。

山家——最後の上海に「横浜らしさ」を感じるというのは非常に面白いご意見だなと思いました。続いて乾さんお願いします。

乾——横浜国立大学に行くようになって7年目ですが、それまで観光で時々来るぐらいで、そこまでイメージはありませんでした。ただ建築や都市を勉強する中で、都市デザイン室がある市で街作りをしっかりとやられることや、「みなとみらい」や創造都市という政策など、非常に先進的な試みを積極的にやっているというイメージを持っていました。

その後、横国に通うようになり、建築学科の学生がいろいろな敷地でいろいろな課題を見つけて、プロジェクトを考えるのですが、彼らが見つけてくる場所は都市部ではなく、どちらかといえば郊外が多いのです。

そうしたプロジェクトを指導する中で、臨海部以外が非常に広大で、課題と魅力が結構あるということがよく分かってきて「臨海部ではない横浜らしさ」も考えるといいんだろうなと思っています。

山家——学生を通して見る、発見する横浜、というのは私も常日頃感じております。小泉さんいかがでしょうか。

小泉——僕もちょっとトリッキーな言い方をすると「横浜らしさ」って、やっぱり東京との関係を抜きには語れない気がします。だから「横浜らしさ」って「東京とは違うぞ」という、そこに尽きるんじゃないかという気がします。東京の近郊にあって、でも、東京とは違う歴史的・文化的な背景を持っていて、ポテンシャル

「先進的である」ことが、「横浜らしさ」のキーワードになりそうです。

もある。だとすると東京とは違う街の作り方、街のあり方を目指すべきじゃないかと。それが「横浜らしさ」という気もしています。やはり東京が経済、あるいは政治の中心であって、そこである種のスタンダードが決まられていくという流れがあるにせよ、横浜は、そこはちょっと距離を置いて、ちょっと違うんだぞっていうのを言い続けていくことが大事なんじゃないか。そこそ何が何か「横浜らしさ」に繋がるんじゃないか、と思ったりしています。横浜って、そういう意味で、都会というより「大きな田舎」なのではないかという気がしています。大きくなりつつも田舎であり続けるというか、それをどうしたらいいのかを模索していくというのが一つの横浜のキーなのかも思っています。

肥田——「横浜らしさ」について私からも。

私は東京生まれで、就職で横浜に来て30年位です。最初来たときに思ったのは、進取の気性、何か新しいことに積極的に取り組むところが横浜の気質なのかなと思っていました。ですが、最近それが残っているのかと言われると、どうだろう、という感じもちょっとしています。新しいことにチャレンジする気質がだんだん失われてきているというのは、反省として思ってい

るところです。

山家——「横浜らしさ」を今後どう考えていくかというのが、このセッションの課題だと思います。まず「先進的である」ことがキーワードになりそうです。また、都市デザインが地域空間資源、はっきり言うと「観光資源」として人が呼べるというのは、なかなか他の都市にはないような気がします。都市空間の魅力だけで十分に人を惹きつけるというのは、今後大事にしたいところだと考えています。



公共建築のあり方

山家——続きまして、「公共建築のあり方」についてです。公共建築は、今回のメインテーマでもあります。100年のパースペクティブで見ますと、大きく社会が変わってきています。100年前と比べますと、あるいは2000年代ぐらいに遡るだけでも、求められる公共建築のあり方は変わってきている気がします。その辺りの「社会課題と求められる

公共建築」について、五十嵐さんは多くの著述があります。歴史的に担ってきた役割も含め、少しお話しいただけないでしょうか。

五十嵐——横浜に限らないですが、公共建築の2000年代以降の流れで、ものすごく変わったと思うのは、ワークショップとか、住民の意見を設計のプロセスに入れるタイプの作品が増えました。建築家が、一方的に形と空間を与えていたものが、2000年代の途中ぐらいから公共建築の作り方が劇的に変わって、その上で高い評価を得ている建築が増えています。

少し「らしさ」を補足すると、JIA東北支部の東北住宅大賞の審査員を10年間ぐらい、古谷誠章さん（早稲田大学）とやっていて、評価項目に「東北らしさ」というのがあります。これは企画しているJIAが入れているのですが、いつも困るのです。東北らしさってなんだろう、と考えることには意味があるけど、これが東北らしさと決めてしまうのはちょっと違うと思います。「問いを続けることには意味がある」とは思うのですが。どうしても「なんとからしさ」となると、それは枠に入るけど、これは入らないって排他的になる。建築でも言えることで、みんな考えるベタな「横浜らしさ」だけではなく

ある種の「冗長性」というか、少し状況が変わっても対応できるような何か余剰なものを抱えている方が、長期的には可能性があると思うんです。

て、それこそ乾さんが学生とのいろいろな話の中で発見していく「何か、これも横浜らしさではないか」みたいな、そういう「発見的なもの」が建築のプロジェクトを通じて出てくるとすれば、凄くいいなと思いました。

乾——求められる公共建築ですが、例えば地方都市に行くと、商店街も完全にシャッター街化していたり、中心市街地にほとんど人がいなかったりなど、誰が見ても明らかな問題がある状況かと思えます。そうした中で公共建築が起死回生のチャンスとして、非常に強く求められていて、それを失敗しちゃいけない、という使命感とともに建てられるようなことがあると思います。失敗しないためには、「やっぱり住民に話を聞かなければいかん」という思考回路があって、五十嵐さんがおっしゃられたみたいに、市民の意見を丁寧に吸い上げて、ちゃんと反映していくようなプロセスを重視するプロジェクトが実際に増えていると思います。

小泉——プロセスを重視していくと、だんだん説明できないものは実現できない、説明しにくいものは避けるみたいな方向に行くんですね。でも一方で、やっぱり説明し難い魅力みたいなものってあると思うんです。そ

れを建築の中でどう拾っていくのか考えていかないと、だんだん説明はしやすいけど、でもなんとなく魅力ないよなって。それで、長い歴史に耐えるような公共建築、あるいは長く愛されるような、住民のシビックプライドを醸成するような建築が、あるいは街並みができるだろうか、ということが結構悩ましいと思っています。

五十嵐——説明が今強く求められるけれど、説明できない価値もある。例えば仮に、たった今パーフェクトに説明できても、それは10年後20年後同じかというと、どんどん状況が変わっています。ベストフィットというよりは、ある種の「冗長性」というか、少し状況が変わっても対応できるような何か余剰なものを抱えている方が、長期的には可能性があると思うんです。今作っているものが100年後に残るかどうか、その可能性を考えたいなという感じはありますね。



山家——「冗長性」は都市のレジリエンスを考えるときにも、非常に大事なキーワードです。社会課題の変容と求められる公共建築を考えるときの一つのキーワードかな、と実は私も考えていました。公共建築が建てられるようになった頃は、小学校といえば小学校、病院といえば病院といったように、ビルディングタイプが明確にあったんだと思います。それが複合化されたり、人々が居場所を求めるようになって、その公共建築が持っているビルディングタイプの機能を満たすだけではフィットしなくなってきている。つまり、空間の質や冗長性が求められるようになってきているんだと思います。

肥田——今の点について、居場所だったり、ちょっとした余裕、それが長持ちするとか、長く愛されるということ、今の時代はそういう居場所が求められていること、これらを市役所内部でどう説明していくのか、我々が課題として持っています。税金を納めている人全員に対して、こういった余裕が必要ですよということを説明できないといけないと思うのですが、なかなかできていないのが実情かもしれません。

乾——我々建築設計をやっている人間は、複合化に可能性を見出しているように思います。思

市民の方がただコストだけじゃなくて、俺たちの居場所をもうちょっとちゃんと作ってくれよ、って言えばいいわけですよ。

わぬ組み合わせがなぜか居場所になってしまう偶然性みたいなものを、複合化によって副次的に得ることができるのではないかと期待しているのです。だから居場所を作ることが必ずしも面積を必要としないのかと思います。

小泉——先ほどの肥田さんの話を受けると、最終的な意味合いでの発注者である「市民のリテラシー」を高めていくことではないかという気はします。

今、市民と対話をするプロセスが徐々に定着しつつある中で、市民の方がただコストだけじゃなくて、俺たちの居場所をもうちょっとちゃんと作ってくれよ、って言えばいいわけですよ。市民の建築に対するリテラシーを高めていくことも、遠回りのようで大事な気がします。



設計のプロセス

山家——今の小泉さんのお話や五十嵐さんの住民参加のお話

でも、公共建築事業あるいは設計のプロセスについても触れられていました。そのあたりについて、乾さん小泉さんいかがでしょうか。

小泉——僕が先ほど寿町のプロジェクトを紹介しましたが、僕らが常識と思っていることと違うことを対話で言われることがあります。建築計画とか建築学の中でセオリーみたいなものがあるのですが、実際はそれとは違うことが多々あって、使う人間が介在して初めて明らかになる事実みたいなものがいっぱいあるわけですよ。それは対話を通じてしか分からないことなので、そういう意味では「対話をしていく流れは間違いない」という気はしています。

乾——私も思わぬ発見を期待してワークショップをやっています。自分で解答を作ってワークショップに臨むと、だいたい大失敗して、面白い意見が聞けないというふうになります。このプロジェクトがどうなってもいいから、皆さんが何を考えているか聞きに行こうという感じで行ったワークショップは、創造的になっていくというか、面白い意見がどんどん出てくるというのはあるかと思えます。先ほど五十嵐さんの市民ワークショップを通して作る建築が歴史に残るのか問題です

けれど、もし残るとするならば、意見によって生まれた「奇妙な集合知」みたいなものが形になれば、それは現代のある姿として、歴史に残るんじゃないかなという期待感があります。



肥田——私もワークショップを以前やったことがあります、あまりうまくいかなかった思いが強いです。市役所側から見ると、最大公約数にしかなくていけない、いろんな人からいろんな意見を聞いて皆さんの意見を全部反映させると、それはできない、みたいなことになっていて、あまりいいものが生まれにくいイメージがまだ残っています。

山家——その辺が、先ほどの乾さんの「奇妙な集合知」というところに含まれているのかなと思いました。肥田さんがおっしゃる、最大公約数的な、あるいはワークショップのうまくいかない感じというのは街づくりの現場で日々体験していますので、よく理解できます。

意見によって生まれた「奇妙な集合知」みたいなものが形になれば、それは現代のある姿として、歴史に残るんじゃないかなという期待感があります。

これからの「横浜らしい」公共建築

山家——「横浜らしさ」と「公共建築のあり方」について話をいただきましたが、最後に「これからの横浜らしい公共建築のあり方」について、一言ずつお願いします。

五十嵐——ワークショップを通じた建築、すでに建築学会賞で高く評価され、いくつか受賞している、歴史に残るような物というのは出てきていると思います。建築の世界だと大さん橋ターミナルは、90年代になってコンピューターが設計に導入されるようになって、一つの成果としてああいう形が出来るということ、高く評価されていますが、多分そんなこと関係なしに、上のデッキの部分で、自由に楽しんでいる人を見ていると、それとは別の価値というか、気持ちのいい場所として成立している。そういう建物をもっと横浜で増やしていただきたいなと思います。

乾——「横浜らしさ」と「これからの横浜らしい公共建築のあり方」ということで、建築がどこまで関われるか分からないですけども、横浜というのは、複雑な地形の丘陵地が急速に都市化した場所が多い。高低差が激しく、交通的にも弱い所が高齢化を迎えて

厳しいところも多いと思っています。それをどうやって未来の街へ変えていけるのか、ということに対して、横浜市のような大きな自治体が取り組むことで、突破口を開いてほしいと思います。「横浜らしい」というのが、郊外にも明確なイメージとともに感じられるようなものになると素晴らしいのではないかと想像しています。

山家——私の研究室では、郊外住宅地のまちづくりをお手伝いする機会があるんですが、横浜の郊外にも課題を抱えているところがあります。個人や地域でやれることももちろんありますが、空間整備など公共に期待されることも多くあるように感じています。

小泉——僕は横浜へのエールというか、常識にとらわれず、チャレンジし続ける街であって欲しいなと思います。そのためには、行政が頑張る部分もある一方で、住民の意識が変わっていく、変えていくことも大事な、という気がしています。そういう意味では、横浜は行政体の規模が大きい分、住民と行政との距離が少し出来始めてしまっているのではないかな。だから、住民と行政と一緒にやれば、常識というものを超えていく一つの手がかりになるのではないかなという気がしています。

良い建築、人々の心の支えになる公共建築を作っていきたいと思います。

肥田——「良い公共建築を作っていきたい」、「今回を機に色々考えていきたい」という思いで参加しましたが、小泉さんがおっしゃるように「常識にとらわれずに」というところは、確かにそのとおりだと思いますし「公共だけじゃなくて市民と一緒に」というところが、とても参考になりました。そこをしっかりとやってかなきゃいけないと思っております。

山家——ここで簡単にまとめさせていただきます。最初に、「横浜らしさ」について、「先見的、先取である」とか、「東京とは違う横浜の立ち位置」といったお話がありました。そうした中で「らしさというのは発見するものである」という重要なご指摘もありました。横浜の大さん橋のお話が出ましたけれど、「横浜らしさ」を追求するだけでなく、「新しいものを付け加えていくこと、それも横浜らしさ」と思ってお聞きしていました。一方で、いわゆる「先見的であること、そうした積極性みたいなものが、ここ最近元気がない」というお話もありました。そのあたりの元気が出る仕組みも、今後必要かと思われました。公共建築に求められるものとして「住民参加と居場所」がキーワードになっているように思います。建築家の乾さん、小泉さんの話を伺っていますと、余剰スペースではなく、「複

合化やデザインの中で、居場所は確保される」。そんなふうに関心強く感じたところです。「住民参加といったものが後世に残る建築に繋がっていくのだろうか」という点でも、「知恵を出し合いながら、うまくやっていると、いい建築、残る建築が作れる」のではないかな、と思います。

いろいろなご意見をいただきましたけれども、ここにいるみなさんは、横浜に「ぜひこれからも良い公共建築を作っていただきたい」という思いをお持ちです。これからも横浜らしい建築を作っていただきたいですし、私達と一緒にやれることがあれば、一緒に考えていきたいと思っております。



肥田——今日は活発なご意見ありがとうございました。今日いただいたものがヒントになると思います。良い建築、人々の心の支えになる公共建築を作っていきたいと思います。ありがとうございました。

山家 京子
[神奈川県立大学建築学部教授]
東京大学大学院博士課程修了、博士(工学)。専門は都市計画、まちづくり。主な著書に『横浜建築』(共著、御茶の水書房、2021)、『アジアのまち再生』(共著、鹿島出版会、2017)、『建築・都市計画のための調査・分析方法 [改訂版]』(共著、井上書院、2012)など。

小泉 雅生
[建築家/東京都立大学大学院教授/小泉アトリエ主宰]
東京大学大学院在学中にシーラカンスを共同設立。同大学院修士課程修了。主な作品に、「象の鼻パーク/テラス」(第14回環境・設備デザイン賞最優秀賞)、「港南区総合庁舎」(第21回JIA環境建築賞優秀賞)など。主な著書に『環境建築私論』(建築技術、2021)など。

乾 久美子
[建築家/横浜国立大学教授/乾久美子建築設計事務所主宰]
東京藝術大学美術学部建築科卒業、イェール大学大学院建築学部修了。主な作品に「延岡駅周辺整備プロジェクト延岡駅前複合施設エンクロス」(2020年日本建築学会賞(作品)など)、「宮島口旅客ターミナル」(2021年第13回JIA中国建築大賞2021一般建築部門奨励賞)など。

五十嵐 太郎
[建築史・建築批評家/東北大学大学院教授]
東京大学大学院修士課程修了。博士(工学)。あいちトリエンナーレ2013芸術監督、第11回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展日本館コミッションを務める。「インボッシブル・アーキテクチャー」などの展覧会を監修。『誰のための排除アート?』(岩波書店、2022)ほか著書多数。

肥田 雄三
[横浜市建築局公共建築部長]
平成5年度入庁。横浜市風力発電事業(ハマウイング)や、3区(南区、金沢区、港南区)庁舎の建替事業、市民病院再整備事業を担当後、建築局営繕企画課長を経て令和3年度から現職。



よこはま建築ひろばシンポジウム「これまでも、これからも、横浜らしく」動画

こどもワークショップ・関連イベント



令和4年11月12日(土)、横浜市役所1階アトリウムをメイン会場に、「よこはま建築ひろば こどもワークショップ」を開催し、関連イベントと合わせて、延べ約3,400名の方にご参加いただきました。

当日は、子どもたちが建築に親しむきっかけづくりを目的とした「こどもワークショップ」に加え、市役所内部や周辺の公共建築を巡るデジタルスタンプラリー、横浜市開港記念会館の改修工事現場見学会、市役所最上階にあるレセプションルームの特別開放、ガス・電気設備の歴史に関する展示など、様々な関連イベントを開催しました。

ワークショップの参加者からは「建築に興味があった」「普段体験できないことができて楽しかった」という声をいただくなど、多くの団体・企業等のご協力のもと、多くの方に建築に触れ、学び、楽しんでいただけるイベントとなり、大盛況のうちに終えることができました。

折り紙建築ワークショップ



切り込みが入った一枚の紙を折り、建物に変身させるワークショップです。折り紙建築家の茶谷 亜矢氏のご指導のもと、横浜市の代表的な公共建築物である横浜市役所及び横浜市開港記念会館を題材に、小学3～6年生の子どもたちが“紙が立体になる不思議”を体験しました。

集中力が必要な細かい作業でしたが、「難しかったけど楽しむことが出来た」、「達成感があった」という声をいただきました。

出展	公益財団法人 横浜市建築保全公社
講師	茶谷 亜矢氏 [折り紙建築家/ 有限会社オリガミックアーキテクチャー代表]
対象年齢	小学3～6年生
タイムテーブル	① 10:00～、② 12:30～、③ 14:30～
参加者数	47人 (3回合計)

工作！お家で使える延長コード作り



建物の中には、見えないところに電気配線が広がっています。お家で使える100Vの延長コード作りを、小学生の子どもたちが保護者の方と一緒に体験しました。ドライバーを握り、一生懸命に部品を組立て、最後に電球をつないでテストを行いました。電球が無事に点灯すると、喜ぶ子どもたちの顔が見られました。

「コンセントの中身を初め見た」「貴重な体験ができた」という言葉とともに多くの子どもたちが楽しみました。



出展	一般社団法人 横浜市電設協会
対象年齢	小学1～6年生
タイムテーブル	① 10:00～、② 11:30～、 ③ 13:00～、④ 14:30～
参加者数	91人(4回合計)

とび出す建物に色をぬろう



横浜市役所、横浜赤レンガ倉庫、大佛次郎記念会館、横浜美術館、横浜市開港記念会館、麒麟舎(よこはま動物園ズーラシア)が描かれている紙に、自由に色を塗るワークショップです。紙には切込みが入っていて、折るとあら不思議!建物を立てて飾ることもできます。

子どもたちからは、「楽しかった」「建築士の道にいきたい」という声も出るなど、建築に興味を持つきっかけとなるようなイベントになりました。

出展	一般社団法人 神奈川県建築士事務所協会 横浜支部
対象年齢	3歳～小学3年生
タイムテーブル	10:00～15:30(随時受付)
参加者数	170人



空間ワークショップ



グループで協力して、2種類の木の角材とジャンボ輪ゴムで家を建築していくワークショップです。「強い構造を作るにはどうすれば良いのか」「どんな空間にしたいのか」等と考えながら、仲間と一つの家を建てる体験を行い、建てたあとは全員で解体・片付けをしました。

「家の作り方がわかった」「協力してできて良かった。友達ができた」という感想をいただくなど、実りあるワークショップとなりました。



出展	公益社団法人 日本建築家協会 JIA 神奈川
対象年齢	小学4年生～中学3年生
タイムテーブル	① 10:00～、② 13:00～
参加者数	52人(2回合計)



間伐材で作るオリジナルコースター



2004年から山梨県道志村の水源林を中心に間伐活動を行っている団体に参加いただきました。間伐材を市内の公共建築に供給していただいた実績もあります。

ワークショップでは、子どもたちが自らつくるをテーマに、自ら丸太をのこぎりで切り、木の実で飾り付けたり、色を塗ったり、創意工夫が詰まったたくさんの作品が出来上がりました。「初めての体験だったけど、面白かった」などの感想をいただきました。

出展	道志間伐材活用横浜 サポート隊 どんきい〜ず
対象年齢	4歳～小学6年生
タイムテーブル	① 10:00～、② 11:00～、③ 13:00～、④ 14:00～、⑤ 15:00～
参加者数	50人(5回合計)

よこはま建築ひろば こどもワークショップ
建設重機・機械工具 体験会



建設工事に欠かせない、重機や手押し輪車に触れることができるワークショップです。重機コーナーでは、めったにお目にかかれないコンパクトトラックローダーへの乗車体験や記念撮影を行いました。また、手押し輪車コーナーでは、曲がりくねったコースでボールを運び、タイムを競いました。「重機に乗れて思い出になった」「ボール運びが楽しかった」という声とともに、多くの子どもたちが、普段は出来ない体験を楽しみました。



出展	横浜建設業青年会
対象年齢	小学1～6年生
タイムテーブル	10:00～16:00 (随時受付)
参加者数	294人

関連イベント
デジタルスタンプラリー



スマートフォンを使用したデジタルスタンプラリーを実施しました。市役所内のみを巡る「市庁舎コース」と、市役所周辺の公共建築を巡る「公共建築コース」の2つを用意。参加者は二次元コードから専用ウェブサイトへアクセスし、各施設に設置されたクイズに答えてスタンプをゲットします。スタンプを集めた方には100周年ロゴを印刷した記念品を配布しました。



記念品 (左からカトラリー、エコバッグ、マグカップ)

協力	神奈川県官庁営繕協議会
参加者数	639名
対象施設	横浜市役所、横浜人形の家、旧第一銀行横浜支店、象の鼻テラス、横浜マリンタワー、THE BAYS、横浜税関、横浜港大さん橋国際客船ターミナル、関内ホール

工事現場見学会「横浜市開港記念会館」



「文化財の維持保全」のために長期休館を伴う改修工事中の「横浜市開港記念会館」で、一般向けの工事現場見学会を実施し、子どもから大人まで幅広い年代の方々に、ご参加いただきました。

冒頭で、開港記念会館の歴史や工事内容を説明し、その後、工事期間中にしか見ることができない「壁の漆喰塗り」や「表面仕上げを撤去した後のレンガ造の壁部分」等を紹介しました。



協力	清水建設株式会社
タイムテーブル	① 10:00～、② 11:30～、 ③ 13:30～、④ 15:00～
参加者数	58人(4回合計)

31階からの景色を見よう

国内外からの賓客のおもてなしや、表彰式などの様々な記念行事に活用している31階レセプションルームを一般開放し、周辺の眺望を楽しんでいただくとともに、模型や動画を活用して市庁舎建設時の紹介等を行いました。



ナゾ解き！ よこはま市役所 アドベンチャー

主催：総務局管理課

市役所館内周遊企画として、謎解きイベントを実施しました。当日は、市役所1階にて、来場者へ謎解き冊子を合計865枚配布しました。館内各所で謎解きを楽しむ方が見られ、市役所の賑わい創出に繋げることができました。

ガス・電気設備展示

出展：東京ガスネットワーク株式会社、
東京電力パワーグリッド株式会社、
東京電力エナジーパートナー株式会社

共創フロントで公募を行い、3社と連携してガス設備・電気設備の展示を行いました。100年前に使用されていた貴重なガス・電気メーター、配管・配線、ガス灯や白黒テレビ等、歴史ある設備の展示に加えて、最新の設備展示を行いました。



横浜市こどもの美術展2022



「横浜市こどもの美術展2022」の展示風景 (Photo:Ken KATO)

「たてもの」をテーマに 子どもたちの絵画作品を募集

「横浜市こどもの美術展」は、毎年、子どもたちの絵画作品を募集し、賞を設けずに応募した全ての作品を展示しています。2022年は「自由テーマ部門」に加え、「横浜市公共建築100周年事業」の連携プログラムとして「たてもの」をテーマに開催されました。10日間の会期中、子どもたちが自由な発想でのびのびと描いた作品が並び、ご家族づれを中心に多くの方でにぎわいました。

主催	横浜市民ギャラリー
会期	令和4年7月22日(金)～7月31日(日)
会場	横浜市民ギャラリー 展示室1～3
出展点数	たてもの部門221点、自由テーマ部門126点 合計347点



こどもの絵画作品 LEDビジョン投影



こどもの絵画作品LED ビジョン投影風景

横浜市民ギャラリーと連携し、 子どもたちの作品219点を投影

アトリウムの大型LED ビジョンに「横浜市こどもの美術展2022」の応募作品のうち、「たてもの」部門の219点(0歳～小学校6年生)を映し出しました。会場では、大画面に投影された作品を背景に、多くの子どもたちや家族が写真を撮っていました。



学校建替え工事 出前授業

[都岡小学校] 設計者：八板建築設計事務所／施工者：小保・サカクラ建設共同企業体
説明及び現場見学：令和4年11月15日（4～6年生） 施工体験：令和4年11月28日（6年生）

[汐見台小学校] 設計者：株式会社アーキシップスタジオ／施工者：戸田・京急・土志田建設共同企業体
説明、現場見学及び施工体験：令和5年2月14日（6年生）

学校建替え工事の現場で、児童に建築の魅力を伝え、建設に興味を持ってもらうとともに、来年度から供用する新しい学校に愛着を持ってもらうために、在校生を対象に「出前授業」を実施しました。

都岡小学校



汐見台小学校



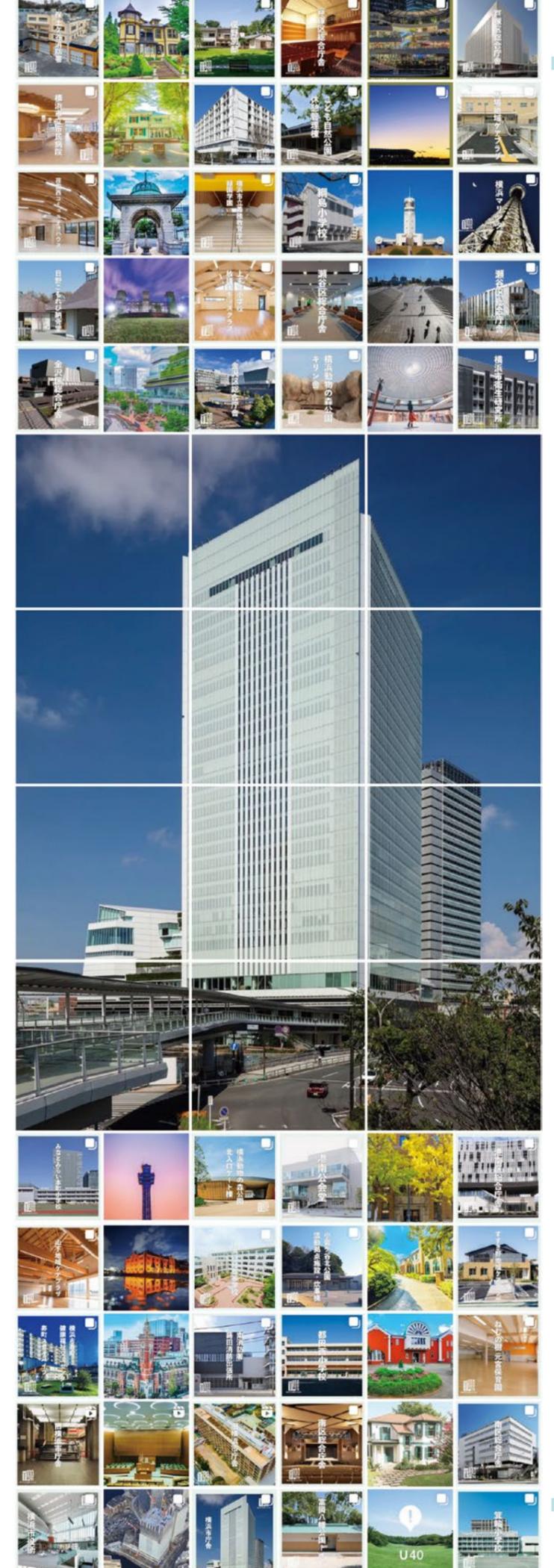
Instagram



「横浜市の公共建築の魅力発信」をテーマに令和4年4月1日からInstagramを開始しました。

工事完了時に撮影した公共建築物の完成写真に、設計意図を添えて紹介しています。

また、「#横浜公共建築」を使ってユーザー投稿を呼びかけ、魅力的な投稿を定期的にリポストし、横浜市の公共建築の魅力を発信しています。



Instagramアカウント
@yokohama_
kokyokenchiku

よこはま建築フォトコンテスト



公共建築の魅力発信のため Instagramを活用

公共建築の魅力を発信するためにInstagramの#(ハッシュタグ)を活用した「よこはま建築フォトコンテスト」を実施しました。

様々な横浜市内の建築物をおさめた816点の応募の中から、ゲスト審査員、建築局、建築保全公社の審査により、入賞作品全15点を選出しました。

ゲスト審査員



森 日出夫
[写真家]

横浜市生まれ。JPS(日本写真家協会)所属。長年撮り続けた横浜の港・街・人を「森の観測」と名づけ、独自の感性で森の「記憶」を記録する。ニューヨーク ADC MERIT AWARD 受賞。第50回横浜文化賞奨励賞受賞。写真集「YOKOHAMA PASS ハマのメリーさん」刊行。写真集「SCENERY of Yokohama」1~3刊行 他。

スケジュール

募集期間 令和4年11月11日~令和5年1月10日
結果発表 令和5年2月22日
市役所展示 令和5年3月4日~3月31日

募集テーマ

「これまで、これからも、横浜らしく」をテーマに、横浜市内のおすすめの建築物、思い出の建築物、これからも大切にしたい建築物など、応募者が思う「横浜らしい建築物」をおさめた写真を募集

応募状況

作品数 816点
投稿数 532投稿
建物数 144種類

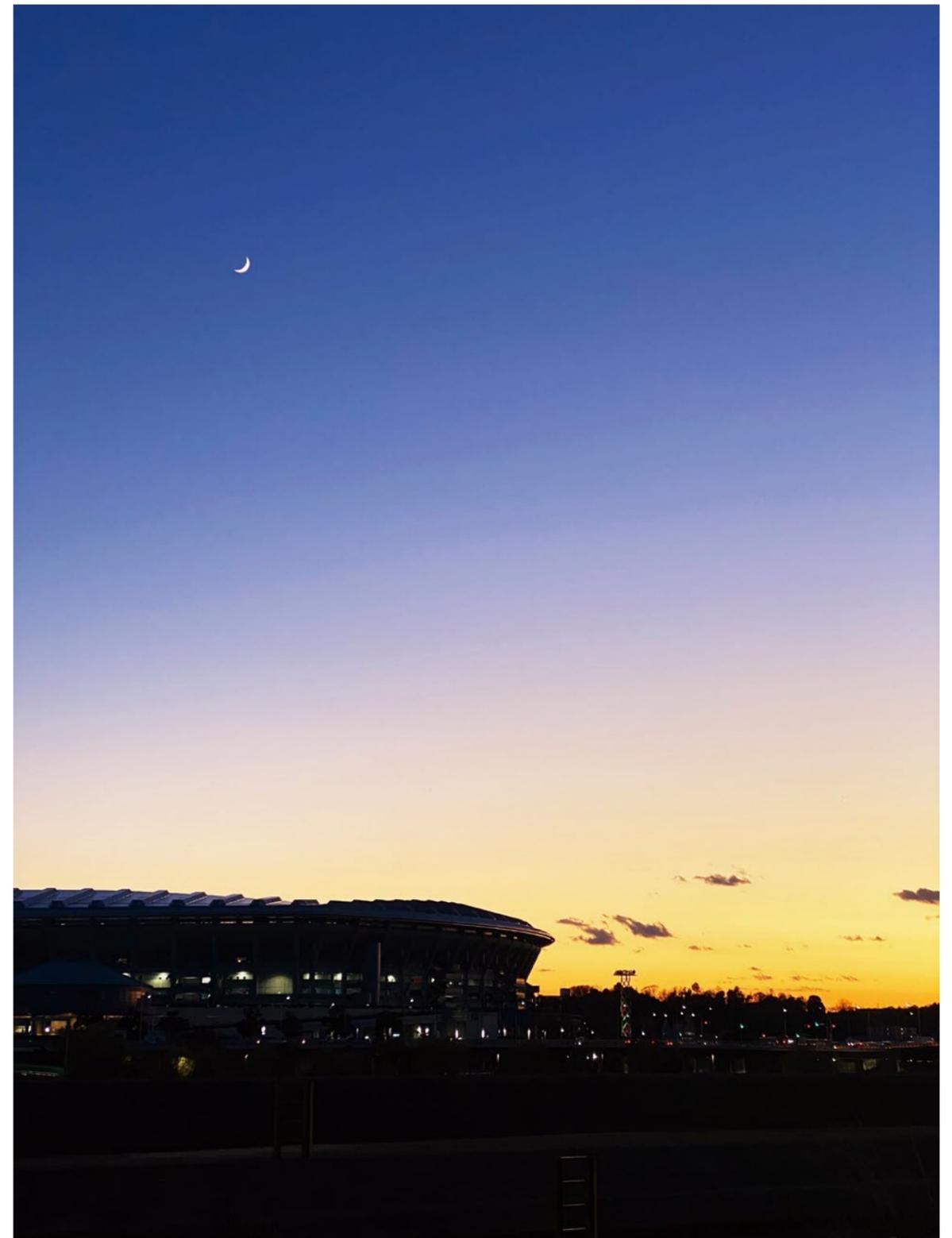
市役所での作品展示

● 最優秀賞・優秀賞展示

「横浜市公式Instagram写真展」で展示しました。
[展示期間] 令和5年3月4日(土)~3月24日(金)
[展示場所] 横浜市役所2階 展示スペース

● 入賞作品展示

多くの方に横浜の建築物の魅力を発信するため、入賞作品の展示と、応募作品をサイネージで投影しました。
[展示期間] 令和5年3月25日(土)~3月31日(金)
[展示場所] 横浜市役所1階 展示スペースA



最優秀賞

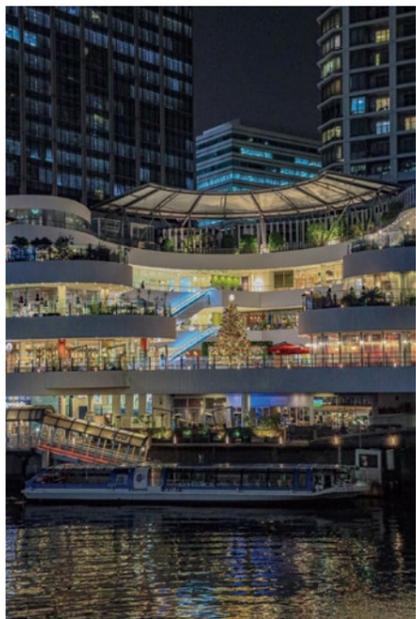
日産スタジアム

日産スタジアムと月

@campione_siena

審査員コメント:太陽が沈み夕陽がスタジアムの上部にディテールを残したシルエットが美しい。広い空の中にスタジアムの存在感が確かにあり、頭上の月も絶妙なタイミングである。

優秀賞



横浜ベイクォーター
横浜ウエーブ
@_toki_photograph

審査員コメント：豪華客船が港に着岸しているような絵で、背景のマンションと重なってふと海外の風景のような錯覚を覚える。シーバスも入り良いシャッターチャンスである。

横浜市役所
願いを込めて
@kdo.yokohama2



審査員コメント：横浜市民にはもう馴染みの場所となった場所だが、さくらみらい橋にも映っているスローシャッターの軌跡が上手く活かされ、バランスの良い作品となっている。

佳作

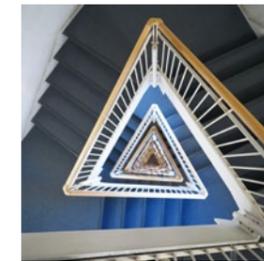


赤レンガ倉庫
秋の赤レンガ倉庫
@ayane_cantable

横浜マリニタワー
大さん橋ふ頭ビル
雨後-黎明
@efs1855mm



赤レンガ倉庫
チルリたいときにおすすめな場所
@gen.kenchiku



横浜市中央図書館
知の螺旋
@k_rush_hour

横浜税関
夜の散歩道
@lovelynoel283



三溪園 臨春閣
美しい秋空と日本家屋
@m_mintrose

建築局長賞

旧根岸競馬場一等馬見所
夕暮れの根岸競馬場跡
@roshi_1010

建築局長コメント：今は無き競馬場の喧騒と、遠くに見える高層建築物の対比が歴史を感じさせる作品。夕日と雲の流れも相まって時代の流れを想起させ、より建物の深みが増している。



建築保全公社理事長賞



横浜ランドマークタワー
横浜みなとみらい21
@jourey_me__

建築保全公社理事長コメント：ランドマークタワーだけでなく、市役所、赤レンガ倉庫、大さん橋、遠くには横浜港シンボルタワーなど横浜を代表する建築がまるで宝石のように散りばめられ、普段は見るできない特別な横浜を表現した作品である。

ザ・カハラ・ホテル
&リゾート 横浜
透過
@sa_a_10



ホテルニューグランド
銀杏が良く似合う
ホテルニューグランド
@yoshirou.46

横浜開港資料館
彩りの歴史～Yokohama
Archives of History
@oboh_0202new



旧根岸競馬場一等馬見所
未来のミライの丘
@tomofuminagayama





横浜市会 本会議場

未来に向けて

これからも横浜らしく

公共建築100年を迎えた2022年は、本市の人口が2年連続で減少という大きな節目を迎えました。人口減少社会のなか、持続可能な市政を維持していくために、公共建築は施設の機能を低下させることなく、市民サービスの場を確保することに取り組んでいく必要があります。

また、地球規模での環境課題である脱炭素化社会の実現を目指して、再生可能エネルギーの導入や環境性能の高い施設の整備、木材の積極的な活用が求められています。

建築課発足以降これまでの100年、関東大震災や横浜大空襲からの復興、人口急増への対応など、その時代における様々な課題の解決を図るため、公共建築の整備・保全を行ってきました。講演の中で内藤廣さんは「公共建築は、人々を励ますもの」とおっしゃっています。さらに、シンポジウムでは、「市民の居場所」を提供し続けることが望まれました。これは、約30年前に提唱された「横浜 commons」の『共有地・共有スペース』の考え方にも通ずるものです。

公共建築の未来に向けた取組は、一つひとつそれぞれの施設整備の中で検討し実現していくものであり、市民のみならず、建設業界のみならずの協力のもとで実現できるものと確信しています。

これからも「横浜らしい」公共建築の整備を目指していきます。

横浜市公共建築100周年事業
プロジェクトメンバー 一同



巻末資料

公共建築リスト

庁舎

学校

住宅

木造化施設

参考文献・資料

横浜市公共建築物に関する組織体制

横浜市公共建築100周年事業プロジェクトメンバー

公共建築リスト—庁舎

本市が建設又は取得した建築物を記載しています。／所在地は行政区画や町名変更により現在とは異なるものがあります。／竣工年は年度の場合もあります。／竣工年の () 内は庁舎としての使用開始年です。／ (▲) は現存していません。



施設名	所在地	竣工年	備考
● 市庁舎・区庁舎			
初代市庁舎	本町一丁目	不詳 (1889)	旧横浜電信分局を転用 (▲)
2代目市庁舎	港町一丁目	1911	(▲)
3代目市庁舎	桜木町二丁目	1923	中央職業紹介所を仮庁舎として代用 (▲)
4代目市庁舎	港町一丁目	1925	1927年より内部に中区役所を設置 (▲)
鶴見区庁舎 (旧)	鶴見区鶴見町	1925 (1927)	旧鶴見町役場を転用 (▲)
保土ヶ谷区庁舎 (旧)	保土ヶ谷区岩間下町	1926 (1927)	旧保土ヶ谷町役場を転用 (▲)
磯子区庁舎 (旧)	磯子区磯子町	1927	(▲)
神奈川区庁舎 (旧)	神奈川区青木町	1927	(▲)
中区庁舎 (旧)	中区桜木町	1929 (1942)	旧興産館を転用 (▲)
港北区庁舎 (旧)	港北区篠原町	不詳 (1939)	大綱小学校篠原分教場を転用 (▲)
港北区庁舎 (旧)	港北区菊名町	1942	(▲)
南区庁舎 (旧)	南区南太田町	不詳 (1943)	旧市民館を転用 (▲)
5代目市庁舎	西区老松町	1929 (1944)	老松中学校旧校舎を代用 (▲)
神奈川区庁舎 (旧)	神奈川区青木通	1949	(▲)
6代目市庁舎	神奈川区反町	1949 (1950)	日本貿易博覧会 (1949.3.15~6.15) の神奈川会場を転用 (▲)
旧西区庁舎	西区杉山町	1952	(▲)
南区総合庁舎 (旧)	南区花之木町	1958	(▲)
7代目市庁舎	中区港町	1959	
港北区総合庁舎 (旧)	港北区菊名町	1960	現在は港北図書館と菊名地区センターに転用
中区庁舎 (旧)	中区住吉町	不詳 (1961)	横浜銀行本店ビルを転用 (▲)
鶴見区総合庁舎 (旧)	鶴見区鶴見町	1964	(▲)
神奈川区総合庁舎	神奈川区広台太田町	1964	
戸塚区総合庁舎 (旧)	戸塚区戸塚町	1965	
磯子区総合庁舎 (旧)	磯子区磯子三丁目	1967	(▲)
保土ヶ谷区総合庁舎	保土ヶ谷区川辺町	1969	
旭区仮庁舎	保土ヶ谷区鶴ヶ峰一丁目	1969	プレハブの仮庁舎 (▲)
港南区仮庁舎	南区笹下町	1969	プレハブの仮庁舎 (▲)
緑区仮庁舎	港北区川和町	1969	プレハブの仮庁舎 (▲)
瀬谷区仮庁舎	戸塚区瀬谷町	1969	プレハブの仮庁舎 (▲)
港南区総合庁舎 (旧)	港南区笹下町	1971	(▲)
旭区総合庁舎	旭区鶴ヶ峰一丁目	1971	
金沢区総合庁舎 (旧)	金沢区泥亀二丁目	1971	(▲)
瀬谷区総合庁舎 (旧)	瀬谷区二ツ橋町	1971	(▲)
西区総合庁舎	西区中央一丁目	1972	
緑区総合庁舎	緑区寺山町	1972	

公共建築リスト—庁舎



施設名	所在地	竣工年	備考
南区総合庁舎 (旧)	南区花之木町	1973	(▲)
栄区庁舎	栄区桂町	1974 (1986)	本郷台小学校旧校舎を転用
港北区総合庁舎	港北区大豆戸町	1978	
中区庁舎	中区日本大通	1983	
泉区仮庁舎	泉区和泉中央北五丁目	1986	
鶴見区総合庁舎	鶴見区鶴見中央三丁目	1988	
青葉区総合庁舎	青葉区市ヶ尾町	1995	
都筑区総合庁舎	都筑区茅ヶ崎中央	1995	
泉区総合庁舎	泉区和泉中央北五丁目	1996	
磯子区総合庁舎	磯子区磯子三丁目	1999	
瀬谷区総合庁舎	瀬谷区二ツ橋町	2012	
戸塚区総合庁舎	戸塚区戸塚町	2013	
金沢区総合庁舎	金沢区泥亀二丁目	2016	
南区総合庁舎	南区浦舟町	2016	
港南区総合庁舎	港南区港南四丁目	2017	
8代目市庁舎	中区本町	2020	
● 公会堂			
開港記念会館 (中公会堂)	中区本町	1917	
鶴見公会堂 (旧)	鶴見区鶴見町	1954	(▲)
港北公会堂 (旧)	港北区菊名町	1960	(▲)
保土ヶ谷公会堂 (旧)	保土ヶ谷区星川町	1961	(▲)
西公会堂 (旧)	西区中央二丁目	1962	(▲)
磯子公会堂 (旧)	磯子区磯子三丁目	1967	(▲)
金沢公会堂 (旧)	金沢区泥亀二丁目	1971	(▲)
港南公会堂 (旧)	港南区港南中央通	1971	(▲)
旭公会堂	旭区鶴ヶ峰一丁目	1971	
瀬谷公会堂 (旧)	瀬谷区二ツ橋町	1971	(▲)
緑公会堂	緑区寺山町	1972	
南公会堂 (旧)	南区花之木町三丁目	1974	(▲)
神奈川公会堂	神奈川区富家町	1978	
港北公会堂	港北区大豆戸町	1978	
戸塚公会堂	戸塚区戸塚町	1978	
西公会堂	西区岡野一丁目	1982	
保土ヶ谷公会堂	保土ヶ谷区星川一丁目	1982	
鶴見公会堂	鶴見区豊岡町	1985	
泉公会堂	泉区和泉中央五丁目	1991	
栄公会堂	栄区桂町	1991	

公共建築リスト—庁舎



本市が建設又は取得した建築物を記載しています。／所在地は行政区画や町名変更により現在とは異なるものがあります。／竣工年は年度の場合もあります。／竣工年の () 内は庁舎としての使用開始年です。／ (▲) は現存していません。

施設名	所在地	竣工年	備考
青葉公会堂	青葉区市ケ尾町	1995	
都筑公会堂	都筑区茅ヶ崎中央	1995	
磯子公会堂	磯子区磯子三丁目	1999	
瀬谷公会堂	瀬谷区二ツ橋町	2010	
南公会堂	南区浦舟町	2016	
<hr/>			
金沢公会堂	金沢区泥亀二丁目	2018	
港南公会堂	港南区港南中央通	2021	
<hr/>			
● 図書館			
<hr/>			
横浜市図書館	西区老松町	1927	(▲)
港北図書館	港北区菊名六丁目	1960 (1980)	旧港北区総合庁舎を転用
磯子図書館 (旧)	磯子区磯子三丁目	1974	磯子センター内に設置
山内図書館	青葉区あざみ野二丁目	1977	
戸塚図書館	戸塚区戸塚町	1978	
<hr/>			
鶴見図書館	鶴見区鶴見中央二丁目	1979	
金沢図書館	金沢区泥亀二丁目	1980	
保土ヶ谷図書館	保土ヶ谷区星川一丁目	1982	
瀬谷図書館	瀬谷区本郷三丁目	1984	
旭図書館	旭区白根四丁目	1986	
<hr/>			
港南図書館	港南区野庭町	1986	
神奈川図書館	神奈川区立町	1987	
泉図書館	泉区和泉町	1989	
栄図書館	栄区公田町	1989	
中図書館	中区本牧原	1989	
<hr/>			
南図書館	南区弘明寺町	1992	
中央図書館	西区老松町	1994	
都筑図書館	都筑区茅ヶ崎中央	1995	
緑図書館	緑区十日市場町	1995	
磯子図書館	磯子区磯子三丁目	1999	
<hr/>			
● スポーツセンター			
<hr/>			
港南スポーツセンター	港南区日野一丁目	1980	
旭スポーツセンター	旭区川島町	1982	
戸塚スポーツセンター	戸塚区上倉田町	1984	
港北スポーツセンター	港北区大豆戸町	1985	
金沢スポーツセンター	金沢区長浜	1985	

公共建築リスト—庁舎



施設名	所在地	竣工年	備考
緑スポーツセンター	緑区中山町	1985	
磯子スポーツセンター	磯子区杉田五丁目	1986	
瀬谷スポーツセンター	瀬谷区南台二丁目	1987	
鶴見スポーツセンター	鶴見区元宮二丁目	1988	
保土ヶ谷スポーツセンター	保土ヶ谷区神戸町	1989	
<hr/>			
栄スポーツセンター	栄区桂町	1991	
中スポーツセンター	中区新山下三丁目	1991	
泉スポーツセンター	泉区西が岡三丁目	1992	
南スポーツセンター	南区大岡一丁目	1992	
神奈川スポーツセンター	神奈川区三ツ沢上町	1994	
<hr/>			
青葉スポーツセンター	青葉区市ケ尾町	1995	
西スポーツセンター	西区浅間町四丁目	1997	
都筑スポーツセンター	都筑区池辺町	2005	
<hr/>			
● 地区センター			
<hr/>			
菊名地区センター	港北区菊名六丁目	1960 (1980)	旧港北区総合庁舎を転用
希望が丘地区センター	旭区中希望が丘	1973	
本郷地区センター (旧)	栄区桂町	1973	
磯子地区センター	磯子区磯子三丁目	1974	
山内地区センター	青葉区あざみ野二丁目	1977	
<hr/>			
戸塚地区センター	戸塚区戸塚町	1978	
日吉地区センター	港北区日吉本町一丁目	1978	
南地区センター	南区南太田二丁目	1979	
港南地区センター	港南区日野一丁目	1980	
金沢地区センター	金沢区泥亀二丁目	1980	
<hr/>			
末吉地区センター	鶴見区上末吉二丁目	1980	
瀬谷地区センター	瀬谷区瀬谷三丁目	1980	
神大寺地区センター	神奈川区神大寺二丁目	1981	
大正地区センター	戸塚区原宿三丁目	1981	
新田地区センター	港北区新吉田町	1981	
<hr/>			
ほどがや地区センター	保土ヶ谷区天王町	1981	
長津田地区センター	緑区長津田町	1982	
西地区センター	西区岡野一丁目	1982	
生麦地区センター	鶴見区生麦四丁目	1982	
若葉台地区センター	旭区若葉台	1983	
<hr/>			
野毛地区センター	中区野毛町	1983	
白根地区センター	旭区白根四丁目	1984	
都筑地区センター	都筑区葛が谷	1984	
神奈川地区センター	神奈川区神奈川本町	1986	
西谷地区センター (旧)	保土ヶ谷区西谷町	1986	(▲)

公共建築リスト—庁舎

本市が建設又は取得した建築物を記載しています。／所在地は行政区画や町名変更により現在とは異なるものがあります。／竣工年は年度の場合もあります。／竣工年の（）内は庁舎としての使用開始年です。／（▲）は現存していません。



施設名	所在地	竣工年	備考
上中里地区センター	磯子区上中里町	1986	
立場地区センター	泉区中田北一丁目	1986	
十日市場地区センター	緑区十日市場町	1986	
永谷地区センター	港南区芹が谷五丁目	1986	
白山地区センター	緑区白山一丁目	1987	
寺尾地区センター	鶴見区馬場四丁目	1988	
綱島地区センター	港北区綱島西一丁目	1988	
中川地区センター	泉区桂坂	1989	
初音が丘地区センター	保土ヶ谷区藤塚町	1989	
東戸塚地区センター	戸塚区川上町	1989	
藤が丘地区センター	青葉区藤が丘一丁目	1989	
本牧地区センター	中区本牧原	1989	
豊田地区センター	栄区飯島町	1990	
中川西地区センター	都筑区中川二丁目	1990	
釜利谷地区センター	金沢区釜利谷南一丁目	1992	
大岡地区センター	南区大岡一丁目	1992	
神之木地区センター	神奈川区神之木町	1992	
港南台地区センター	港南区港南台五丁目	1992	
若草台地区センター	青葉区若草台	1992	
上矢部地区センター	戸塚区上矢部町	1993	
杉田地区センター	磯子区杉田一丁目	1993	
潮田地区センター	鶴見区本町通	1994	
都岡地区センター	旭区今宿西町	1994	
根岸地区センター	磯子区馬場町	1994	
美しが丘西地区センター	青葉区美しが丘西三丁目	1994	
富岡並木地区センター	金沢区富岡東四丁目	1994	
永田地区センター	南区永田台	1994	
阿久和地区センター	瀬谷区阿久和南二丁目	1995	
仲町台地区センター	都筑区仲町台二丁目	1995	
下和泉地区センター	泉区和泉が丘一丁目	1996	
竹之丸地区センター	中区竹之丸	1996	
矢向地区センター	鶴見区矢向四丁目	1996	
篠原地区センター	港北区篠原東二丁目	1997	
東永谷地区センター	港南区東永谷一丁目	1997	
藤棚地区センター	西区藤棚町	1997	
舞岡地区センター	戸塚区舞岡町	1998	
六浦地区センター	金沢区六浦五丁目	1998	
北山田地区センター	都筑区北山田二丁目	1998	
中山地区センター	緑区中山二丁目	1998	
今井地区センター	保土ヶ谷区今井町	1999	

公共建築リスト—庁舎



施設名	所在地	竣工年	備考
菅田地区センター	神奈川区菅田町	1999	
中屋敷地区センター	瀬谷区中屋敷二丁目	1999	
奈良地区センター	青葉区奈良町	2000	
大場みすずが丘地区センター	青葉区みすずが丘	2000	
今宿地区センター	旭区今宿町	2001	
能見台地区センター	金沢区能見台東	2001	
野庭地区センター	港南区野庭町	2001	
駒岡地区センター	鶴見区駒岡四丁目	2002	
市沢地区センター	旭区市沢町	2001	
上飯田地区センター	泉区上飯田町	2002	
踊場地区センター	戸塚区汲沢二丁目	2003	
白幡地区センター	神奈川区白幡上町	2004	
城郷小机地区センター	港北区小机町	2004	
中村地区センター	南区中村町	2005	
上郷地区センター	栄区上郷町	2006	
西谷地区センター	保土ヶ谷区西谷三丁目	2012	
本郷地区センター	栄区小菅ヶ谷一丁目	2021	
都田地区センター	都筑区東方町	2022	
● 地域ケアプラザ（民設民営の施設を除く）			
浦舟地域ケアプラザ	南区浦舟町	1967（2004）	旧横浜市立大学医学部附属浦舟病院1号館を転用
二ツ橋第二地域ケアプラザ	瀬谷区二ツ橋町	1981（2011）	旧横浜市小児アレルギーセンターを転用
霧が丘地域ケアプラザ	緑区霧が丘三丁目	1984（2008）	旧霧が丘第三小学校校舎を転用
二ツ橋地域ケアプラザ	瀬谷区二ツ橋町	1991	
上飯田地域ケアプラザ	泉区上飯田町	1991	
新山下地域ケアプラザ	中区新山下三丁目	1992	
荏田地域ケアプラザ	青葉区荏田町	1992	
並木地域ケアプラザ	金沢区富岡東二丁目	1992	
大岡地域ケアプラザ	南区大岡一丁目	1992	
反町地域ケアプラザ	神奈川区反町	1992	
神之木地域ケアプラザ	神奈川区神之木町	1992	
上矢部地域ケアプラザ	戸塚区上矢部町	1993	
葛が谷地域ケアプラザ	都筑区葛が谷	1993	
潮田地域ケアプラザ	鶴見区本町通	1994	
根岸地域ケアプラザ	磯子区馬場町	1994	
港南台地域ケアプラザ	港南区港南台三丁目	1994	
東戸塚地域ケアプラザ	戸塚区川上町	1994	
豊田地域ケアプラザ	栄区飯島町	1994	
十日市場地域ケアプラザ	緑区十日市場町	1995	
長津田地域ケアプラザ	緑区長津田二丁目	1995	

公共建築リスト—庁舎

本市が建設又は取得した建築物を記載しています。／所在地は行政区画や町名変更により現在とは異なるものがあります。／竣工年は年度の場合もあります。／竣工年の（）内は庁舎としての使用開始年です。／（▲）は現存していません。



施設名	所在地	竣工年	備考
阿久和地域ケアプラザ	瀬谷区阿久和南二丁目	1995	
上白根地域ケアプラザ	旭区上白根町	1996	
清水ヶ丘地域ケアプラザ	南区清水ヶ丘	1996	
岩崎地域ケアプラザ	保土ヶ谷区岩崎町	1996	
不老町地域ケアプラザ	中区不老町	1996	
上倉田地域ケアプラザ	戸塚区上倉田町	1996	
矢向地域ケアプラザ	鶴見区矢向四丁目	1996	
寺尾地域ケアプラザ	鶴見区東寺尾六丁目	1996	
新杉田地域ケアプラザ	磯子区新杉田町	1996	
下和泉地域ケアプラザ	泉区和泉が丘一丁目	1996	
篠原地域ケアプラザ	港北区篠原東二丁目	1997	
東永谷地域ケアプラザ	港南区東永谷一丁目	1997	
藤棚地域ケアプラザ	西区藤棚町	1997	
平戸地域ケアプラザ	戸塚区平戸二丁目	1997	
洋光台地域ケアプラザ	磯子区洋光台六丁目	1997	
左近山地域ケアプラザ	旭区左近山	1997	
もえぎ野地域ケアプラザ	青葉区もえぎ野	1997	
中野地域ケアプラザ	栄区中野町	1998	
六浦地域ケアプラザ	金沢区六浦五丁目	1998	
川井地域ケアプラザ	旭区川井本町	1998	
中山地域ケアプラザ	緑区中山二丁目	1998	
加賀原地域ケアプラザ	都筑区加賀原一丁目	1998	
下永谷地域ケアプラザ	港南区下永谷三丁目	1998	
今井地域ケアプラザ	保土ヶ谷区今井町	1999	
桂台地域ケアプラザ	栄区桂台中	1999	
若葉台地域ケアプラザ	旭区若葉台四丁目	1999	
永田地域ケアプラザ	南区永田南二丁目	1999	
宮崎地域ケアプラザ	西区宮崎町	1999	
原宿地域ケアプラザ	戸塚区原宿四丁目	1999	
中屋敷地域ケアプラザ	瀬谷区中屋敷二丁目	1999	
高田地域ケアプラザ	港北区高田西二丁目	1999	
泥亀地域ケアプラザ	金沢区泥亀一丁目	1999	
菅田地域ケアプラザ	神奈川区菅田町	1999	
踊場地域ケアプラザ	泉区中田東一丁目	1999	
さつきが丘地域ケアプラザ	青葉区さつきが丘	1999	
六ツ川地域ケアプラザ	南区六ツ川二丁目	2000	
麦田地域ケアプラザ	中区麦田町	2000	
舞岡柏尾地域ケアプラザ	戸塚区舞岡町	2000	
東本郷地域ケアプラザ	緑区東本郷五丁目	2000	
本牧原地域ケアプラザ	中区本牧原	2000	

公共建築リスト—庁舎



施設名	所在地	竣工年	備考
小菅ヶ谷地域ケアプラザ	栄区小菅ヶ谷三丁目	2000	
下田地域ケアプラザ	港北区下田町四丁目	2000	
大豆戸地域ケアプラザ	港北区大豆戸町	2000	
富岡地域ケアプラザ	金沢区富岡西七丁目	2000	
片倉三枚地域ケアプラザ	神奈川区三枚町	2000	
新子安地域ケアプラザ	神奈川区新子安一丁目	2000	
磯子地域ケアプラザ	磯子区磯子三丁目	2000	
いずみ中央地域ケアプラザ	泉区和泉中央北五丁目	2001	
鶴ヶ峰地域ケアプラザ	旭区鶴ヶ峰一丁目	2001	
東寺尾地域ケアプラザ	鶴見区東寺尾一丁目	2001	
新栄地域ケアプラザ	都筑区新栄町	2001	
下瀬谷地域ケアプラザ	瀬谷区下瀬谷二丁目	2001	
笠間地域ケアプラザ	栄区笠間一丁目	2001	
野庭地域ケアプラザ	港南区野庭町	2001	
日下地域ケアプラザ	港南区笹下三丁目	2001	
釜利谷地域ケアプラザ	金沢区釜利谷南二丁目	2001	
能見台地域ケアプラザ	金沢区能見台東	2001	
今宿地域ケアプラザ	旭区今宿町	2001	
美しが丘地域ケアプラザ	青葉区美しが丘四丁目	2001	
大場地域ケアプラザ	青葉区大場町	2001	
駒岡地域ケアプラザ	鶴見区駒岡四丁目	2002	
港南中央地域ケアプラザ	港南区港南四丁目	2002	
星川地域ケアプラザ	保土ヶ谷区川辺町	2002	
蓑沢地域ケアプラザ	中区蓑沢	2002	
南戸塚地域ケアプラザ	戸塚区戸塚町	2002	
樽町地域ケアプラザ	港北区樽町一丁目	2002	
西金沢地域ケアプラザ	金沢区釜利谷南三丁目	2002	
ひかりが丘地域ケアプラザ	旭区上白根町	2002	
戸部本町地域ケアプラザ	西区戸部本町	2003	
本牧和田地域ケアプラザ	中区本牧和田	2003	
下倉田地域ケアプラザ	戸塚区下倉田町	2003	
鴨志田地域ケアプラザ	青葉区鴨志田町	2003	
滝頭地域ケアプラザ	磯子区滝頭二丁目	2004	
城郷小机地域ケアプラザ	港北区小机町	2004	
富岡東地域ケアプラザ	金沢区富岡東四丁目	2005	
鶴見市場地域ケアプラザ	鶴見区市場下町	2005	
中村地域ケアプラザ	南区中村町	2006	
睦地域ケアプラザ	南区睦町	2006	
仏向地域ケアプラザ	保土ヶ谷区仏向町	2006	
沢渡三ツ沢地域ケアプラザ	神奈川区沢渡	2006	

公共建築リスト—庁舎

本市が建設又は取得した建築物を記載しています。／所在地は行政区画や町名変更により現在とは異なるものがあります。／竣工年は年度の場合もあります。／竣工年の（）内は庁舎としての使用開始年です。／（▲）は現存していません。



施設名	所在地	竣工年	備考
屏風ヶ浦地域ケアプラザ	磯子区森四丁目	2006	
鶴見中央地域ケアプラザ	鶴見区鶴見中央一丁目	2007	
鴨居地域ケアプラザ	緑区鴨居五丁目	2007	
日吉本町地域ケアプラザ	港北区日吉本町四丁目	2007	
名瀬地域ケアプラザ	戸塚区名瀬町	2008	
柳町地域ケアプラザ	金沢区柳町	2008	
野七里地域ケアプラザ	栄区野七里一丁目	2009	
南希望が丘地域ケアプラザ	旭区南希望が丘	2009	
常盤台地域ケアプラザ	保土ヶ谷区常盤台	2009	
中川地域ケアプラザ	都筑区中川一丁目	2009	
日野南地域ケアプラザ	港南区日野南三丁目	2009	
新橋地域ケアプラザ	泉区新橋町	2009	
上笹下地域ケアプラザ	磯子区氷取沢町	2011	
今宿西地域ケアプラザ	旭区今宿西町	2011	
川島地域ケアプラザ	保土ヶ谷区川島町	2011	
生麦地域ケアプラザ	鶴見区生麦四丁目	2011	
芹が谷地域ケアプラザ	港南区芹が谷二丁目	2011	
六角橋地域ケアプラザ	神奈川区六角橋三丁目	2011	
恩田地域ケアプラザ	青葉区あかね台二丁目	2011	
笹野台地域ケアプラザ	旭区笹野台二丁目	2012	
たまプラーザ地域ケアプラザ	青葉区新石川二丁目	2013	
馬場地域ケアプラザ	鶴見区馬場七丁目	2014	
新羽地域ケアプラザ	港北区新羽町	2014	
白根地域ケアプラザ	旭区白根二丁目	2014	
日限山地域ケアプラザ	港南区日限山一丁目	2016	
いずみ野地域ケアプラザ	泉区和泉町	2016	
すすき野地域ケアプラザ	青葉区すすき野一丁目	2016	
深谷俣野地域ケアプラザ	戸塚区深谷町	2017	
二俣川地域ケアプラザ	旭区二俣川2丁目	2018	
岡津地域ケアプラザ	泉区岡津町	2019	
別所地域ケアプラザ	南区別所一丁目	2019	
本郷台駅前地域ケアプラザ	栄区小菅ヶ谷一丁目	2021	
山下地域ケアプラザ	緑区北八朔町	2021	
都田地域ケアプラザ	都筑区東方町	2022	

公共建築リスト—学校

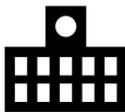
本市が建設又は取得した建築物を記載しています。／学校名及び所在地は現存又は閉校時のものです。／所在地は行政区画や町名変更により現在とは異なるものがあります。／竣工年は年度の場合もあります。／（▲）は閉校したものです。



学校名	所在地	竣工年	備考
北方小学校	中区諏訪町	1873/1926/1983	
富岡小学校	金沢区富岡西七丁目	1873/1879/1968	
日野小学校	港南区日野七丁目	1873/1929/1970	
保土ヶ谷小学校	保土ヶ谷区神戸町	1873/1925/1955/1999	
横浜国民学校	中区山下町	1873/1876/1928	(▲)
戸部小学校	西区伊勢町二丁目	1874/1880/1928/1981	
老松小学校	中区老松町	1874/1898/1929	(▲)
神奈川小学校	神奈川区東神奈川二丁目	1875/1908/1928/1975	
川島小学校	保土ヶ谷区川島町	1875/1928/1966	
鉄小学校	青葉区鉄町	1875/1911/1938/1974	
元街小学校	中区山手町	1875/1906/1929/1984	
池上小学校	神奈川区菅田町	1876/1928/1964	跡地は菅田の丘小学校として利用予定(▲)
磯子小学校	磯子区久木町	1876/1920/1937/1968	
大岡小学校	南区大橋町三丁目	1876/1927/1983	
金沢小学校	金沢区町屋町	1876/1911/1925/1958/1970	
千秀小学校	栄区田谷町	1876/1957/1971	
戸塚小学校	戸塚区戸塚町	1876/1913/1927/1959/1970	
末吉小学校	鶴見区上末吉一丁目	1877/1927/1978	
杉田小学校	磯子区杉田一丁目	1877/1929/1956/1976	
釜利谷小学校	金沢区釜利谷東六丁目	1878/1929/1944/1969	
鴨居小学校	緑区鴨居四丁目	1878/1922/1966	
中川小学校	都筑区牛久保東二丁目	1878/1910/1948/1962/1975	
星川小学校	保土ヶ谷区星川三丁目	1878/1928/1962	
六浦小学校	金沢区六浦三丁目	1878/1926/1966	
谷本小学校	青葉区藤が丘一丁目	1878/1972	
市場小学校	鶴見区元宮一丁目	1879/1925/1981	
高田小学校	港北区高田町	1879/1924/1965/1970	
田奈小学校	青葉区田奈町	1879/1971	
石川小学校	南区中村町一丁目	1880/1928/1958/1984	
日吉台小学校	港北区日吉本町一丁目	1880/1940/1962/1969	
本牧小学校	中区本牧和田	1880/1914/1926/1992	
白根小学校	旭区中白根一丁目	1881/1958/1964	
根岸小学校	磯子区西町	1881/1917/1972	
二俣川小学校	旭区二俣川一丁目	1881/1966	
横浜商業高等学校	南区南太田二丁目	1882/1889/1897/1926/1974	
長津田小学校	緑区長津田町	1888/1956/1966	
瀬谷小学校	瀬谷区相沢四丁目	1890/1951/1961/1971	
盲特別支援学校	神奈川区松見町一丁目	1890/1924/1952/1964/1990	
豊田小学校	栄区長沼町	1892/1965	
中和田小学校	泉区和泉中央南四丁目	1892/1898/1926/1969	

公共建築リスト—学校

本市が建設又は取得した建築物を記載しています。／学校名及び所在地は現存又は閉校時のものです。／所在地は行政区画や町名変更により現在とは異なるものがあります。／竣工年は年度の場合もあります。／(▲)は閉校したものです。



学校名	所在地	竣工年	備考
永野小学校	港南区上永谷二丁目	1892/1963	
本郷小学校	栄区中野町	1892/1949/1968	
新田小学校	港北区新吉田町	1893/1929/1980	
子安小学校	神奈川区新子安一丁目	1894/1926/1951/1981/2018	
東台小学校	鶴見区東寺尾東台	1894/1928/1960	
山下小学校	緑区北八朔町	1894/1970	
横浜吉田中学校	中区羽衣町三丁目	1894/1901/1928/1975	旧吉田中学校校舎を使用
神橋小学校	神奈川区六角橋二丁目	1896/1928/1965	
川上小学校	戸塚区秋葉町	1898/1926/1972	
今井小学校	保土ヶ谷区今井町	1899/1928/1963/1975	
寿国民学校	中区翁町	1899/1920/1925	(▲)
城郷小学校	港北区鳥山町	1900/1972	
都岡小学校	旭区都岡町	1900/1927/1959/1964/2023	
大綱小学校	港北区大倉山四丁目	1901/1923/1947/1966	
旭小学校	鶴見区北寺尾四丁目	1902/1917/1951/1971	
日下小学校	港南区笹下三丁目	1903/1966/1972	
東小学校	西区東ヶ丘	1905/1924/1927/1980	
太田小学校	南区三春台	1905/1920/1950/1959	
二谷小学校	神奈川区平川町	1905/1949/1956/1966	
本町小学校	中区花咲町三丁目	1905/1927/1984/1967	
南吉田小学校	南区高根町二丁目	1905/1926/1979	
西中学校	西区西戸部町三丁目	1906/1930/1983	
平沼小学校	西区平沼二丁目	1906/1928/1983	
青木小学校	神奈川区桐畑	1908/1948/1978	
宮谷小学校	西区宮ヶ谷	1908/1929/1953/1983	
中山小学校	緑区中山四丁目	1909/1967	
新治小学校	緑区新治町	1909/1984	
三吉小学校	中区浦舟町	1909/1919/1926	(▲)
一本松小学校	西区西戸部町一丁目	1911/1951/1959	
桜岡小学校	港南区大久保一丁目	1911/1925/1942/1966	
立野小学校	中区立野	1911/1953/1956/1963/1991	
西前小学校	西区中央二丁目	1911/1929/1957/1984	
日枝小学校	南区山王町五丁目	1911/1930/1959/1982	
共進小学校	南区共進町	1911/1930	(▲)
平楽小学校	南区平楽	1912/1927	(▲)
市沢小学校	旭区市沢町	1913/1970	
折本小学校	都筑区折本町	1917/1949/1974	
川和小学校	都筑区川和町	1917/1948/1955/1970	
都田小学校	都筑区池辺町	1917/1965/1972	
大正小学校	戸塚区原宿四丁目	1918/1926/1962/1971	

公共建築リスト—学校



学校名	所在地	竣工年	備考
潮田小学校	鶴見区向井町三丁目	1919/1947/1949/1963	
浦島小学校	神奈川区浦島丘	1920/1928/1975	
岡野中学校	西区岡野二丁目	1920/1929/1964/1975	
奈良小学校	青葉区奈良町	1920/1970	
稲荷台小学校	西区藤棚町二丁目	1921/1947/1951/1975	
大鳥小学校	中区本牧町一丁目	1921/1924/1928/1983	
岡津小学校	泉区岡津町	1921/1949/1967	
南太田小学校	南区南太田一丁目	1921/1929/1983	
山元小学校	中区山元町	1921/1956/1977	
峯小学校	保土ヶ谷区峰岡町	1923/1924/1947/1968/1972	
豊岡小学校	鶴見区豊岡町	1924/1958/1964	
生麦小学校	鶴見区生麦四丁目	1924/1976	
岩崎小学校	保土ヶ谷区岩崎町	1925/1961/1966	
下野谷小学校	鶴見区下野谷町二丁目	1926/1983	
桜丘高等学校	保土ヶ谷区桜ヶ丘二丁目	1927/1948/1954/1963	
ろう特別支援学校	保土ヶ谷区常盤台	1927/1956/1965/1969/1979	
入船小学校	鶴見区浜町一丁目	1928/1950	
港高等学校	中区山下町	1928/1962/1979	(▲)
滝頭小学校	磯子区丸山二丁目	1928/1981	
栗田谷中学校	神奈川区栗田谷	1929/1982	
幸ヶ谷小学校	神奈川区幸ヶ谷	1929/1984	
戸塚高等学校	戸塚区汲沢二丁目	1929/1960/1985	
間門小学校	中区本牧間門	1929/1958/1980	
三ツ沢小学校	神奈川区三ツ沢中町	1930/1948/1967	
鶴見小学校	鶴見区鶴見中央三丁目	1931/1948/1969/1971	
井土ヶ谷小学校	南区井土ヶ谷上町	1934/1963/1971	
鶴見国民学校	鶴見区鶴見町	1935	(▲)
上川井小学校	旭区上川井町	1936/1970	
鶴見工業高等学校	鶴見区下野谷町	1936/1958/1961/1967/1969	(▲)
白幡小学校	神奈川区白幡上町	1936/1974	
平安小学校	鶴見区平安町	1937/1952/1958	
山内小学校	青葉区新石川一丁目	1937/1967	
中村国民学校	中区中村町	1937	(▲)
宮田国民学校	保土ヶ谷区宮田町	1939	(▲)
岸谷小学校	鶴見区岸谷一丁目	1940/1972	
浜小学校	磯子区磯子台	1940/1963/1969	
斎藤分小学校	神奈川区斎藤分町	1942/1964	
西大口国民学校	神奈川区西大口町	1942	(▲)
原小学校	瀬谷区阿久和東四丁目	1943/1949/1966	
大道小学校	金沢区大道二丁目	1944/1963	

公共建築リスト—学校

本市が建設又は取得した建築物を記載しています。／学校名及び所在地は現存又は閉校時のものです。／所在地は行政区画や町名変更により現在とは異なるものがあります。／竣工年は年度の場合もあります。／(▲)は閉校したものです。



学校名	所在地	竣工年	備考
矢向小学校	鶴見区矢向三丁目	1944/1965	
富士見台小学校	保土ヶ谷区岩井町	1946/1980	
金沢中学校	金沢区釜利谷東一丁目	1948/1962	
上瀬谷小学校	瀬谷区瀬谷町	1948/1959/1963/1972	
中山中学校	緑区寺山町	1948/1957/1995	
浜中学校	磯子区杉田三丁目	1948/1958/1961	
二つ橋高等特別支援学校	瀬谷区二ツ橋町	1948/1961/1981	
六角橋中学校	神奈川区六角橋五丁目	1948/1956/1959/1973	
市場中学校	鶴見区市場下町	1949/1974	
潮田中学校	鶴見区向井町	1949/1964/1971/1975	
大綱中学校	港北区大倉山三丁目	1949/1960	
岡村中学校	磯子区岡村一丁目	1949/1961/1971	
神奈川中学校	神奈川区西大口	1949/1960/1963/1972/1986	
港南中学校	港南区港南中央通	1949/1961	
港北小学校	港北区菊名二丁目	1949/1966/1972	
城郷中学校	港北区小机町	1949/1961/1963/1972	
末吉中学校	鶴見区下末吉六丁目	1949/1965	
田奈中学校	緑区長津田二丁目	1949/1967	
都田中学校	都筑区池辺町	1949/1973	
鶴ヶ峯中学校	旭区鶴ヶ峰本町三丁目	1949/1963	
寺尾中学校	鶴見区北寺尾三丁目	1949/1961/1974	
生麦中学校	鶴見区岸谷二丁目	1949/1958	
南中学校	南区六ツ川一丁目	1949/1963	
宮田中学校	保土ヶ谷区宮田町	1949/1972	
瀬谷中学校	瀬谷区中央	1950/1959/1961/1970	
綱島小学校	港北区綱島西三丁目	1950/1967	
鶴見中学校	鶴見区鶴見中央三丁目	1950/1964	
戸塚中学校	戸塚区戸塚町	1950/1960	
中川中学校	都筑区大圃町	1950/1968	
西寺尾小学校	神奈川区西寺尾二丁目	1950/1978	
日吉台中学校	港北区日吉本町四丁目	1950/1964	
蒔田小学校	南区蒔田町	1950/1959	
帷子小学校	保土ヶ谷区川辺町	1951/1976	
金沢高等学校	金沢区瀬戸	1951/1961	
上末吉小学校	鶴見区上末吉五丁目	1951/1961	
菊名小学校	港北区菊名五丁目	1951/1967/1972	
中村小学校	南区中村町四丁目	1951/1956/1959	
中和田中学校	泉区和泉中央北二丁目	1951/1965	
新田中学校	港北区新吉田東五丁目	1951/1971	
根岸中学校	磯子区西町	1951/1963/1984	

公共建築リスト—学校



学校名	所在地	竣工年	備考
八景小学校	金沢区泥亀一丁目	1951/1971	
東戸塚小学校	戸塚区吉田町	1951/1965	
屏風浦小学校	磯子区森三丁目	1951/1965/1972	
文庫小学校	金沢区寺前二丁目	1951/1975	
本宿小学校	旭区本宿町	1951/1965/1970/1974	
浦島丘中学校	神奈川区白幡東町	1952/1962/1979	
希望ヶ丘小学校	旭区中希望が丘	1952/1960	
下末吉小学校	鶴見区下末吉二丁目	1952/1968	
中田小学校	泉区中田南四丁目	1952/1957/1966	
西本郷小学校	栄区小菅ヶ谷二丁目	1952/1967	
松本中学校	神奈川区三ツ沢下町	1952/1961	
岩井原中学校	保土ヶ谷区岩井町	1953/1959/1983	
浅間台小学校	西区浅間町	1953/1978	
大正中学校	戸塚区原宿四丁目	1953/1959/1966/1971	
保土ヶ谷中学校	保土ヶ谷区釜台町	1953/1963	
大口台小学校	神奈川区大口仲町	1954/1973	
岡村小学校	磯子区岡村四丁目	1954/1963	
瀬ヶ崎小学校	金沢区六浦東三丁目	1954/1975	
本郷中学校	栄区桂町	1954/1957/1961/1969/1974	
六浦中学校	金沢区六浦一丁目	1954/1977	
大島中学校	中区本牧原	1955/1983	
寺尾小学校	鶴見区東寺尾五丁目	1955/1967	
三ツ境小学校	瀬谷区三ツ境	1955/1956/1974/1978	
南小学校	南区中里一丁目	1955/1961	
南瀬谷小学校	瀬谷区南瀬谷一丁目	1955/1965	
鶴ヶ峯小学校	旭区鶴ヶ峰一丁目	1956/1966	
中村特別支援学校	南区中村町	1956	
原中学校	瀬谷区阿久和西二丁目	1956/1970	
寛政中学校	鶴見区寛政町	1957/1961/1995	
仲尾台中学校	中区仲尾台	1957/1985	
軽井沢中学校	西区北軽井沢	1958/1961/1989	
篠原小学校	港北区篠原東三丁目	1958/1960	
常盤台小学校	保土ヶ谷区釜台町	1958/1961	
錦台中学校	神奈川区西寺尾三丁目	1958/1993	
梅林小学校	磯子区杉田五丁目	1958/1972/1974	
舞岡中学校	戸塚区舞岡町	1958/1961/1966/1972	
神大寺小学校	神奈川区神大寺三丁目	1959/1967	
桜台小学校	保土ヶ谷区桜ヶ丘一丁目	1959	
下田小学校	港北区下田町四丁目	1959/1964/1991	
永田小学校	南区永田北二丁目	1959/1967	

公共建築リスト—学校

本市が建設又は取得した建築物を記載しています。／学校名及び所在地は現存又は閉校時のものです。／所在地は行政区画や町名変更により現在とは異なるものがあります。／竣工年は年度の場合もあります。／(▲)は閉校したものです。



学校名	所在地	竣工年	備考
西寺尾第二小学校	神奈川区西寺尾二丁目	1959/1966/1991	
西谷中学校	保土ヶ谷区川島町	1959/1963	
万騎が原中学校	旭区万騎が原	1959/1963/1967/1973	
南が丘中学校	南区別所三丁目	1959/1962	
南高等学校・附属中学校	港南区東永谷二丁目	1959/1963/1991	
南台小学校	港南区港南五丁目	1959/1968	
岩崎中学校	保土ヶ谷区桜ヶ丘二丁目	1960/1974/1980	
上菅田小学校	保土ヶ谷区上菅田町	1960/1962/1968	跡地は上菅田笹の丘小学校として利用予定 (▲)
富士見中学校	中区山田町	1960	(▲)
汲沢小学校	戸塚区汲沢三丁目	1960/1965	
大曽根小学校	港北区大曽根二丁目	1961/1965/1969	
岡津中学校	泉区岡津町	1961/1970	
大道中学校	金沢区大道一丁目	1961/1975	
中丸小学校	神奈川区神大寺三丁目	1961/1969	
西柴中学校	金沢区西柴一丁目	1961	
初音が丘小学校	保土ヶ谷区藤塚町	1961	
仏向小学校	保土ヶ谷区仏向町	1961/1990	
老松中学校	西区老松町	1962/1971/1981	
十日市場中学校	緑区十日市場町	1962/2000	
矢向中学校	鶴見区矢向一丁目	1962	
横浜国立大学金沢八景キャンパス	金沢区瀬戸	1963/2016	
十日市場小学校	緑区十日市場町	1963/1969/2007	
二つ橋小学校	瀬谷区二ツ橋町	1963/1966	
境木小学校	戸塚区平戸三丁目	1964/1968	
境木中学校	戸塚区平戸三丁目	1964	
東高等学校	鶴見区馬場三丁目	1964	
万騎が原小学校	旭区大池町	1964/2027	2027年新校舎竣工予定
今宿小学校	旭区今宿東町	1965	
上永谷中学校	港南区上永谷四丁目	1965	
港商業高等学校	中区山下町	1965/1979	(▲)
汐見台小学校	磯子区汐見台三丁目	1965/2023	2023年新校舎竣工予定
瀬谷第二小学校	瀬谷区橋戸二丁目	1965	
六つ川小学校	南区六ツ川三丁目	1965/1969	
相沢小学校	瀬谷区相沢二丁目	1966	
柏尾小学校	戸塚区柏尾町	1966	
上飯田小学校	泉区上飯田町	1966/1969	
下永谷小学校	港南区東永谷一丁目	1966	
芹が谷小学校	港南区芹が谷三丁目	1966	
馬場小学校	鶴見区馬場七丁目	1966	
東希望が丘小学校	旭区東希望が丘	1966/1970	

公共建築リスト—学校



学校名	所在地	竣工年	備考
日吉南小学校	港北区日吉本町四丁目	1966	
南瀬谷中学校	瀬谷区南台二丁目	1966	
吉原小学校	港南区日野二丁目	1966	
新井小学校	保土ヶ谷区上菅田町	1967	
浦舟特別支援学校	南区浦舟町	1967	
上星川小学校	保土ヶ谷区上星川二丁目	1967	
希望が丘中学校	旭区東希望が丘	1967	
小雀小学校	戸塚区小雀町	1967/1973	
つつじが丘小学校	青葉区つつじが丘	1967/1970/1974	
東中田小学校	泉区中田東四丁目	1967	
飯島小学校	栄区飯島町	1968	
上菅田中学校	保土ヶ谷区上菅田町	1968	
川上北小学校	戸塚区川上町	1968	
左近山小学校	旭区左近山	1968	
さちが丘小学校	旭区さちが丘	1968	
篠原西小学校	港北区篠原町	1968	
中和田南小学校	泉区和泉町	1968/1972	
藤の木小学校	南区大岡四丁目	1968	
三保小学校	緑区三保町	1968/1971	
泉が丘中学校	泉区和泉が丘三丁目	1969	
美しが丘小学校	青葉区美しが丘二丁目	1969	
勝田小学校	都筑区勝田町	1969	
汐見台中学校	磯子区汐見台一丁目	1969	
山内中学校	青葉区美しが丘五丁目	1969	
桂台小学校	栄区桂台南一丁目	1970	
上大岡小学校	港南区上大岡東三丁目	1970	
くぬぎ台小学校	保土ヶ谷区川島町	1970	(▲)
左近山第二小学校	旭区左近山	1970	(▲)
横浜工業高等学校	中区翁町	1970	(▲)
笹野台小学校	旭区笹野台四丁目	1970	
四季の森小学校	旭区上白根町	1970	
豊田中学校	戸塚区下倉田町	1970/1974	
中沢小学校	旭区中沢三丁目	1970	
師岡小学校	港北区師岡町	1970	
矢部小学校	戸塚区矢部町	1970	
谷本中学校	青葉区梅が丘	1970	
洋光台第一小学校	磯子区洋光台一丁目	1970	
青葉台小学校	青葉区桜台	1971/1974	
和泉小学校	泉区和泉中央北一丁目	1971	
上白根中学校	旭区上白根町	1971	(▲)

公共建築リスト—学校

本市が建設又は取得した建築物を記載しています。／学校名及び所在地は現存又は閉校時のものです。／所在地は行政区画や町名変更により現在とは異なるものがあります。／竣工年は年度の場合もあります。／(▲)は閉校したものです。



学校名	所在地	竣工年	備考
港南台ひの特別支援学校	港南区港南台五丁目	1971/2003	
駒岡小学校	鶴見区駒岡三丁目	1971/1992	
坂本小学校	保土ヶ谷区坂本町	1971	
左近山中学校	旭区左近山	1971	
新橋小学校	泉区新橋町	1971	
新吉田小学校	港北区新吉田東六丁目	1971	
菅田の丘小学校	神奈川区菅田町	1971/2024	旧菅田小学校校舎を使用、2024年旧池上小学校跡地に新校舎竣工予定
竹山小学校	緑区竹山三丁目	1971	
羽沢小学校	神奈川区羽沢町	1971	
本牧南小学校	中区本牧元町	1971	
南戸塚小学校	戸塚区戸塚町	1971	
山田小学校	都筑区東山田三丁目	1971	
洋光台第一中学校	磯子区洋光台二丁目	1971	
洋光台第二小学校	磯子区洋光台四丁目	1971	
美しが丘中学校	青葉区美しが丘三丁目	1972	旧美しが丘小学校北分校を転用 (▲)
上菅田笹の丘小学校	保土ヶ谷区上菅田町	1972/2023	旧笹山小学校校舎を使用、2023年旧上菅田小学校跡地に新校舎竣工予定
川井小学校	旭区川井宿町	1972	
いちょう小学校	泉区上飯田町	1972	(▲)
駒林小学校	港北区日吉本町二丁目	1972	
笹下中学校	港南区港南五丁目	1972	
篠原中学校	港北区篠原町	1972	
綱島東小学校	港北区綱島東三丁目	1972	
永田台小学校	南区永田みなみ台	1972	
西富岡小学校	金沢区富岡西五丁目	1972	
平戸小学校	戸塚区平戸町	1972	
蒔田中学校	南区花之木町二丁目	1972/1981	
青葉台中学校	青葉区青葉台二丁目	1973	
東野中学校	瀬谷区東野	1973	
荏田小学校	都筑区荏田南町	1973	
榎が丘小学校	青葉区榎が丘	1973	
野庭小学校	港南区野庭町	1973	(▲)
さわの里小学校	磯子区上中里町	1973	旧上中里小学校校舎を使用
芹が谷南小学校	港南区芹が谷四丁目	1973	
大門小学校	瀬谷区本郷三丁目	1973	
都岡中学校	旭区川井宿町	1973	

公共建築リスト—学校



学校名	所在地	竣工年	備考
富岡中学校	金沢区富岡西五丁目	1973	
中田中学校	泉区中田北二丁目	1973	
西柴小学校	金沢区西柴四丁目	1973	
深谷小学校	戸塚区深谷町	1973	
矢上小学校	港北区日吉三丁目	1973	
洋光台第三小学校	磯子区洋光台二丁目	1973	
洋光台第四小学校	磯子区洋光台六丁目	1973	
横浜深谷台小学校	戸塚区深谷町	1973	旧深谷台小学校校舎を使用
上郷小学校	栄区犬山町	1974	旧犬山小学校校舎を使用
上菅田特別支援学校	保土ヶ谷区上菅田町	1974	
野庭中学校	港南区野庭町	1974	
葛野小学校	泉区中田南五丁目	1974	
港南台第一小学校	港南区港南台六丁目	1974	
港南台第一中学校	港南区港南台六丁目	1974	
下和泉小学校	泉区和泉町	1974	
すすき野小学校	青葉区すすき野三丁目	1974	
瀬戸ヶ谷小学校	保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷町	1974	
高田東小学校	港北区高田東二丁目	1974	
樽町中学校	港北区樽町四丁目	1974	
西が岡小学校	泉区西が岡三丁目	1974	
日限山小学校	港南区日限山二丁目	1974	
日野南小学校	港南区日野南六丁目	1974	
藤塚小学校	保土ヶ谷区新桜ヶ丘一丁目	1974	
不動丸小学校	旭区白根三丁目	1974	
南神大寺小学校	神奈川区神大寺二丁目	1974	
野七里小学校	栄区野七里二丁目	1974	
朝比奈小学校	金沢区東朝比奈二丁目	1975	
上郷中学校	栄区犬山町	1975	
上白根小学校	旭区上白根二丁目	1975	
ひかりが丘小学校	旭区上白根町	1975	
俣野小学校	戸塚区俣野町	1975	
小菅ヶ谷小学校	栄区本郷台四丁目	1975	
汐入小学校	鶴見区汐入町二丁目	1975	
下野庭小学校	港南区野庭町	1975	
すみれが丘小学校	都筑区すみれが丘	1975	
瀬谷さくら小学校	瀬谷区下瀬谷三丁目	1975	旧下瀬谷小学校を使用
相武山小学校	港南区上永谷一丁目	1975	
永谷小学校	港南区下永谷五丁目	1975	
名瀬小学校	戸塚区名瀬町	1975	
西金沢学園 (小学部)	金沢区釜利谷西四丁目	1975	旧釜利谷西小学校校舎を使用

公共建築リスト—学校

本市が建設又は取得した建築物を記載しています。／学校名及び所在地は現存又は閉校時のものです。／所在地は行政区画や町名変更により現在とは異なるものがあります。／竣工年は年度の場合もあります。／(▲)は閉校したものです。



学校名	所在地	竣工年	備考
東汲沢小学校	戸塚区汲沢一丁目	1975	
東本郷小学校	緑区東本郷五丁目	1975	
太尾小学校	港北区大倉山七丁目	1975	
本郷台小学校	栄区本郷台一丁目	1975/1985	
旭中学校	旭区今宿二丁目	1976	
上山小学校	緑区上山二丁目	1976	
左近山小高小学校	旭区小高町	1976	
公田小学校	栄区公田町	1976	
港南台第二小学校	港南区港南台五丁目	1976	
永田中学校	南区永田みなみ台	1976	
長津田第二小学校	緑区長津田町	1976	
別所小学校	南区別所六丁目	1976	
みたけ台小学校	青葉区みたけ台	1976	
南本宿小学校	旭区南本宿町	1976	
六つ川台小学校	南区六つ川三丁目	1976	
六つ川中学校	南区六つ川三丁目	1976	
もえぎ野小学校	青葉区もえぎ野	1976	
元石川小学校	青葉区美しが丘四丁目	1976	
森東小学校	磯子区森一丁目	1976	
洋光台第二中学校	磯子区洋光台六丁目	1976	
新井中学校	保土ヶ谷区新井町	1977	
いずみ野小学校	泉区和泉町	1977	
上飯田中学校	泉区上飯田町	1977	
鴨居中学校	緑区鴨居五丁目	1977	
北綱島小学校	港北区綱島西五丁目	1977	
汲沢中学校	戸塚区汲沢町	1977	
新吉田第二小学校	港北区新吉田町	1977	
芹が谷中学校	港南区芹が谷二丁目	1977	
橘中学校	保土ヶ谷区仏向町	1977	
新羽小学校	港北区新羽町	1977	
日限山中学校	港南区日限山四丁目	1977	
日野中央高等特別支援学校	港南区日野中央二丁目	1977	
日吉台西中学校	港北区日吉本町五丁目	1977	
藤が丘小学校	青葉区藤が丘二丁目	1977	
南希望が丘中学校	旭区南希望が丘	1977	
飯田北いちょう小学校	泉区上飯田町	1978	旧飯田北小学校校舎を使用
伊勢山小学校	泉区和泉中央南二丁目	1978	
市ヶ尾小学校	青葉区市ヶ尾町	1978	
美しが丘東小学校	青葉区美しが丘二丁目	1978	
桂台中学校	栄区桂台中	1978	

公共建築リスト—学校



学校名	所在地	竣工年	備考
釜利谷東小学校	金沢区釜利谷東二丁目	1978	
上の宮中学校	鶴見区上の宮一丁目	1978	
矢沢小学校	栄区桂台南二丁目	1978	
権太坂小学校	保土ヶ谷区権太坂二丁目	1978	
獅子ヶ谷小学校	鶴見区獅子ヶ谷一丁目	1978	
庄戸小学校	栄区庄戸一丁目	1978	旧上郷南小学校校舎を使用
菅田中学校	神奈川区菅田町	1978	
高舟台小学校	金沢区高舟台一丁目	1978	
中尾小学校	旭区中尾一丁目	1978	
並木第一小学校	金沢区並木一丁目	1978	
新羽中学校	港北区新羽町	1978	
みたけ台中学校	青葉区みたけ台	1978	
あざみ野第一小学校	青葉区あざみ野四丁目	1979	
今宿中学校	旭区今宿東町	1979	
鴨志田第一小学校	青葉区鴨志田町	1979	
霧が丘第一小学校	緑区霧が丘六丁目	1979	
嶮山小学校	青葉区すすき野一丁目	1979	
港南台第三小学校	港南区港南台二丁目	1979	
小山台小学校	栄区小山台一丁目	1979	
善部小学校	旭区善部町	1979	
都田西小学校	都筑区池辺町	1979	
富岡東中学校	金沢区並木一丁目	1979	
並木中央小学校	金沢区並木一丁目	1979	旧並木第二小学校校舎を使用
日野南中学校	港南区港南台四丁目	1979	
平戸台小学校	戸塚区平戸町	1979	
六つ川西小学校	南区六つ川二丁目	1979	
笠間小学校	栄区笠間三丁目	1980	
川和中学校	都筑区富士見が丘	1980	
庄戸中学校	栄区庄戸三丁目	1980	
水取沢小学校	磯子区水取沢町	1980	
日向山小学校	瀬谷区南瀬谷二丁目	1980	
若葉台東小学校	旭区若葉台二丁目	1980	
山王台小学校	磯子区磯子五丁目	1980	
鳥が丘小学校	戸塚区鳥が丘	1980	
名瀬中学校	戸塚区名瀬町	1980	
西本郷中学校	栄区小菅ヶ谷一丁目	1980	
深谷中学校	戸塚区深谷町	1980	
本宿中学校	旭区川島町	1980	
大豆戸小学校	港北区大豆戸町	1980	
緑小学校	緑区鴨居五丁目	1980	

公共建築リスト—学校

本市が建設又は取得した建築物を記載しています。／学校名及び所在地は現存又は閉校時のものです。／所在地は行政区画や町名変更により現在とは異なるものがあります。／竣工年は年度の場合もあります。／(▲)は閉校したものです。



学校名	所在地	竣工年	備考
阿久和小学校	瀬谷区阿久和南四丁目	1981	2024年4月閉校予定
あざみ野第二小学校	青葉区あざみ野三丁目	1981	
飯島中学校	栄区飯島町	1981	
今宿南小学校	旭区今宿南町	1981	
上矢部小学校	戸塚区上矢部町	1981	
並木第三小学校	金沢区並木二丁目	1981	
霧が丘学園 (小学部)	緑区霧が丘四丁目	1981	旧霧が丘第二小学校校舎を使用
桜井小学校	栄区上郷町	1981	
すすき野中学校	青葉区すすき野三丁目	1981	
茅ヶ崎中学校	都筑区茅ヶ崎南一丁目	1981	
奈良中学校	青葉区すみよし台	1981	
西金沢学園 (中学部)	金沢区釜利谷西四丁目	1981	旧西金沢中学校校舎を使用
野庭すずかけ小学校	港南区野庭町	1981	旧野庭東小学校校舎を使用
東市ヶ尾小学校	青葉区市ヶ尾町	1981	
藤の木中学校	南区大岡四丁目	1981	
丸山台小学校	港南区丸山台三丁目	1981	
緑が丘中学校	青葉区千草台	1981	
南舞岡小学校	戸塚区南舞岡四丁目	1981	
若葉台中学校	旭区若葉台一丁目	1981	旧若葉台東中学校校舎を使用
あざみ野中学校	青葉区あざみ野一丁目	1982	
いずみ野中学校	泉区和泉町	1982	
霧が丘学園 (中学部)	緑区霧が丘四丁目	1982	旧霧が丘中学校校舎を使用
小坪小学校	港南区港南台四丁目	1982	
小机小学校	港北区小机町	1982	
品濃小学校	戸塚区品濃町	1982	
並木中学校	金沢区並木三丁目	1982	
本郷特別支援学校	栄区小菅ヶ谷三丁目	1982	
丸山台中学校	港南区丸山台四丁目	1982	
港中学校	中区山下町	1982	旧横浜国民学校校舎を転用
もえぎ野中学校	青葉区もえぎ野	1982	
若葉台小学校	旭区若葉台二丁目	1982	旧若葉台北小学校校舎を使用
荏田東第一小学校	都筑区荏田東三丁目	1983	
荏田南小学校	都筑区荏田南二丁目	1983	
荏田南中学校	都筑区荏田南二丁目	1983	
鴨志田緑小学校	青葉区鴨志田町	1983	
新治特別支援学校	緑区新治町	1983	
若葉台西小学校	旭区若葉台四丁目	1983	
若葉台西中学校	旭区若葉台四丁目	1983	
共進中学校	南区東蒔田町	1983	旧共進小学校校舎を転用
小山台中学校	栄区小山台一丁目	1983	

公共建築リスト—学校



学校名	所在地	竣工年	備考
下瀬谷中学校	瀬谷区下瀬谷二丁目	1983	
並木第四小学校	金沢区並木三丁目	1983	
旭北中学校	旭区上白根二丁目	1984	
荏子田小学校	青葉区荏子田三丁目	1984	
平楽中学校	南区平楽	1984	旧平楽小学校校舎を転用
森中学校	磯子区森五丁目	1984	
霧が丘第三小学校	緑区霧が丘三丁目	1984	
秋葉小学校	戸塚区秋葉町	1985	
秋葉中学校	戸塚区秋葉町	1985	
鴨志田中学校	青葉区鴨志田町	1985	
市ヶ尾中学校	青葉区市ヶ尾町	1986	
恩田小学校	青葉区桂台二丁目	1986	
釜利谷中学校	金沢区釜利谷南三丁目	1986	
東俣野小学校	戸塚区東俣野町	1986	
東俣野特別支援学校	戸塚区東俣野町	1986	
平戸中学校	戸塚区平戸町	1986	
南戸塚中学校	戸塚区戸塚町	1986	
領家中学校	泉区領家四丁目	1986	
倉田小学校	戸塚区上倉田町	1987	
新石川小学校	青葉区新石川三丁目	1987	
舞岡小学校	戸塚区舞岡町	1987	
釜利谷南小学校	金沢区釜利谷南四丁目	1988	
高田中学校	港北区高田町	1988	
茅ヶ崎小学校	都筑区茅ヶ崎南一丁目	1988	
能見台小学校	金沢区能見台三丁目	1988	
東鴨居中学校	緑区鴨居三丁目	1988	
東品濃小学校	戸塚区品濃町	1988	
東永谷中学校	港南区東永谷二丁目	1989	
上寺尾小学校	鶴見区馬場三丁目	1990	
小田小学校	金沢区富岡西一丁目	1990	
中川西小学校	都筑区中川一丁目	1990	
中川西中学校	都筑区中川二丁目	1990	
緑園学園 (前期・後期課程)	泉区緑園五丁目	1990/2021	旧緑園東小学校校舎を使用
六浦南小学校	金沢区六浦南三丁目	1991	
いぶき野小学校	緑区いぶき野	1992	
荏田西小学校	青葉区荏田西四丁目	1992	
小田中学校	金沢区富岡西一丁目	1992	
さつきが丘小学校	青葉区さつきが丘	1992	
川和東小学校	都筑区富士見が丘	1993	
茅ヶ崎台小学校	都筑区長坂	1993	

公共建築リスト—学校

本市が建設又は取得した建築物を記載しています。／学校名及び所在地は現存又は閉校時のものです。／所在地は行政区画や町名変更により現在とは異なるものがあります。／竣工年は年度の場合もあります。／(▲)は閉校したものです。



学校名	所在地	竣工年	備考
本牧中学校	中区本牧和田	1993	
緑園西小学校	泉区緑園三丁目	1993	
横浜市立大学金沢舞岡キャンパス	戸塚区舞岡町	1994	
新鶴見小学校	鶴見区江ヶ崎町	1994	
桂小学校	青葉区桂台一丁目	1995	
北綱島特別支援学校	港北区綱島西五丁目	1995	
北山田小学校	都筑区北山田五丁目	1995	
南山田小学校	都筑区南山田二丁目	1996	
都筑小学校	都筑区中川六丁目	1997	
横浜商業高等学校別科	磯子区丸山一丁目	1997	
つづきの丘小学校	都筑区荏田東一丁目	1998	
下郷小学校	戸塚区戸塚町	2000	
奈良の丘小学校	青葉区奈良二丁目	2000	
東山田小学校	都筑区東山田一丁目	2000	
茅ヶ崎東小学校	都筑区茅ヶ崎東二丁目	2001	
森の台小学校	緑区森の台	2001	
牛久保小学校	都筑区牛久保一丁目	2003	
山下みどり台小学校	緑区北八朔町	2003	
東山田中学校	都筑区東山田二丁目	2005	
黒須田小学校	青葉区黒須田	2006	
能見台南小学校	金沢区能見台六丁目	2008	
早渕中学校	都筑区早渕二丁目	2009	
横浜サイエンスフロンティア高等学校・附属中学校	鶴見区小野町	2009	
あかね台中学校	青葉区あかね台二丁目	2011	
美しが丘西小学校	青葉区美しが丘西二丁目	2012	
横浜総合高等学校	南区大岡二丁目	2013	旧横浜工業高等学校校舎を使用、その後移転
横浜吉田中学校 第二校舎	中区山田町	2017	
みなとみらい本町小学校	西区高島一丁目	2018	
市場小学校けやき分校	鶴見区元宮二丁目	2019	
箕輪小学校	港北区箕輪町二丁目	2019	
左近山特別支援学校	旭区左近山	-	旧左近山第二小学校校舎を転用
みなと総合高等学校	中区山下町	-	旧港高等学校、旧港商業高等学校校舎を使用
若葉台特別支援学校	旭区若葉台二丁目	-	旧若葉台東小学校校舎を転用

一部の分校、閉校又は校名変更した学校は記載していません。／主な校舎の新築、増築及び改築等の一部のものを記載しています。他の建築物を利用し、開校した学校は竣工年と開校年が一致しないものがあります。

公共建築リスト—住宅

本市が建設又は取得した建築物を記載しています。／住宅名及び区分は竣工又は取得等時のものです。／所在地は行政区画や町名変更により現在とは異なるものがあります。／戸数の () 内は震災復興として建設したものです。／竣工年は年度の場合もあります。／(▲)は現存していません。



住宅名	区分	所在地	戸数	竣工年	備考
久保山住宅	普通	中区南太田町	74(55)	1920/1924	震災53戸全壊 (▲)
齋藤分住宅	普通	神奈川区神奈川町	188	1921/1922	(▲)
中村町住宅	普通	中区中村町	156(55)	1921/1924	震災73戸全壊 (▲)
柏葉住宅	普通	中区根岸町	51(66)	1922/1924/1925	震災51戸全壊 (▲)
古井戸住宅	普通	中区西戸部町	101	1923	(▲)
中村町第一共同住宅館	共同	中区中村町	34(1)	1921/1924	(▲)
中村町第二共同住宅館	共同	中区中村町	42	1922	震災全壊 (▲)
柏葉共同住宅館	共同	中区根岸町	55	1922	震災全壊 (▲)
翁町共同住宅館	共同	中区翁町	88	1923	震災全焼 (▲)
中村町第二共同住宅館	共同	中区中村町	24	1924	復興 (▲)
柏葉共同住宅館	共同	中区根岸町	36	1925	復興 (▲)
七島住宅	復興	神奈川区子安町	31	1925	注1 (▲)
子安住宅	復興	神奈川区子安町	4	1925	注1 (▲)
三ツ澤住宅	復興	神奈川区青木町	39	1925	注1 (▲)
青木台町住宅	復興	神奈川区青木町	5	1925	注1 (▲)
豆口住宅	復興	中区根岸町	96	1925/1926	注1 (▲)
本牧住宅	復興	中区本牧町	2	1925	注1 (▲)
泉住宅	復興	中区北方町	8	1925	注1 (▲)
井土ヶ谷住宅	復興	中区井土ヶ谷町	149	1925/1926	注1 (▲)
泉住宅	復興	中区根岸町	8	1925	注1 (▲)
神ノ木住宅	普通	神奈川区子安町	2	1925	(▲)
池ノ坂住宅	普通	中区西戸部町	5	1925/1926	(▲)
翁町住宅	普通	中区翁町	1	1924	(▲)
鷺山外国人住宅	外国	中区根岸町	4	1925	(▲)
加層ノ上外国人住宅	外国	中区根岸町	1	1925	(▲)
寺久保外国人住宅	外国	中区根岸町	1	1926	(▲)
山手外国人住宅	外国	中区山手町	23	1926~1929	(▲)
会下小住宅	小住	中区蒔田町	200	1924	注2 (▲)
八反目小住宅	小住	中区蒔田町	48	1924	注2 (▲)
雑色小住宅	小住	中区蒔田町	46	1924	注2 (▲)
榎木坪小住宅	小住	中区蒔田町	33	1924	注2 (▲)
大松久保小住宅	小住	中区西戸部町	28	1924	注2 (▲)
齋藤分小住宅	小住	鶴見区神奈川町	179	1924	注2 (▲)
岡野町小住宅	小住	神奈川区岡野町	123	1924	注2 (▲)
根岸町小住宅	小住	中区根岸町	78	1924	注2 (▲)
北方町小住宅	小住	中区北方町	18	1924	注2 (▲)
大岡町小住宅	小住	中区大岡町	199	1924	注2 (▲)
久保町小住宅	小住	中区久保町	48	1924	注2 (▲)
分田仮住宅	仮住	磯子区西根岸町	40	1925	(▲)
池ノ坂仮住宅	仮住	中区西戸部町	14	1925	(▲)

公共建築リスト—住宅

本市が建設又は取得した建築物を記載しています。／住宅名及び区分は竣工又は取得等時のものです。／所在地は行政区画や町名変更により現在とは異なるものがあります。／戸数の（）内は震災復興として建設したものです。／竣工年は年度の場合もあります。／(▲)は現存していません。



住宅名	区分	所在地	戸数	竣工年	備考
神ノ木仮住宅	仮住	神奈川区子安町	110	1925	(▲)
山王山仮住宅	仮住	中区西戸部町	36	1925	(▲)
池ノ坂収容所	収容	中区西戸部町	132	1925	注3 (▲)
稲荷山下収容所	収容	中区中村町	68	1925	注3 (▲)
豊岡住宅	普通	鶴見区豊岡町	8	1922	注4 (▲)
生麦住宅	普通	鶴見区生麦町	18	1922	注4 (▲)
尻手住宅	普通	鶴見区市場町	11	1925	注4 (▲)
本町住宅	普通	鶴見区市場町	12	1925	注4 (▲)
富士見住宅	普通	鶴見区市場町	15	1925	注4 (▲)
堀ノ内住宅	普通	鶴見区潮田町	32	1925	注4 (▲)
大東住宅	普通	鶴見区潮田町	50	1925／1928	注4 (▲)
日之出住宅	普通	鶴見区潮田町	32	1925	注4 (▲)
市場住宅	普通	鶴見区市場町	18	1925	注4 (▲)
菅澤住宅	普通	鶴見区菅澤町	16	1925	注4 (▲)
貝助住宅	普通	鶴見区生麦町	5	1925	注4 (▲)
上戸上町住宅	普通	保土ヶ谷区神戸上町	5	1926	注4 (▲)
宮田町住宅	普通	保土ヶ谷区宮田町	5	1926	注4 (▲)
峯岡町住宅	普通	保土ヶ谷区峯岡町	25	1926	注4 (▲)
保土ヶ谷町住宅	普通	保土ヶ谷区保土ヶ谷町	25	1926	注4 (▲)
星川町住宅	普通	保土ヶ谷区星川町	20	1926	注4 (▲)
笹下町住宅	普通	中区笹下町	16	1926／1927	注4 (▲)
小松原住宅	普通	中区西戸部町	2	1928	注5 (▲)
花ノ木町供給住宅	供給	中区花ノ木町	9	1929	(▲)
中村町供給住宅	供給	中区中村町	22	1929	(▲)
星川町供給住宅	供給	保土ヶ谷区星川町	23	1929	(▲)
櫻ヶ丘供給住宅	供給	保土ヶ谷区神戸上町	35	1929	(▲)
潮田町供給住宅	供給	鶴見区潮田町	4	1930	(▲)
清風荘分譲住宅	分譲	鶴見区東寺尾町	39	1932	(▲)
清風荘分譲住宅	分譲	鶴見区東寺尾町	2	1933	(▲)
澄心荘分譲住宅	分譲	鶴見区馬場町	8	1935	(▲)
石川島自強組合分譲住宅	分譲	鶴見区矢向町	76	1936	(▲)
第二次分譲住宅	分譲	神奈川区篠原町ほか23か所	24	1937～1939	市内24か所 (▲)
労務者住宅	労務	市内各所	735	1942～1944	(▲)
谷戸田住宅	戦災	金沢区六浦町	82	1947	注6 (▲)
瀬戸橋住宅	戦災	金沢区泥亀町	103	1947	注6 (▲)
磯子住宅	戦災	金沢区六浦町	77	1947	注6 (▲)
赤井谷住宅	戦災	金沢区釜利谷町	92	1947	注6 (▲)
鍛冶ヶ谷住宅	戦災	戸塚区鍛冶ヶ谷町	55	1947	注6 (▲)
分譲住宅	分譲	鶴見区ほか8区	127	1947	(▲)
汐田栄町団地	庶民	鶴見区栄町通	29	1948／1950	(▲)

公共建築リスト—住宅



住宅名	区分	所在地	戸数	竣工年	備考
八景団地	庶民	磯子区泥亀町	12	1948	(▲)
岡野団地	庶民	西区岡野町	5	1948／1949	(▲)
神ノ木団地 (個人敷地)	庶民	神奈川区子安台	41	1948	(▲)
池ノ坂団地	庶民	西区西戸部町	11	1948／1949	(▲)
磯子住宅	庶民	不詳	3	1948	(▲)
反町団地	庶民	神奈川区反町	3	1948	(▲)
上反町団地	庶民	神奈川区上反町	8	1951	(▲)
松ヶ丘団地	庶民	神奈川区松ヶ丘	4	1951	(▲)
斉藤分団地	庶民	神奈川区斎藤分町	14	1948	(▲)
汲沢団地	庶民	戸塚区汲沢	180	1948／1949	(▲)
二ツ橋団地	庶民	戸塚区二ツ橋町	31	1948／1949	(▲)
文庫住宅	庶民	金沢区釜利谷町	520	1948～1952／1958	(▲)
下末吉団地	庶民	鶴見区下末吉町	39	1948	(▲)
東寺尾団地	庶民	鶴見区東寺尾町	7	1948	(▲)
三王山団地	庶民	西区西戸部町	10	1948／1949	(▲)
小野団地	庶民	鶴見区小野町	23	1948	(▲)
朝日町住宅	庶民	鶴見区朝日町	79	1948／1949	(▲)
西谷住宅	庶民	旭区川島町	21	1949	(▲)
白幡団地	庶民	神奈川区白幡上町	145	1949	(▲)
神大寺第一住宅	庶民	神奈川区神大寺	29	1949	(▲)
六角橋団地	庶民	神奈川区六角橋	12	1949	(▲)
栗田谷住宅	庶民	神奈川区栗田谷	31	1949／1957	(▲)
栗田谷アパート	庶民	神奈川区栗田谷	144	1949／1950／1952	(▲)
仲手原第一団地	庶民	港北区仲手原二丁目	36	1949	(▲)
別所団地	庶民	鶴見区北寺尾町	43	1949	(▲)
東汐田団地	庶民	鶴見区向井町	10	1949	(▲)
常盤台団地	庶民	保土ヶ谷区峯岡町	31	1949	(▲)
軽井沢住宅	庶民	西区北軽井沢	60	1950	(▲)
桜ヶ丘住宅	庶民	保土ヶ谷区桜ヶ丘	47	1950	(▲)
上星川住宅	庶民	保土ヶ谷区上星川町	70	1950	(▲)
三ツ沢住宅	庶民	神奈川区三ツ沢中町	60	1950	(▲)
富岡住宅	庶民	金沢区富岡町	47	1950	(▲)
仲手原第二住宅	庶民	港北区篠原台町	36	1950	(▲)
日吉住宅	庶民	港北区日吉本町	26	1950	(▲)
三ツ境住宅	庶民	瀬谷区三ツ境、保土ヶ谷区中希望ヶ丘	602	1951／1953～1955	(▲)
霞台住宅	庶民	保土ヶ谷区霞台	27	1951	(▲)
霞台アパート	庶民	保土ヶ谷区霞台	48	1951	(▲)
清水ヶ丘住宅	庶民	南区清水ヶ丘	26	1951	(▲)
長津田第一住宅	庶民	緑区長津田町	274	1951／1954／1955／1957	(▲)

公共建築リスト—住宅

本市が建設又は取得した建築物を記載しています。／住宅名及び区分は竣工又は取得等時のものです。／所在地は行政区画や町名変更により現在とは異なるものがあります。／戸数の（）内は震災復興として建設したものです。／竣工年は年度の場合もあります。／(▲)は現存していません。



住宅名	区分	所在地	戸数	竣工年	備考
瀬谷住宅	公営	瀬谷区瀬谷町	735	1952～1955	(▲)
三ツ沢第二住宅	公営	神奈川区中町、神大寺	115	1953／1956	(▲)
神大寺第二住宅	公営	神奈川区神大寺	62	1953／1957	(▲)
鶴ヶ峰住宅	公営	旭区鶴ヶ峰二丁目	28	1953	(▲)
桜ヶ丘アパート	公営	保土ヶ谷区岩崎町	96	1953／1954	(▲)
菅田住宅	公営	神奈川区菅田町、港北区小机町	245	1954／1955	(▲)
鶴ヶ峰アパート	公営	旭区鶴ヶ峰一丁目	168	1954／1958／1959	(▲)
出刈場住宅	公営	旭区東希望が丘	57	1955	(▲)
楽老住宅	公営	瀬谷区二ツ橋町	382	1955～1958／1961	(▲)
今宿住宅	公営	旭区今宿町	208	1956	(▲)
長津田第二住宅	公営	緑区長津田町	143	1956	(▲)
橋戸住宅	公営	戸塚区瀬谷町	149	1956／1957／1961	(▲)
法泉町住宅	公営	保土ヶ谷区法泉町	233	1957／1958／1961／1962	(▲)
三保住宅	公営	緑区三保町	102	1958	(▲)
谷津田原第一住宅	公営	緑区北八朔町	258	1958／1959	(▲)
谷津田原第二住宅	公営	緑区北八朔町	144	1959～1961	(▲)
西原住宅	公営	保土ヶ谷区川島町	43	1959	(▲)
上白根住宅	公営	旭区上白根	284	1959～1961	(▲)
十日市場住宅	公営	緑区十日市場町	2,293	1960～1965	(▲)
橋戸原住宅	公営	戸塚区瀬谷町	235	1961	(▲)
釜台団地	分譲	保土ヶ谷区常盤台	30	1957	(▲)
丸山団地	分譲	保土ヶ谷区今宿町	89	1958	(▲)
常盤台団地	分譲	保土ヶ谷区常盤台	65	1958	(▲)
谷津田原団地	分譲	港北区北八朔町	70	1959	(▲)
御嶽堂団地	分譲	港北区青砥町	20	1961	(▲)
久良岐ヶ丘団地	分譲	磯子区森町	42	1962	(▲)
中村町住宅	改良	南区中村町	50	1961／1962	
瀬戸橋住宅	改良	金沢区洲崎町	124	1963／1964	(▲)
上飯田住宅	公営	泉区上飯田町	1,412	1965～1967	
瀬ヶ崎住宅	改良	金沢区六浦東一丁目	56	1965	
六浦住宅	改良	金沢区六浦五丁目	94	1965／1966	
勝田住宅	公営	都筑区勝田町	1,534	1967／1968／1972／1987	
塩場住宅	改良	金沢区六浦四丁目	200	1968／1969	
ひかりが丘住宅	公営	旭区上白根町	2,325	1969～1971／1984／1993	
さかえ住宅	改良	港北区日吉六丁目	180	1970	
川辺町住宅	公営	保土ヶ谷区川辺町	240	1972	
洋光台住宅	公営	磯子区洋光台五丁目	730	1972	
本郷住宅	改良	栄区桂町	20	1972	
小菅が谷住宅	公営	栄区小菅ヶ谷一丁目	292	1972	
岩井町住宅	改良	保土ヶ谷区岩井町	34	1972	

公共建築リスト—住宅



住宅名	区分	所在地	戸数	竣工年	備考
南三双住宅	改良	金沢区六浦南一丁目	64	1972	
野庭住宅	公営	港南区野庭町	3,294	1973～1976／1984	
尾張屋橋住宅	改良	西区西平沼町	40	1974	
本郷台住宅	公営	栄区小菅ヶ谷一丁目	252	1975	
白山住宅	公営	緑区白山一丁目	86	1975	
寿町住宅	公営	中区寿町	80	1975	(▲)
矢向住宅	公営	鶴見区矢向五丁目	50	1976	
小菅が谷第二住宅	公営	栄区桂町	110	1976	
生麦住宅	公営	鶴見区生麦一丁目	157	1978	
金沢住宅	公営	金沢区並木一丁目	290	1978／1979	
名瀬住宅	公営	戸塚区名瀬町	360	1978	
滝頭住宅	公営	磯子区滝頭三丁目	72	1980	
金沢第二住宅	公営	金沢区並木一丁目	350	1980	
滝頭第二住宅	公営	磯子区滝頭三丁目	68	1981	
西台町住宅	公営	神奈川区菅田町	50	1981	
南台ハイツ	公営	瀬谷区南台一丁目	1,189	1981～1984	建替
初音が丘住宅	公営	保土ヶ谷区初音ヶ丘	72	1982	
金沢第三住宅	公営	金沢区並木三丁目	252	1982	
旭グリーンハイツ	公営	旭区中希望が丘	36	1982	建替
日野住宅	公営	港南区日野南三丁目	40	1983	
滝頭第三住宅	公営	磯子区滝頭三丁目	56	1983	
鴨志田住宅	公営	青葉区鴨志田町	98	1983	
岡村住宅	公営	磯子区岡村八丁目	260	1984	
永田山王台住宅	公営	南区永田山王台	48	1984	
橋戸ハイツ	公営	瀬谷区橋戸一丁目	204	1984	建替
十日市場第二住宅	公営	緑区十日市場町	80	1984	
磯子住宅	公営	磯子区森三丁目	119	1985／1986	
橋戸原ハイツ	公営	瀬谷区橋戸一丁目	310	1985／1986	建替
箕輪住宅	公営	港北区箕輪町二丁目	52	1986	
十日市場駅前住宅	公営	緑区十日市場町	16	1986	
つづきが丘住宅	公営	都筑区葛が谷	120	1986	
法泉ハイツ	公営	保土ヶ谷区法泉三丁目	290	1986／1988	建替
谷津坂住宅	公営	金沢区能見台東	320	1987／1988	
神大寺ハイツ	公営	神奈川区神大寺二丁目	38	1987	建替
山内住宅	公営	青葉区美しが丘五丁目	66	1987	
楽老ハイツ	公営	瀬谷区二ツ橋町	508	1987／1988／1990	建替
三保みどり台住宅	公営	緑区三保町	196	1988／1989	
金沢柴町住宅	公営	金沢区柴町	90	1988	
ベイサイド新山下	改良	中区新山下三丁目	383	1989/1991/1995/1997/1999/2001/2002	
南戸塚住宅	公営	戸塚区戸塚町	159	1990	

公共建築リスト—住宅

本市が建設又は取得した建築物を記載しています。／住宅名及び区分は竣工又は取得等時のものです。／所在地は行政区画や町名変更により現在とは異なるものがあります。／戸数の（）内は震災復興として建設したものです。／竣工年は年度の場合もあります。／(▲)は現存していません。



住宅名	区分	所在地	戸数	竣工年	備考
西原グリーンハイツ	公営	保土ヶ谷区川島町	64	1990	建替
菅田ハイツ	公営	神奈川区菅田町	342	1990	建替
瀬谷南住宅	公営	瀬谷区南台一丁目	60	1990	
新橋住宅	公営	泉区新橋町	114	1991	
今宿ハイツ	公営	旭区今宿東町	430	1991	建替
杉田住宅	公営	磯子区杉田三丁目	40	1991	
上飯田第二住宅	公営	泉区上飯田町	45	1992	
三保グリーンハイツ	公営	緑区三保町	138	1992	建替
谷津田原ハイツ	公営	緑区北八朔町	327	1992／1993	建替
岩井町第二住宅	公営	保土ヶ谷区岩井町	8	1993	
三ツ沢中町ハイツ	公営	神奈川区三ツ沢中町	146	1993	建替
新橋第二住宅	公営	泉区新橋町	81	1993	
川辺町第二住宅	公営	保土ヶ谷区川辺町	114	1993	
上の原グリーンハイツ	公営	緑区長津田みなみ台七丁目	302	1993／1994	建替
吉田町住宅	公営	戸塚区吉田町	22	1994	
阿久和向原住宅	公営	瀬谷区阿久和西一丁目	45	1994	
東希望が丘ハイツ	公営	旭区東希望が丘	156	1994	建替
長津田スカイハイツ	公営	緑区長津田二丁目	246	1995	建替
十日市場ヒルタウン	公営	緑区十日市場町	2,334	1995～2001	建替
岩崎町住宅	公営	保土ヶ谷区岩崎町	191	1996	
グリーンヒル上白根	公営	旭区上白根町	524	1996	建替
二俣川宮沢住宅	公営	旭区二俣川2丁目	33	1996	
不老町住宅	公営	中区不老町	24	1996	
矢向第二住宅	公営	鶴見区矢向四丁目	60	1996	
梶山住宅	公営	鶴見区梶山二丁目	40	1997	
藤棚ハイツ	公営	西区藤棚町	37	1997	
藤棚ハイツ	改良	西区藤棚町	83	1997	
中希望が丘ハイツ	公営	旭区中希望が丘	59	1997	建替
グリーンヒル三ツ沢	公営	神奈川区三ツ沢中町	144	1997	建替
日吉本町ハイツ	公営	港北区日吉本町三丁目	57	1997	建替
サンヴァリエ日吉	公営	港北区下田町四丁目	93	1997	
平戸住宅	公営	戸塚区平戸二丁目	73	1997	
ビューコート小港	公営	中区小港町	50	1997	
川井本町住宅	公営	旭区川井本町	120	1998	
霞台グリーンハイツ	公営	保土ヶ谷区霞台	96	1998／2001	建替
谷津田原第二住宅	公営	緑区北八朔町	156	1998／1999	建替
プロムナード矢部	公営	戸塚区矢部町	86	1998	
釜利谷東ハイツ	公営	金沢区釜利谷東一丁目	123	1999／2000／2002／2004	建替
名瀬第二住宅	公営	戸塚区名瀬町	129	1999	
北八朔住宅	公営	緑区北八朔町	436	1999～2001	

公共建築リスト—住宅



住宅名	区分	所在地	戸数	竣工年	備考
清水ヶ丘ハイツ	公営	南区清水ヶ丘	58	1999	建替
戸塚原宿住宅	公営	戸塚区原宿四丁目	160	2000	
三ツ境ハイツ	公営	瀬谷区三ツ境	124	2000	建替
富岡西ハイツ	公営	金沢区富岡西七丁目	92	2000	建替
大豆戸町住宅	公営	港北区大豆戸町	42	2001	
笹野台住宅	公営	旭区笹野台二丁目	126	2002	
駒岡住宅	公営	鶴見区駒岡四丁目	97	2002	
上瀬谷住宅	公営	瀬谷区上瀬谷町	336	2002～2004	
ベイスайд新山下	公営	中区新山下三丁目	5	2002	
鶴ヶ峰南住宅	公営	旭区鶴ヶ峰一丁目	207	2002／2004	建替
鶴見中央住宅	公営	鶴見区鶴見中央三丁目	23	2002	
鶴見中央住宅	改良	鶴見区鶴見中央三丁目	42	2002	
コンフォール明神台	公営	保土ヶ谷区明神台	232	2003／2006	
三ツ境南住宅	公営	瀬谷区三ツ境	197	2003／2004	建替
善部町住宅	公営	旭区善部町	60	2003	
中村町南住宅	改良	南区中村町	58	2005／2009	
栗田谷ヒルズ	公営	神奈川区栗田谷	98	2006	建替
南日吉住宅	公営	港北区日吉本町四丁目	91	2007／2008	
桜ヶ丘グリーンハイツ	公営	保土ヶ谷区岩崎町	135	2008	建替
寿町スカイハイツ	公営	中区寿町	80	2019	建替
瀬戸橋住宅	公営更新	金沢区洲崎町	178	2024	建替 2024年竣工予定
中村町住宅	公営更新	南区中村町	58	2025	建替 2025年竣工予定

〔区分凡例〕普通…普通住宅／共同…共同住宅館／復興…復興住宅／外国…外国人住宅／小住…小住宅／仮住…仮住宅／収容…収容所／供給…供給住宅／分譲…分譲住宅／労務…労務者住宅／戦災…戦災者収容住宅／庶民…庶民住宅／公営…公営住宅／改良…改良住宅／更新…更新住宅

〔注釈〕注1：1926(大正15)年4月より普通住宅に変更／注2：1926(大正15)年6月に神奈川県より無償譲渡／注3：1929(昭和4)年より仮住宅に変更／注4：1927(昭和2)年4月2日の隣接町村合併により引継ぎ／注5：1928(昭和3)年11月より市営住宅として管理／注6：1954(昭和29)年頃に応急共用住宅に変更

公共建築リスト—木造化施設

本市が建設した建築物で、木材利用促進法が施行された2010年以降に竣工したものを記載しています。／竣工年は年度の場合もあります。／区分の「一部木造」とは、小屋組み等の一部を木造としているものを指します。



建物名	工事場所	竣工年	区分
動物愛護センター 猫の家	神奈川区菅田町	2010	木造
こども自然公園トイレ4	旭区大池町	2010	一部木造
こども自然公園トイレ5	旭区大池町	2010	一部木造
横浜動物の森公園 家畜舎	旭区川井宿町	2010	木造
野島公園倉庫	金沢区野島町	2011	木造
自然観察センター 増築部	栄区上郷町	2011	木造
自然観察センター 活動拠点	栄区上郷町	2011	木造
新治里山公園全天候型屋外体験施設 体験棟	緑区新治町	2011	木造
新治里山公園全天候型屋外体験施設 管理棟	緑区新治町	2011	木造
横浜動物の森公園 アビシニアコロブス舎	旭区川井宿町	2012	一部木造
横浜動物の森公園サバンナゾーンふれあいのエリア 休憩棟1	旭区川井宿町	2012	木造
横浜動物の森公園サバンナゾーンふれあいのエリア 休憩棟2	旭区川井宿町	2012	木造
横浜動物の森公園サバンナゾーンふれあいのエリア 展示棟1	旭区川井宿町	2012	木造
横浜動物の森公園サバンナゾーンふれあいのエリア 展示棟2	旭区川井宿町	2012	木造
横浜動物の森公園サバンナゾーンふれあいのエリア ラクダライド待合所	旭区川井宿町	2012	木造
横浜動物の森公園サバンナゾーンふれあいのエリア ビグミーゴート舎	旭区川井宿町	2012	木造
横浜動物の森公園北入口ゲート棟	旭区川井宿町	2012	一部木造
旧住友邸庭園 休憩所棟	戸塚区東俣野町	2012	木造
旧住友邸庭園 倉庫棟	戸塚区東俣野町	2012	木造
上郷矢沢コミュニティハウス	栄区桂台南二丁目	2012	木造
野毛山公園事務所・倉庫	西区老松町	2012	木造
こども自然公園トイレ6	旭区大池町	2012	一部木造
大曽根保育園 増築部	港北区大曽根二丁目	2012	木造
谷矢部池公園トイレ	戸塚区矢部町	2012	木造
横浜動物の森公園チータービューイングシェルター	旭区川井宿町	2013	木造
小菅ヶ谷北公園活動拠点施設 炊事棟	栄区小菅ヶ谷四丁目	2013	木造
富岡八幡公園トイレ	金沢区富岡東四丁目	2014	一部木造
港北保育園 増築部	港北区仲手原二丁目	2014	木造
ねむの樹 元宮保育園	鶴見区元宮二丁目	2014	木造
杉田保育園 事務室増築部分	磯子区杉田七丁目	2015	木造
俣野別邸(再建)	戸塚区東俣野町	2015	木造
俣野別邸庭園 トイレ棟	戸塚区東俣野町	2015	木造
俣野別邸庭園 作業場	戸塚区東俣野町	2015	木造
長屋門公園 倉庫	瀬谷区阿久和東一丁目	2015	木造
長屋門公園 炭焼き小屋	瀬谷区阿久和東一丁目	2015	木造
荇田西コミュニティハウス	青葉区荇田西一丁目	2015	木造
自然観察の森トイレ	栄区上郷町	2015	木造
大棚杉の森ふれあい公園 トイレ棟	都筑区大棚町	2015	木造
大棚杉の森ふれあい公園 倉庫棟	都筑区大棚町	2015	木造
上末吉小学校放課後施設棟	鶴見区上末吉五丁目	2015	木造

公共建築リスト—木造化施設



建物名	工事場所	竣工年	区分
すすき野地域ケアプラザ	青葉区すすき野一丁目	2016	一部木造
篠原中学校 武道場	港北区篠原町	2016	一部木造
今井の丘公園便所・倉庫棟	保土ヶ谷区新桜ヶ丘一丁目	2016	木造
こども自然公園休憩管理棟	旭区大池町	2016	一部木造
こども自然公園駐車場管理棟	旭区大池町	2017	木造
久保山墓地管理事務所便所	西区元久保町	2017	木造
今井小学校 放課後キッズクラブ	保土ヶ谷区今井町	2017	木造
三保小学校 放課後キッズクラブ	緑区三保町	2017	木造
入船小学校 放課後キッズクラブ	鶴見区浜町1丁目	2017	木造
白幡小学校 放課後キッズクラブ	神奈川区白幡上町	2017	木造
神無公園トイレ	都筑区北山田三丁目	2017	一部木造
折田不動公園トイレ	都筑区荇田南4丁目	2017	一部木造
富岡総合公園並木便所 男子用	金沢区富岡東二丁目	2018	一部木造
富岡総合公園並木便所 女子用	金沢区富岡東二丁目	2018	一部木造
富岡総合公園並木便所 多目的	金沢区富岡東二丁目	2018	一部木造
緑が丘中学校 武道場	青葉区千草台	2018	一部木造
大場かやのき公園便所	青葉区大場町	2018	一部木造
綱島東二丁目公園トイレ	港北区綱島東二丁目	2018	一部木造
緑小学校 放課後キッズクラブ	緑区鴨居五丁目	2018	木造
下永谷小学校 放課後キッズクラブ	港南区東永谷一丁目	2018	木造
瀬谷第二小学校 放課後キッズクラブ	瀬谷区橋戸二丁目	2018	木造
仏向町農園付公園倉庫	保土ヶ谷区仏向町	2018	木造
追分市民の森活動拠点	旭区矢指町	2019	木造
岡津地域ケアプラザ	泉区岡津町	2019	木造
美しが丘中学校 武道場	青葉区美しが丘三丁目	2019	木造
馬場花木園旧藤本家住宅 主屋	鶴見区馬場二丁目	2019	木造
馬場花木園旧藤本家住宅 東屋	鶴見区馬場二丁目	2019	木造
馬場花木園旧藤本家住宅 詰所	鶴見区馬場二丁目	2019	木造
青葉台小学校 放課後キッズクラブ	青葉区桜台	2019	木造
青葉台小学校 倉庫棟	青葉区桜台	2019	木造
南本宿小学校 放課後キッズクラブ	旭区南本宿町	2019	木造
北綱島小学校 放課後キッズクラブ	港北区綱島西五丁目	2019	木造
佐江戸公園トイレ	都筑区佐江戸町	2019	一部木造
佐江戸大峰公園トイレ	都筑区佐江戸町	2019	一部木造
環境活動支援センター屋外トイレ	保土ヶ谷区狩場町	2019	木造
富岡総合公園プラタナス便所 男子用	金沢区富岡東二丁目	2019	一部木造
富岡総合公園プラタナス便所 女子用	金沢区富岡東二丁目	2019	一部木造
富岡総合公園プラタナス便所 多目的	金沢区富岡東二丁目	2019	一部木造
富岡総合公園洋弓場便所	金沢区富岡東二丁目	2019	一部木造
富岡総合公園北台便所	金沢区富岡東二丁目	2019	一部木造

公共建築リスト—木造化施設

本市が建設した建築物で、木材利用促進法が施行された2010年以降に竣工したものを記載しています。／竣工年は年度の場合もあります。／区分の「一部木造」とは、小屋組み等の一部を木造としているものを指します。



建物名	工事場所	竣工年	区分
旧円通寺客殿（旧木村家住宅主屋）	金沢区瀬戸	2020	木造
駒岡小学校 放課後キッズクラブ	鶴見区駒岡三丁目	2020	木造
馬場小学校 放課後キッズクラブ	鶴見区馬場七丁目	2020	木造
山下地域ケアプラザ	緑区北八朔町	2020	木造
川和台もみじ公園トイレ	都筑区川和台	2020	一部木造
牛久保西公園トイレ	都筑区牛久保西二丁目	2020	木造
小柴貯油施設跡地公園草地広場便所	金沢区並木三丁目	2020	一部木造
神の木公園トイレ	神奈川区神之木台	2021	木造
六ツ川中学校 武道場	南区六ツ川三丁目	2021	木造
こども自然公園桜山トイレ	旭区大池町	2021	一部木造
野島公園トイレ	金沢区野島町	2021	一部木造
新井中学校 武道場	保土ヶ谷区新井町	2022	木造
西久保町公園トイレ	保土ヶ谷区西久保町	2022	一部木造
三保町西公園トイレ	緑区三保町	2022	一部木造
小柴貯油施設跡地公園小柴埼東口トイレ	金沢区並木三丁目	2022	一部木造
早淵公園トイレ	都筑区早淵二丁目	2022	一部木造
金沢緑地 (3号地) トイレ	金沢区並木一丁目	2022	一部木造
久良岐公園トイレ	港南区上大岡東三丁目	2023	一部木造
根岸森林公園トイレ (芝生広場前)	中区根岸台	2023	一部木造
東野中学校 武道場	瀬谷区東野	2024	一部木造
旭中学校 武道場	旭区今宿二丁目	2024	木造
松風学園 日中活動棟	泉区上飯田町	2024	木造
万騎が原小学校 校舎棟	旭区大池町	2027	木造

参考文献・資料

横浜市中心図書館所蔵

- ・横浜市統計書
- ・横浜市社会事業施設一覧
- ・横浜市要覧
- ・横浜市会議事速記録
- ・神奈川県社会事業要覧
- ・横浜市政報告書
- ・復興途上ニ在ル横浜市営住宅トソノ住宅政策
- ・横浜市社会事業概要
- ・大正十二年大震災火災恩賜金伝達誌
- ・御大典記念写真帖
- ・横浜市会会議録
- ・市政概要
- ・市の施設のあんない
- ・横浜市機構沿革史

横浜市史資料室所蔵資料

- ・広報課写真資料
- ・『横浜市職員録』

書籍等

- ・『横浜市立復興小学校建築図集』（昭和6年刊）
- ・『横浜市学校沿革誌』（昭和32年刊、昭和50年刊）
- ・『目でみる老松のあゆみ 創立30周年記念誌』（昭和52年）
- ・『横浜市の公営住宅』（昭和62年4月発行）
- ・『横浜市の学校建築』（横浜市教育委員会施設部／横浜市建築局建築部、1982年）
- ・『横浜市の学校建築 II』（横浜市教育委員会施設部／横浜市建築局建築部、1987年）
- ・『横浜市の学校建築 III』（横浜市教育委員会施設部／横浜市建築局建築部、1994年）
- ・『昭和を生き抜いた学舎 横浜震災復興小学校の記録』（横浜市建築局学校建設課／横浜市教育委員会施設課、1985年）
- ・『public architecture of yokohama city graphic横浜の公共建築写真集』（横浜市建築局、1985年）
- ・『横浜・都市と建築の100年』（横浜市建築局企画管理課、1989年）
- ・『public architecture of yokohama-city photographic 1991横浜公共建築写真集』（横浜市建築局、1991年）
- ・『寮・アパート 建築写真文庫 (69)』（彰国社、1958年）
- ・『Showa Style-再編・建築写真文庫』（彰国社、2009年）
- ・横浜市大倉山記念館建築案内パンフレット

横浜市公共建築物に関する組織体制

本市の公共建築物の営繕業務は、資源循環局、港湾局、水道局及び交通局の営繕部署が各局の所管施設を担当し、その他の区局の所管施設を建築局公共建築部と公益財団法人横浜市建築保全公社が両輪となって担当し、企画・設計・施工管理・検査・保全及びこれに伴う業務を行っています。

● 建築局公共建築部と公益財団法人横浜市建築保全公社の主な事業

1— 公共建築物等に係る企画・調整

- (1) 公共建築物の計画に関するアドバイス（営繕企画課）
- (2) 設計委託業者の選定業務（営繕企画課）
- (3) 公共建築物の脱炭素化の取組（営繕企画課）
- (4) 公共建築物の天井脱落対策の推進（営繕企画課）
- (5) 設計・工事に係わる技術基準等の作成等（営繕企画課技術管理担当）

2— 公共建築物の整備・保全

- (1) 予算下調業務（営繕企画課、保全推進課、施設整備課、学校整備課、電気設備課、機械設備課、建築保全公社）
- (2) 設計・工事（施設整備課、学校整備課、電気設備課、機械設備課、建築保全公社）
- (3) 公共建築物長寿命化対策事業の推進（保全推進課）
- (4) 公共建築物の省エネルギー化の推進（保全推進課）
- (5) 学校施設の技術支援（保全推進課）
- (6) その他保全に係わる業務（保全推進課）

3— その他の事業

- (1) 建設関連業活性化支援事業（営繕企画課）
- (2) 公共建築物に係わる震災時の応急措置の協力に関する協定（営繕企画課）
- (3) 公共建築物の耐震対策（保全推進課）
- (4) 公共建築物の維持保全に係る調査研究、普及啓発（建築保全公社）

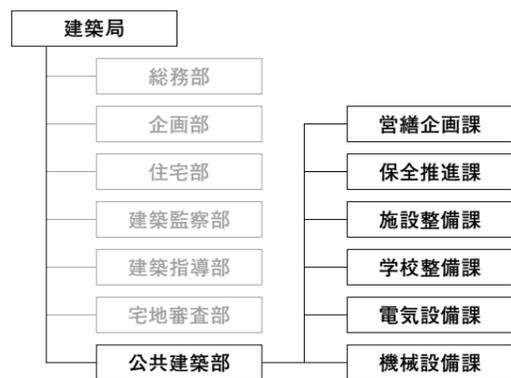
公益財団法人 横浜市建築保全公社について

昭和45年7月に、人口急増に伴う学校不足への対応や民間資金活用による先行整備を行うため、全国に先駆けて「財団法人横浜市学校建設公社」が設立されました。多くの学校を整備し、人口増加に対応して教育施設を円滑に供給するという使命を達成しました。

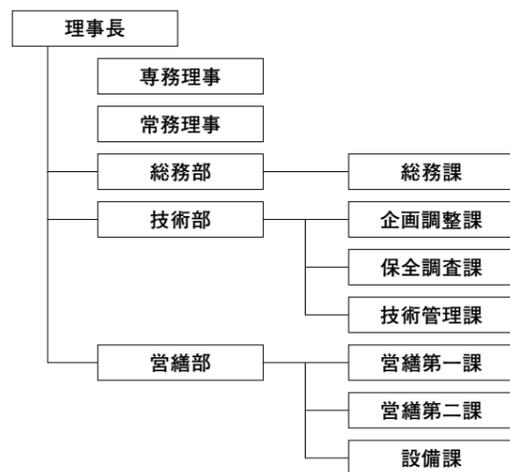
その後、多数建設された公共建築物の機能を維持し、耐久性や安全性を高めるという課題や社会的要請に応えるため、学校建設公社の残余業務を引き継ぎ、昭和61年6月に「財団法人横浜市建築保全公社」として設立され、現在は「公益財団法人横浜市建築保全公社」となっています。

● 組織体制

建築局公共建築部



公益財団法人横浜市建築保全公社



公共建築部職員(令和4年4月時点) **179**

技術職員 163
事務職員 15
消防職員 1

建築保全公社職員(令和4年4月時点) **103**

固定職員 73
嘱託職員 16
横浜市派遣 3
パート 11

横浜市公共建築100周年事業 プロジェクトメンバー

● 横浜市公共建築100周年事業イベント開催・記念誌制作

令和4年度 鶴澤 聡明 [建築局長]

肥田 雄三 [プロジェクトリーダー (公共建築部長)]

山口 賢 [プロジェクトリーダー (企画部長)]

曾根 進 [公共建築部営繕企画課]	内田 敦 [公共建築部機械設備課]
高松 誠 [公共建築部営繕企画課]	加藤 暢一 [企画部企画課]
佐藤 智宏 [公共建築部営繕企画課]	石川 久美子 [企画部企画課]
岩田 仁希 [公共建築部営繕企画課]	大竹 みずき [企画部企画課]
能上 真衣 [公共建築部営繕企画課]	小林 亮太 [企画部都市計画課]
松下 健太 [公共建築部営繕企画課]	土屋 隆文 [企画部建築防災課]
三宅 俊平 [公共建築部保全推進課]	永田 祐介 [住宅部市営住宅課]
永山 智文 [公共建築部施設整備課]	内山 光二 [住宅部市営住宅課]
寺口 達志 [公共建築部学校整備課]	中村 聡子 [建築監察部違反対策課]
安藤 皓央 [公共建築部学校整備課]	長谷川 亮 [建築指導部建築指導課]
八矢 恭昂 [公共建築部学校整備課]	鈴木 桜 [建築指導部建築指導課]
池田 貴光 [公共建築部電気設備課]	藤代 涼介 [建築指導部市街地建築課]
坂本 順 [公共建築部機械設備課]	市川 洸靖 [宅地審査部宅地審査課]



● 協力

公益財団法人横浜市建築保全公社

● 過年度の検討

令和3年度 鈴木 和宏 [建築局長]	大竹 みずき [企画部企画課]	早川 勝久 [公共建築部営繕企画課]
肥田 雄三 [プロジェクトリーダー]	藤代 涼介 [企画部企画課]	岩田 仁希 [公共建築部営繕企画課]
山口 賢 [プロジェクトリーダー]	土屋 隆文 [企画部建築防災課]	齋藤 優太 [公共建築部営繕企画課]
曾根 進 [公共建築部営繕企画課]	永田 祐介 [住宅部市営住宅課]	成田 信太郎 [公共建築部営繕企画課]
高松 誠 [公共建築部営繕企画課]	内山 光二 [住宅部市営住宅課]	能上 真衣 [公共建築部営繕企画課]
早川 勝久 [公共建築部営繕企画課]	中村 聡子 [建築監察部違反対策課]	神川 健太 [公共建築部施設整備課]
岩田 仁希 [公共建築部営繕企画課]	八矢 恭昂 [建築監察部違反対策課]	高松 誠 [公共建築部施設整備課]
能上 真衣 [公共建築部営繕企画課]	道明 由衣 [建築指導部建築企画課]	永山 智文 [公共建築部施設整備課]
松下 健太 [公共建築部営繕企画課]	小林 遼吉 [建築指導部建築指導課]	安藤 皓央 [公共建築部施設整備課]
永山 智文 [公共建築部施設整備課]	馬場 哲朗 [建築指導部建築指導課]	曾根 進 [企画部企画課]
神川 健太 [公共建築部学校整備課]	市川 洸靖 [宅地審査部宅地審査課]	石川 久美子 [企画部企画課]
安藤 皓央 [公共建築部学校整備課]		大竹 みずき [企画部企画課]
池田 貴光 [公共建築部電気設備課]	令和2年度 黒田 浩 [建築局長]	藤代 涼介 [企画部企画課]
坂本 順 [公共建築部機械設備課]	鈴木 和宏 [プロジェクトリーダー]	田島 剛 [住宅部住宅再生課]
内田 敦 [公共建築部機械設備課]	鶴澤 聡明 [プロジェクトリーダー]	平山 竣 [住宅部住宅再生課]
立川 宜久 [総務部総務課]	肥田 雄三 [公共建築部営繕企画課]	石田 彩 [建築監察部違反対策課]
加藤 暢一 [企画部企画課]	飯村 智 [公共建築部営繕企画課]	松下 健太 [建築監察部違反対策課]
石川 久美子 [企画部企画課]		馬場 哲朗 [建築指導部建築指導課]

[] は当時の所属、敬称略

横浜市公共建築の100年

— これまでも、これからも、横浜らしく —

2023年7月

発行 横浜市建築局

編集企画・原稿 [公共建築100周年事業記念誌班]

永山 智文
池田 貴光
石川 久美子
高松 誠
藤代 涼介
安藤 皓央
市川 洸靖
土屋 隆文
能上 真衣
三宅 俊平

編集企画・監理 [AND150株式会社]

野田 恒雄

デザイン・装丁 [STGK Inc.]

伊藤 祐基

